生田春月全集

第一巻

詩集（1）

新潮社

十八歳（上京後一年）の著者

著者とその姉弟

目次

—目次了—

詩集
(1)

靈魂の秋（心の斷片）

歌ふ小鳥は小鳥をさそひて歌はしめ、
蘆の葉は蘆の葉にゆすられて打顫ふ。
憂ひは深きわが胸の叫びに答へん人心、
ああ、そはありやなしや。

シヤアル・ゲラン（永井荷風氏譯）

自序

一

あまりにも早く墓の彼方に運ばれし生命(いのち)よ。それは春の夜のおぼろなる花かげを忍びやかに通り過ぎたあの微風ではなかつたか？ 夏の夜の地平線の上に明滅した稲妻の一閃ではなかつたか？ いづれにしても、それは白晝のものではなかつた――あゝ、我が青春よ、我が青春の夢よ、我が青春の嘆きよ！

蒼褪めた頬をもて生れて來た者に、青春は重い負擔に過ぎなかつた。どれだけの苦痛が、どれだけの憂愁が、私に弱々しいくらい目をした子供を生んでくれたであらう。しかしその憂愁も苦痛も石女(うまずめ)になつてしまつた。私の詩神は永久に沈默してしまつた。その後に來たものは、たゞ嘆息に過ぎない、呻吟に過ぎない。あゝ、青春の日は貧しき歩行者の上に、いかに速かに暮れるであらう！

私は「未だ認められずして已に忘られたる」詩人である。そしてこれが私の運命である。私は運命に服從する。私がどうして名聲を欲するであらう！ 私は零(こぼ)れ落ちた只一葉の桂の葉さへも豫期しない。私の心は老いた。若き詩人は喜び勇んで、希望の道を進んで、跳躍して桂冠を奪ひ取れ。多くの涙と、失望と、苦闘との後にそれは成功するであらう。私はそれを眺めるのを樂しみとする。少しの嫉みもなくこれを眺めて喜ぶを得ば、それは自分の成功よりも樂しい事に違ひない。人生の否定者にはそれは困難な事ではない。その代り、私の口邊に浮ぶかすかな微笑は許されなければならぬ。

然し、私も詩人である。第二流の詩人として、私の名も他日或は好事家の口に上るかも知れない。人は運命に虐げられて貧しく死んだあはれなる詩人として、一生を夢より夢に轉々として終つた滑稽なる痴人として、私のために泣き且つ笑ふかも知れない。十年、或は何十年かの後、サント・ブウヴやマシュウ・アアノルドが、忘却の墓

の中から私を喚び起してくれるかも知れない。それはどうでもいゝ。私が何でそんな事を賴みにしよう。私は已に自ら十分樂しんだのだ。若し詩が無かつたなら、私の生は此上更にどんなにか慰めのない、みすぼらしいものであつたらう。幸ひにして私は自分の姿を、自分の陰鬱な生活を、詩の鏡に眺めて、ひとり人知れず樂む事が出來た。それで十分ではないか！　それは勿論、私とても持ち切れぬほどの野心を持つてゐた靑年であつた。それが、その野心が、慘酷な現實の手に、片つぱしから小氣味よくぶちこはされ、足下に蹂躙されてしまつた。そのときになほ、人はどうしてさうした野心を、名譽心を、虛榮心を値あるものと見る事が出來たであらう。かくて今私は唯自分の墓を築き、自分の足跡を眺めて暫く疲れた心を慰めるのみである。然しその墓も忽ちにして他の人の墓に代へられてしまひ、その足跡も風に吹き消され、波に洗はれてしまふであらう。すべてのものは、同じ滅亡の道を進み、忘却の河へと急いでゐるのだから、「不朽」の天才（ジニアス）も、第二流の小さな能才（タレント）も。

これは失はれたる幸福の歌である。世界は彼の爲めに暗くなつた。夜を慕ひ夜をなつかしみて、常に祕密に充ちた夜の蔭に身を潛めた彼に、太陽は再び昇ることを厭ふ。彼の希望は何處へ行つたか？　彼の愛する者は何處へ行つたか？

これは失はれたる幸福の歌である。しかし、幸福とは抑も何ものであらう。幸福とは掬（すく）べば消ゆる泡であらうか？　近づいて見ると消えてしまふ蜃氣樓（フアタ・モルガナ）であらうか？いな、幸福は空しい夢ではない。たゞ、人間が幸福なるべく餘りに賢くなるのである、或は幸福の中にあつて幸福を感じない程に愚かなのである。幸福の中にあつて幸福に氣の附かない人間は、失はれたる樂園の爲めに嘆く人間である。見よ、凡ての子供は幸福を有つてゐる、最も不幸な者にも子供の時代はある。

これは失はれたる幸福の歌である。人よ、この愚かな

る嘆きを嘲弄するな、よし彼が嘲弄を甘受しようとも。彼もまた勇ましく運命と戰つた戰士である、よし彼が敗れたにしても、彼小さなチタアンは、決して屈する事を知らないのである。彼の青春は明るいものでなかつたけれど、なほ美しい夢によつて飾られてゐた、しかしその夢は醒めなければならなかつた。あゝ、青春を越してなほ失はれたる幸福を嘆かない者は幸福である。

これは失はれたる幸福の歌である。樂しむ事なくして永遠に返る日なく失はれてしまつた青春の輓歌である。

詩人は既に生るゝこと遲し。我が歌はんと欲する事は、既にハイネや、バイロンや、レエナウや、プラアテンや、レオパルヂや、ボオドレエルや、ルコント・ド・リイルや、ド・ヸニイや、其他あらゆるすぐれた詩人によつて歌ひ盡されてゐる。我等に與へられてゐるのは、沈默か、然らずんば摸き反覆かである。

我が愁名づけがたし、

たゞ古よりの愁のみ。
かゝる言葉、人すでに云ひき。
されど我もまたかく思ふ。

——されば詩人と我れを許せよ。

私がこの詩を作つたのも、已に五六年の昔となつた。年を重ねるにつれて、書を讀むことの多くなるにつれて、益々時の遲れたるを、生れる事の遲かつたのを感ずる。ラ・ブリュイエエルは、既に二百年前に、たくみに(あゝこの思想をさへも!)もう云つてしまつた——

語らるべきことは盡きたり、考へむためには、人生るゝ事遲し。

私は是等の詩によつて何を誇るべきか。何もない。たゞ、これが高い價を拂つて贖ひ得たものだと云ひ得るばかりだ。世間には隨分立派な詩人もあるであらう。潑溂たる感覺の詩人、幽玄な象徵の詩人、力强い現實の詩人、——それらは皆すぐれたる人々である、それらは常に青

年の尊敬を、さも氣のりがしないやうな手つきで受取つてゐる人々である。私はそれとは全く別の世界に生れ、別の世界に住み通した。私は自分でそれらの人々に比肩するに足るとは思つてゐない。然し、――それだからとて、此の私と同じやうに、暗いところで生れ、暗いところで育つた詩が、此の靈魂の奥底より迸り出た詩が、無料で買はれたものだとは思ふことが出來ないのである。然し、私が欺されて、安物を高く買はせられたにしても、運命が私の苦痛に高價な報酬を與へる事を拒んだにしても、それはどうでもいゝのである。これらの詩の價値などは最早私の問ふところではない。

私はたゞ自分が誰の道も踏まず、自分自身の道を踏んだ事に――これが私の詩集が今の詩壇に不思議なストレンジアのやうに見える理由であらうが――その唯一の慰めを見出す。私は私である、外の誰でもない、私は私の悲みを歌つた、私は私の思想を歌つた、それで私には澤山である。彼等の天才が私になくとも、私の感情は彼等には歌へはしない。私は私の地盤を有つ、彼等がエンサイクロペヂアの數頁を與へられるのに、私が十行しか與へられなくとも、私は敢て彼等に自分を換へようとは思はない。

昔、人の惡いアウグスッスは食卓について、胸狭きギルギリウスと、眼うるめるホラチウスとの間にすわつた時、「私は今嘆息と涙との間にすわつてゐる」と言つた。人は、この書を讀むとき、まつたく羅馬の皇帝と同じやうに食事をする事が出來る。然し、ホラチウスのあの快活さを此中から味ひ得る人は羅馬の皇帝よりも幸福である。それは最も高價な哄笑である。それは獨逸人が Galgenhumor と呼ぶところのものである。私は私が泣く時に於ても、よきユウモリストである。私は第一流の道化者である。私が「打たれる子」であるといふ事は、既に他の人にとつて哄笑に値する事である。そして讀者がハムレットの如く "Alas, poor Yorick!" といふとき、それは喝采の聲に外ならぬ。

厭世家にも慰めはある。厭世それ自體が一つの快樂である場合も多い。靜かな丘の上にひとり坐して、十分に人間を憎み得る時は、厭世家に取つていかに喜ばしい時であらう。人生の中から悲慘な事實をあとからあとからとかき集めて來て、かりにも人生を樂しいものだなどと云ふ者があれば、これでもかこれでもかと突き附けてやる時は（例へばギュスタアヴ・フロオベルのやうに）どんなに胸がすくであらう。古人の言説の中から、あらゆる暗い言葉を、あらゆる否定的な斷案を、あらゆる人生に對する厭忌を、人間に對する憎惡を、運命に對する絶望を、神に對する呪咀を漁り來つて之れを讀み且つ感嘆する時は、いかに深い滿足を覺えるであらう。私も十分に厭世家の喜びを味つた。

　人生の悲慘を嘆ずる者は、つひには、あらゆる光明的な事實を呪咀するようになる。私もまたさうであつた。そんなら、私は人生に光明的な一面のある事を認めてゐるか？　あゝ光明！　さうだ、私も光明を認めてゐる。だが、その光明は、見よ、あんなに薄れて行く、日は沈んでしまふ。私の青春は何處へ行つたか？　誰が私に私の青春を返してくれるか？　私がどうして再び子供になれよう？　私が遊んだ野原には、違つた子供が今は遊んでゐる。太陽は再び昇る、だが人間は再び失つた青春を――失つた幸福を――失つた光明を恢復する事は出來ないのだ。一度呑み込んだ林檎を――智慧の實を再び吐き出す事が誰に出來るか？　すべての幸福は、すべての光明は kindisch なものである。無智、無經驗、子供の有する凡ての心的狀態の中にのみ――あゝ、幸福はある！光明はある！

　私も曾ては子供であつた。私の感情は「子供」をかへせ！　と不幸な母親の呼ぶごとく呼ぶ。然し私の理性は樂しい少年の日の幸福を斷乎として斥ける。四十年の後に死なゝければならぬのが眞實であるのに、それを知らないで遊んでゐる十歳の子供が何であるか？　十步の先き

に恐ろしい深淵が口をひらいてゐるのに、それを知らないで進んで行く盲人の幸福が何であるか？　苦い眞實を知つた後に、甘い無智にかへらうと云ふのは、不可能であるよりも、より以上に馬鹿々々しい事である。花咲く野邊を貫いて、蘆の葉のさゝやく間を、海に流れ込んだ水は、昔の平和な生活を思出でて嘆くことはあらう、が、もとの泉にかへる事は不可能であるよりも、より以上に好ましくない事に思ふであらう、そして永劫の海の中に、いかにも海の波らしく、いさぎよく砕け散らうと思ふであらう。

厭世主義よ、あゝ、それはどんなに甘い響を持つてゐるか！

私はアンリイ・フレデリック・アミエルと共にかう云ふべきである。『世に生きて行くことはむづかしいことである。おゝ、疲れ果てた我が心よ』と。そして、その言葉と共に、やがては、早晩――一瞬の後にか、二十年の後にか――私の生涯も閉ぢられる時が来るであらう。これが私の慰めである。

Eternity, be thou my refuge!

二

以上はさまざまな時に、さまざまな氣分で、序文にと思つて書き出したものである。が、まだ肝腎な事が云はれてゐない。それを次に簡單に書き添へて置かう。これは私の心の歴史である。私の半生はこのやうにして過されたのである。私はこの詩篇を見るとき、さながら自分の墓を見るやうな思ひがする。この中には私の最もよきものが、即ち青春の夢が眠つてゐる、美しい美しい黄金の夢が、つらい現實の荒々しい手に無慘に引きむしられ掻き破られた蝶の翼のやうに脆い夢が眠つてゐる。私はこのいとしい薄命だつた私の夢を、夢の断片をかき集めて、うれしくまた悲しく、甘い涙と苦い笑ひとをもつて、この中に葬つたのではなかつたか？　さうだ、これは私

の愚かな夢想の墓である。しかしその墓碑の面には、私の名前が彫り附けられねばならぬ。あゝ、私が夢想の外の何ものであつたらう。――これはまた私の碑銘でもある。碑銘としてこの一册はあまりに長すぎるであらう、それならば讀者はその中から自分の好きな一句を選ぶことが出來る、それが各人に對する私の碑銘になるであらう――

　これは私の半生の全集である。私がこの殆んど十年近くの間、いかに生きたか、いかに苦んだか、いかに迷つたかをこの詩集は示すであらう。これは或る時代々々のある風潮を示すものではなく、然し一個の人間を示すものである。一個の人間の内面生活の幾轉變（私は敢て發展とは云はない）を示すものである。その人間はさして價値ある人間ではないであらう、けれども尠くとも多少の興味ある人間たることは確實である。よしその人間に興味がなくとも、その人間の經過し來つた思想の變化は何等かの暗示を與へるに違ひない。

　この中には一人の詩人の青春の黎明より薄暮に至るまでの三つの時期が包括せられてゐる。その第一期に於て彼は美しいロマンチケルである。その若々しいやはらかな心をもつて凡てを愛し凡てを抱擁せんとした宗教的な人道主義的な「愛」の詩人である。然るに時は彼を暗い洞穴へ連れて行く。そこでこの幼い感激と人道主義とは忽ち打破られてしまふ。そこで經驗は彼に苦い眞實を示したのである。處女のやうな弱い心は、赤裸々なる人生の姿に面して、只管におそれ戰くのみであつたが、一轉してそれは烈しい絕望の聲、否定の叫びとなつた、そして私の詩はいつとなく哲學的色彩を帶びて來た、私はこれをニヒリズムと名づける。これが第二期である。然し、この暗い否定の洞穴の中に人間はいつ迄も止つてゐる事は出來ない。彼はどうかしてこの人生を肯定しなければならない。その青春の暮にあつて、既に十分厭世家であつた私、「失敗者の哲學」をつくつて、人生に成功すればするほど惡で失敗すればするほど善であると云ふやうな

考を抱いてゐた私が、極端なニヒリストになつたのは寧ろ自然の事であらう。が、ニヒリズムを最も徹底させて行つた形式は、いかに強辯しようとも、結局シュイサイドの外はない。然し私も生きなければならぬ、生きるためにはこの人生の意義を認め、世界の罪惡と人間の利己心とを肯定しなければならぬ。マキアヹリが道破し、ダアヰンが動かすべからざる科學的根據を與へ、ニイチエが高唱したかの無慈悲な峻烈な恐るべき眞理がまた私の眞理とならなければならぬ。それと共に、一方ではニイチエ及びロマン・ロオランのあの悲壯な Amor fati の思想に安心立命の地を見出さなければならぬ。此努力に於て此詩集は終つてゐる。その努力は果して成功するであらうか？ 此集に洩れた詩及譯詩と、其後の作とを集めて刊行せらるべき詩集がそれを告げるであらう。然し其思想がいかに變化しようとも、私は依然として一個の小さなロマンチケルである。無限の渇望の子である。あるがまゝの人生に滿足する事の出來ない理想家である。私がニヒリストとなつたのも、畢竟私が餘りに理想家であつたからではないか。――然し、詩人の饒舌は厭ふべきことである、今は沈默すべき時である。

三

曾て私の畏敬する友は私を「一茶」と呼んでくれた、私の小學時代からの友は私を「純情の人」と呼んでくれた。私はそれに値するであらうか？ いや、よしそれに値しなくとも「自分のやうなものでも、なほ何等かの足跡を此世に殘して置きたい」と口ごもりながらも、顏をあからめながらも、私は言はずにはゐられぬ。幼い時からのなつかしい友は此時私を激勵して言つてくれる「心から出たものは、それだけで尊い、それだけで存在の値がある」と。この言葉に甘えて、私は安んじて、この不幸な私の愛兒を、このかくし子を、世の中へ送り出さうと思ふ。

一九一七年十月十五日

霊魂の秋（一九一一年—一九一三年）

いと古き調に、いと古き想をのせて、
我れはとこしへの嘆きをあげん。

断篇

×

あはれわが胸こそ
あめつちのあやしき鏡、
悲しくも、嬉しくも、うつるが儘に
くもりてはまた照れど、
よろこびは消えやすく
かなしみはながくとどまる。
くだくるまでは眠りがたきに
絶えず人の世の影をうつして、
とこしへに止む日もあらぬ
なげきをぞする。

×

あはれ人の心こそ、
とこしへに満つるなき海なりけれ。
よろこびにあれば、よろこびに飽き、
かなしみにあれば、よろこびを求む。
されば、すぎ去りし日のおもひでに
いとふべき今もなつかしむべき。

秋の断片

その一

秋雨のふるにまかせて
木の葉いろづく、
おとろへし光の息に
草はしをるる。

ああ秋のしづけさ。
いまぞすべては息づくなる。
木々に鳴りそよぐ西風、
空はしる雲、
地の床を見いづる木の葉、
ひととせの縛めとかれしわが心も。
春の花どき、
すずしき夏の夕も、
かくも幸ある悲しみは
わが胸に來ざりき。
惱める胸を鎮めむとて
かくはひそやかに來りけん、
汝、天地にみつる平和よ。
わがをはりの年もまたかくあれ。

その二

胸ふかく沁み入る日かげ、
稲の穂は野に垂れさがり、
罪なき童とやさしき少女と、
たはむれし古里おもふ。
はるかにも街は息づき
荷車の音かすかにて、
足もとにひそめき、かしらに顫ふ
衣ずれの音、梳きがての髪、
なき人もかへり來るか。
かつてそこに我等いこひし
木の根は朽ちて、
彫りつけし名は消えはてぬ、
苔むす幹に、石のおもてに。
さはれなどか消ゆべき
わが胸に刻みしなき人の面影、
はた、靑空にわが星もて書きし
美しき人をたたへし不朽の歌、
墓の下よりかの人も仰がん
蟲の音のしげきゆふべゆふべを。

かかる夕は遥かなる道もかくせど
朝ごとのわが寢床に我はただ我をのみ見る。
ああ枕も朽ちぬに、わが目は夏の旱にあひぬ。
一人は愛をもて立去りたれば
この世に我を慰むるもの、
ああ秋よ、眠よ、
いやはての安きをば我も求むる。

夕暮の斷片

夕暮のひととき
小鳥等は木立にとびこみ
夕ばえは塔にうするる。
さびしくも森をわたり來る鐘の音は
やがてわがをはりの夕をわが友に告げ、
あはれ母の胸に沁みてひびかん。
胸にわくため息かあらじか、
おとろへし憂鬱の眼に霧ふりかかり、
山を越え、野を流れ、家々の屋根をつつみて
暗はもて來ぬ、祈禱とねむりを、
はて知らぬ歎きのなかに。

秋の憂愁

われらこの世に何をかなすべき、
われらの愛とまことをもて。　ノヷリス

この老いつかれたる世に
若者と生れたるこそ悲しけれ。
僞りにみちみてる世に
誠をもちて生れたるこそ悲しけれ。
鐘の音は森をとほして
わが胸にこだます。

無益なり、
わが愛に誰かこたへし。
外面(そとも)には秋雨ぞ土を濕(うるほ)す
ゆたかなる收穫(みのり)のために、
わが心、わが心には
人の涙ぞ涸(か)れはてたる。

湧けよ、溢れよ、流れいでよ、
涙よ、乾かんとする胸にそそげ、
みなぎりたりし流れすら、
いまは涸れたる時なれど。

いな、その故に、その故にこそ。
子供よ、汝れはげに末の子なりき、
母の涙はその乳とともに汝れにすくなし、」
さればただ自らを泣け。

夜に寄する空想

その一

とこしへの妻にと
天(そら)の汝におくりし夜は、
あつき晝のすぐるを待ちて、
そのかぐろき翼もて汝れをかくまふ。
嘆くな、嘆くな、
誰か汝のおとろへを見るべき、
誰かまた汝をさげすむべき。
汝(な)が髮も、汝(な)が乾ける脣も　心も、
夜はその涙もてうるほすなり。
汝(な)が失ひしあまたの戀人にかはりて、
夜はその息を汝にかけ、やさしくもかき抱くなり、」
日ひと日を無益にもとめしものを夜は
いとひそかに、汝(な)が胸のなかにおくなり、

渴望の目もて、光にあへぐ草の葉を
闇はしづかにうるほすなり。
ねがへ、夜のふかき情(なさけ)に、
よれよ、ただ、夜のやはらかき腕(かひな)に、
足らぬものある稚兒(をさなご)のごとくに。
さらばうすものもて汝(なんぢ)の惱みをつつみ、
夜は母のごとく接吻(くちづけ)せん、
千(ち)たび百(もも)たび。

その二

晝のつかれの癒えぬ間(ま)に、
あはれみじかき夜(よる)はわれをすて去る、
長きもののうさをまた與へむと。
雪の上にまた雪のふりつむごとく
かくは惱みの上に惱みぞつもる。
いとしの夜よ、
などつれなくもわれを棄つるや、
たのしき夢もむすびあへぬに。

ああ、夜よ、神のあたへしわが戀人よ、
われをして汝のやさしき胸のうちに
醒むる時なく眠らしめよ。

その三

夜よ、來りてわが罪をおほへ。
闇あらば、世の人のごとく
などかまた罪ををかさん、
ただ、悲しさに、嬉しさに祈らんものを。
夜よ、美しき目をあまたもてる少女(をとめ)よ、
愛の心に遠ざかりて、あだなる望につかれ、
いま汝(な)が膝にわれはたふる、
夜よ、汝の膝をわが涙の床となさしめよ。
さまよふ鹿のその妻にかへるごとくに
われは汝(な)が愛の胸にぞよる、
夜よ、汝(なんぢ)の膝をわが空想の花園とせよ。
いまぞ、夢にも似たる汝(な)が手は降りて
わが厭ふもの、わが憎むものを悉く蔽ひぬ、

汝來るとき、わが愛はめざむ。
さらば夜よ、うるはしきマリアの心よ、
わがおもき罪をきよめよかし。

その四　夕つつに寄す

世にすてられし我れなるに
夜ごとわが窓邊にちかくおとづるる
汝れにささげんわが歌を。

しばしはかたれ、汝夕ぐれの星、
汝われをばあはれと見るか、
はた、めめしとて卑しむか、
われを一人この世に殘せし戀人のごとくに、
はたわれを卑しきものとなしたる女のごとくに、
ああ汝、わが求めえしただ一人の女の友よ、
汝かかる涙の量をば見しか、
また見しか、わがごとかくも悲しめるものを、
さらばわれたづね逢ひもて、
泣きあかさなんこの夜を。

ああ汝、わが涙にも似たろ子よ、
來れ、ものいへ、わが終りの願ひのうへに、
汝がくらき嘆きの窓よりくだりて
やがてわがさびしき墓を訪ふことほどに。

その五

夜よ、我をこの世よりかくせよ、
暗よ、我にこの世をかくせよ。
あはれの我をばかくまふべき
山中の修道院もここにあらねば、
やさしき愛の腕も見出でざれば、
よし魔の手なりとも我は汝が手による。
夜よ、汝靑やかなるやさしき魔ものよ、
汝はうちよする波の破片より生るるか、
などわがまはりに底知れぬ大海をもち來るぞ、
汝は戀人のいつはりの涙より出づるか、
などわが目にかの美しき妖女の面影を送るぞ、
――されどそれこそは今やわが友なり。

晝のつとめは我を卑しうす、
その汚れにまみれし不信の子を
きよき泉もて汝は洗ふ。
されは、たとへしづかなる面紗のうしろに
殘忍なる運命の目は光れりとも、
我は汝の胸にもたれて泣かん、
我は汝の末の子として、
その暗きマンテルもて蔽はるる甘やかし兒とならむ。
ああ夜陰よ、汝の慈悲にかくれて
人の子はあらゆる罪を犯せど、
にくむことなく訪れ來て
あはれ、甘き眠を汝はもたらす。
――されば我をして母よと汝をよばしめよ。

不運兒の月の歌

一

けぶれる海ぞ
わが眼のまへにはひろごれる。
森、丘、塔を
盛りてかをる花籠こそ
わが眼のまへにはおかれたる。
すてられし女のごとく
月よ、御空にわびなせそ。
うらむもつたなし、憤るもおろかし。
あらゆる苦惱に融けゆく瞳もて、
ただ、かなしめるものの胸をやはらげよかし。
昨日見き、また明日も見ん。
よろこびもて、かなしみもて、
など不運兒の一人の汝を愛でざるべき。
されば、若くして世を去りし詩人の
まごころにむくいむの意あらば、
わが墓のうへにも照らすべし、
うせにしうるはしき心をかざると
花もちておとづるる戀人のごとく。

二

不幸なる人の子の母、
聖母の瞳よ。
かくもやはらかくわれ等をつつみて
はげしき世の爭ひよりかくまひたまふ。
うるはしき母の子ならば
誰かはけがれに染まるべき。
憎めとは、憎まれよとは、
いつの日に誰かをしへし。
人を憎みしわれこそは憎けれ。
その影は泉に碎くれども、
なほ、悲しみもて地上のすべてを愛(め)づる
いともやさしき母の手に、
ふかき傷手(いたで)は癒(い)やされたり。
マドンナはただひとりのみ、
いな、人ごとにただひとりのみ。
いまぞ、たかぶりの心は棄てて

幼兒(をさなご)のごと、
その膝に、顔をうづめてよよと泣かまし。

不運兒のなげき

一

森の木はうちふるひ、
枝は小屋の屋根をたたく。
かをりも苦(にが)き盃にむかひてあれば、
夕の鐘なりとどろけり。
ああ、いく年(とせ)のさすらひよ、
汝、何をか我にあたへし。
世のいとふべく、人の惡(にく)むべきを、
今こそは知りつれ。
求むるところみな空しく、
すべての自負はくだけたり。
世の聖(きよ)きもの、うつくしきもの、

まぼろしは我に死したり。

二

螢ひとつ高く飛びて、
星のひかりにまぎれ去れり。
ああかくも、などひとり飛び去りつる、」
いとも悲しき女よ、君よ。
熱く愁ひて、すくなく信じ、
絶えず盃におぼるる我を、
鞭ちて、力づけて、
荒き海路にみちびきし君こそは、
とこしへに我にあるべかりしに。
わが額は垂れ、わが手はふるふ。
ああ誰かなほ我をいつくしむ、
このあさましきものを。

罪人のさまよひの歌

母をすてゝ、
友とわかれて、
苦しみをたどりて、
何處まで行くべきか、我れ。

わが望みいつかなふべき、
痛みのみ日々にまされど、
あはれなる子よ、
來よ、わが膝にとよぶ人もなし。

うるはしき戀人は失せ、
花と見し世は幻なりき。
やぶれたる胸の鏡に
なにものかまたうつるべき。

狂へどもなぐさめなく、
迷へども道しるべなし、

眠れども人をゆめみず、
渇けども酒も見出でず。

道もなき道をたづねて
夢の岡もとめ行くべき
わが運命——これぞわが罪、」
罪人を待つは獄屋か。

人すまぬ異郷の空の
森かげに倒れ伏すとき、
すてし母、わかれし友の
いかばかり戀しかるべき。

罪人の詩

清き世界にただ一人、
罪人として生れ出でしか。

はた、荒き森の眞中に
ここに泣けよとて取殘されしか。

運命の手に虐げられて
歸る家なき迷兒ぞ、我れ、
日々の苦役に衰へて
明日の命に思ひわづらふ。

いとけなき日のすぎ去りてより、
一日も我れに樂しき日はなかりき、」
すぐなりし幼兒も、いま、
あらゆる犯罪に黑くゆがめり。

なやみ疲れしわが面をば、
あはれ唾してながめさる幸福の子よ、
乞食すら我れをわらへり、
死せるが如く蒼ざめし生ける『不幸』を。」

あはれ罪とは我が名なるべき、
暗き世界の牢獄に鎖を曳きて、
身を終ふるまで逃るるを得ず。
ああ誰か我れをばいつくしむべき、」
我が身すらなほ厭ひ果つるを。

閉ぢよ、閉ぢよ

ああわが目よ、
わが戰ひの具よ、
いともろきもの、世の人の前に伏し、」
あらゆる誘ひに抗ひ得ず、
天もえ仰がで塵にかくるる。
戀人の目にえむかはず、
ただめしうも涙をぞこぼす。
この目にむかふとき、
女はつねにあざけりをたたへ、
友の目もしばしばくもる。
されどああわが目よ、
汝はいとよく耐へしのびき、
二十年を、汝は世の不正を見たり。
あらゆるけがれは汝を苦しめ、
あらゆる責苦は汝が輝きを奪へり。
もとむるものの一つをも見しことなくて、」
わが心の鏡はくもれり。
ホオマアの目に、うるはしきものはうつる。
閉ぢよ、閉ぢよ、
汝がうちにこそ淸らかさと喜びはあれ。」

絶望

雨に濡れんと出で行けり、
望も失せて暗き巷に出で行けり。

傘もなく靴もなし。
我は帽子をはらひすてて、
長くのびたる髪を雨にゆだねむ、
雨は半ば死せる身にも温かかるべし。
否むしろ願くばこの衣服をもうちはらひ、
我はこの泥濘の中に横はらむ。
貫け、貫け、柔かき雨よ、わが胸を貫けかし、
蒼白き顔を打つのみにては足らはず。
ああ明日(あす)の朝(あした)こそは我が軀(むくろ)は都の泥濘の中に見出さる
るべけれ。
われは他人の笑ひによりて傷けらる、
されど雨はいかに我を優しく打つかな。
貫け、貫け、意地悪く世の人の笑ひのごとく我を傷け
かし
我はかくて帽もなく、衣もまとはず、巷の泥にうづも
れて
世の人の踏むにまかすべし。

ふるさとの友に（断片）

友よ、汝は知らん　いかに多くのものの我に失はれし
かを、
また知らん、ただ汝のみとこしへに我が手に殘るを。
汝(なれ)は朝紅(あさあけ)の子、我は夕紅(ゆふやけ)の子、
されど我等はおなじ搖籃に育ちき、
さればまたおなじ墓邊に眠るべきなれ。
げに汝は、この古里を追はれて旅に泣く子を、
ただ一人悲みの中に見すつることをせざりき。
汝はけがれし雲にかこまる月にして、
我はひとり淋しく薄れゆく星なり。
見よ、世の人は呼ぶ、汝ゆゆしき罪人(つみびと)よと、
さらばこの罪もて神の前に立たむとおもふ。
我は胸にひそかなる罪をやしなひ、裁(さば)けど、
罪を犯さではかなはぬほどの惱みこそ、

我は信ず、その罪の正しき償ひなるを。
しかもなほ、見よ、世には正しきが常に罪となるを。
我等貧しかるべし、弱かるべし、
されどただ清く、うつくしかるべし、
よしそのゆゑに罪せらるるとも。
我はあやしむ、いかなれば此の狭き日本の
かくもおびただしき僞りを容れ得るかを。
ああただ狂はん、友よ、我にはなほこの自由あり。
鞭てよ、罪せよ、裁け、
されどこの心をば誰れか奪はん。
ふたつの胸はなほ他の一人を容れ得べく、
四つの手はなほ罪をわくるに堪ふ。
友よ、安かれ、我等なほ愛とまことを持つ。

醉人の詩

その一

前の世紀の詩人等は幽愁のあまきにふけりき。
いまの我等をにがき熱愁は襲へり。
針さかばえし針鼠のごとく砂上にまろびつつ、
ただわが涙のみ晝夜そそぎてわが糧なりき、
されどわが涙のつひに酒とならざるをかなしむ。
酒のみぞこの罪人の天國なれ。
かくぞ我は神を嘲り、神を憎み、神を呪ひき、
この我を撃つだけの慈悲なんぢにありやと。

見よ、地上にあふるるものたたかひに、
海はあせて、日の光さへ薄らぎゆくを。
千たびに一たびをかかる世に生れて、
この詩を作るも喜劇のみ。
我れ病めり、我を悪み、我が悪む者の嘲りの如し、
されど誰かもつとも健かなるものぞ。

その二

我れはあらゆる愛に燃えき。

神をたたへ、人の心をたふとしとし、
人生のいひ知れずめでたきを思へり。
かくも清かりしをさな兒をして、
にくむべき醉人となせしは誰れぞ。
我れ愛せしかど、世は我れを嘲りき、
罪なき我れを捉へてぬすとと云ひき。
つひに我れは罪人として生くるに至れり。

若くして、一人の愛でいつくしむ人もなく、
一日のやすかりし日もあらで老いぬ。
今ぞ我れすべての喜劇をわらふに堪へたり。
されど、老いても若きをねがひ、
失はれたるふるさとを求むるこそ、
罪ふかき身のふかき罰なるべき。

その三

愁多くして酒すくなしといへども、
酒をかたむくれば愁來らず。
我がおもひ人すでにかくも歌へり、
さればただ醉ひて滿腔の不平を吐かん、
歌はんためにも時すでに遲し。
時すでに遲し、歌のこころも知らずして、
たくみに彈ずる樂師あり、
感ぜずして歌ふたくみなる詩人あり。

默して酒を飲むばかりいたましきはなし、
されどもの云はんにも時すでに遲し。
時すでに遲し、若くして我れは老いたり。
才なく、智なく、富なく、幸運なし、
ただ恥のみ我れに殘されたり、
神よ、いざ撃ちたまへ、この不信者を。

ゲエテの言葉を

母が推しゆく乳母車のなかに、

ましろき稚兒ぞ安らかに眠れる。
三あしに一たびのくちづけをも、
汝れは嬉しと思はぬか、やよ稚兒よ。
故國をはなれて生れたれども、
汝れは談らむ、美しきゲエテの言葉を。
島國になき愛と力に充てる人の、
ブロンドに日はかがやけり。
われもし汝れの父ならば、
汝れのごと樂しかるべき。

若き農家の妻に

汝があたへし秋の果物、
いま一たび味ふを得ば！
汝がつねに我におくりし微笑を
いま一たび日に吸ひ取るを得ば！
汝がつよき腕に抱かれ、
汝が柔かなる身を抱くを得ば！
汝が焚きし飯を食ふを得ば、
鋤とりてその米もつくらん。
汝が織りし衣を着くるを得ば、
綿つくる畑に肥もになはん。
さはれ素朴なる汝が夫を見て、
疑ひぶかき身の顧られて悲しかりき。

かつて田舍におくを惜しと思ひき、
されど、けがれたる都に連れ來て、
よき衣つけて飾りたる人妻とせば、
その悔は今日にまさりしならん。
汝が幸福を奪はず、汝が面影を傷けざりしより、
我に膽なきを知り、また些かの智あるを見たり。
さらば幸あれ、女よ、村人にたたへられ、
汝が夫と友白髮せよ。
我れ不幸なる絶望の日にありて、

うるはしき一時にいささか慰み、
いと單純なる幸福を汝に祈る。

なき妹に

一

妹よ。
妹と汝れを呼ぶこそうれしけれ。
妹よ、我れにひとりの妹よ、
おのが嘆きのしげくして、
汝れをいたむことさへ忘れたる、
つれなき、さはれ幸うすき兄をゆるせよ。
六歳にして海のあなたに汝れは失せにき。
汝がなきがらを焼きにし草原に
はや五たびを花咲きけん。
若し、水車場に近きかしこに家のたちなば、
汝れによく似し子の手毬もちて戯るるらん、
かつて釜山の街に汝が樂しげに遊びしごとくに。

二

うるはしき少女となれば
淸らなる戀になやみ、
母となりては、人々にたたへられけん。
つれなき兄の妹とうまれ
世の幸を知らざりしかど、
またけがれにも染ませじと、
神はその手にかへしたまひき。
我が一家の美點のすべてを持ちて、
いと賢かりし汝れこそは失せつれ。
いまなほ惡しきかたのみ擔ひて、
世路にいたみ、愁ひつつある兄をあはれめ。

三

町の老いたる長者のさかんなる葬ひありし夜、
我れはおとろへし母とともに
汝が骨をふるさとの墓場にうづめき。

その夜月あかく、海のひびき高かりき、
我等の衣は露に濡れ、
我が持つ鍬はふるへたりき。
されど母の涙に我れもまたともなひしか。
妹よ、ゆるせよ。
我れはつれなき女を戀ひて
汝があはれさへも覺えざりしなり。
げに、人の世の樂しみは我れに適はず、
妹よ、我れはただただ、汝れのみをいたみてあらん。

四

歩くにつれて從ひ來るかと見えし塔影を
やがて後に見出せしごとく、
秋風にゆくりなくもまた泣かれぬる。
汝が面影をうち見れば、
神のむすめに似たるかな。
あはれ、うるはしさは息のごとし、
汝が命こそ神の息なりしか。

愛はけがれし心に止まるをねがはず、
さこそ汝れは我が手に止まるを得ざりき。
されど妹よ。
いかにやさしき戀人も、をはりの床に
汝がごといとせちに我が名をば呼ばざるべし。

五

妹よ。
秋は木の葉にうづもれて、
冬はつめたき雪のうちに、
なにを思うて眠るらん。
人に知られで、けがされで、
うるはしく生き、うるはしく死にし汝れこそ
永遠の神のむすめぞ――
されど、ああ、などかくも早く我れに失せしや。
罪人の罪を見じとや。
さらば大空の高くとも、あまりに我れの罪な見そ、
妹よ、妹よ。汝が淸らけき心より

天堂へみちびく人も持たぬ身を
あはれと思はば、せめてあの世に導けよ。

孤獨の賛

ひとり生れき、ひとり死なん、
我れを愛せば我れを顧るなかれ。
雲行かずば我が身は船とならん、
世人(よひと)去らずば我れは身を捨てんのみ。
ああ孤獨よ、世に我が見出でたるは唯だ汝のみ、」
神ひとりなるを憎みたまはば、
我は汝とともに居らん。
さらば孤獨よ、影のごとく我れを守れ。

ゆめみる鳥は群れてかけらず、
月はみ空にただひとり、悲しみさすらふ。
見よ、卑しきものに滿つる世を、
聞け、かのいまはしき女等の笑ひを。
ああ孤獨よ、汝は憎むべき世を防ぐべき
我が城なり、我が櫓(やぐら)なり。

ただ去らん

人々巷にしていたく我れを罵れり、
あだかもかの詩人ダビデになせし如く。
その時我れは自らに云へり、ただ去らんと。

愛する女の家の前を我れは幾度かさまよへり、
その時哀れなるヱルテルの云へるが如く、
我れは一つの嘆息もて云へり、ただ去らんと。

ただ去らん！　ただ、暗き此の世を、
かく云ふ時、甘き絶望は我が脣(くち)にあり。
我は永遠に去るべき人、ただ去らん、去りてかへらじ。

シンプル・ハアト

（一九一二年――一九一四年）

おろかしと人わらうとも、
もだしつつほろびなばよし。

不幸なる人の子のため

とこしへになげける人こそ
ただわれになぐさめを與ふれ、
ただわがなぐさめを受くべけれ。
くるしみはわかちわかたれ
つらき旅路を手をとり行かん。
ひとり忍ぶをよしとは知れど、
くるしき時にもらす言葉を
卑しめよとは、聞かざりしを。

すこやかなるを誇るものは
みなこれ獸のともがらのみ、
あはれ不幸なるはなんらの幸福ぞや、
神はかなしめるものに來ませばなり。
人の世に、夢もなきねむりはなかれ、
ただその夢はうるはしかれ。

惱める人に

苦痛ほど友を求めてありくはなし、
またよき友を得るものはなし。
二十とせをわれわづらひに生きて、
あだかも地獄をめぐれるおもひす。
われは糧をくらふごとくに灰をくらひ、
わが飲みものには涙をまじへたり。

われ負ふに倦みたりとエホバのたまふ。
げに、人をおのれに似せてつくりし神は、
人のごとき弱きところを持ちたまふらん。
友よ、ことごとに神をわづらはさむより、
くるしみはくるしみに換へ、
なやみはなやみとわかたなむ。

草刈の子が足にふまれて、
折れ、まがりても咲けるなでしこ、
われらまたかくこそあらめ。
美しき後姿のふりかへりて醜かりける
人の世のあはれを知らば、——ああ人よ、
涙とこそは融け合はめ、愛の小川に。

病める詩人のなぐさめに

聞く、君の病重しと。ああ、才を忌むものひと

り人間にとどまらざるか。我れ君とともに病むことなしといへど、またおなじく人生の悩みに傷けるもの。つたなき一篇の詩、もつて君にこの情を致さむとす。

慰められつ、慰めつ、
人の世は御空に通ふ。
枯木には小鳥ぞならぶ、
荒き世に、飛ぶも憩ふも。
離れざらまし、とこしへに。
世にすてられて世をすてぬとも、
森のおとろへを友となして、
刈田のさびしさを慰めとせん。
取る手は互につめたけれど、
來れ、ふかき愁にさまよはん。
君がなげきはわが幸なり、
君もよろこべ、わが悩みを。
おのれに等しく悲しめる人を

見出づる喜びは、
世に不幸なるもののみぞ知る。
見よ野邊を、われらがいためる胸にも似て、
荒れ果てて、蘚もあらねど、
なほ來るべき日の望はひそむ。
惱むとも望を捨つるな、
よろこびは君が胸に波打ち入らん。
人の世に上なき藥水の涙は涸れず、
花咲く春は慰めをぞ齎らす。

追記。詩人田波御白はつひに逝きぬ、されどその遺稿は幸福なる諸詩人を恥ぢしむるべし。

あはれなる基督の弟子の歌

いとたかき人とならまし、
うつくしき人とならまし、
のちの世に慕はるる人とならまし、
人によきことをなさまし、
世のために血も流さまし、
くるしみをおのれ一人にとりておかまし。

わかき戀人等にあたふ

不幸なる人の子のため、
戀よ、とこしへにとどまれかし、
なやみに充ちたる生涯にただ
これのみぞまことの慰めなれ。
されば汝等ただまこともて愛し、
力をあはせて人の世の險しき道にのぼれよ。
しからずば、愛を云ふことなかれ、
愛の名によりて罪を犯すなかれ。

不信者の聖歌

いと若きやはらかき心は、
ただしばし、神をたたへき。
うつくしき夢はやぶれて、
ニヒリストの苦き微笑ぞ今のこりたれ、」
父祖の時よりのこの不信者に。

一

神なくばなどかあるべき、
わが罪も、わがくるしみも。
このなやみこそ神のたまもの、
とこしへに抱きてあらむ。
めぐみの光はわれをつつみ、
いとしの風はわが身を撫づる。
かかるよき日に、
いかでわが家にとどまらむ。
ああ神よ、君にえうなきおそれもて、
などかこの世にとどまらむ。

二

神はわれ等を幸はひたまふ、
いと高き人のみを幸はひたまふ。
そは重き悩みとして來れど
おもひでの世にうるはしき影となるべし、
こころよく受け、よろこび保て、
こごしき山々をふりかへる日は
花咲く野邊に汝等いこはん。
神はわれ等を幸はひたまふ、
いと高き人のみを幸はひたまふ。

三

神の息の身にかかるとき、
そこに悩みあり、いと幸なる。
悩みわが胸にしのべば、
祈りはわが口より出づる。

四

わが胸はよわく、神の息の身にかかるも
これを吸ふことあたはず、

わが手はあまりによわく、神のこの賜物も
もち支ふることあたはず。

五

いかに惡魔わが頭に巣くうも、
神の息は胸にぞかかる。

六

友よ、世のあらきをおもへ、
さらば神の讃むべきをさとらん。
塵にひとしき財をあづくるだに、
人は安固なる金庫をもとむ、
まして貴き生命を安んじてあづくべき
神をなどもとめざらんや。

七

神なくば、などかあるべき、わが罪の。
天にえうなき恐れもて
などかとどまる人の世に、
汝れなぐさむるものありや。

八

基督の教へあらずば、
わが生涯もあらざりしならん、
されば主よ、一重の墻を隔てて吹きすさぶ
浮世の嵐よりわれを守りませ。

九

くらき影の身にまつはるは
神のひかりのあればなり、
神なくばわが罪もなし、
罪におそれず、神に行かまし。

十

はげしき惱みにさいなまれて
くらき小路をさまよひし時、
聖なる歌は會堂の窓より洩れぬ、
さまよへるものよ立ちかへりて
天つふるさとの父を見よやと。
あはれ世にかくれ家もなき

我れになほふるさとはありき、
いかで我れ歸らざるべき、父の御(み)もとに。

惱みの讃歌

其一

樂みの與へぬものを
苦みぞ絶えず與ふる
よろこびは僞り多き娼婦にして
惱みこそ操正しき夫人なれ。
幸ひは解きに解けども
不幸こそ、そをば織るなれ。
來れ、青白き女よ、
その手は冷たし、されど我れを聖(きよ)うす。

其二

我か不幸よ、我れを捨つるな、
我が苦惱よ、我れを捨つるな、
人知れぬ德、
人知れぬ惱み、
人知れぬ思想こそ、
我が心よ、汝に奥知れぬ神祕をあたへ、
我が面(おもて)よ、汝にたふとき美をぞあたふる。

其三

惱みぞ先づ我れを愛す、
されば我れを何ものか奪ふべき。
惡魔よ、去れ、
我が心はただこれ德の巣として造られたり、
たとひそが今汚れし手もて亂さるるとも。

惱みぞ先づ我れを愛す、
されば我れを何ものか慰むべき。
現世よ、去れ、

我が胸はただ天上の灝氣のために造られたり、
たとひそが今地の風を吸へりとも。

罪人の群れより

——詩人竹友藻風に——

我はわが愆をしる、わが罪はつねにわが前にあり。（詩篇第五十一章）

かつて我れなほ子供なりしとき、
我が道に美しき子はあらはれぬ、
素直なる顏付と、親しき眼付とをもて。
我等はたのしく戯れぬ、
あるは地にものを畫きて、あるは歌ひて。

そはリンデンの靈場にして
老いたる巡禮の連れて來し輝かしき子、
イエスの子供に似たりしが、
我れは罪に於て孕まれ、惱みに於て生れ、
貧しき心もて土を掘るモルモットなりき。
我が心は腐れたる塵よりなれり、
やさしき愛の一言も我れには蔑（あなど）りと思はる。
かくて戯れのなかばに、我れいたくその子を打ちぬ、
我れは嘆きつつ、悔いつつ、罪の家へ歸れり。
人よ、この子を咎むるな、そは自ら餘りに罪せられ
ばなり。

かかることあらじとは知れど
もし美しき愛の心に、憎しみを植ゑつけしならんには、
我が罪は二倍に罰せらるべきなり。
拗くとも、輕蔑の眼はいと高き人にふさはしからず、
そを求めしならんには、我が罪は輕蔑せらるるのみに
ては足らざるなり。

我れ悲みをもて思ひ出づ、
我が齢（よはひ）の君に等しかりしを。

されども、今は等しからじ、
我れは生長することを爲さざればなり。
また生長せざりしを信ぜんとする程に我れはあはれなる者なり。

されどかのうるはしきやさしき子は生ひ立ちぬ、
しかして立琴をかなづるいみじき詩人とはなりぬ。
人を厭ふ心にたえず追はれて、
我れは死の陰の谷にも似たる沼邊にすわり
草笛につきぬ嘆きをこめてぞ吹く。

我れは敗れき、よし君我れを敗らずとも。
されどこれ我が罪の爲め、我が喜ばしき慰めなれ。
淸き若者、少女(をとめ)の口は君が聖(きよ)き歌もて充たさる。
我が歌は牢獄の夕の窓を洩るるのみ、
されば我れ、彼等罪人(つみびと)と共に、今日この歌をぞうたふ。
（一九一三年、竹友藻風が歌の多く世にもてはやされし時、彼を苦しめし過去の罪を嘆き、ひそかに作りて筐底に藏せしもの）

愛と慰め

×

涙は戀のなかうどなり、
軟かになりし心に愛は沁み入る。
幸福の與へし戀は不幸に破らる。
されど悲みの結びし戀は喜びに破れじ。
ああ、破船の後ただ二人殘りし男と女との戀！
破られたる船に海水(かいすゐ)はたのしく押入る、
やぶられたる胸に愛はたのしく忍び入る。

×

虐(しへた)げられて、
あまき同情の泉を見出づ、
そは二つの目なり、

かがやく水をそこに汲め！
汝が心乾くときには。

婚禮の詩（斷片）

×

花嫁のはじめの言葉、
あらゆる愛のはじめの言葉、
その中に永遠の生命(いのち)は籠る。
よしきらびやかなる婚禮の式は擧げぬも、
愛の抱擁は正教會(カソリック)の嚴しき式にまされり。

×

いと烈しき人生の渦卷の中に、
手を執りに進み入るいと若きプウア・カップルの
苦痛もて裏書きせられし幸福を
友は涙もて喜びて、貧しき食卓に連なる。

×

されば、おのが家の樂しき團欒(まとゐ)、
隣へと喜びを分け、
またその隣へ分け與へ、
全き世を地の上の樂園とせよ。
冬枯れし人々の胸に
紅き血の滴(したたり)をしたたらし行き、
その足跡を菫・蒲公英(たんぽぽ)もて埋(うづ)めしめよ。
かくてその喜びをとこしへの世に
もたらせよ、おのが兒に、おのが曾孫(ひまご)に。
溫かき雨に濕ほされて
ひからびし世も芽ぐみ出るごと、
愛の波紋のひろがるままに、
地の骸(むくろ)すら動き出づべき
その日こそ、この婚禮の果てし日なれや。

敗殘者のために

たゞ一つの不公平も、罪悪も止まるな!
あらたに搾つた原林の空氣の乳の香に胸をば充たし、
世界の深い海を泳ぐことが出來、
黑暗々たる地下になほ喜びを得て、
天上の靈氣を呼吸することの出來る人には、
苦痛は最も甘美な酒である。

出版せられなかつた詩集『破船者』の献本辭

すべての病める人の枕もとに、
世に虐げられ、たよる人なき手の中に、
かたるべき友もなき孤獨の人に、
みたされぬ願ひのうへに、破れたる愛のまへに、
我が藝術は捧げられてある!
(一九〇九年)

第一

我は年經た古酒を
我が穴藏から出して來る、
この饗宴の座席には
身うちに傷を受けない者は許さぬ!
翼をそなへた未來の人と、
詩を生活してゐた過去の人とが此處にゐる、
此處に汝等、不幸なる汝等を待つてゐる。
我が世界には人みな清く美しかれ!
此處には、人みな歌ふことを知れ!

我が詩集は餘りに僅かに賞められるべきだ、
唯、汝等に、友よ、汝等に讀まれ讀まれむ事を欲する。
憂鬱の眼をもて我は世界に迷ひ出た!
ふるへよろめく足取りで我は汝等の胸に忍び入る!

太古の森で、慰め合うた過去の人、
ただよふ光の中で、さかまく潮のただ中で
やがて逢ふべき未來の人よ、
たとひ今巷ですげなう行違はうと

どうか知らぬ人とはおつしやるな！

第　二

我は我が一生を不幸なる人々の爲に捧げん事を誓ふ！
その人の嘆きに代つて嘆きもし、
その人の恨みに代つて恨みもし、
その人の憎みに代つて憎みもし、
またその特別喜ばしい喜びに代つて喜びもする。

頼るものなき人々の杖となるには弱くとも、
なほ、日熱ければ蔭ともならう、
雨ふれば傘ともならう、
夕暮を草間にすわる時、蟲ともなつて慰めよう、
七つの夢の高樓(たかどの)には若やぐ酒を缺がすまい、
待て、朝ともなれば、我が童話(メエルヘン)の靑い花も咲かう。
凡ての勝利者、現世の適者に我は一つの正義も見ぬ！
美を見ぬ！　もとより詩を見るものか！
此の間違ひだらけの社會で成功すると云ふのが、
旣にその正しくない何よりの證據だ！

歴史は勝利者のものだ、
しかし、藝術は敗殘者のものだ！
敗殘者の友は誰た詩人のみだ、此外に何があらう！
藝術の中に、敗殘者は人知れぬ喜びの杯を擧ぐ！
されば今大いなる敗殘者、藝術家なる基督のために
敗殘と呼ばるる大いなる勝利を祝せしめよ！

シンプル・ハアトのあとに

あから引くうるはしき少女(をとめ)の心よ！
我れは汝の輝きを愛す。
汝は人生の曙の、やはらかき光をもて
悲しめる人の胸に沁みんとねがひき。

その愛のかたちなき夢と溶くるは、
賢き人の說くにまかせん。
ひとすぢに人生の哀れを泣きて
愛をうたひしやさしき心よ！

ああ、かくも我れはいたく愛でたりしを、
ああ、その愛はいかなる事をかせし？
そは今やその詩人の若さを殺しぬ、
その夢想家の單純を永遠に奪ひぬ！

（一九一六年夏）

我が畫廊より（一九〇九年―一九一二年）

幸福の畫は見る人の顏に輝き、
不幸の場面は人の目にくもりて消ゆる。
なに人も樂しき色もて描かれんとはすれど、
されど悲しき畫面に自れを見出でぬはなし。

みまかりし女の墓

丘の上のちひさき墓に
いともかなしき人ぞ眠れる。
强ひられて嫁ぎ、病みて去られ、
かなしみのうちに世を去りしひと、
うるはしきかたちはあらざりしかど
失するまですなほなる心をもちて、
人をうらます、おのが身をかなしみにき。

世にも不幸なるその戀人と、
昔馴染の友として、
彼女のために咲きにし花をそなふるとき、
牛のむれ家路にかへる
夕暮の野はかすみて、
あたらしき墓こそ白くうかびたれ、
棺のなかなる死顏もかくやと。

少女のうたへる歌

月かげの窓に入るを誰かはふせがん、
わが胸に入る面影をわれいかではらはん。
憂きことしげき世にうまれ來て、
われをいつくしむ戀人とぞ
よばれまし、よばまし、さらば君よ、
たかくつめたき星を仰ぐもよしなし、

暖かき血のめぐる薔薇（さうび）をはやく摘みませ、
たとひ花のひとやにつながるるとも。
あはれ聖なる罪人（つみびと）マリアよ、
われにまた許しませ、聖なる罪人の名を。

若者のうたへる歌

さまよひありく旅人も
暮るればやどる家を見ん、
われも疲れしゆふべゆふべ
その黒髮を手にまきて
この世のほかの夜（よる）を見ん。
われは心もみにくくて
愛する君をくるしめぬ、
かくもいやしき身なれども
母はその子をいやしまじ、
母ともおもふ戀人よ、
罪になやみは添ふものを、
君が愁にいだかれて
花のひとやにねむらなん、
あつき涙にひたりつつ。

夢物語

女

うるはしき世にうるはしき女とうまれ
うるはしき戀に泣くこそ、
上（うへ）もなき神のめぐみといまぞさとりぬ。
さればもろ人に知られんとねがはず、
ただうるはしく生き、うるはしく死なんとぞ思ふ。
かくもうるはしきわが胸のなやみを歌ふに
ふさひたるかな、君がよき歌、
そのかをる言葉をわれに惜みたまふな、うまし詩人（うたびと）。

詩人

もも千年(ちとせ)君はながらふるとも、塵もいかでか汚すべき。
わが歌も君を歌ふに恥ぢかくる、
さればただ、君がため、いとめでたき寝床をぞつくらん。

君がむくろはわれ園の繁みの中に葬らん、
さらば薔薇(さうび)と生ひいでて、世の戀人の手に花咲くべし。
君が心はただわが胸の靜けさの中につつまん、
さらば鶯を啼きやますべきうるはしの歌をうたひて
かなしめる人をなぐさめやせん。

人妻

ひと妻こそはあはれなれと、
友のうたへるかなしさよ。
つらあてに飲む酒の痩せを、
肥えふとりたるひと妻の、
いそがしといふひと妻の、
ゑみをたたへて見る憂さよ。
友の老いしもそのゆゑか。

尼にならむとよく泣きし
君は行きけり尼寺へ、
あか兒の聲する尼寺へ。
泣かねど涙(なんだ)がわく間(ま)も
かくれ家(が)もなき男の身、
ひと妻を戀ふ罪なくも
われは尼にもなりがたし。

人妻のうたへる

髪あらひつつおもふこと。
おもはるる身としりしとき
むかふ鏡もはづかしく、
みだれし朝のくろ髪を

かきあぐる手もふるへにき。

髪を乾しつつおもふこと。
ひと妻といふ名にめでて
苦勞する身はいとはねど、
君が寝ざめの枕もと
わがおち髪をいかにせん。

おもかげ

生きてゐるやら死んだやら
逢はで過ぎたるその十年、
思はねど、また忘られぬ。
荒野のはての墓ひとつ、
もしかさうした身の巣かと、
案じられてはただ逢ひたいが、
たとひ逢うてもわかるまい、
塵にまみれて、鬢に霜さへおいたもの。
ゆふべの夢はまさ夢か、
窓のほとりに鏡をすゑて
髪といてゐる肩の痩せ、
それも苦勞をしたしるし。
ぢつと面を見合せて、
言葉もなくてはらはらと
落つる涙がとめられぬ。
ああこれが、また此世で見られうか。
月の夜を、岡に短い松のかげ。

三年ののち

夫となれる戀人のうたへる

いつもいつも君が額にこの唇をおしあてて
我はつめたき戀のあはれを味ふなり。

夕はうするる影をたづねて
嘆きの道に我ぞさまよひいる。

噴きいづる水盤のかがやくおもひに、
くれなゐの夕日の影のうするるままに、
わが求むなるその影もともにうするる。

ああうすれゆく戀のなげきよ、
かくて三年のむかしは夢となりにけり。

夕はうするる影をたづねて、
いつもいつも我はつめたき額を味ふなり。

戀の、薔薇の、われらの春の去りゆくとき、
むなしき眞晝のあざやけき影をたづねて
嘆きの道にぞ我はさまよふ。

ある女の一生

幸福のただなかにして
我が胸に病は入りぬ。
小さき神の矢のあとさへも
癒やされしとき、
君の外には入れじと云ひし
我が胸に冷やけき魔は忍び入りぬ。
手を取りて花摘みし
野遊びの樂しきときに、
俄雨あらく降り來ぬ。

幸福は長居せぬもの、
甘き夢はねたまるるもの、
一ときの冬をしのべば
やがてまた春は來べしと

慰むる人も悲しく、
なつかしき都もすてて
ここに來しかど、
海邊(かいひん)のこころよき風も、
やさしき夫(つま)の慰めさへも、
我が頰の紅(あけ)となるのみ。

ひと夏は苦しくすぎて
わくら葉のはやも散りくる。
秋風に我れも取られん。
これも我が運とおもへば、
神も怨まず、ただ泣くのみ、
おのが身はなほよけれども、
我が夫(つま)のなげきはいかに。

罪を知らず、人に愛(め)でられ、
幸福の杯を我れは乾しにき、
この上に何を望まん、
うるはしき浪子のごとく
うるはしく我れも死なまし。
我が夫(つま)のなげきあらずば。

行路難

一

若人(わかうど)ははやもおきいで、
馬の鈴鳴りひびけり。
はなれがたなきふるさとを捨てて
行く路はけはしからむも、
貧しきなかに老いくちて
人の世のたのしみを知らざらんはくやし。

二

うらぶれの子は牛馬(うしうま)のむれにまじりて
塵を浴び、砂を嚙めど、

たれ慰むる人もなく
さすらひのなかにやつれぬ。
世の呪ふべく、人の悪むべきを、
はじめて悟りし身を、あざけりつつも。

三

旅人のころもに霜はおけり。
馬を下りて盃とれば
ふるさとの鐘の音ひびく。
人よ、われをあざけり、わらへ。
されどこのおろかしきものの
賢くなりてかへりしを誰かは知らむ。

牧場の少女

しののめの光を見つつ、
夕ぐれの虹を追ひつつ、
驢馬の背にかよふ朝な夕なに。

人のために羊は守れど、
人のために花はつめども、
君ならで誰にかあはむ、牧場に野邊に。

巡禮の少女の歌

ふるさと遠き物思ひ、
わが父母はいかにますらん。
世を捨てて、世に捨てられて
旅にあるいとし子を嘆きたまはん。

過ぎ來し橋に白鷺も見ず、
わが髪も巻き上げられぬに、
などかこの罪！
ああ神よ、美しき世を創りて

その中にこの身をおきつ、
よき衣を着て祭の日を樂しむ娘のかずに
われをもかぞへたまへり。

などかくも運命はつれなき、
うるはしきこの子あはれと
父母は嘆きたまへり。

われは野の紫の菫の中に
弱き菫と生ひ立ちぬ、
つむ人の手にも染みなばおそろしと
草の間にふかくかくれぬ。

谷かげの花をとるだに
恐ろしとわが手は顫ふ。
鳥よ、さは笠をのぞくな、
あはれ悲しきわが肌には風も觸るるな。

ああ神よ佛よ、この惱み消ゆる日なくば
あはれわが身を取りたまへと
祈りしことも幾度か。
地獄には、人目を避けて
靜かに嘆くべき陰もあらむに。

牧者の生活より

うつし世の榮華こそ女の命、
洗場に牧の兒を棄て、
蕃紅花、薔薇、あるは葡萄の園に行き、
かをりみのれる頸をば
王の手に捲かしむるらん。

顏くろき我れは牧の兒、
悲しみに眼くもりて

我が母の墓を訪へば、
風にまぎれて『いとしの子よ』と懐しの聲、
『なにを愁ふるこのよき日に、
狼に襲はれたるか、
女子の汝れを棄てしか』

『母よ、狼は心やさし、
羊は奪へど、我が胸はやぶらず。
うるはしきかの姿こそ
いつはりの現身なりき、
母よ、など貧しくも我れは生れし』

『あはれなる弱き我が子よ、
村人に生神とたたへられたる父を思へよ。
汝がまことを欺きし女は
愛するの値はなきに、いたづらの嘆きを止めよ。
見よ、春の日はやはらかに汝が黒き髪をてらすを、
この限りなき神の愛こそめでたけれ』

牧の子はつみて來し花、言葉なく墓に手向けぬ、
その心慰められしか、はた否か、詩人は知らず。

流浪せる舊王が歌

我が後宮に三千の女ありき、
我は彼等の身體を底まで極めて樂しみしが、
彼等の身體と手足とは唯だ僅かの相違をもつのみなりき、やや高きと、やや低きと、やや肥えたると、やや痩せたると。
そはやや賢き者を長く欺くべき器具にあらず。
よく眠るものはよき王なり。悲しいかな我れ不眠症なりき。
むしろ我より眠を棄てて、眠は我を追放しぬ。
されど我がその事を嘆くとおもふな、

我れ、歡樂のはての哀傷にして、
王座の天鵞絨の薔薇の模樣のまことの刺をもつを知れり。

王宮をすてて我れはじめて人となりぬ、
我は小さき少女を知りぬ、そは我に愛を敎へぬ、
そは我が未だ曾て思はざりしもの、女の心を敎へたり。
今にして知る、後宮の三千人、やはらかき枕なりしを。
まつりごととは日の中の眠の名なり、よきまつりごととはよき眠なり。
民はただ業にいそしめ、晝眠らぬものにまつりごとは要らじ。

民をはなれて、奧深き宮殿にひそむ種屬よ、
宦官の舌は汝等が良心を燒く焰なり、
三千の後宮の腕は汝等のくびきなり。
我れ昔日の王、我が衷心より汝等諸王に告ぐ、
去れ、見捨てよ、汝等の宮殿を、惡魔の支配する場處を、
然してまことの幸福を勤勉なる人民の中に求めよ。

蟋蟀の歌

鳴くよ、あはれに足折れし蟋蟀こそ。
あはれなるおのが嘆きを歌ひては、
宿世おなじき人の子をかなしましむ。
これぞ牢獄の隙もるる妙なる調。
蟲賣の手にもかかりて、
場末なるまづしき家にうつされて、
人を戀ふ少女子の夢、
世をいとふ若者の夢、
老人の衰へをいためる胸に、
夜もすがら沁みて行くらん。

ゆがみたる竹の籠のみかは、
黃金の籠より、汝れは草場を好むなり。

なにもののむごき輩か、
夜の岡の邊に火をかざしたる。
ああそれも、今となりては術もなく、
惱みのみかは、命さへ歌にかふるか。
汝がための神はあらぬか、
はらからはいかにしつるや。
さもあらばあれ、曉は絶え入る蟲の、
今宵ひと夜は歌ひ明かせよ。

一詩人の言葉（一九一一年―一九一三年）

遲く生れしもの

我が愁名づけがたし、
ただ古(いにしへ)よりの愁のみ。
かかる言葉、人すでに云ひき。
されど我れもまたかく思ふ。
――されば詩人と我れを許せよ。

一詩人の言葉

その一

才なきものをして榮えしめよ、
されど、才あるがゆゑに、
滅びなばいかに悲しかるらん。
世に知られで止むよきものは無しと、
ゲエテは敎へき。
われは後代の眼を信ずるものなり。
（さはれなどかく、われは生きたる）

生れ來(こ)し身をうらむより、
安きねむりをねがふこそよけれ。
たとひ知られで失するとも、
われは不朽をはかれるなり。
地の上にかしこからむより、
神のしもべとなるぞよき。

いかなる神のたすけもなくして、
生れにしものよ、末の世の禍ひのものよ、
いかに眼(め)にうるはしくとも、
翼なき鳥の
いつの世にかは天上をうかがひ得し、
愚かなるものこそここには蔓(はびこ)りたれ、

棄て去るにはげによきところぞ。

神のみわざをたたふるため、
かなしみ、なやめる人のために、
われはうたへど、
わが歌はなほわが疾病なり。
友よ、今日のみは許せかし、
われにこの言葉あるを。

その二

（筑波根詩人を哀しみて、眞詩人のつとめを
おもふ）

一

うたびとは世に多かれど、
まことなるこそ稀れなりけれ。
いつはりにのみ馴れたる世の人に
君がまことの歌にこもる
あはれはなどか汲まるべき。
ああ、運命のはげしさに
われこそは、破れ果てたる船なれど、
その荒海に船出する
力をだにも奪はれて、
ポオプとおなじなやみもてと、
なげきし君が言の葉の
おなじうれひは持つものを。

二

げにやまことのうたびとは、
そと胸おせば泣き出づる
人形のごとくあるべきなれ。
よろこびも、またかなしみも、
われ等みづからのものにあらず。
蘆は河畔にあらざるべからず、
うたびとはなやみのうちに
絶えずふるひてあらざるべからず。

さらば、ほとつく息は風となりて、
すべての蘆の葉をして咽ばしめん。
オルネエの村より
カウパアの歌はひびきき、
筑波根に君は老いけん、
あはれ詩人よ、その溜息を空しうせざれ。

その三

一

すべての空しく、うつろなるものも、
わが胸に入りて花咲くべし。
人生のかなしみもて
われこそは愛の國を見たり。

いともちひさきわが手をもて
にぎるべきもの、
天地こそは大いなれ、
そのゆゑにわれはわが手をさしのぶる。

戀、狂、醉、
もろもろの傷手を癒やすものぞこれ。
狂ひごころを
いかなる病かをかし得む。

二

久遠のもなかに、
果てなき世界のただなかにあれば、
わがおもひこそいと澤なれ。

わが歌を誰れもうたはず、
衢に立ちて聞けば、
童等のうたふはあだしびとの歌なりき。

やがてほろぶべき言葉をもて

いまの世にさからふ歌、
先驅のこゑ、
つひにのぞかるるなきこの十字架も
よろこびて負はむとねがふ。

たとひ世はかへりみずとも
われはまことのうたびとなれば、
なげき、泣き、祈るひとびとに代りて
野をよぎり、山を越え、
森をくぐり、谷添ひに、
けはしき小みちの盡くるまで
歌うたひつつ行かましを。

一詩人のなげき

わが詩世に知られずとなす、
ひそかに愛誦する人あるやも知れず。
わが願ひあまりに高く、成らずとなせど、
いつかはかなふ日もあるべし。
われ愛を受けずとなす、
遠くおもへる子あるやも知れず。

われし失せなば、わが戀も願ひもかなはむ。
われは不運なる能才と呼ばれ、
キイツよと、ノヴァリスよとたたへられて、
友に、世に、あまたの人に惜しまれて、
かくて靑白き子の口よりわが歌は唱へられむ。
——ただおそる、わが才のかくもあらぬを。

大詩人と小詩人と

おだやかなる微笑もて悲劇をものし、
喜びと痛みとの果てをきはめつ、
兩手に天の惠みと、地の幸福とを持ちて、

晴れやかにいと高く榮えある生を完うするは
ただ大沙翁、大ゲエテにのみ許されたり。

ここに我等いやしき小詩人等は、
喜びもなく、つたなくおろかなる惱みに
我れと身を嚙み、狂ひ、溺れ、罪せられて、
おのが恥もて同時代者の機智を助けつつ、
忘却の地獄の底へ、なだれを打ちて落ち込むならん。

詩工に與ふ

バヴはつたなき詩人なりや？　つたなき詩人とや？　いな！
彼は少くともたくみなる詩工なるべければなり

レッシング

たくみにたくみにものしては、
わが友をほほゑましむる

才たかき君にこれをおくる。
君をたたへてわれ詩工と呼ばん。
愁なく、いきどほりなく、
ストア學徒をも恥ぢしむる人よ。
筆とれば立ちどころに歌なる君のために、
斗酒を要せし李白をわらはん。

あたらしき言葉をもて、
なまめかしうも歌ふわざを學ばねば、
身は一吟雙涙流るるをあはれみたまへ。
翼なき鳥もあれば、
詩人に君あるも世のつねのこと。
されば、飛ぶ鳥の夢をわらひて、
あたたかき木かげに餌をひらふこそ賢けれ。

再びバヴに

ゲエテは言へりき。
近き世の詩人はそのいんきに幾分の水をまじふと。
思ふに君はその水に幾分のいんきをまじへたるべし。
群衆はただ手ざはりのよきもののみを愛す。
現在すでに然り、後代を誰かは信ぜん。
情熱と苦闘と生死の境の懊悩とは、
人形とおもちやと骨董とを好める民衆にふさはず。
されば汝巧みなる細工人よ、その技術を誇れ。

友に寄せて志を示す

ふるさとのあらき高峰の岩にふし鷲の子などと
わらひなんかも

佐藤春夫

我は鳥なり、
自由を愛する鳥なり。
我れは天上をふるさととなす。
我れは地上を匍匐するものを軽蔑す。
すべて我が翔(かけ)り得る處こそは我が世界なれ。
きのふは谷の花に伏しき、
けふは南に海越えて、
あすは椰子樹に巣をつくらん。
我れは歌ふ。
我れは瞰下す。
我が聲は農夫も聞きてよろこべど、
我が眼をば帝王も避くるを得ず。
されど我れは悲しみの巣に生れき、
鷲の子よ、汝笑ふとき我れは泣かん。

我が詩篇を手にして

一

我が歌よ、いとしき者よ、我が愛兒よ、
汝(なれ)は微かなれども快き聲音(こわね)を持てり、

されば我が失せしのち、世の人々に
我が嘆きと愛と願ひを告げよかし。

今の世に稀れなるものも
後の世にあとを絶たずば、
我れに等しき人ありて、
やさしき心は、いかばかり慰めを得ん。

二

我れは晝寝て、夜を行く旅人なりき、
我が歌よ、汝れもまた夕闇に消ゆるをねがふ。
かぎりなき郷愁に我れは嘆けり、
その時汝は見知らぬ人々の中に響きき。

ある者は汝を窓打つ風とおもへり、
他の者は何も思はず、また聞くことを厭へり。
されどそはゆくりなく心の惱める時、

思ひもかけぬ魔力もて襲ひ來ることもあらん。

三

あはれその作者の如くに、
多く苦しめられたる我が歌よ、
我れ汝を見るとき涙ながる、
「かかる身を親と仰ぎし」汝れの不運に。

×

我れ自らを見て涙ながる。
されど詩人よ、いたづらに悲しむなかれ、
汝が絶望ぞ汝れを救はん、
汝の死は汝の生命をその詩に與ふ。

TAEDIUM VITAE.

あるニヒリストの手記より（一九一六年夏六月より九月まで）

Vanitas vanitatum.

生くるは空（あだ）なるつとめにして
すべての賢き言葉は空し。
ソロモンの智慧はこの王にこれを教へ、
我が愚鈍もまたこの奴隷にこれを告げたり。

秋の渇望

夏よ、足早に我が門（かど）をよぎり去れ！
光は我が心に痛し。
硝子の杯に熱湯を充たせるごとく、
いと脆き頭（かしら）は狂暴の情火に裂けん。
夏よ、みだらなる女優よ、我を棄て去れ。
さらばはげしき命、狂氣の熱とともに、
輕き浴衣（ゆかた）と、それよりも輕き心は去らん。
かくて、あはれ深き歌を
秋風は我が窓の鍵盤（タステン）に彈かん。
秋は甘き涙を傷けるものに注ぐ、
すべては疲れ、すべては樂しき眠を求む。
いざ來れ、銀色の秋！
汝（な）が腕は力なく、ただ柔かにゆるめり、
いと熱き夏の抱擁に傷けられしものを
病みて去られたる蒼ざめし夫人のごとく、
細長き膝に取りて撫でさするべく——
夏よ、足早に我が門（かど）をよぎり去れ！
光は我が心に痛し。

秋の疲れ（斷片）

ほどよき冷たさ、
胸ひきしむる秋のよろこび、

硝子戸に露としたたる朝霧の中を
さしのぼる日の淡きくれなゐ、
そは夕ぐれの紅（くれなゐ）の喜びをもて、
眠をねがひて目覺めゐしものを愛撫す。
老いし農夫の如く安らかなる眠を求むる
色つきし木の葉のそよぎ、
つひに滿つるなき心のあはれをいましめ、
黄になりし面（おもて）にうかぶ
力なき影と皺とは等しきに、
など汝（なれ）もまた地の胸にやすまんとはせざる、
眠はいともやはらかきをと、
とげがたき望にかられ
冬の日の氷の中に凍らんとする心を
なつかしく共に誘（いざな）ふ、
秋よ、うれしき我が友よ、
我が心の故郷に去ることなく止まる季節（とき）よ。

×

つかれ果てし秋の光は
我がつかれし瞼（まぶた）の上にいこへり、
秋よ、眠はいとよきかな、
こころよき疲れのうちに
こころよき眠りにぞ入る
幸ひはなほ我にあるものを。
あはれ冬の虐げをなほも欲（ほ）りして、
秋の長夜を一時（とき）の眠に餓ゑて、
いかで我れなほ喘ぎ行かん、
空しき願ひも枯れ果てしとき。

棄却（あきらめ）

戀も、ほまれも、
あはれなる望も、
幸福の日も、
すべてを棄てて、

すべての縛めより我をはなちて、
靑空の晴れし心に
ゆく雲のかかはりもなく、
美しき少女の戀も、
我が友の高きほまれも
夢に見し高樓の宴の如く、
やぶれたる石鹼玉の輝きにして、
人も、おのれも、
心を濁す手とならずして、
すみて淸き泉の面に
うつり行く影をたのしみ、
ほほゑみて紅の花をながむる
安き心は、
地の上に身を投げ出し
嘆き泣きし日の夢をあはれむとき、
幸うすき我は葬られたり。
いまぞ世の人は幸うすき營みをする、

盲たる意志の驅り行くところ
ただ怨み、憎み、嫉みのみ住む
罪業の海は深きを、
ああ我はかくて去らばや。
きのふ若き生命は自らやぶり、
けふ望ある身は斃されたり、
あはれこの荒き山路に
いかで我なほ踏み迷へる、
手がかりはかくも危ふく
暗き谷底は落つるをねがふ。
一ときをのばして、一時の苦痛に砕かれ
なほ狂ほしく縋りつき、
しかもその執着の深きを誇れど、
運命は、賭博上手の
其の上にごまかしの札をつかへば、
生命さへ愚かなる賭物なれや。
一場の戲れにいさぎよき終りをあたへ

高笑ひして立上るとき、
ああそはいかに快からん。
運命よ、汝いたく我をば苦めにき、
されど、我をやぶれりと汝、誇るを得ず、
いまぞ汝は我が前に力なき神となれり。
その無力はしりぞけられし王に似たり。
一切を棄て去りしものに、
何ものかなほ君臨する、
萬能の運命も
齒がみして、逃げ去りし犧牲を罵り泣かん。
運命に刄向ふもの、
自らを救はんとせば、
よし、さらば先づ、自らを棄て去れよかし。

賭博

運命の賽の目により
泣き、笑ひ、死する人間、
あはれ造物主のつくりしおもちや、
生命がけのばくち打なる
人間も造物主の賭けもの。

斷片

×

勝負は見えたり、我は負けたり、
我が敵はここに氣の利いたる洒落を言へかし、」
我は今默して退くべし、
嘆くことなく、泣くことなく、——
これ我が運命なればなり。

×

あらゆる行爲は愚かなる夢、
そはただ悲しき滑稽のみ、
あやまりて生れ來りし力弱きものに、

悩みは超ぎたり、彼が身はもろく折れたり。
かくて慰めなき一生は閉ぢたり。

×

ああこの悲劇はあまりに滑稽なり。
またこの喜劇はあまりに退屈なり。
欠伸して觀客は散る、
ああつまらなかつたと呟きつつ――
其時、舞臺の上の死人も、大きなる欠伸をばすべし。

昔と今と

あらき火をもて我れは街中を駈け廻れり、
『あぶない、あぶない、君は子供だよ』と友は言へり、
『貴方はどうかしてゐます』と、彼女は言へり、
『狂人だ』子供のあとにつきて大人は叫べり、
『犯罪者！』警官は追つ駈けて來ぬ。
火は消えぬ、我が身は空しき灰皿となれり。
『君は老込んぢやつた、しつかりし給へ』と友は言へり、
『あの人はぢき死ぬだらう』と昔の戀人は言へり、
『病人だと見える』行き會ふ毎の人は思へり。
『生ける死骸』と O' Neddy は既に自れをかく呼びき。

わかれの言葉

世界よ、我れは汝を見き、
汝の我れを虐ぐる間に、
我れは汝を觀察しぬ、
今我れは汝を十分見たり、
殘ることなく見拔きたり。

今我れ汝を棄て去らん、
これ汝の鞭を恐るるにあらず、
そを恐るべく我が身は餘りに硬ばりたり。

いな、我れは汝の面に飽きぬ、
閉げる日にも尙ほ映るその意地惡き面を
忘却の河に流さん。

未知の世界よ、──
そは汝より美しくとも醜くとも、
汝より優しくとも酷なりとも、
よし、我はただ汝ならぬ面をば見ん。

これは別れの言葉なり、
あつかましき賣女に似たる汝の面に投ぐる
我が絶交狀なり。

運命に忠告する

何故にかく我が周圍は
かばかりの悲劇に充つるや、
神はつひに『悲哀』にして、
人間は永劫の地獄にありや。

若き心はかばかりの悲劇に堪へず、
見知らぬ人の苦患だに
なほその胸に堪へがたき戰慄を與ふ、
我が友の苦痛は我れに慟哭を與ふ、
まして自れの苦痛をや、
そは弱き胸を破らん。

いかなる苦痛にも碎けぬべく
鍛へらるる間に、
我が心は鐵砧の上に溶けたり。

その繼子を能ふかぎり苦しめんとせば、
ああ智慧淺き運命よ、
汝若し彼を保たんとせば、

彼の胸より多感なる心を奪へ。

あまりに重き荷を負はするはよし、
されど忽ち、その背のうち砕けなば、
汝の樂しみはあまりに飽氣なく終らん。

人生（斷片）

社交とは其場に居合はさざるものを
惡しざまに談ることなり。
戀愛とは盲目の强き欲望と、
無意識の打算との取引なり。
友誼とは酒杯の中に生れ、
財布の中に死する怪物なり。
世界のあらゆる美しき名は
すべて醜き面を飾る。
これは人生の正しき觀察なり、
輝き匂ふ世界の苦き眞實なり、
尙ほこれを愛せんとするものはこれを愛せよ！

滅亡の喜び

一

我が四肢は甘くたるみて
痛む頭もこころよし、
この頭くらく、めくるめくとき、
失ひし樂園は幻に見ゆ。

二

手はふるひ、足はよろめく、
さながら、醉ひどれが
家路へかへるにも似て、
地獄の門に倒れ入らん。

三

滅びよ、滅びよ、いとしき我が身、

急げよ、たのしき地獄の門へ。
すべてのものの存在せざる
其處にこそ我が失ひし樂園はあれ。

衰弱の喜び（斷片）

心くろむ夏の眞晝に、
さびれて、薄るる秋の光を待ちわびつつ、
手を胸におしあて、
たかまりゆく鼓動をほほゑむ我れ。

青ざめて、より青ざめて、
なつかしき墓場のにほひに染みつつ、
目に見えず、心に強くおぼゆる
衰への甘き喜びに身をゆだぬる我れ。

人生の歡びは

すべて、身をすりへらす歡びにして、
はげしく働き、身をさいなむも、
これもただ滅亡の爲め。

慢性の病のごとくに、
快樂も苦痛も、人の身をさいなみ殺ぐよ。
燃ゆるはランプのつとめにして
油盡きなば嘆き消ゆる。

風の來て火を吹き消す如く、
運命の氣まぐれに攫はるるもの、
または急性の死に逃れむと
決然として匕首を取るもの。

我れも去らまし——
されど定命の時をねがふは待遠し、
運命をたのむは氣遣はし、

匕首も、毒も、それはまた餘りに荒し。

世の歡び(よろこび)は我れに否まれてあれば、
いざ、我れは身を苦めん、
あらゆる惱みと辛勞とに、絶間なく衰へ消えん、」
『徐々にかつ確實に』しかも尙ほはるかに早く。

滅亡に向ひて急ぐ自れを眺めながら
しづかに落つる涙を樂しめるものに、
すさまじきカタストロオフはなつかしきもの。
ああいかに、その呼ぶ聲の甘く樂しき。

處世哲學

誠實は人を破滅に誘ふ、
若し智慧の伴ふなくば。
人間の生存に必要なるものは
程よき智慧なり、
聊かの利己心なり。

世界の中にて愛よりも尊きはなし、
されどまた愛よりも難き(かたき)はなし。
人の爲めに生命(いのち)を棄つるはよき事なり、
されど徒らに犧牲となるは愚かなり、
先づ相手が其身を捧ぐるに足るかと問へ。」

人生は常に聰明なるものに味方す、
されど聰明すぎるは愚かなるに等し。
その手加減は料理の如くむづかし。
悧巧なれ、されど悧巧すぎるな、
これ汝が幸福の祕訣なり。

人の心について

世より世へと
かぎりなき人もありしが
たまたまに同じ世に生れ來りて、
廣き世界のただ中にして、
たまたまに顏を相見て
かたるだに、世にもあやしき緣なるを、
しかもなほ、いかなれば人は
憎みそしり、あざ笑ふらん。

しかもまたなき友となりて
交はりながら、陰にゐていたく罵り、
敵の中なる敵よりも烈しく憎み、
その人の世を去りしまで
癒えがたき嘆きをあたふ、
いな、その人の世を去りしのちも
堪へがたき誹りをばすらん。
かなしくも造られし人の心よ。

人生の空虚なる事につきて（斷篇）

×

愛し、憎み、
ねたみ、恥ぢ、
なげき、喜び、
あやまちて、また後悔し、
かくてあはれなる一生は終る。

×

生くるも、死するも、
束の間の戲れにして、
めまぐるしき世は
をかしき樂劇の舞臺、
一時の勝利も、敗北も、
消えてあとなき泡沫の
夢にも似たり。

×

卑しき性根も、美しき心も、
人間の下畫を染むる偶然のいろどりにして、
善とよぶも、惡と謗るも、
罪にあらず、譽れにあらず。

×

泣くも、笑ふも、
運命の氣まぐれに操らるる人形芝居、
筋道が立つてゐたらば
不思議な位。
十錢で見るがものなし、
世界とよぶ此の花屋敷。

×

欺かれしも、欺きしものも、
盜みしものも、盜まれしものも、
そしりし者も、そしられし者も、
するだけの事さへすめば
墓をつらねて横はる。
土の中にはただ等しき腐蝕と沈默とあるのみ。

×

人が行くか、時がうつるか、
フィルムのまはるは早く、
つと絶えて見ればはかなし
人生の活動寫眞——
一昨日の御馳走の味のごとくに
うまかつたと云ふも馬鹿らし。
こよなき快樂も、限りなき苦痛も、
すぎ去りて見れば同じき經驗のみ。

×

百年も足らずと思へど、
つひには來る死の床にして、
惡しき夢を見たるものよと
嘆くらん、幸福の子も。

×

かくて時代は時代とかける、
父より子へ、子より孫へと
かぎりなき嘆きはつづき、
虚無より出でて虚無にかへる
肉の影なる魂(たましひ)は、
霧より出でて霧にかくるる
旅人のすがたの如し。

厚顔なる者の幸福について（斷篇）

×

踊れ、踊れ、
人生の踊り場にして、
無益なる矯飾をして尻込みする者は、
忽ち幸福の帳簿より除名されん。
見榮坊よ、內氣者よ、
汝の『踊らざる踊』は拙劣なり、變則なり、」

汝は陰部をも恥づる事なき者となれ。
汝の最も人に見らるる事を恐るるものは
汝の持てる最もよきものなり、
その『利己心』をさらけ出せ。
かくて踊は本式となる。
惡魔の踊も及ばずなる。

×

踊れ、踊れ、
無用な遠慮をすること勿れ、
人生はあまりに短し、
下らぬ辭退の禮儀にこだはつて
失ひし一秒は返る事なし。

×

人生は假面舞踏會なり、
ここにして地顔にまさる假面はなし、
この假面によりて思ひの儘に人間は戯れ踊る。
まことに生きることを知らざる者のみ

恥をかたり、良心をかたる。
幸福の行列の落伍者として
彼等は零落し、自殺し、發狂すべし。
人生の棄權者は
常に車の五番目の車輪となる。
片隅に引込んでゐる者を
踊に引出す面倒を見るには人は餘りに忙(せは)しきなり。

×

生くるは人間の第一の喜びなり、
生くるは凡ての尊き惡事よりも尊し、
生くるは『利己心』の面白き競技なり、
生くるは卽ち踊るなり。
生きよ、生きよ、
ああ人間よ、
己れのもてる物は皆ジャスチファイせよ、
眞理は『利己心』に反すべからず、
友は中傷の滿足を知らしめ、
戀人は誘惑と飜弄との喜びを汝に告げん。

×

踊れ、踊れ、
厚顏なる生の踊を。
女は圖々しき手に入るを樂しみ、
幸福は厚顏なる者を喜ぶ。

×

されど我れは足萎へたり。
『生の踊』を恥づる者に
神は足をばひつたくる。
足萎へはただ『死の踊』をのみ踊る、
面白くもない陰氣臭い『死の踊』を。

二重の踊

間違ひの圓きかたまり、、、
無限大なる空間を踊り廻る。

その上に出來損ひの人形が
厚顔きはまる踊をどる。
ああ、しらじらしき嘘の上なる眞赤な嘘よ！

ノンセンス

生かじりの作家の爲めに
滅茶苦茶の舞臺に立つて、
泣きつ笑ひつ飛びまはる
ああ氣の毒な役者達、
トガキの通り、『このところ十五分間沈默』に
見物人は欠伸して、
日も、月星も、食堂に交りばんこに引込めど、
この滅茶な芝居は、何時迄たつても幕にならぬ。

悲痛なユウモア

よし。我れは嘆かじ。
そは神の試みなり、それもよし。
そは前きの世の報いなり、それもよし。
そは惡魔の惡戯なり、それもまたよし。
そは他の何事にも非ず唯だ運命のみ、それもいとよし。
我れは嘆かじ。
第一に嘆くべき言葉を遣ひ果たしたれば。
第二に嘆くより善きことをよく知りたれば。
そは何ぞ。そは嘆かずして笑ふことなり。
出る處にて頬を打たれ、
べそをかきつつ引き退る
世界の道化役なる自れを笑ひて樂むことなり。
有難し、汝 Galgenhumor（悲痛なユウモア！）

宿命論者のユウモア

彼は生れき、その家の破產せし日に。

彼は戀しき、その女の戀を得し日に。
彼は職業にありつきぬ、徵兵に取られし時に。
彼は婚禮しぬ、花嫁の不淨の時に。
彼は雪駄穿きて出でぬ、その日雨降り出でぬ。
彼は傘もて出でぬ、その日雨降らざりき。
彼は常になく車に乘りぬ、その車覆りぬ、
彼の兩手は挫けぬ、彼は畫家なりき。
彼は自殺せんとて海にはまりぬ、
漁夫が駈け付けて彼を救ひぬ！
彼はまた生きんとする欲望を得て
夜中に村を通りしに、人に怨みを抱くもの、
人違へして打ち殺しぬ！

我が享樂

無神論、唯物論、
しかしてニヒリズム！
破壞の喜び、絶望の笑ひ、
しかして人類への挽歌！
我が轉倒せる享樂は
ノルマアルなる享樂よりも深し。

人間の悲劇

人間のあるところに地獄あり、
しかも人間は地獄を恐る。
彼等の惡智慧はつひに天國を造れり、
されど人間の入るとき天國は地獄に變る。

暗面

おのれ暗面（ダアクサイド）を有するものは
好んで人の暗面を談る。
ああ、人は互に暗面を喜び談る。

預言

詩は預言なり、
あまりに悲しき預言なり、
詩人の本能の聲は
そが運命を自らかたる。

漂流

我が人生にありしは、
大海にただよふ小舟にありて
一杯の飲み水を求むる者の、
水の中にありて水に渇くが如くなりき。
我れは人間のただ中にありて、
一人の人間にこがれたり、
我が渇きを醫(いや)すべきただ一人に……

後悔

その財産を銅貨もて蒔き散らす人の如くに
我れは我が感情を愚かに費(つひ)へり。
パッションを小出しして、
遂ひに我れは必要なるものを買ひ得ざりき。

文學と呼ぶ菓子の味を覺えて、
胃腸を弱めて、我れは人生を消化し得ざる
若隱居となれり。人生問題に耽つて
かへつて人生の明きめくらとなれり。

愛の教への甘言にうまうま乘せられ、
我れは神樣のペテンにかかれり。
若(も)しくは、神を僞造せし人間にしてやられたり。
かくて我れ三歳兒(みつご)のやうにべそをかく。

愚痴は醜き過去を染むる醜き色彩にして、
すべての後悔は馬鹿らしきものの王なり。
痴者よ、永遠に汝の星は落ちぬ。今は默せよ、
汝の愚かなる過去を償ふものは唯だ汝の沈默のみ。

硬派

我が不幸を遺憾なきものとせん爲めに
あらゆる苦難を、運命よ、我に與へよ、
かくて我れ思ひの儘に汝を罵り得べし。
かかる時、申譯だけの幸福を與へて
口どめせんと圖るとも、そは成功せざるべし。
我れは限りなき不幸もて購ひ得たる
運命を罵り得る此の幸福を抱きて死なん。

誤植

我が生涯はあはれなる夢、
我れは世界の頁の上の一つの誤植なりき、
我れはいかに空しく世界の著者に
その正誤をば求めけん。
されど誰か否と云ひ得ん、
この世界自らもまた
あやまれる、無益なる書物なるを。

『あきらめ』の哲學（斷片）

忘れ去れ、つれなき女を
棄て去れよ、いつはりの友を、
願ふなかれ、あだなる譽れ、
棄てて行け、苦みに充つる此の世を。

しかも『無用の者入るべからず』と、
張札のある幸福の嚴めしき門の中へと
押入るべき圖々しさは我が審美學に背けり。

かくも我れは古き日本人なり、
我れは歐洲人と支那人との執着なし、
ハラキリを美しき芝居と思ひ、
『あきらめ』を又となき哲學となす。

我れはあらゆる欲望を一つ一つ擲ちて來ぬ、
今や人生に對して、想像し得る限りの
最も僅かなる要求をもつのみ。
それさへも、惜氣なく手離すを得ん。

飽きたり（斷片）

×

おろかなる未練の心に
嘆きつつ、憎みつつ、嫉みつつ、
女の幸福を、友の譽れを
眺めつつ、悶え死ぬ者は醜し。

運命に屈する者は賢者なりと
希臘人も云ひき。
無窮の戰線の一角を守りて、
我れは其日其時、斃るべき宿命を持つ。

いかに嘆けばとて嘆きは減らず、
ただ汝の茶番を愈々可笑しくするだけなり。
棄て去れよ、すべての悲嘆を、
汝には合性惡しき賑はしき世界を。

我れは人生の餘計者として生れき、

我れを殘して日は沈む、
我れを殘して人は逝く、
世に忘れられ、
幸福の帳面に附け落されて
我れは生きたり、十分生きたり。
我れは未だ戸籍の上にては二十幾歳なれど、
我が經驗は華かに豐富なる芝居にはあらざりしかど、
我れは人生を洞察したりと誇るべき何物も持たねど、
されど我れは餘りに欺かれたり、
我れは餘りに虐げられたり、
(我が二十五年は幸福の子の百年にも當る)
――我れは飽きたり。

若くして『飽きたり』と云ふは悲し、
百年も生きたるが如く思ふは悲し、
正義に渇望し、平等を信條となし、
あらゆるユウトピアの夢に青春を養ひたるもの、
あはれ、『幻滅屋』なる醜名のもとに
嘲けらるる者の末輩となりしは悲し、
運命の烈しさに泣く事も能はずなりしは更に悲し。

×

人間の心は水甕のごとく
限りなき苦痛の水を盛ること能はず。
あまりに烈しき音は耳の鼓膜を破り、
あまりに酷しき苦惱は感情の鼓膜を破らん。

×

青くして蝕まれたる木の實のごとく
我が心には皺寄れり、
常に鍬を取る手の皮の厚くなるごとく
常に激動せし我が感情は化石せり、
人の苦痛も、自れの苦痛も、
今は我れに何の關係も無し。
人生の美食も無味に等しく、
幸福も不幸も同じ事となれり。

惡意に酬いる憎惡もなく、
貧困に對する憐憫もなく、
我れは辛辣なる皮肉を浴びせかくるものうくして、
人通り繁き巷のほとりに腰おろして、
世界の步行を眺めゐる。
我れは凡ての人生の聲に聾となり、
無感覺となれり。
ああ、何時の日にか斯くなりし、
かの敏感を持てあませし我が心は。

我れは飽きたり。

taedium vitae ――生の倦怠――
そは歐羅巴にては一世紀遲れたる
流行おくれの呼聲なり、
今更物珍らしげに呟く馬鹿よと
批評家は罵れよかし。
我れにはその非難などはどうでもよし。
かかる惡詩の羅列にも我れは飽きたり。
我れはすべての我が本能に飽きたり、
されど人間を辭職するその手續きも面倒臭し、
生きるも死ぬるも、どうでもよし。

初戀

初戀の人をおもふは、
なほ我が墓を見るが如し。
ソシアリズムは我が初戀なりき、
我れ年十七歳にして、
かの赤き表紙の書を感激もて讀みき。
岡燒きをして、その戀とその戀人を
朋輩と世間は謗る。
かく我れも『貧乏人のソシアリズム』と
富める友より嘲けられ、
幼稚な感激よ、ヒロイズムよと

處世の哲學者よりは笑はれぬ。
（されどそは一つのポエムなりき。）
生命がけの戀はおもしろし、
情婦の爲めに一生を棒にふるはよし、
一つの信仰に殉ずるはえらし、
ただ其處にのみ人間の生き甲斐はある。
我れは子供ながらにそを知れりき、
またやけくその勇氣もあり、
血氣は瘠せし身體に充ちたりき。
されど此の勇士は餘りに內氣なりき。
すべてのもどかしき初戀のごとくに、
我れは遠くよりその姿にあこがれ、
あへて我が理想に近づかむともせざりき。
（かのFに死ぬまでの戀をしながら
一言も打明けて言ひ寄りし事なきが如く）
――その間に我れは年を取りぬ……

人間を改善せんとせば
人間を滅ぼさざるべからず、
そは不治の病にかかれる人の如し、
癒やすとは滅ぼすを云ふ。
人間のあらゆる惡しき制度は
世界の惱めるその病なり。
（いな、人間が世界のバチルス其物かも知れず）
平等と自由とは人類の其の爲に生きる
美しき夢なり、最高の標的なり、
しかもそは唯『死』の中に在り。
かくて絕對の自由と平等とを得んとて
人間はつひに死に行く。
――かく經驗は我れに敎へぬ。
いま我れは死をのみ信ず、
あらゆるユウトピアは蜃氣樓なれど、

死のみは不滅のユウトピアなり。
我が努力は今やこれに向へり。
されどなほ世にあるうちは、
實體を摑み得ざるうちは、
夢をよろこぶ、詩人なる我れは。
初戀の人をおもふがごとく、
我れは愛す、ソシアリズムを。

×

美しき世界は深き深き苦痛の巣なり。
美しき世界は不治の病にかかれる美人の如し、
彼女の美しさは病的にして、
美を滅ぼすときにそは癒ゆるなり。
世界の苦痛をのがれんとする者は世界を棄てよ。

世界のストレンジアより（斷篇）

一

憂鬱の眼をもて我れは世界に迷ひ出ぬ、
きらびやかなる此の世界に。
されど世界は我れを見知らず、
冷やかなる眼に送られて、
行き暮れしこの旅人は
家ごとに、一夜の宿を求むれども、
いたるところに、隣の家を教へらる。
あはれ、この世界は人氣（にんき）惡（あ）しき土地なりき。
しかも我れ、何處（いづこ）までさまよひ行くぞ。

二

家なき人のねむり場は
つめたき土の上にあり。
他國（ストレンジア）の者のふるさとは
つめたき土の底にあり。
歸れ、歸れ、地上に疲れし旅人よ、
一日の營（いとな）みに黑みし人の
家のいろりにくつろぐ如く、

汝れもやさしき土のふところに土となれかし。
今こそ此世の修羅場を棄て去るの時、
ながき日も早やたそがれぬ。

三

見馴れぬ者を、道のべに
子供ははやし、犬は吠ゆ。
笑ひの槍よ、暗き心は黒く血を流せり、
それにも馴れたり。
我れは世界に馴れ行けど、
世界は我れに馴れんとせず。
我が胸にここなる空氣は氷の如く、
世界の光は我が身に毒矢の如し。
ああ、旅人よ、
汝はあやまりて世界に出でぬ、
力ある者、正しき位置に汝を置きかふるとき、
光なきところに暗は汝を愛撫せん——
汝が此世に願ふもの、
事業も、幸福も、汝には强すぎる光なれば、
こころなく日向に置かれし日蔭の草の如くに
枯れ果てよ、二度とまた萠え出でぬために。

ああ、世界は苦し（斷篇）

我れは若くして晩年を見たり……

一

ああ、世界は苦し、
ああ、我が命は長し、
朝明はあまりに早し、
胸を燒く光は强し、
夕暮はあまりに遲し。
あはれ枯るるか萎るるか、あはれなる草、
いざや與へむ我が涙を
されどああ、我が涙はかくも苦く、かくも熱し。

二

ああ、欠伸する魂よ。
ああ、疲れたる旅人よ。
醒むる時なきこの惡夢、
止むことのなき拷問よ。
ああ、未だ未だ世界は滅びず。

世界の堅き心を我れは食へり、
我が脆き齒の碎くるまで。
世界に充つるあらゆる毒を我れは吸へり、
我がいと弱き胸の血を流すまで。
されど、なほ我れは生きたり。

三

我が過去はあまりに悲し、
我が未來はあまりに暗し、
我が現在は悲しく暗し。
しかもなほ目に見えぬ鎖につながれ、

盲目の意志と呼ぶ磁石に引かれ、
我れはこの世界を逃るるを得ず。

あはれ眞晝の熱き光に泉は涸れたり、
眼は髑髏の穴となりぬ。
ああ泣くものは尙ほ幸ひなり、
その心は若し――
我が心は今や百歳になれり。――
今はただ腹の底よりの大いなる欠伸出づるのみ。

あはれ、いつ我れはかくなりし？……

幽靈

人のすべての眠りしとき
あらはるる星のごとく、
生なき者のほとりに

さまよひ出づる幻のごとく、
光なき灯火となりて、
形なき影となりて、
燃えしことなき灰となりて、
生れしことなき死人となりて、
空氣なき世界に迷ふ。

我

我れは一つだに大いなる事をなさざりき、
されど我れは大いなる事を思へり。
我れは人の爲め貴き事を敎へざりしかど、
なほ自ら貴き事を多く學べり。
いとつたなき韻律をあやつりしかど
自然の壯嚴なる韻律を深くさとりぬ。

嘘からまことが出る

かい眼鏡近眼を誘ふごとく、
佯狂のまことの狂氣に轉ずるごとく、
苦痛をつくりて樂しめるものに
つひにまことの苦痛は來りぬ。
かつて下宿屋の二階を屋根裏と稱し、
その苦痛を誇張して喜びしものに、
運命はまことの屋根裏と沈默とを與へぬ。

力を持たぬアトラスの歌

目に見えぬ力のありて
滅亡に向ひて我れを供へき。
名づけ難きもの我れをとらへて
あらゆる惱みに我れを捧げき。

なに人もただこれを知れ。
掠かれしもの、破られしもの、
嘆きつつ正義を呼ばふ。

人の世は闇に合せなり、
ここにして泣くはおろかし。
ただ強き拳をねがへ、
強き拳よ、これにまして語るものなし。

力ある拳くだせば
粉微塵に正義は砕くる。
力即善、
力なきところには常に
愚かなる涙ただよふ。

無題

大いなる魔術師ありて我が知らぬ間に
重き世界を我が肩におけり。
かくて我れ日に日に卑しき奴隷となり、
苛ざめて、苛ざめて、苛ざめて行き、
いと脆き火として風の前に置かれ、
女ほどの力もなきアトラスとはなりぬ。
アトラス世界を投げ出すとき、
彼のいなみし膝に罪はあらじ。

力即善

あはれ我れはあやまりたり、
『力即善』の眞理を
知るために、ああいかばかり
犧牲をば我れは拂ひし。

力あるところには善、

我が涙土に流れて
さびしき微笑は脣に實りをあたへ、
たくみたる哀れを訴へしもの、
まことの痛みの來るにまかす。

苦痛に耽り喜ぶもの、
その度びに談りてやまず、
我れはひそかに苦しみを胸にやしなひ、
なめげなる問ひを拒めり。

されど苦しみのすぎ去りしとき、
そは事もなかりきと人に告ぐる、
さればこころよき今日の疲れは
なきあとに誰にかかたらん、うれしかりしと。

自らを葬る

我が眼は失はれて行け、
我が憂愁は我が眼に溢る。
かなしげなる微笑を
汝はつねに涙にかへたり。

我が脣は失はれて行け、
そは愚かなる嘆きのために色褪せ、
そは一度びも人生の熱き接吻を感ぜず、
ただ遂げがたき願ひを口籠りしのみ。

我が兩の手は失はれて行け
そは一度びも力をこめて
溫かき世界の胸を抱きしことなく、
ただはかなき夢を記せしのみ。

我が魂は失はれて行け
そは惡魔さへ買ふことをねがはず、

この哀れなる肉體さへも嫌へるもの、
不具に生れし發育せざりし魂なり。

一度びも生きし事なく、
ただ影の如く漂ひしのみ、
しかも常に死をかたりしその滑稽さをも、」
かくて我れは今日つひに葬る。

海の死

我れを育てし搖籃よ、
限りなく廣き我が寢床よ、
永遠に朽つるなき我が墳墓よ、
世に狹め、壓しつけられて、
我は限りなく汝を慕ひき。

海の求めし花婿よ、
地の上に不幸なる者よ、
漂へ、漂へ、海の上を――
生ける者の最も勇敢なる者も
未だ行かざりし北極に、
氷の墓は汝を待たん。
海の象なる鯨の群れ、
古き世界の王者のごとく
汝を衛りて導かん。

漂へ、漂へ、海の上を――
果てなき波とたはむれて、
世に忘れられし汝が歌を
眠に誘ふ守唄に
やさしき波はうたふべし。

地の上にありしとき一たびも笑はざりしもの、
波の中なる波となり、

躍り、狂ひ、叫びて笑へ、
汝を棄てし女の
汝を賣りし友の
その地上のあはれなる幸福をあはれみつつも。」

遠き故郷の岸を打ち
幼馴染の墓を洗ひ、
汝を追ひし地の上に
雨と降れかしやはらかく。

地と相容れぬ陸上の反亂者、
海にのがれよ、
海は故郷なき亡命客を
などかつれなく陸の上に投げ出だすべき、」
海の胸は限りなく廣し。

海よ、廣き胸もつ花嫁よ、
汝が新床に年若き夫をむかへよ、
古くして、とこしへに若き汝の欲情もて、
大いなる詩人シエリイになせしが如く、
小さき詩人の我れにもなせ。

憂鬱家の斷章

一

短劍、短銃、また毒藥、
ああわが戀人よ、
わが夜毎必ずいだきて眠る
最終のわが戀人よ。
われを人生の鐵鎖より解放する
義者よ、俠士よ、
不幸なる者の救世主よ。
われは汝等が千萬の善行の
最もよき證人たらん。

われにまして、汝等が
働き甲斐のある苦惱はなからん。
またわれにまして、汝等をば
限りなく愛するはなからん。

二

人生の底なし沼に踏み込みし者は、
絶望を樂しみとせよ。
免れんとあせるだけ苦しみはまさる。
ただ、落ち込め、落ち込め、
深く、深く、また深く……

三

その生涯のをはりの頁に
The end の文字を自ら書かば、
そは胸のすく事なり、
そは二十餘年間の溜飲を下ぐるに足る。
してやられたる意地惡き運命の狼狽を
冷かに笑ふは樂し。
ここ迄お出でをやりながら。

四

あまりにみぢめなる生き方をすべく
わが誇りは高し。
資本を持たずして人生の市場に立ちて、
何一つ得るところなかりしは當然のみ、
資本無かりしを嘆くより、
その途方に暮れたるまぬけづらを笑へ、
泣くよりもそは男らし。
高笑ひして、已れに最も尊きものを
地に擲つは、誇の高きものに似合はし。

五

プロロオグなくして始まりし生は
エピロオグなくして終るべし。
おそらくこれは創造者の氣まぐれの產物、
その全集より除かるべき失敗の作、
斷片のままに捨て去らるべき駄作ならん。

そはただ悲劇の下書きのみ、
悲劇を作らんとせしが、途中より
作者の氣が變りて、喜劇としたる斷片のみ。
この書きぞこなひの草稿を
燒きすてよ、作者の名譽のために。

六

われは自然より此の肉體を借りたり、
われは曾てかかる重荷を欲せし事なけれど、
氣が付きて見たれば負はされてゐぬ。
かくて『生きる』にはあらで、『生きさせ』られて、
絶間なく手酷しき利子に追はれて、
われは無期徒刑者の絶望を惱めり。
かかる禍ひの生命はわれに用無し、
苦痛の利子を日毎日毎に拂はんより、
われはむしろ此の肉體を自然に返さん。
日日の疲勞もてなしくづしに支拂はんより、
かためて高利貸の面(おもて)にたたきつけん。
日常生活の小出しの苦痛を
小氣味よく一瞬の痛みもて代へん。
われは旣にあまりに多くの利子を拂へり、
しかも此の資本もてする事業はなし。
われは人生の無期徒刑には飽きたり、
さらばよし、
かの丁抹の王子が最後の言葉をもて
此の「結末」の結末とせん、
"The rest is silence."
餘るところは沈默のみ……

道化者として（一九一四年—一九一六年）

アラス、プウア・ヨリック！
おまへは悲しい道化者、
おまへの涙も笑ひの種になるばかり！

莫迦の歌より（大正三年九月—十月）

—『紙上英雄』の豪語と自嘲と—

思ふだけで滿足出來なかつた大阪の與力のふみのあはれたふとし

一册の本は書かねど宗五郎は平八郎に劣るものかは

二千年の日本歷史にただひとり我れを泣かしむ佐倉の宗五

瓦となりて全からんより玉となりて碎けんと言ひし古人を慕ふ

タルタルウスの深き底に投込まれても遂に屈せぬチタアネン我もその族

チタニックのこの精神の向くところ焰ともなれ劍ともなれ

竹林の七賢は日に淸談す我は日に日に繩目のもとに齒ぎしりをせん

我が小さき家をめぐりてなく蟲よこの空想兒をわらふか悲しむか

弱きもの貧しきものの群れにありて我が腸は燃ゆ

ミイラとなりて千年ののちに殘らんか階級戰の塵とならんか

大逆無道天も許さぬ罪犯し絞めらるる時を想ひつつ便所の中できく蟀

宿なしは今ごろ何處をうろつくらんこの夜雨ふりて十月に入る

文豪にならむとおもひ鄉關を出でし日おもふ秋の雨か

な
義賊こそ我が理想なれと口で言へど空巣ねらひも出來ぬかなしさ
叱られて家のまはりの雨に濡れながら泣きまはる猫よ叱つた僕もおまへと同じ弱者だ勘忍してくれ
臆病でへまな僕さへ傲慢と見られて反感を買ふらし人生の悲劇
人口制限を持論してゐる僕なれば一ダアスの子を神や授けん
質草はまさに蠢きんとすこの僕を質に取つてくれる質屋はないか
酒屋の拂米屋の拂何かあらん妻よ恐るるな我に尙半日を空想せしめよ
食へなくなれば夜逃をせんと思うてゐるそれにしては本が重すぎる哉
質屋の養子今は質屋のお客様有爲轉變のおもしろきかな
ままのてこなこのうるはしき少女子に我もわたさん我が家の鍵
夕ぐれの何ともわかぬ悲しみにこの一生をむしろゆだねん
豆しぼり、しるし半天、紺のれん、意氣な職人がうらやましけれ
四海波をさまりて目出度けれ花嫁花婿の寫眞も絶えずして天下泰平

續莫迦の歌（大正四年八月）

妻にのみえらき人よと頼まるるに顏をそむけて高笑ひする
夕ぐれの雨をながめて髯のびし顎を撫でをる甲斐性なしかな
長居して低能の底ぶちまけて格子戸を出るしよげた面かな

にやりとして聞く人の顔に氣が附きてにはかにしよげし低能兒かな

街頭の風に吹かるる塵となり雨の來るまでせめて狂はん

塵勞にすりへらさるる憤りが Yota と出て來て罵られにき

五時間の仕事をさへも厭はしと思ふばかりに疲れはてにき

月末をよそに手枕するほどのなまけものとはいつなりにけん

いかばかり困るものかを知らんとてなまけ暮しぬ月はくるれど

あべこべにしかも巧みに出來てゐる世の莫迦らしさ笑はん泣かん

三十にして失せにし友をとむらひてかへる夕の空の稻妻

貧乏が、この貧腦のもとなるか、貧腦ゆゑのこの貧乏か

低能兒の濟民を說くその聲にまじる赤きを友はわらひき

臭し臭し、されども悲し、かのいたちの最後屁に似る莫迦の歌かな

莫迦の歌の後に （大正五年六月）

十分に莫迦を發揮したその後の莫迦らしさこそ莫迦の役得

俺は莫迦だつたと後悔するほど賢くなつた時の莫迦のみぢめさ

おひとよし、正直者であつたゆゑしくじりにけり惡の世なれば

だまされた男の愚痴をさかなにして一杯やるのが賢人の道

『幻滅』の歌を『人道主義』の日にうたふ何處まで逆に

ゆく運命か
莫迦の歌の時代の生きた記念碑の友は氣まづく我と別れき
これほどに暗い人生觀がよく抱かれたものと思ふ人こそ幸福の人
『人間』を憎むに至らしめたるその友とあはせて『莫迦』に今日ぞ別れん

再び一年の後に（大正六年六月十日――二十六日）

『露の世は露の世ながらさりながら』ここに生の唯一の肯定がある
勝つ望なくて戰ふチタアンのこの大勇氣、我れを棄つるな
我れもまた强く邪惡にならんとすかのシルス・マリアの隱者のごとく
惡よ惡よ、この利己心よ、ここにのみ生存はある、肯定はある
凡て世の危害に對し抗すべきもの我身一つぞその故に自己を愛せよ
この自己よこの中にこそ限りなき力はひそむ自己を愛せよ

道化者は神樣をどう見る？

神はどえらい犬儒だ！
トルストイアンに貯金を與へ、
哲人の下女を孕ませ、
ヒュウマニタリアン同志を反目せしめ、
ペシミストには百歳の壽をばねがはせ、
雲の中から手を拍つてかゝから笑ふ。
『神はチイク君よりも皮肉屋だよ』と
チイク君をからかつたハイネの傳記も、

『神はハイネ君よりも皮肉屋だよ』と
この道化者に言はせるが、
またこの俺より、更に俺を皮肉る者よりも、
神はどえらい皮肉屋だ！

彼は永遠のこの走馬燈をばまはして見る
飽くこと知らぬ意地惡のいたづら小僧！
彼は特別席に陣取つて、
自分の作つた喜劇を自ら樂む大作者！

心の放浪（一九一六年秋―一九一七年夏）

『ここまでも私は來たか？』
おどろいて叫ぶか、心の放浪者、――
終りを知らぬこの旅に心はつかれた！
つかれた眼に、消える日のないこの渇望！

果實と詩人

未熟な青い果物は木から落ちる、」
落ちながらそれは嘆息する、
『これが私の運命か？
私もまた甘く熟して、
この世の快樂のかぎりをつくし、」
――一夏の日光をたのしみ――
美しい秋にめぐりあひ、
さて、鳥の胃の腑に入らうと思つたのに……』
不運な木の實よ！
然し、おまへは一人ぢやない、
おまへの運命をこの木の下の詩人もわかつ――
食はれ啄まれるのは果實の喜びだ、
讀まれ歌はれるのは詩人の樂みだ、
それも私とおまへには、ああ、悲しい願ひ！
『そんなものを食べるとおなかをこはす』と
母親の『批評家』は子供をいましめる……

勝利

ある處に罪人が十字架にかけられてゐた、
平常仲の惡かつた男が其處を通りかかつて、
ざまを見ろ、平常の心得が惡いからそのざまだ、
早く舌を嚙み切れ、それが今の貴樣には一番いい事だ
などと

あらん限りの嘲笑を浴びせかけて行つた。
罪人は首を垂れて瞑目した儘何も言はなかつた。

悪口した男は半町ばかり行くと、
急にその男が可哀さうになつて來た。
自分の態度があまり苛酷すぎたと氣附いた。
それで引返して、俺が悪かつた、勘辨してくれ、
君は苦んでゐる、俺は君の苦痛を尊重すると言つた。
罪人は首を垂れて瞑目した儘やつぱり何も言はなかつた。

ごろつきの幸福

ごろつきの面白味は
すべての名譽を捨てたところにある、
體裁(ていさい)を飾るに忙しい良民の中に、
赤裸々な野性をむき出すところにある。
最も實直な人間でさへも
酒の上と云ふのを萬一の言譯(いひわけ)にして、
(醉つた時の人間の理性は素面(しらふ)の時より確かだ)
大道でふざけたり、傍若無人の振舞ひをして、
ごろつきの眞似事をして得意になる。
それは暫くの間檻を放たれた野獸の喜びだ。
だが此のごろつきの素人(チレッタント)の翌朝はみぢめだ、
自分の顔を始めて見たカリバンの苦痛を味ふからだ、」
本物のごろつきはこの自覺から出發してゐる。
人間を超越しようと云ふのは夢だが、
人間を沒却しようと云ふのは確かな話だ。
だが、それだけの手數をかけるにも及ぶまい、
ごろつきの幸福は人間性の勝利に外ならぬのだから。
ごろつきよ、そこで先づ一杯ひつかけろ。

悪魔の嘆息

人間を誘惑したのは
おれの若氣のあやまちだつた、
おれは彼等を賢くした、
今では彼等がおれを苦める。

この不埒な奴等め、あつかましくも
おれに誘惑の催促をしをる。
今度はおれを誘惑しよる。
何と、小ましやくれた此の人間共めが！

買つてくれ、買つてくれ、
出來るだけ勉强しますとつきまとふ、
魂の押賣りばかりは眞平だ、
今ぢや魂の値打も安くなつて
うかうか買つてゐちや損をする。

フアウストといふ男のゐた時分には
まだまだ人間の魂は値があつた、
今どきのずるく卑しい人間よりは
まづ蛆蟲の方が一割方は値があるて。

中にはてんから魂を
持合せてもをらない癖に、
どうです一つ氣張つてはなどと言つて來る、
いつかな可笑しくないおれだとて
これにはついふつと吹出したくなる。

さてさて、人間といふものは
小ざかしくて、しかも馬鹿げた動物だ、
そこで何處までずるくなるかきりが見えぬ。
何しろ今ぢや金にさへなりや『糞でもくら』ふ、
まして魂ぐらゐ屁とも思はぬ、
もうかうなつては惡魔も上つたりだ、
まあまあ天王星あたりへでも逃げ出さうよ。

不思議な謎

人間――それは不思議な謎だ。
今迄居なかつたものがひよつこり現れ、
またひよつこり居なくなつてしまふ。
それは人間自身には解けない謎だ。

だが、一番不思議なことがある。
たつた一人の人間のために、
忽然として眩惑しさうな快樂が湧き出し、
また癒やす事の出來ない苦痛が生れる。

その人がやつて來なかつたばつかりに
夜の家は、沈默と涙とにつつまれる。
その人がたつた一言言つたばつかりに
今迄沈んでゐた胸は火のやうに躍る。

人間――それは不思議な謎だ。
頭から爪先まで謎のかたまりだ。
だが不思議な人間の中で一番不思議なものは、
それは戀人と云ふものだ！――快樂と苦痛とのこの手品師！――

變心

忍びよる、忍びよる、我れに『不幸』は！
戀人を戀人の訪ふがごとくに
忍びかに、またうちとけて――
またおなじ悲しき微笑と、
おなじうるめる青き眼と、ほそき頸もて。
おなじつめたき脣もて、
またおなじ細長き手をもて
我れを接吻し、我れを抱かむがために。

されど汝の戀人の此の變心を
知るか、ああ、『破滅の德』よ、——
汝の戀人は生きんとねがふ——
血を、功名を、快樂を、罪惡をねがふ。
執拗なる年上の女の戀をいとひて、
つれなく、さはれあでやかに媚をふくめる
娼婦を慕ふ、『幸福』を慕ふ。

『同情』と『愛憐』との戀よ、
我れはつれなく、憎みをもつて汝れを拒まん！
ここにして、嫉妬の刄が
つひに我が胸を刺すとも！
我れも男子ぞ！

『幸福』へのこの渇望、——
『不幸』に愛せられたるもののみが知るこの渇望！
そは我が生命を値せんとも、——
おなじく滅亡が人間の運命ならば
なほ一たび、勝算のなき戰ひに
——『幸福』のせめて輝く黑き眼をのぞまんために——
運命に抗ひつつも、
美しき娼婦のために死なんとぞ思ふ……
我れも男子ぞ！

つめたき輓歌

一

死に行くものは美し——
我は我が愛せし人の柩の上に
祝福の花輪を置かん、
その人の生はいたづらなる憂苦なりしとも、
その人の死は、ああ！　我に尊し。
ああ、かずかずのなつかしき思出よ、

(若しそが我が心の傷を思出さしめずば！)
いかばかりの謝恩と、
いかばかりの敬愛とを、
ああ、我は君に負へるぞ！
しかも、今日はつひに昨日にあらず……

ああ、一生が犠牲なりし人よ、
そは、おろかなる女の道なりし。
されど死にのぞみての怨みごと、
かへらぬ嘆き、——
これこそは、まことの生のはじめなりき。
人生のまことの悲痛は
その一生の苦痛にあらず、
ただその最期の悲嘆なりしのみ、
あまりに遅く来りし悔なりしのみ。

みまかりし命は美し——

萎れたる花は美し、
再び永遠にかへることなきものよ！
再び捉へがたき楽の音こそ、
再びあひがたき人生こそ、
再びかへしがたき友こそ、
ああ、我に尊し！

されば尽きせぬ渇望の的となるべく、
うるはしき電光の如く愛せらるべく、
ああ、つひに、此の世界は滅びざるべからず……
ほろび行くものよ、またあらぬものよ、
我れ汝を愛す、ただ汝をのみ！

冷酷なる我が輓歌のうしろの
おろかなる涙を——おさへおさへしこの涙を——
我に許せよ、我が蛇よ、冷たき蛇よ！

二

生は醜し、存在するものは醜し、——
いやしめられ、はづかしめられても
なほ生きんとする心は醜し。
『一日を生くるは一日の勝利』と人は語る。
はかなき勝利よ、
より不幸なる敗北に終らんためのはかなき勝利よ！
——されどこの醜さもつひに終る、
その時凡ての非難も共に死せん。
さて、そののちに、我ははじめてかく言はん、
『彼が命は言葉を越ゆる苦患なりき、
彼はその愛するものに、ただその者にのみ
人知れぬ苦みを與へき。
されど今彼はあらず、彼はつひにかへる事なし、
そのゆゑに彼は美し——
冷酷なる我が輓歌のうしろの
おろかなる涙を——おさへおさへしこの涙を——
我に許せよ、我が蛇よ、冷たき蛇よ！』

惡心の曙

『道化役者の三年』は過ぎたり、——
今日我はいさぎよく告げん——『滅亡の德』と、
その德の結果なるニヒリズムとに、
永遠に、こころよき、いと甘き『いざさらば』を——
『人生に對する愛はすべての邪惡の中より生る。
人生を愛するものは、まづこの「惡」を肯定せよ！』
かくも賢く我が耳に冷たき蛇はささやきぬ、
ああ弱き少女の心よ、汝はたして眞理に堪ふるか？
『若しかくも世界が邪惡ならば、むしろ我は棄てん、
そは生くるだけの値なし』と弱き理想家はかく語る、
『いな、いな、生きよ、厚顔に、また狡猾に、

何となれば、汝は生きざるを得ぬがゆゑに、
しかして生きるはこれ厚顔の第一歩なればなり』
汝の意志はかく命ず、理想家にあらぬ汝の意志は！

『失敗者の哲學』を棄てよ、そはただ自滅の哲學のみ。
世界の何處に、曾て何の日か『善』が勝利を得たるぞ！
人生は夢にあらず、しかして快樂は邪惡より生る。
惡心のこの曙に、勇ましく飛立て、汝『利己心』の鳥！
　ああ、おまへは何處まで行つても正直者！
　人の云はない事を言ひ、
　眞理を道破したと誇つた正直者、」
　ああ、單純なニイチエよ、
　ああ、哀れなるマキアヹリ！
　ああ、この邪惡の學究先生！

ジプシイ・ガアルに

色黒く、眼の愛らしいジプシイ・ガアル！
おまへはすつぱだかで踊つて見せる、
夫をすてて、子をすてて、より美しく、より幸福に！
おまへの情慾はおまへの生の法則だ、
おまへの『嘘』はルネッサンスの道德だ、
だが、おまへはあまりに一本調子だ！
おまへはもつと惡のニユアンスと曲折とを知らねばならぬ。
罪惡と云ふものはもつと曲線的でなければならぬ。

色黒く、眼の愛らしいジプシイ・ガアル！
おまへの快樂はおまへの罪から生れて來る、
だが若しおまへが少しでも良心の呵責を感じたなら、
その時は、おまへは敗北したのだ！
おまへは生粹（きつすゐ）のジプシイらしく、よく踊る、
人間の『僞善』の花壇をふみにぢつて踊る！
だがその僞善が一層上手（うはて）の惡だと云ふ事を知らぬか？

おまへはもつと悪のニユアンスと曲折とを知らねばならぬ。

『心の祭』に於て

――卓上演説――

我が二十六歳の夏に、
我は心の祭を祝ふ。
すべての失はれたる幸福のための、
これは悲しき記念の祭。
古き友を、新しき友を、
我は我が心の祭にまねく。
ここに、古き日の甘き夢と、
新しき日の苦き眞實とはあり、
友よ、まづ我が滿足によつて飽滿するも
いかでそれを憤るほどに我れ若からん。
破産せる理想家の破れし夢を、
失ひて久しくなりし信仰を、
おろかなる戀の嘆きを、
無慘に碎けしあはれなる自負を、
社交家の平氣をもて我は食卓にならべ、
悲しき祭を、はれやかなる笑ひもて祓はんとする。
かくも勇ましきこの心は、
ありふれし世辭をいかで求めん、
ねがはくばこのをかしき取合せに、
友よ、巧妙なる警句を惜むなかれ。

ここまでも私は來たか？

ここまでも私は來たか？
あはれな投書家、然し幸福だつたその少年は
かくも不幸に、かくも年老いて！
ああ二十六歳のこの老人！

父の家に、父の家業をついだなら
幸福だつたこの私！
東京に出て、人の情にすがりつき、
ほつつき廻つたその罰で
ああ、役にも立たぬこの苦勞！
（お前の頭にひびが入つたことを知つてゐるか？）

だが、詩を作る外に私に何の能がある？
この一卷の詩集のために、
あらゆる危險を冒して――ここまで來た。
これが私の半生か？
こんなに馬鹿げたたはごとがお前の獲物だつたか？

だが、すべての文學――それは馬鹿げた樂みか？
圖書館の埃の中に、紙魚に食はれるこの夢と、
墓場の闇で、蛆に食はれるこの現實と、
どちらが餘計に莫迦げてゐるか？

誰がこれに返事が出來ようぞ！
ただ嘆息をもつて答へる事の出來るものが賢人か？

私も資本があつたらと
嘆いたうちはまだ若い！
幸福を求めて世界に出て來たのが抑もの大間違ひ、
鑛脈でもない土地をよくまあ掘つたものだ！
（もう此上は、やり直し、やり直し！）

人間の言葉は自己肯定にけりが附く、
すべての思想はその生活の臭ひをはなつ。
ああ、誰かまだ書物に望をかけてゐる？
――では、さやうなら――おやすみなさい！

落穗びろひ（一九一二年―一九一六年）

斷片の前の斷片

あなあはれ、息の短き笛吹きよ
音色(ねいろ)の美しくなる時に汝が息は盡くる。
淺し、淺し、あはれなる谷間の泉、
旅人の一呑みに水は盡くらん。
若くして力盡くべき弱き詩人よ、
汝れはその重荷を終りまで擔ぎ得ざらん。

×

この老いつかれたる世に、
若者と生れたるこそかなしけれ。
この散文的なるあさましき國に、
詩人と生れたるこそかなしけれ。

×

我れは弱し、
しかも我れ強くならずば、
弱きを助くる人を見出づる能はず。
ただひとり廣き世界に捨てられて、
傷口を縫ふ人を求めつつ尙ほ痛みをます。
地の上に我れのみ知れるものは多けれど、
この惱みこそ、
あらゆる人のとこしへに知らざるべきもの、
我が愁はただ海に向ひて告ぐべきのみ。

×

心より出でて心に入るもの！
我が歌よ、汝はああいかに不幸なるよ。
見よ、凡ての心は今旣に滿たされてあり、
虛僞に、虛榮に、虛僞の歌に！
心より出でて心に入るもの、
ああ、それは『僞(いつはり)』なりき！

×

つまるるとともに萎れはつべき
あはれの運命よ、薔薇の花よ、
手なふれそ、永遠にと心はささやけど、
いづれは褪する色香ならば、
世の人の荒く手折らんそのまへに
せめてやさしく摘みて行かまし。

×

あはれ無慘に碎かれし美しき玉、
持主の禍となるを恐れて
うち碎かれし玉のごとくに、
我が幸福の星となるべき
人はなにゆゑ碎かれし。

×

空いろの果ては無けれど
我が靈は何處にかいこふべき、
君がめぐみの手をほかにして。
ああかへれ、月日とともに、
ああ二十歳のとしを伴ひて。

×

聖母マリア

あはれマリアよ、
罪人の母よ、
人のつくりしいとよきもの、
汝れこそは、慰めを知らず、
世に捨てられて、戀人もなく、
すさまじく生くるこの身を
その膝にすくふ。

×

地の上に我れ一人のみ、
つめたき水は我れをめぐれり。
ああ孤獨よ、寂寥よ
さらずば憎惡よ、嘲笑よ、
我れ今人の世に何をか望まん、
憐憫に生きんより、

憎惡に死なんとぞ思ふ。

×

友に寄す

我が友よ、
酒飲めば汝れをおもひ、
汝れをおもへば地獄をおもひ、
地獄をおもへば
また罪ふかき我が身をぞおもふ。

×

紙片にしるす

ともすれば我が影のかへりみらるるかな、
我が心こそ惡の巢なれや。

×

鳥の中に蝙蝠として生れなばよりよかりけん、
人間の中に人間として生るるよりは。

×

金ある人に金はあつまり、

憂ひある人に憂ひはつどふ。
ねがはくば富めるものの貧しくなり、
悲しめるものの健かにならむことを。
しからずば世はあやまれるなり。

×

朝の光は迷ひを送る、
深き夜陰の齎らせし
彼岸の希望をぬぐひ去りて、
朝はあだなる喘ぎをあたふ。

×

最も短き夜の讃歌

けだかき聖者は神を讃む。
醉へる詩人は酒を讃む。
さて、夢みる我れは夜を讃む。

×

秋風よ、などかくも慌しきや。
我が泥のごとき涙の底にしづめる

重き悩みをくむ人もなきに、
いにしへの歡びのかろき屑をも
汝れは持ち去る、汝がこの森を見捨つる時に。
その歡びを汝れこそ我れに與へしなれ。
ああ汝、物惜みする老女よ。

×

など月はいつも我が上に曇れるぞ、
など海は我れに向ひて荒れ立つぞ、
など風は我が涙をば吹きはらふぞ、
ああ少女よ、汝(なれ)はなど我が胸を砕かずば止まざる。

×

An Novalis.

ああ世は汚れたり、日毎に荒くなりまさり行く、
うるはしきものは滅びゆき、
人はうちに湧く熱を持たず。
汝れは今も尙は我がほとりをさまよふ、
つねに我が心の中に歌へり、

聖なる汝が手にしるされぬため
うるはしき思ひは傷けらるるも。
汝れはやはらかき春風のそよぎの中に住みき、
蕭殺の風ぞ我が胸には充つ。
ノヴリス！ ああ我が昔の我よ、
我れをゆるせよ！ 我が濁れる(トリユウプ)を許せよ！
我れもまた眼(まなこ)くもりたる末の世の一人なれば……
また嘆け！ 今の世の汝が眼(まなこ)さへ曇らしむるを……

×

アッヒム・フォン・アルニムの肖像に題す

未だみとめられずして
すでに忘られたる詩人よ、
あるものは汝の意義を認めず
認めしものは汝の才をねたむ。
汝我れに似たるか、はた我れ汝に似たるか？
汝は黙せるメランコリイの獸(けもの)のごとし。
くづれたる土藏の壁に、

忘られたる詩人の遺稿に、
靑ざめし女の息に、
黄に朽ちし秋の木の葉に、
永遠の祕密のささやきはあり。
ここに魅するが如き死のにほひは匂ふ。
それぞ汝の愛せしもの(?)また我が愛するものなれ。
Ein grosses aber sehr kurzatmiges plastisches Talent.
こはブランデスのアルニム評なり。

×

汝等、大空を飛翔せし飛行機の
忽ち地に墮ちて碎けしを見しことあるか?
汝等、さかんなる饗宴にのぞみて、
主(あるじ)の大官の面に死の如き憂愁を見しことあるか?
汝等、いと熱き戀をしてその戀人と相談る時、
永劫の世界の惱(なやみ)に言葉を奪はれし人を見し事あるか?

×

我れもまた詩人なるか?

されどかの頬紅く髪長き星菫派とともに、
おろかなる夢はうたはじ、
まことの詩は、悲しめる時の慰めならざるべからず。
人の世に知らるることなくして、
うるはしく生き、うるはしく死ぬる人こそ
我が詩をまことの詩と呼ぶべし。

×

我が惱ましきこの思ひは
地にとどまりてはよき歌となり、
空にのぼりては輝く星となる。

×

內氣なるもの

すべての世界は我を知らず、
されどすべての世界の我を知るとき、
我はこの世にあるをねがはず。

×

寂寥は我れを追求す。

廣き世界を夜の闇にまぎれて逃れ出づる時、
我れは我が後に鏘々の音を聞く、
そは鐵の響なりや、
はた追ふ者の靴音なりや、
墓場までもそは我れに伴ふ。

…………

歌ふべき鳥の默する時、世は悲みに包まる、
しかも寂寥は我れをして默せしむ、
歌なき時、されど我が心は寂寥に泣く！
軒に落つる雨垂れの音を聞く時、
森をとほして來る鐘の音を聞く時、
寂寥は我れをとらへて、
我れは友になほ背を向けざるを得ず。
我が寂寥を脱るる道は唯だ寂寥に突入るあるのみ、
宛も死を脱るるには死の中に飛込むの外なき如く。

×

酒をあたへよ、濃き酒をあたへよ、
忘れの河の水をもてつくりたる酒を。
苦みはこれを酒に飲ましめ、
憤りはこれを海にそそがん。
醉よ、狂よ、
すべての苦しさは醉ひにまさらず、
すべての樂しさは醉ひにまさらず、
若し、この杯の禁められなば、
むしろ溺れん、かの鹽からき大杯に。

×

きはみなき絶望の底より、あたらしき力は出づる、
閉ぢられたる目蓋の中より、新しき涙はこぼる。

×

傷もたぬ人のため、いかでその傷を縫はん、
愁なき人のため、いかでその愁を慰め得ん。

×

酒について

我は敬虔なる酒徒なり、

されど我は酒の前に跪かずして、
これを杯に盛りて自らに獻ぐ。
人々よ、汝等は知るか、
いかにして酒の育ちしかを？
そは貴人の家の一人子のごとく、
こころして、いつくしまるる。
我が家の三つの酒藏は
かつて一人の女を入れず、
酒は不淨を忌めばなり。
酒よ、我は汝と共に育ちき、
されど汝の如く心して育てられざりき、
大なる桶の中に湧き立つ力をもたず、
我は小さき桶に生ひ立ちければなり。
その故に、酒よ、我は汝の使徒とはなりぬ、」
汝の黄金の海を我が肩にささげんがため。

×

すべての人の幸福に心醉ふとき、
ひとり惱みに棄てらるる。
この運命を我がになふとは、
何等かのあやまりならぬか？

×

樂しみも、苦しみも、
譽れも、恥も、
惱しみも、いとしみも、
すべてただ愚かしき夢。
さきの世を知らず、
のちの世を知らず、
束の間のいとなみに
あはれにも人は喘ぎもがくよ。

×

死ののぞみ

すべての希望はつれなく逃れ、
あるは手きびしくも欺きだまし、
しからずばもろく死したり。

凡ての持物を賣り去りし破産せし名家の
夫人の指にただ一つ輝く指輪のごとく、
いまなほ我にただ一つ殘れるもの、
最後の希望よ、
これのみは我を欺かず、
我が世を逃るるも我を逃れず、
我が失する迄我が胸に死せず、
あはれ、我がなつかしき死よ。

×

秋思

巷にきく追分の節にも
秋のひびきはこもれり、
そは人の涙をさそふ、
こころなき尺八の音も
ありとあらゆる苦しみを、
おもひでと嘆きのかぎり
身のうちに湧きかへらしむ、
そは熱き涙となりて溢れ出づる、
——かくてこそ人に喜びはあれ。

×

人の足音も消えゆきて、
かすかに遠くきこゆるは童等の歌、
夕暮は木の葉ぞそよぐ、
ああ、汝等も我を歎くか、——
松の樹は黒黒と我が愁に向ひ、
我が胸の憂鬱を反映せしむ、
かかる夕を、おとなひ來りて、
我が夕暮ごとの物思ひを、
子よ、何を愁ふるぞと優しくもたづぬる
いとしの微風よ、
されど我が愁を拂はんには汝が力餘りに弱し。
手を組みて、眼ふすれば、
誰が描きし、我が前に横はる影、
さながら地獄を迷ひ出でし亡者の如し。

見よ、明日か死ぬべき衰へをと月は示すか、
ああ、明日は死ぬべき命なり、
今日の悩みの疾く消えよ。
雀等は、我が屋根の巣に今宵も安く眠るらん、
さても哀れなるは人間なるよと、
我が溜息を、夢うつつにや聞きぬらん。
ああ、疲れ、悩める魂よ、
つめたき石に身を投げて
泣かば愁もやすまらむ。——
ともしびの下に我が幸はあらじ、
我は髪濡るるまでかくてあらん。

×

不幸なる者の償ひは早き死なり。
富くぢの外れたる人よ、
汝が引き當てしそのくぢを捨てよ。
人生には凶日とよぶものあり、
その日には何事もならず、
惡しきは變ぜず、よきは惡しくなると哲人は云ふ。
一生が凶日なる人は
何事もせずして、
人生の舞臺より引き退くべし。

×

酒客は最後の一滴をも樂しむ。
我もまた人生の苦痛の
最後の一滴をも傾注せん。
餘瀝もつくさず飲み干して、
我は言はん、我は生きぬと。

×

二重の呪咀

町を行く人殺し——
汝等など我を棄つるか、かへりみざるか、
げに汝等は情といふものを持たざりき——
我は二重に呪はん、汝等の無情を。

×

かくばかり憂鬱なる人に、
しかもなほ喜びはあり、
あらゆる不幸を肩に擔ひて
靜かに運命と和睦するとき、
不幸なるものは聖者となる。

×

我は運命の標的なり、されど我はふるふ、
彈丸は我が胸を貫く。我は悲鳴す。」

×

郷愁

いで逢ひし人は訝しげに我が顏を見て
つとすれ違ふ、そのあとに聞き馴れぬ歌ぞ響く、」
おお、深き深き郷愁をその歌ぞ齎らす……
愛らしき少女は格子戸越しに我れを見る、
昔の人よ、かく呼びて不圖驚きぬ、
そは初めての面なりき、されど千度見しことあり。
おお、古里よ、その外に我が足跡も殘れる
窓にゐて、少女は機織りつつ歌へり、
かかる聲もて、おお、そは千度聞きしことあり。
見覺えのある公園の並木を行けば、
晴れやかに五月の日影を額もてはこぶ人々は、
我が脣の能はざる發音もて挨拶を交はす。
その中をただ一人行く、――
おお、我れを生みたる故郷よ、
ああ、いかに汝れは素知らぬ顏して見するぞ、」
おお、我れを投げ出せし故郷よ、
こは遠き國の都にあらず、
つれなく、しかもなつかしき我が故郷ぞ。
されど、我が記憶は弱し――
『ああ汝、世界の何處にもありて
何處にも無き故郷よ、』……
――ああ、我れは凡ての町を知る、
されどまた凡ての處に
限りなき郷愁は我を捉ふる、

『汝の故郷はなは遠し、
遠き遠き彼方にあり』と……
我が目は迷ふ、
また遠き地平の果に……

×

我がまことの愛を受くべき人は
まことの愛ある戀人のみなり、
さればいつはりの戀人は我れを拒めよ。

×

したたりの下の石のごとくに、
時計の音に絶えず胸穿たれて、
年をおくりて靑ざめゆき、
年を迎へてまた靑ざめゆく。

×

愛は靈魂のくるしみにして、
媚は肉體のたのしみなり。
娼婦の床に死屍を抱くの思ひせしもの、
亡き戀人の墓にして不朽の生命を感得しぬ。

×

道　德

黄金多くして愛いよいよ少し、
愛少くして媚いよいよ多し。
黄金と媚とは人の心をそこなへど、
愛とまごころは癒えがたき傷をも癒やす。
愛は用ふるほどいよいよ豐かに、
まごころは盡すほどいよいよ深し。

×

我は愛の國に入るべき通行券を持たず、
しかも黄金のまへにその一葉は塵に等し。

×

我が惱みをつつむに世界は餘りに狹からずや。
されど我が身は運命の掌の上にありて餘りに小さし。

×

常にみたされざる願ひをいだき、

むなしく愛の中をば過ぎて來ぬ、
つかれ、やつれて、ただここに憩はん、
星のもとに、夜風のうちに。

×

我れは寂しくはぐくまん、
世にすてられしこの一人を。
そは常にやすきを得ず、
おのれも知らで罪犯すところの
いまはしき、されど哀れなる我れを。

×

我が窓に來てなげく風よ、
我が屋根に來て涙する雨よ、
窓を鳴らせど、屋根を打てども、
ああ、消え去るものよ、流れ去るものよ、
汝等の悲しみを我れも覺ゆる。
求むるものの一つだに得し事なくて
僅かに持てる物さへ我れを棄て去る。
失ひし時、そが缺くべからざる物なりと
はじめて悟りし愚かしさを
ひとり坐して悲しめる者に、
汝等はあまりに悲しき客人なり。
ああ我れあまりに心傷めり。
風よ、とまれ、雨よ、やめよ、
いまぞ眞夜中、
我が心は深き闇なり。
影さへもなき深き夜陰に、
溜息も消ゆ、涙も溶け去る、
風の如くに、雨の如くに。

感傷の春

反古の中よりかきあつめたる
たはむれと、まこととの歌、
面（おも）そめてもていづるとき
ほほゑみてかたりたまふな。

自序

三十をすぎると、どんな無口な世馴れない青年でも、少しは快活になつて、立居振舞にどこかしらしつかりしたところが出來てくるものである。三十をすぎると、人ははじめて本當に生きるといふことがどんなものであるか知るやうになる。私はまだ三十にはならない。けれども今日までの私の經驗は、既にそのことを私に豫覺せしめる。私は今や三十といふ年齢（とし）を、祭の日を待つ子供のやうに胸を轟かしながら待つてゐる。私ももうペシミズムの暗室を抜け出してもいい時分である。私は ein Mann にならなければならない。私は自分の力量をためして見なければならない。たとへ、いかに無慘なる敗北を受けようとも、戰ふといふことは、ただそれだけで意味のあることである。私は曾つて反感を有たずには對することの出來なかつたゲエテを——彼の天才には無限の尊崇を捧げてはゐたけれど、しかも其故に私は愈々彼の冷靜を憎んだ、そして憫むべきヘルデルリンや、クライストやレナウを彼の上に置きたかつたのである、自からその愚かなる反抗心を嗤ひ嘲りながらも——かの大いなる俗人(Weltkind) ゲエテを、今や心から敬慕せずにはゐられないのである。『若きエルテルの悲み』の後に附した彼の冷靜な理性的な言葉、地獄よりのあはれなるエルテルの警告（いましめ）、『男子たれ、而して我にならふなかれ』は、今や私が太陽に背ける半球にのみ親みすぎてゐるやうに見える人々に對して飜譯して示したい言葉となつた。

人間はまづ理性的でなければならない。理性はプロオズである、そしてプロオズのみが生活の基礎である。かくて、私は今プロオズの世界に移らうとしてゐるのである。

別れるに當つては、人は最も打ちとけて談らなければならない。私のこの詩歌の世界に對する Lebewohl が、果して一時的のものであるか、それとも永久的のものであるか私は知らない、然し、口に別杯をふくむ時、我々

は互に最も愛すべきものであることを私は知つてゐる。それゆゑ私は自分のこの希望多く、感慨深き門出に當つて、この『感傷の春』の一卷を、その最も愛すべきものである人々に、夢想の象（かたち）を織り出した布に蔽はれてゐる詩歌の美しい卓に殘り留まる人々に贈ることの出來るのを喜びとする。

私が前集『靈魂の秋』を出したとき、私はそれが聊かも世に顧られようなどとは夢想だにしなかつた。私はただ自分のために小さな記念碑を建ててやらうと思つた許りであつた。然るに、意外にもそれが多くの友を見出したのは嬉くもあり、不思議でもあり、また特に氣恥しく感じたことであつた。ただ、あの第一詩集は『心の秋』を示すことに專らであつて、青春の曙ともいふべき美しい時代の若々しい感傷的な作品を見本以上には採錄し得なかつたので、今それ等のあまりに若い、それ故、時には見るに堪へないかも知れないが、また時には私の最も美しい肖像であるかも知れないと思はれる詩歌を集めて、これに『靈魂の秋』以後の作を加へて、こゝに第二の集を出すこととした。これでこの十年間の私の詩人としての生活は、展望臺に於てよりも更によりよく眺望し得ることとなる。最も初期の作と、短歌の多くと、そのラディカルな思想の爲に、或はそのエロティシズムの爲に、發表を躊躇した十數篇との除外せられてゐるものはあるけれども。若し此二集によつて、私の寂寥なる十年が無益に過されたのではないと確信する事が出來れば、それはどんなに喜ばしい事であらう。そして更に『我もまた生き且つ樂しめり』と歌ふ事が出來たならば！

思へば、私は常に影の如く生きたと嘆じて來た。此世の中を敷居高く暮して來た。私の生活は取るに足らぬ無意味なものと考へられた。私の心は若くして老いた。——然し、實際に於ては、私は未だ曾て一度も生きた事はないのである。私の生活はこれから始まる。餘りに早く青春を葬つた者は、再び青春を得なければならない。私は多くの苦行の後に再び青春の祭を祝する事が出來る事を

望んでゐる、またその謙遜なる勝利を豫感してゐる。私の悲劇はその性格と境遇との矛盾撞着から生れてゐる。私は享樂の徒であつた、そして私は貧乏であつた。私は美の崇拜者であつた、そして私は醜い動物であつた。私は自由の愛人であつた、そして私は鎖をかけられてゐた。私は最も謙遜な、自己を主張しない人間であつた、そして私は藝術を共生涯の任務に選んだ。私は『善』を渇仰し、『惡』を憎惡した、そして私は『惡』の具體化なる此世に在る。私の凡ての反抗と、譏笑とは、實にこのディレンマから生れ出たものである。

然しながら、他日美しい沈默の一日が來るであらう、其時こそ、私には轉心が始まるであらう。其時こそ、すべての矛盾は消滅するであらう。其時こそ、私は謙遜なる勝利を祝して、第二の青春の祭に於て、最美最善の詩を愛する友に示す事が出來るであらう。然し、詩は竟に私の目標とはなり得ない。私はかばかりに藝術を愛しつつも、絶えず藝術を呪つてゐる、それが眞に美しい生涯と調和し得ない事を悲んでゐる。藝術は人を倨傲にする、藝術は人を嫉妬深くする、藝術は人を不自由にする。藝術は果してそんなものであらうか？　私は偏見に陷つてゐるのではなからうか？

——然し、藝術が書かれるものでなく、行はれるものであつたならば、かうした人の心を高くすべき筈のものが、反つて卑しくするといふやうな悲しい矛盾は消滅して了ふであらうと言ふものがあつて、基督や聖フランシスや法然や親鸞やの名を擧げるとしたならば、私は自分がたやすくその魅力に羅致されて了ふであらうといふ事を感じてゐる。しかも尙、私は藝術を書かうとしてゐる、プロオズが私を招いてゐる……詩歌よ、然し、汝は健かであれ。

一九一八年十月四日

感傷の春（一九〇九年―一九一二年）

ああ人情の花咲くところ
うつくしき夢の世界に
遙かにも、遙かにも、あこがれて來し
そのあとをここにこそ書きとどめたる。

少女の夢

あなたを一度見てからは
昔の私でありません、
もはや子供でなくなつて、
あなたを戀しと思ふ心になりました。
あなたは一度私の頭を撫でて下さつた、
いまでは私の心にいつも觸れてくれます、
だけど、あなたはもう遠方にいらしつた、
さうしてあなたがえらくおなりになつた時、
私も女になりました……
私はあなたのお姿を胸にうかべては
何とも知れぬ涙が頬を流れます、
愚かな少女の夢を笑つて下さいませ……

少年の戀

その一

私の心の、水色の繪絹に畫かれた
その繪姿を、あなたは誰だとおもひます。
外でもない、それはあなたのその姿。

私はたつた一日なりとも見たさにいつも
いつもあなたの家へ行く。

あなたの兄さんの長い話はいくら聞いても

なぜにあなたの聲がせぬ。
最初あがつた日のやうに、隣の部屋で
ピアノでも聞かせて下さい。

あなた故なら、私はどんな苦勞もいたします、
あなた故なら、私は命も棄てませう、
私はあなたの草履とり。

その二

この脣をどこへ私はもつて行かう、
この脣をもつて行くべき脣は
あなたの脣のほかにはない。

だからさあ、おかしなさいなその脣を、
むかし四つに割れた紅い瑪瑙が
今こそもとの通りになるのです。

この脣がどうしてほかの脣をのぞみませう。
もしまんいち、あなたの脣がなくなつたなら
私もこの脣をすてませう。

はつ戀

せめて一度はその手をにぎりしめ
長くかぼそい指さきに、脣をあてたい、
この涙をこのやうに無駄に
ああ馬鹿らしい、
なんにもない紙の上に落そより、
あなたの髪に、額に、落したい。

わたしの心が臆病なのか、
それともあなたの心が冷たくて
こはれた風車のやうに
風が吹いてもまはらぬのか、

紙はのべても書きたい文は書けず、
あだの涙がまた落ちた。

幸福が遲く來たなら

『幸福』よ、巷(ちまた)で出逢つた見知らぬ人よ、
お前の言葉は私に通じない!
冷たい冷たいこの顏が、私の求めてゐたものだらう
か?
お前の顏は不思議な親みのないものに見える、
そんなにお前は二十年、遠國をうろついてたんだ、
お前はもはや私の『望』にさへ忘れてしまはれた!
よしやお前が私の許嫁(いひなづけ)であつたにしても、
あんまり遲く來た『幸福』を誰が信じるものか!
私は蒼ざめた貧しい少女の手に眠る、
少女よ、どんなにお前は軟かく、枕のやうに
夜毎(よごと)痛む頭(かしら)をささへてくれるだらう!
少女よ、お前の名前は何と云ふ?
もしか『嘆き』と云やせぬか?
そんなら行つて『幸福』に言つてくれ、
お前さんの來るのがあんまり遲いので
もはや私があの人のお嫁になりましたと!

すなほな愛情

誰も彼女を綺麗だとは言はない、
また氣の利いたところもない。
それに何故(なぜ)私は彼女を愛するのだらう?
それは彼女があはれな少女であるからだ、
また私自らあはれな青年であるからだ。
いや、この二行はいつそ消しちまはう、
愛は愛するが故に愛するのだ、
私は此外の凡ての『故に』を擲つて彼女を愛する。

私の膝に來て嘆くとき、
私はその髮を撫でて慰めずにはゐられない、
私の手を取つてその胸に押し當てるとき、
私は愛らしい子よと微笑まずにはゐられない。
おお少女よ、いとしいお前を
私の小さな妻と呼ばせてくれ。

あるお孃さん

それは泣くために生れたやうな顏だつた、
あらゆる不運にみいられる美しさだつた、
その手はすらりと長くやさしかつた、
それはやがて神の前に合せられるやうな手であつた。

神はこんな少女を私のやうに、また凡ての男のやうに
愛しては下さらないのか？　それともまた
私にこんな歌を作らせようとて
わざとこんな少女を作つて、苦めなさるのか？
私がこんなあはれな詩人でなかつたなら
私はこんなに言つたでせう、『お孃さん！
私の處へお出でなさい、私は貴女を幸福にしてあげます』と。
けれど王子のハムレットは言ひます、『尼寺へお行き』

かしこい豫期

おれの妻は戀の終りに來るだらうか、
それとも戀の始めに來るだらうか、おれは知らぬ。
おれの妻はおれを憎むか、冷淡なのか、
ひよつと又おれをいとしがるか、おれは知らぬ。
このやうな妻の生む子供の
馬鹿か、悧巧か、もちろん知らぬ。
しかし妻と子供のおれの手のうちに來た時に

おれの苦むのは知れたことだ。

ひきがへるの歌

月影の碎け散る木蔭のおくを、
あるはまたじめじめした井戸のわきを、
靜かなことは石のやうにその足をはこぶ
あの蟇はおれの友だ。

命あるもののうち最高最善にして
眞に敬虔なるものよ、
お前は哲學者で、さうして詩人だ、
晝は眞を思ひ、夜は美を追ふ。

敷石を行くときも、水溜を行くときも、
その歩みは等しい。倒れた木があれば
これを避けて行き、石をもつて打たれる時は
靜かに其處を去つてしまふ。

彼は泥の中から掘出された小石のやうだ
彼の如く醜いものが何處にあらう、
然し彼の中に美しい魂のある事を誰か否定し得よう。
これぞ不動の姿、永遠の姿、不死不滅の姿ではないか。

常に卷き收められてをるその舌は
瞬きの間にその餌物をとらへる、
そのやうにおれも美しい歌を、
彼の歌のやうな歌をつかまへたいと思ふ。

彼は傍觀者だ、けれども嘲罵者ではない。
常に默默として肯くが、夜になると、
すなはち溝の底、庭園の隅で
あやしい歌をうたひだす。

その歌は愛に滿ち、信仰に滿ち、
また光明に滿ちてゐる。しかも身は暗黑裡にあり、
また暗黑をも讃美する、
まことに彼は何物をも喜ばぬといふことがない。

ねがはくは、世の紳士淑女諸君。
その姿のみにくいのを厭ひたまはず
その歌の美しきを愛でたまへ、
彼はまた御身等をも慰めるであらう。

おれは曾つてある晩方、古池から落ちる流れの中に、
重り合つた彼等のいくつを見た、
いかにそれは睦じいかたらひであつたか、
おれもまた人あつてかく自分に來ればいいと思ふ。

あの蟇はおれの友だ、
いつもいつも歎くやうだが、實は心たのしく、
いつもいつも苦しめどその不運をかこたず、
今宵また月影にうたふ。

よひどれ

ちよいと、眉をしかめて、小首かたむけ、
「まあどうしたの、この人は、また醉つぱらつてゐるこ
とね」と
小言いつては、柔かい手で抱くやうに
そつと寢床へ連れて行く。
さういふことが聞きたさに、
おれが醉つて來るのを知つてるかい。ええ。
お前許りがおれの屛風だ。おれの守り本尊はお前だよ。

若い若いといふうちにいつかおれにも昔が出來た。
暗い小石川の戸崎町の通りで、
工場がへりのお前にあつて

道をきいたのが、それがいはゆる結びの神のしわざさ、
緣は異なものあぢなもの、
今ぢやお前がかうしていつもおれの心の守役だ、
たとひ酒は飲むとも、ついぞ怠けなんぞはしないよお
　れは。

それはどうでもいいから、さ、
おれをそつと寢床へはこんでおくれな。
かうして醉つちやおれもいい男。
どうせ世間にすてられた
見るかげもない日かげもの。
優しくいつて、慰めて、影になり日向になりしていた
　はつて、
抱いてさすつてくれるのは、お前よりない身の上だ。
さあさ、こら、そんなに拗ねて見せないで
床のなかまではこんでくれよ、

たよりないではないかい、おれは
今ぢや日五十錢の日傭とり。
よく割引電車でいやに高慢ちきな昔の友達に逢ふがな
ほんに涙がこぼれるぜ。
此のかあいさうな飲んだくれを、お前はふびんに思は
　ぬか。

おれは流れる水だ

夕方、とある工場の窓に
うなだれてゐる若い女を見た。
女は蒼白い顔を上げておれにながし目を送つた。
岸邊にさく花、名なし花、蒼ざめた花、
撫子のやうにあどけなくはない、
野菊のやうに鄙びてもゐない、
ただいたましい程に面窶れして、愁はしげに
この名もない花はおれを眺めて、悲しうも媚びる。

しかしおれは流れる水だ。

おれは曾つてゆたかに咲き亂れてゐる
ほこりを持つた貴女薔薇の姿に醉つた。
また曾つて靜かに淸く咲きほこつてゐる
才女めいた白百合に魅せられた。
しかしおれは流れる水だ、
とどまりがたい。

ああおれは絶えず流れる水だ、
お前の影はおれにうつる、
おれはお前を可哀想だとは見る、がしかし、」
とどまりがたい。

さうは云つても、名は知らないが、お前可哀想な工場
　の女よ、
もしお前が散ることを厭はないと云ふならば、
お前と一緒に流れてゆくことをおれも厭ふまい。

そしてふたり渦巻く海に流れでて
ともにうき世の荒波に沈んでゆかう。

燕が少女にいふのには

戀する少女よ、出て御らん、
四月の公園へ行つて御らん、
そんなに家にばかりこもつてゐると
心ばかりか身體まで病氣になりますよ。
少し散歩をしてお出でなさい、
花見をする愉快な人たちが
あなたのうさをはらしませう。
そこには甘い疲れをたのしんで、
ベンチに頭を伏せてゐる眠り人もあり、
動物園に牡獅子も寢てゐます、
二羽の水鳥は濁つた水をあげてます、
孔雀は羽をひろげてあなたに媚びる。

あなたもベンチに腰かける、
そこには山吹が咲いてます、
あなたも種のちがつた山吹だ。
戀しい人を待つために
いつも格子に身をよせて、
通る人を見迎へ、見送りして、
さうして萎れるまでさうしてゐるならば、
さうして戀しい思ひも悲みも
小さく疊んで祕めておくならば、
あなたはほんとに山吹だ。
そんなら少女よ、かうお言ひ、
さやうなら、私は家(うち)へ歸つて行く、
家の格子に身をよせて、
丁度、山吹、おまへのやうに
戀しい人を待ちませう、さやうなら。
戀する少女よ、さう言つて
四月の公園からかへりなさい。

御婦人がたに

やさしい心の持主、美の女王なる婦人たち、
どうぞ私の願ひを、このかあいさうな詩人の願ひを
きいて下さい、ただ耳にきくだけでもよろしいから。
それはもちろん私を愛して下さいと云ふのではありま
せん、
私の詩を讀んで泣いて下さいと云ふのでもありませ
ん、
貧乏人に金を施しておやりなさいと云ふのでもありま
せん。
ただそのあなたの美しい寶物を一生埋(うづ)めて通さずに、
清い涙はかくさずに、女らしくしとやかに、
戀をするなら心から命にかけて戀をして、
その美しい顏(かんばせ)にひけを取らないやうにとて
そのおつくりを心にもしてやる事を忘れずに、

この人生といふ美しい童話の女王とおなりなさい。
やさしい心の持主、美の女王なる婦人たち、
さうして青鞜社へ入つたり、ミスなにがしの眞似をして
馬にまたがつて、巡査と喧嘩などなさいますな。

聖母の教

その一

私は先天的の失戀者だ。
私がどうして美しい戀人を得られよう。
私は全世界の女に嗤はれる男だ。
いや、いや、女は唾もひつかけてはくれぬだらう。
だが然し、私はかたく信じてゐる、
此世の何處かに私を愛してくれる一人の女のあることを。
それは戀ではなくて、あはれみかも知れないけれど。

私の幸ひにして自殺もせず、かうして生きてゐるのは、
ただその女を求めようためばかりだ。
私はこれまで、蜂のやうに、花から花へと
私の命の主を求めたけれど、空であつた、
私の羽は荊の刺に傷けられたばかりだつた。
それで私は、丁度朝の露を待つ草花のやうに、
ぢつとかうして待つてゐる。
ああ、未だ知らぬわが母、わがマドンナよ、
おまへは今何處にどうしてゐるのだ、
このあはれな男をいつまでぢらすのだ。
それともおまへは——私のベアトリチェは——
まだ手毬でもついてゐるのか？

その二

私が信じるのはただ聖母の教があるばかり、
私は地上のマドンナを求める、
それはこの世に二人とない私の妻だ、
それは地上の生んだ女性の一等すぐれた女性、

哲學者の頭腦をもち、詩人の心臓をもち、
意志を以て私を治め、情を以て私を愛する女だ、
いや、それは女ではないかも知れない、
女の形をした男性かも知れない、——それでよい。
私は詩人だ、詩人の中の最も女性的な詩人、
人間の中の最も脆い蠶だ——私は詩の絲を吐く、
しかし桑を食はせる人がなければ、どうして生きられ
よう。
だから私は妻の意志で生き、妻の鏡となつてゐよう。
そして破られるまではその愛をうつしてをらう。
ああ、私の信じるのは、ただ、聖母の教があるばかり。

七年ののちに

この頰にのぼる羞恥の色と、
この唇にのぼる苦い笑ひと、
ここに私は男子を見る。
ああ七年といふ歳月は
つひに私をも男子としたか？
いや、まだまだ女だ、女だ！
おまへの心の腕ももつと強くなれ！

（一九一八年）

水車場の娘

水車、水ぐるま、まはる因果か、親兄弟に
三つの時から生きわかれ、前の小橋に棄てられて、
今は寒い水車場の米かしぎ、
すゐしや、すゐしや。

水車、水ぐるま、まはる因果か、うらめしや
楊小枝のかげでしたふかい情も今ははや、
たのみない世がうらめしい、
すゐしや、すゐしや。

水車、水ぐるま、まはる因果はのがれない、
三つの時から十八の今日が日までの憂き辛氣。
それも誰ゆゑ、ああ米粒よりも
もつとこまかな情ぢやた。

水車、水ぐるま、まはる因果の瀬にせかれ
道の小草にすてた身が何の惜しかろ、死にもしよう、
何で死ぬよりよからうか、あああの埃のよに
わたしや小川へ棄てられた。

田舍むすめ

賤の伏屋に人となり
朝は野畑に水をくみ
夕は納屋に米を舂く。
鷄とあらそひおきいでて
長きひと日のいそしみに
月入るころを寢入るかな。

見るかげもなきわが身こそ
風にさらされ日にやかれ
はやも二十をこえてけり。

まだおしろいはつけねども
まだ口紅はささねども
人こひしさはあるものを。

晝はまぶかき編笠を
ぬぐ間もなきに紅の緒の
色にいでしをいかにせむ。

たまに祭の日をえては
親のゆづりの衣つけて

おもふ男に逢ひに行く。

田舎娘の戀

麥を刈る日は麥の香に
君のかをりをしのぶかな。

まだ青かりし畝の間に
われを抱きしは誰れなりし。

やや黄はみたる穗のかげに
かくれ去りしは誰れなりし。

ひとりなごりの香をたづね
麥を刈る日のわがおもひ。

いかに心はつれなくも
刈られし麥をいかに見る。

この刈られたる穗のごとく
いとも短き戀なりし。

小唄

ながきひと日は遊蝶花、
むらさき、うすべに、とりどりに
きれいな岡でくらそなら、
いつもうれしいさくら草、
罌粟のやうにもうらわかい
面あからめてべにの花、
めでたい戀のしるしとて
おくりましよぞえすみれ草、
七たびかはる紫陽花の
ほんに女とうまれては

人に踏まれて苜蓿、
尼のやうなる木蓮の
それもこの世のつらさゆゑ、
蓮もあざみもあぢきない
命ひとつがすてられぬ。

くちなし

あかい雛罌粟がかあいけりや
摘んでおゆきやれほろほろと
かかる露さへそのきぬぎぬの
思はせぶりではないかいな、
わたしやくちなし愛嬌に
つひぞ笑つたこともない、
よしすねものといはれても
どうせ冷たいわたしなら、
いつもかうしてしよんぼりと
人のあふ瀬を見てくらそ。

夏の小唄

窓に咲いたる白百合の
花のなかから面出して
もしもちよいとよんだなら、
すだれのかげではたはたと
つかふ扇にまぎらして
いとしいとしといはうものを。

今日もむかうの硝子戸の
なかで何やらめんだうな
事務にせはしいあの人に、
ひまでくるしい夏の夜
人目しのんであはうものを。

秋の小唄

川竹の枯れて亂るる水かがみ、
浮いた朽木も流れてくれば、
なんに追はれて泥鼈の
しどろもどろの水掻に
秋の名殘はやれ裂けて、
さやけき月が並木の枝に
暮れて今宵も知らぬ顏。

つばめの歌（童謠）

つばめ、つばめ、
我家のつばめ、
迷子になつたの？
早くおいで！
向うの高い瓦の屋根に
早くいづてとまれ！
つばめ、つばめ、
かはいい私の妹よ。

たぬきの唄

（著者が田舎で本當に聞いた童謠）

お月さま、見さへ、
おらが村にも狸はゐます、
お團子どつさり食べて
腹皷うちます、
ポコポン、ポコポン！、

お月さま、見さへ、
おらも狸よ、子狸よ、
お團子おくれ、

腹鼓うちます、
ポコポン、ポコポン！

雨に音する小笹のみだれ
胸のみだれもさぞ繁からう
酒と歎とにあかす夜は。

茶室の賛

K氏のために

月の夜に誰がさしたよこのつま戸君ならで
あけて來ませよそのつま戸

田舎源氏

半蔀(はじとみ)を、あけて見たればいい月夜、
かかる折こそ柴折戸のそとに
源氏の君もいでたまふ。

更けて都の夜のさびしさ、
蘭燈のかげもしめやかに
あるじ小唄に興じたまふ。

若き日の夢

二十歳までの詩の中より　（一九〇九年—一九一一年）

あこがれは
我が手の玉、
あやまちて
地に落し、
うち砕くとも、
なほ我がものぞ。

小曲

一

笑みと涙とこもごもに
我れにあたへしかの君は、
ひとたび笑みて世をばすて、
ひとたび泣きて身をばすて、
さて我がもとを去りましき。

二

川をながめてありしとき
我れは涙をおぼえけり、
海をながめてありしとき、
我れは吐息をおぼえけり。

ああ川見れば行く水の
行きてあとなき身をば泣き、
ああ海見ればうたかたの
消えゆく戀をなげくなり。

三

むかし少女（をとめ）は我が膝に
顔おしあてて泣きにしか、
今日の少女は我が髪を
撫でつつ歌をうたふなり。

むかし少女（をとめ）は我がために
おのが命もちぢめしか、
今日の少女は我がために
長くもがなと祈るなり。

四　なき人に寄す

やさしき稚兒（ちご）の我が『歌』の
我れをむかしにかへすとき、
うせにし君があをみたる
いとかなしげのみすがたの
いとど涙をもとむなる。

君がのこせしこの兒こそ、
父なる我れの兒にあらで
母なる君がたまものぞ、
苦しかりける夜ごと夜ごと
君があたへし涙ゆゑ。

嚢のつかれに乾きたる
我がこの胸をやはらげし
君が涙よ、なぐさめよ、
やさしき稚兒とともにゐて
我れは夜ごとにかへすなり。

故鄕のひと夏

×

落つる涙は水とともに
行方（ゆくへ）もしらず流るれど、
のこる嘆きに蘆の葉も
心もともにうちふるひ、
ふるへながらに暮れゆけば、
ほのかに月はのぼりきて
心も水となりて流る。

×

みやま清水のわくごとく
君がなさけもわくものを、
われもにごらぬ眞清水の
こころもてまた戀ふものを、
などひややけき情（なさけ）ぞと
淺き戀ぞと人の言ふらん。

×

君がまことのその愛に
むくゆるものをもたぬわれ、
あらず、ちひさきわが愛を
さはれまことの愛をもて、
やさしき君にむくいまゐらす。

×

おのが昔の姿こひし、
おのが昔の心こひし、
ああ、ああ、されどかへる日なし。
おのが昔の淸らなりし、
おのが昔の妙（たへ）にありし、
すがたも心もすでに失（う）せぬ。

×

絶えぬおもひのくるしさに
ともしび消して窓しめて、
まなこつぶりてわれは坐す。
うかぶは君が面影か、
はたのぞみある行末か、
いないな苦（にが）きおもひでぞ。

×

罌粟は蒔くとも植うるとも
かなしき目には似ざらまし、
罌粟は散るともおつるとも
さびしき頰には似ざらまし。
罌粟のさかりに來て見れば

うつくしいかな屑の、
さはれもろくも散りしかな
君が心の罌粟こそは。

×

夕日はかなたの沖邊にしづみ、
ゆききもせはしきあまつ雲なる
ゆくへもあやなきわが悲しみは、
弓弦をはなれし征矢のごとくに
ゆふづつさやけきみ空に飛びぬ。

磯山さびしくたそがるるとき
いとしき君にも似たるすがたを
いたくも繁れる葉かげに見たり、
いつの日か君はかへりたまひし。
いな、これあやしき影にすぎじか。

君と別れてしこの磯山に
君をまた見むとわれねがはむや、
きえゆく水沫に似たる姿の
昨のあこがれによしかへすとも、
淸きひかりだにあけは消ゆるに。

故里にて

流るる水にわれ愁ふ、
やなぎのかげにうたへども
戀はしばしもとどまらず
ほまれは浮きてただ流る、
ながれ夜を日につきずとも
など盡きざらむわが命、
世のわづらひをふりすてて
秋風さむき川ばたの
やなぎのかげにわれ愁ふ。

思ひ出

わがつかれたる世にありて
さびしく渴く思ひ出よ。

なれが渴ける思ひ出は
今日もわれ見てうなだれぬ。

われ、窓枠にもたるべき
夕となれば胸騷ぐ。

げにわが餓ゑし思ひ出も
なれにうなだれ嘆くらむ。

ある夜のおもひ

われをさませし戀なれば
また醉はするをあやしみそ。

若くてにほふかほばせに
とらへられたる身ならずや。

右にひだりに目をはせて
なにさはものにおどろかむ。

たとへ醉ふ日のみじかきも
さむるは醉ふにあらぬかは。

野葡萄のあかきしたたり

野葡萄のあかきしたたり
君がましろき手を染めき、
その指をいくたびわれは欲りしけん。

蝶は身がるに來てとまる、
その髪を一度もわれは捲かざるに。
月の光はわがまへをもはばからず
君がおもてにくちづけし、
そよ風は君が乳房をもてあそぶ。
ああ、われひとり、
など觸れがたき、君が胸、君が手に。」

愛

はやわれは何人も傷つけざらむ
何人もわが爲めに苦しむものを。

われひとりここに生く、わがこの糧は
世の人よ、汝が手よりこぼれけるもの。

はやわれは何人も傷つけざらむ
何人もわが爲めに友と見ゆるに。

月夜

靜かにうかべる月を見れば
短き今日の命をうち嘆くなり。

草叢を吹く風の音をきけば
宛らわれの草となりし如くかなし。

つきせぬ流れの岸に立てば
幸なき來方はかなまれつつ。

いづこかすだける蟲の音につれ
消ゆる煙の身となりて泣く。

あはれわが身の行末よ

やがて入るべき月のてる間を
覺束なくも思はるるかな。

わが涙、あだなる涙

わが涙、あだなる涙、
この涙たとひ雨とふらすも、
また空の鳥と飛ばすも、
あだなりや、あだなりや、
すべてただ神のまにまに。

わが命、あだなる命、
たとひ光の中に生るるとも、
たとひ潮の中に育つとも、
あだなりや、あだなりや、
すべてただわが咎ゆゑに。

わがねがひ

すべてのものの騷がしきなかに
ただひとり靜かにさびしく、
すべてのものの美しきなかに
ただひとり姿みにくく、
すべてのものの富めるなかに
ただひとりいとも貧しく、
人の目につくり飾らず
人のおもひに心いためず、」
しづかにて
しづかにて、
いともさびしく
われぞあらなむ。

望のやぶれたるときに

ふわふわとのぼる風船
やぶれてはまたも落ちくる。

かなしみのわが風船は
ひさかたの天にやぶれぬ。

夢想の破れたるのちに

摘まれ、捨てられ、
踏まれたる花のいとしさ。

我れは我が破れたる
夢想をいつくしむ。
我れは我が死したる愛兒を
葬るにしのびず。

運命の捨兒、
我れは今日ぞ悲むを樂む。

夕暮の歌

千よろづの望はうちに渦巻けども、
しかも我れ、早くも今日に倦みはてたり。
夕影ながく地の上に愁をひきて、
いやはての眸はふかく胸に沁み入る。
ああ、光は流れたり、そののちになほ
望はうちに火と燃ゆれども、我は倦みたり。
つかれつ病みつ、かくて我れ溜息により
いたましき悟をひらく、死もまたよしと。
渦巻く望の死によりて靜まりし時、
夕は嘆きをまたもおくりぬ。

ゆふづつの歌

その一

くもりなき少女の眸のごとき
　汝が黄昏のあきらけき光を見れば、
この世は我に幸あるものとなりて
　しばしは彼方の光明に心ほほゑむ。

されどうすれて消えゆく汝れの
　老いたる女の髮のごとき光を見れば、
この世は我に底しらぬ淵となりて
　ひとり暗きに身をなげて來方を嘆き泣くなり。

その二

ふかき傷手になやむ時も
われはかなたの星にあこがる、
夕暮かがやくかの星こそ
わが身に涙をおくるなれ。
ふかき傷手に身もこころも
芝生のうへに投げいだして、
君を戀しとわが歌へば
かなたの光もほほゑみぬ。

野末に立ちて、空の雲の
波のごとくにわくを見れば、
そのかたはらに輝きつつ
われ招くごとき星こそあれ。

その三

つかれてかへる少女のむれを
光さやけき瞳もて、天のはてより、
情にみつる微笑もて、眺むるみれば、
　うれしき君も、あはれゆふづつ。

しげき草葉の露に濡れて、
山彦となる少女の歌よ、
さすらひ來にし旅人を慰めたまふ、

うれしき君も、あはれゆふづつ。

しらぬ旅路にすがたやつれて、
影もうすれて、わが行けば川の邊(ほと)りに、
行く水のつきぬ憂ひをてらすなる、
　うれしき君も、あはれゆふづつ。

少女子に

さやかなる汝れの面影
さわだてる繁葉木立(しげはこだち)の
ささやきにまぎれ來り、
さばかりの悲みをもて
　わが胸になどつと添ふや。

いま見るはあどけなき
いにしへの姿にあらず、
いと脆き夜(よる)の蛾(が)のごと
いたましき汝れが面影、——
　いまもなほさやかなれども。

なれを見るわが目見(まみ)は
なにとなき悔(くい)を覺えて、
なつかしきおもひだに
などかああ遙(はるか)に去りぬ、
　あはれなる汝れの窶(やつ)れに。

なげき

いつもいつも力なき脣の上に
紫の花ぞ咲くなり。
夏の夜の風に吹かれて
白露のはやくも零(こぼ)るる。

いつもいつも紫のふるひわななく
力なき脣の上に、
失せぬる戀の、悲しめる世の、」
ふかき嘆きぞ零れ落つる。

いつもいつも力なくうなだるる人よ、」
紫の脣をまたももれじか、
人の世をたのしとたたへ
自らの幸をほこりし、その言の葉。」

病窓にて

悲みよ、さは夜毎
わが枕邊を騷立たしむるや。
種蒔の五月は晴れたる
つつじ咲く山の夕を、
さしいづる、あはれ長庚。

さはな泣きそね……
のこしたるわが愁は
オルガンにこもりたれば、
明日を待たでなりやいでむ。

ああその澄みたる空のかなたに、
なつかしき戀人の面影の
ひそみやすらむと……夜毎いでつつ、」
わがこころまたも嘆くか。

見ず、知らず、聞かざりし
昔こそ寧ろやすけき……
思ふ胸も、えうちあけずて
ただ、その眼、その脣、その手に
あこがるるはかなき病は、
病窓の百合の萎れに、

それならぬ……えこそわかたね……
云ひしらぬ恐怖(おそれ)にぞ、しばし顫(ふる)へぬ。

眠りながらに

ああされば、われは緑にかがやく夜
惱ましき君が匂ひを知れるのみ。

三木露風「搖る小舟」

搖られ搖らるる小舟のなかに
我等ねむらむ。

波かがやけばかがやけば
白金の眞晝にむかふ。

あやなく洩るる光を、光を
我等はもとむ。
隈(くま)なき月影の海にうかびいで、
高く歌はむふたりの戀を。

かくて盡きせぬ思ひを夜の名殘に
かがやかせつつ、
搖られ搖られていざや歸らむ、
ねむりながらに。

昔の戀人のために

その一

しづかなるこの夏の夜に
などかくも胸さわがしき、
窓よりの風すずしきに
などかくも我が息の熱き、
月かげはひろごりて、また
森はたかく波うつ。
街の騷ぎ、子供の歌、
この窓をめぐる木立も、
森も、森の上の月も、

ただ、かはらぬに
ああ一とせはすぎ去りしよ、
ああ愛する人よ、
汝は我れをはなれ去りしよ。
ああ、我れは幾夜か、
なり騒ぐ木の葉の彼方に
あだにのみ君をもとめき、——
されどああ、かくばかり我れに貴く、
天使にも似たりし人は、
かのいやしき市の翁に
その胸を惜氣なく投げあたへけん。
いと遠き市の響をきけば、
我れは覺ゆ、その中にかの華かなる笑ひのまじるを。

その二

よどみなく年はすぎ去る、
すさまじく世はうつり行く。
まことある戀もかなはず、
路行くに影もうすれき。
なさけをば人に惜みて、
樂しくもあるべきときに、
君はしも重く病みけり。
うるはしき君の今日をば、
いかに我れ嘆きいたまん。
うきたる戀は今我が求むるものならじ、
不幸なるもの、いと脆く美しきもの——
そは君なりしか？
いま我れおのが嘆きをやめて、
いと熱き慰めもて
傷ける君をかなしまむとす。
かくばかり悲しき君に、
ねがはくば健かに樂しきむかし、
我れに苦しきその日をば、かへし與へよ。

その三

月よ、汝はなほ忘れざるべし、

果てもなく、限りなき人の中にも、
汝はただ我をのみ眺むとおもへば。
いにし年、我と共にありしかの人、
その人の黒き髪を、くれなゐの頰を、
月よ、汝はやさしくも照しき。

我がたたへける女、悲しくも今は
おろかなるものなれり。
一たびもわが愛は花咲かずして
ただこの痛みのみ殘れり、
枯れ果てし薔薇の木の刺のごとくに！

月よ、汝はかの人を今いづくに見る？
たのしめるか？　かなしめるか？……
月よ、汝が下界の鏡なりせば
我は見ん、かの人の笑ひてあるを——

破船者の歌

あらしの海におけるより
なほ無慘なる難破せし
この人生の小舟にも
つめる寶は多かりき。
もし風もなく波もなく
めざす港に着きぬれば、
すて賣りすべき積荷をば
破れしづみしそれゆゑに
寶といふか知らねども。
この積荷ゆゑあら海に
船出をしたるわが身には、
こは命にも換へがたき
寶なりしをあなあはれ、
今は求めんあともなし。

さすらひ人の歌

さながら津浪なす
このうつし世の、
あらき世潮に、
いまぞおぼるる。

山したに捨てられし
柴つみ車、
さながらや、われからに。
靜かなるゆふべ夕を。

片山里の
まばら樹立に、
なげかふやま鳩。

かくも、かへらぬ
昔は苦き、おもひでの
歌もあらなくに。

愁の歌

極みもあらぬ愁は風となりて我を吹きめぐる。
今朝冬は來ぬ。
片岡に低く並み立つ松の樹は
老しりそめし女の如く赤き落髮をちらしぬ。
我はかく打ふるへて、昨夜の嗟のつづきとて
またも涙し溜息す。
野分吹き、木がらしすさび、
わが血また冷くならむ。
ああ過去りし夏の日のなつかしきかな、
川邊ゆき釣を垂れつ、山ゆきて通草をとりし、
それもまた夢なりけるよ。

今我に不幸は來ぬ。
ねがはくは青空と草原の我にあれかし、」
そこに横り、そこに歌をよまむ、
我は青空の歌と草原の生涯を好む。
されどあゝ空なりき。
冬は來ぬ。
（いな我は冬の國、木枯の國に生れしなり）
木造の冷き家に石に似て人ぞ默せる、——
これぞわが住む國なる。
我は眞夏の愛兒なり。
嘗て青空のもと、草原のうへに、
かの月桂樹の繁りたる國にありし身の、
いと愚かなりし報とて
愚かなる人のすむ海の中にはうつされけむ。
我に戀なし、我に歌なし。
ただ過去りし夏の日に、眞夏の影に
憧るるのみ、——ただ愁へてあるのみ、
蒼ざめて、うち戰きて、鈍く笑ひて、
我はかく冬の朝をひとり柱に靠れて、
片岡を越え來る風に吹かれてあるのみ。
血も冷えぬ、頰も冷えぬ。
あゝ歸り行くべき南の國よ、今はたいかに。
極みもあらぬ愁は雲となりて
わがうへを覆ひて去らず。
ああ、我はかくてこの國に老ふべきか。

一詩人のなげき

我は早世の詩人なるか、
何ぞ焦心燥急なる、
ああ止みなん止みなん。

我が思想は春の雪と飛散す、
落つれば地上に溶くるなり、

ああ止みなん止みなん。

東方の邊土（へんど）にありて、
理想の國を求むれど得ず、
ああ止みなん止みなん。

ベアトリチェはあまりに聖（きよ）し、
カロリイネは我に過ぎたり、
ああ止みなん止みなん。

孤獨者の煙草の賛詩

たのしげに人は笑へり、
街の上に若者は歌をうたへり、
ほこりかに女はさまよへり、
嘆きは人にわかつべからず、
笑ひは人にわかたるるをねがはず、
好みて我れはひとり世をのがれて、
窓ごしに孔雀の誇りをおもひ、
雀のむれのはしたなき饒舌を聞き、
兀鷹（はげたか）の歌をねがはず、
我れと我身を嚙みやぶり、
我れと我身をかきいだき、
我れを賞め、我れをそしりつ、
夕暮の祈も知らず、
紙に刷られたる凡ての夢をいとひて、
我れはただ煙草をぞ吸ふ。
右にのべたる凡てをば、
煙草よ、汝は紫の煙となせば。

手帳のはしに

其一

我れ疲れたり。我れ蒼くなれり。

屈辱と、勞働とに勞れたり。
哀毀骨立、何の爲すところなし。
ああ歡樂を欲ふ、卑しき情慾にてもあれかし。
ああ我は我より我を引出す人を求む。
古き戀は運命によつてつかさどられたり、
されど我等は自ら戀を求めざるべからず。
否々、今宵はや十二時に近し。
いざ寢む、ああ我は疲れたる人なり。

其　二

欺かれて常に生くるなり、我のみひとり此の如きなり。
貧しく、弱く、悲しく、情なき生涯なるかな。
幸は我にあらず、我はかの囚はれたる王の如く死ぬべ
きのみ。
惡運よ。惡運よ。惡運よ。
寒きに火なし。闇きに燈なし。
饑ゑたるに食なし。渇けるに水なし。
迷へるに導く人もなし。

ああ我を救へよ。女よ、友よ。我は切に求む、
生涯のうち、我をこの世の嵐より守るべき愛を。

少女の教

かつて少女の一人は我に教へき、
神の讃むべきことを、
人生の樂しきことを、
しかして、女の愛すべきことを。
心よ、我はよく知る、
汝がその生涯、少女の言葉を信ぜんとするを。

夕の歌

一

夕は來れり、秋の夕は來れり、
星とともに出づるあやしき思ひ、

風とともにゆらぐさびしきかげ、
繁木が奥のおくよりいつともなく
津浪のごとくに夕は來れり、
秋の夕は來れり、あやしき思ひは來れり。

二

松の樹はくろくまたくろく
あやしき影もて我が胸にせまる、
夕ぐれひとり野路ゆけば
秋をかなしむ蟲のこゑごゑ涙をさそふ。
かくて我が今日もまた去りゆく、
ああ我が日毎の嘆きはさながらに
うかみて消ゆる松の樹の影にあらじか。

丘邊のさまよひ

月おぼろにして我が影うすし、
我が生命さへ覺束なきかな。
靜かなる心だにあらば
たのしさは來らむものを。
あはれ、日として夜として
我が胸の靜かなることはあらず。
ある時は、死の谷に迷ひ、
ある時は、嘆きの海に溺る。
ここに一日の惱みよりのがれ出でて
ひとり丘邊にさまよひ來れば、
繁れる松の樹の影もうすし。
夕風のなかにそよげる草のごとくに
寂しくしてたえだえなる我が生活は、
節ほそく哀れに鳴りて、
おぼろおぼろの歌とこそなれ、
影もろともに薄らぎつつも。

故郷の夜の歌

一

日の下にすべての命はすこやかなれど、
幽暗の境に我れは姿かくして、
よろづのものの枯るるを待たむ——
荘嚴の夜、うるはしの夜を待たむ。

二

夜こそは我が命なれ、我が力なれ。
この夜にひとり立つ時、
あはれ、身も溶くる樂しき思出は、
よる波のごと、ひそやかに我れに立返るなり。

夜の歌

睡をやすしと思ひぬる晝もありしか、——
つくづくと、苦しき夢に夜をつかれぬ。
うららけき日影の下の、うららけき

思ひを戀ひて、いま夜をなげく。

睡より醒めにし時と、ながきひとの日の
いそしみに疲れし時と、いと似たるかな。

くるしきもまた睡なり、晝もまた
もとよりくるし、永劫の冬にし棲めば。——

日より夜へ、夜より晝へ、くるしみより
くるしみへ、睡より疲れへと、——我れはさまよふ。

二月の或日鴻の臺にて

靜けき大河は我が前を流る、
をやみなき歡呼をもて
海にそそぐこの大河に
我が胸もまた溶けよかし。

たえず片帆あげし舟は
我が前をよぎりすぐ、
さながら苦悶と囘想との
胸をよぎるそれにも似て。

枯草の中に身をうづめて
すぎにし戀をおもふのとき、
ああ、いつかへり來し、
流れの音、君が聲音にまがふ。

小さき詩人はかくねがふ

我が歌もまた
かの即興樂のごとく、
その場かぎりに消え去らば、
いかにうれしからまし。

ただひと度、ただひと度
來る幸、來る戀、來る歌こそ
人生のいとよきものなれ、
されど世は空しき骸に滿つ。

煙火は空に消ゆ、
青春も、また戀も消ゆ、
されど我が歌はなど
みにくき骸をあとに殘す。

我が歌もまた
かの少女子の微笑のごとく、
束の間にして消え去らば、
いかにうれしからまし。

風信子

我れは見ぬ、
かなしみの花を。
むらさきの花の名を、されど知らず。

我れは聞きぬ、
こころよき風信子、花の名なりと。
されどその花を、我れは知らず。

嘆きつつ我等行くとき、
かぼそき人さし指は、我れに敎へぬ。
そのかなしみの花の名を。
むらさきの色もあやなき風信子の花を。

遺産

ある人逝きぬ、彼女は天をになひて去れり。

ユウゴオ

はじめてその人の悲しげなる面を見しとき、
我はあだかも世界の悲しみを見るの思ひをしき。
人の中の最も悲しき人、女の中の最も傷ましき女なりしその人は、
我に涙を求むべく來りし如くなりき。
その人はげによく人を觀るの明をもちたりしよ。
涙によりて聖化せらるること他に比類なき我をあまたの男のうちより特に選びたればなり。
幸なき二人は幸なき二人を悲む事によりて、纔に生くるを得き。
我はその人の涙によりて、その人はまた我の涙によりて――

かくて涙と涙とは世界を詩歌となし終りぬ。
しかもその夢はつひに破るる時來れり。
すなはちその人は逝きぬ。
げにその人は常に血を喀きつつ、
涙によりて死と戰ひつつありしなり。
我をして地上の一人たるの自覺を得せしめし人、
その人は今や墓の下に眠れり。
曾て終夜かの機下の小蟲の如く、共に咽び共に慰め合ひし人は、
今や永刧にかへらずなりぬ。
これもまた神の惠みなりと、神につかふる人は言ひぬ。
げに神の惠なるべし。神は更に追懷と哀怨の涙を我に與へたまふ。
はじめてその悲しげなる面を見しとき、
あだかも世界のかなしみを見るの思ひしたりしその人は、
世界の悲しみを我に殘して、今やひとり逝けり。
その悲しみによりて、我もまた聖化せられむと欲す。
その人の死はげに大いなる打擊なりき。
されどまた大いなる賜物を齎せしならずや。
その人の我にのこせし遺産のうちには、
また神とよぶ寳ありき。
げに百萬の黄金にも換へがたき貴き寳こそはありしなれ。

夜色

くらやみの中にひそめる
悲みの、なげかふ聲をききて、
わが戀は今宵またも、
いづこともなくさまよひゆきぬ。
軒末にたち迷ふ冷たき空氣、
あぢきなくうたふらむ

わが身よりいづる吐息は……
見よ、ほのに明るき空に
蝙蝠はいづち行きけむ、
むら雲のあゆみは速し。

夜の色、しづむ、ふかみに……
戀しき家はあかり消えぬ、
甘寢よ、われを、思ふことなき
憎き手まくら……

うつりゆく時の叫びは今この夜に
歡聲をあげて、にごりたる
底の大都の叫喚を、
手うち興ずるおももちなれ。

ああさらに、落つるあらじか、
わが今日はいとも慘なるに、
いなあらず、水のうたたね……

小夜のかり寢

海の果より、のぼれ今こそ雲のひとむら、
あはれにも草原の刈株は踏みしだかれて、
早少女のただひとり、小手をかざして
眺めやる、その空の晴れがましさは、
いまつくづくと醒めては眠り、眠りては
また醒めきたる皐月の夢の、夢のくだちに
かへるしとねのみだれ髮、白き腕の
ふと眼にうつる目の亂れ、蓬らう處女。

毛蒲團のなまめきは濡れ燕翔るごとくに、
くれなゐの夜着のたるみに、紫紺こそ
もつれもつるる、夜の海の波がしら、
白く匂ふも艶やかに、處女ともなき

身の疲れ、小夜のかり寝にゆるやかに、
接吻の香やのこるらむ、そのたたずまひ。

若くしてみまかりし女詩人をいたみて

限りなき恨みのなかに限りなき愛をうたひし
うつくしきうた人の君、若くして死にしわが君、
君こそはげに戀すべくうたふべく世に生れきて、
限りなき恨みのなかに若くして死するべかりし。

うつくしきサッフォオの君、うるはしきわが戀人よ、
われは君の才を慕ひて限りなき恨みの歌に
限りなく戀ひわたりにき、君が歌は夜の鶯
よごとよごと盡きぬ嘆きにそのかみをいたむが如し。

されどわがめでにしものは誠もてめでにしものは、
身をつくし命をかけて限りなくあくがれこしは、
ひとへにその悩ましげなる捨てがたきみ姿なりき。

黒き眸、顫ふ脣、長き指、あはれこれこそ
限りなくわがよろこびし悲みしものなるを、いま
白骨の歌はのこれど、あはれ君なし、あはれ君なし。

愛の小曲

その一

やはらかきその右の手にたとひ鋭き矢はもてりとも、
ゆるやかにしなだるる枝の葉繁りといつも涼しき
顔よ、玉のありかを求むるごと見とれてあれば、
夢もなし、幻もなし、ただ青き海を知るのみ。

にこやかにこぼれこぼるる微笑に刺はありとも、
房の緒の結目めでたきその乳房、毒は垂るとも

何かあらむ、わが心根は音もなくくだちゆきつつ、
命なく、束の間もなき瀬戸際にうち惑ふなり。

靜かなる吐息かすかに罌粟の花おつる夜なれば、
うちつかれ、波もねむれるわが海は、情の海は
小夜ふけてしげき涙の泉なす胸にたゆたふ。

わが前にただ光あり、夜の目には紅のいとよし、
長き指わが指と組みてふるふ時、いまの安さに、
かずならぬこのわが胸も息づきて、ただにいたみぬ。

その二

燈のかげになまめく君よ、春の夜は更にうるはし、
うるはしき君なかりせば我れいかで今宵あるべき。
あはれその二重目蓋は千よろづの愁をかたり、
はた燃ゆる小さき脣は蘂のごと戀にふるへき。

わが血ただ君に燃えたち、わが思ひ君にくるひぬ。
我しりぬ、今ぞ知りぬる、毒草のくしき匂ひを、
我ききぬ、今ぞ聽きぬる、パン神の笛の響を。
君よ、ああわが戀人よ、美しき眸よ、脣よ。

君ゆゑに我はあるなり、君なくばいかでありえむ。
うたた寢の夢見ごこちに吹く風も君かとぞ見む、
そこはかと漂ふ香にもよそならぬ哀れ身にしむ。

夢に見き、また夢に見き、ああ君よ、わが戀人よ、
何なれば微笑みたまふ、その媚の心憎さよ。
海のごとき眸よ、脣よ、地の上の聖なるものよ。

その三

ひとりの愁はまづ顫へて、棧橋に波を聽くとき、
影をつくり影を收めて、闇は靜かにほほゑみぬ。
渡津海は星に見惚れて夢に入るたのしきこよひ、

舟の上にふたりの脣はあたらしく合ひにけるかな。

漕きいづるわれらの舟の篝火はひたすら燃えぬ。
てらすは二つの若き愁、涙し胸にまづながるれば、
やぶれむとして結びたる脣ぞ音に泣きぬめり、
絶間なく擁きむつるる波もまたともにかなしむ。

舟夫の唄こそ長閑にひびけ、靑海原に
いさり火は且つうかび消え、月なき夜の心しづけさ。
手をとりてまた抱き、また泣くは戀か命か。

河岸なみのともしびは我が春の夜を祝ふなるべし。
光なくまた形なし、ただ闇とただわが戀と。
舷を叩くわれらに、小夜ふけにけり、小夜ふけにけり。

潜水夫

くまもなき月光の、棚曳ける狹霧のなかに
靑々と靜やかに照りしくごとき、
海底の世界、いま、なべてのものは
艶を消されて、ひと色に、尼のおももち。

濡髮の海藻は千々にみだるる。
茂みなす海樹の林。なめらなる苔岩に、
くさぐさの貝の族、また鰭物は甘寢せり。
大いなる音のなかに、聲絶えし音のなかに。

あな、あやし、頭まろき海坊主いづと、
蒼界の子等どもはをののきやみむ。
笑止なるわが姿、澄めるみだしてよろめきぬ。

あはれ、かくて我れふらふらと、さながら靈なきに似て
右ひだり、たえまなく心かたむく。
さて、綱ひけば、わがこの惑は、光へ光へ……

船出

青海原はそよそよとただに暮れゆく、
いとはやし黄昏のあし、わが船のあし、
波の長手の瀬戸を出でて、荒き夜海に
さしかかる、望の帆布のこのはらみ風。

見かへれば船のこし方、ひと筋ひける
白き光の遠方に、消ゆるともしび、
高き濤の穗、平らならぬわが胸のうち、
いとせめて明日の日の狩場を慕ふ。

行方遥けき旅立や、けふの船出の
幸ことぶくか、舷ちかく羽ばたきさやぐ
鷗一群れ、うたかたに翼濡れつつ。

青海原は果てもなく、濤たかまりぬ、
海のあなたのわが領土、こひしき國に
さびしき望擔ふ、わが船の帆布はためく。

願望

なげ棄てられし破橋の擬寶珠のごとく
くだつとも、かの天日にきはみなき
願ひこそあれ、あさはかの人生に悔を
抱く身は、せめて眞夏に身を灼かむ。

昨日はすぎぬ、唯だ今日ぞ、此の日はいかに、
夜ひと夜の死より醒めたるその後の
惠方はいづこ、あきらかに敗を期しての
戰より、われを救はむ人や誰れ。

大日蓮よ、今いづこ、かの腰強の

槲の樹の一葉はわれも身につけて、
たとへ卑怯とそしるともなど行かざらむ。

ここに紅蓮のふる池に、あはれ荷葉は
やれやれて、月は靑めり、いざわれは
うせし望を求め得て眞夏に行かむ。

川のほとりにて

せまき川、流れよどまず今もなほ水は澄むらむ、
忘れたるいにしへのその調かへり來りて、
川添ひの草のしげりに、鳴き交す秋の夜の蟲、
また晝の蟬の聲、わが耳に何かささやく。

あかき芽のふきいづる頃、水の中の蘆の戰ぎは
枯莖ともろともに暖き日を腐れにたれど、
群れて飛ぶ水馬、鰭をふる日高のたぐひ、
まのあたりせせらげるこの川に棲みやうつれる。

ふるさとの長きいくとせ、幼さを今見るものか、
せまき川靑く澄み、川底の苔ぞぬめれる、
うちなびく蛇のごときふる藻草流れえずして。

秋の實り、あかき果實のはぢけては水に落ちゆく
名なし草、やがて枯れ、やがて刈られて、
たよりなき今日ぞ思ほゆ、この川もまた我が淨土。

夢

夢よりほかによきものはなし。今ぞさとりぬ。
夢よりほかによきものはなし、一つだになし。
夢をゆめみて暮すのみぞ、我が生存の
價なるべし。されば我れただにゆめみむ。

とある夜は我れ蒼海を夢に見き。
燃えたちし天日の、自らの熱にたふれて、
刺されたる大蛇の如くくるくると、荒海の上
毒血の如き火をとばし、地を燬かむとす。

とある夜は我れ曠原を夢に見き。
深林に梟さけび、大月は死してかかりぬ。
傷きて靑ざめし人、林を出でぬ、そは我れなりき。

かず多き夢の中よりかず多き愁をくみて
我れはつひに自らを弔ふべけれ。
今にして何を恐れむ。夢はつひに死の如し。

カフヱエ・フランセエに於ける
ヱルレエヌの肖像に

若き女の脣のごとき雛罌粟の花、
しとしとと、しとしとと、白石板に
落ち落つるそのたび毎に、小夜ふけまさる。
いま一人のこれり、ああヱルレエヌ。

燈火消ゆる間、生命消ゆる間、
なほ神の愛はとどまれり。
その卓の白布の上、鵞ペンの光るあり。
汝が嗜めるアブサント、いまだ盡きず。

悲しきは君も我れも、ああヱルレエヌ。
君はいま、その墓に思ひわぶらむ。
半生の孤愁の上におつる涙よ。

とび散らふ落葉よ。あはれ、酒も盡きたり。
君のむかひの空椅子に、いざ我れも坐し、
さてふたり、悲しき微笑を交さむかな。

靑邱の歌　（高靑邱）

淸く瘦せつる靑邱は
天に生れし身なれども
いつかこの世に下りけむ
名をあかさぬもあはれなり、
遠き旅寢もいとはしく
山をたがやすもものうけれ、
劍は銹にまかせたり
書はみだるる枕もと、
など腰折らむ五斗米に
域七十も何かそも
ただ歌こそはうれしけれ、
ひとり歌ひてよろこびて
野行き山行きさまよふを
人はあざけり笑へども
靑邱はなどかへりみむ、
絶えず歌ひて朝夕に
飢をば忘れ世も忘る、
歌にくるしむその折りは
醉へるが如き眸のひかり、
髮はおどろにみだれつつ
家も思はず兒もめでず
などまらうどにいらへせむ、
顏囘に似るまづしきも
猗氏の富みしも何かある、
衣の破れも恥ぢざれば
人の榮えも羨まず、
岸邊にすわり木の間ゆき
大あめつちをおもふとき
すべて聲あり心あり、
鯨と名け蟲といふ
などわが前にわかるべき

きよき氣はみつ大空に
地にはけはしき道多し、
草は萠えいで日影さす
わが心またある時は
鬼神にあひある時は
きよき山河めづるなり、
光るは星か大空の
烟るは露かしの原の
かがやくものぞこひしけれ、
世にわが幸はなけれども
ひとり黃金の聲をもつ、
風は落ちけり川上に
雨ははれけりあしの屋に、
ねむりも足りぬ詩もなりぬ
よし世の人はおどろくも
いざ壺うちて歌ひてむ、
その歌聲にあはせつつ
かの仙人の笛とりて
月のひかりに吹かせばや、
さはあれど若し忽ちに
獸さけびて鳥啼きて
波たち山の崩るるに
怒りたまひし天つ神、
靑邱を世にあらせじと
ましろき鶴をつかはして
天の都にかへさばいかに。

駱駝の歌（高靑邱）

その峰は黃なり、
その耳は紫なり、
そのむかし、黃金を馱して君にささげし時、
北の雪ふかうして耳をうづめき。
下鞍の色褪せたれど、駱駝は死せず。

いさみて去年は軍とともに、
いと遠き南へくだりぬ。
いや遠く、草焼け、沙もえ、水にごりたり、
肉は落ち、毛は焦げ、骨はくだけぬ。
かへりみれば戀しきかな、北の深雪よ、
ああいつかまたかへりえむ。
あはれ誰か知る駱駝の飢ゑを、
あはれ誰か知る駱駝の渇き。
おとろへては馬にも如かじ。
ああ駱駝、あはれ駱駝よ、むしろなげくな。
峰は食ふべし、
耳は衣るべし、
みよ飢ゑかはくと、いづれか汝を醫すべき。

高青邱より

秋の夜

つめたき水に影うつる
わが面影も老いてけり、
桐の葉かげに立ちよれば
鳥なくなり秋の夜を。

荻の花

身も凍るべき露じもに
髪濡らしつつたたずめば
魚もをどらず水涸れて
鳥は翼を垂れにけり、
こころいたみてあるときは
風にみだるる荻の花。

旅寢

しづかにも露はこぼるる、
蓮の花汀にうきて
白鷺は月にも似たり
みだれとぶ螢は星か、
夢うつつ旅寢の牀に

舟唄をひとりし聽けば
などかくも道をはるかに
たどり來しわが心ぞも。

鷺

雪のやうなるわが羽に
くまなき月の影さえて
けぶる浦曲の秋ゆふべ、
魚をねらひてたたずめば
おどろかしゆく水馴棹、
遠きなぎさを戀ひて寢る
よしあし草のわが宿に
鷗ばかりはゆるさなむ。

船どまり

枕にかよふ波のおと
瀧つ瀬をなす夜もすがら
あまたくらき雨あらし、
船窓ちかきわがねむり
三夜やすからずたちやらず、
夢のみひとり鷗をば
逐うてながれを飛びゆけど。

丘邊の水

いかで世に流れなからむ
丘ゆけば耳にこそ入れ
月影のなかにまじりて
水の音、たたかひの歌、
山に寢てふるさとゆめみ
つづらをり行きぞわづらふ、
くるしさに涙ながせば
さき行きしあまたの友の
創の血を洗ひやしけむ
にごりたる流れに落ちて
窶れにし顏もうつさず、
見かへれば都はとほし
つはものの涙乾かず

とこしへに水はにごらむ。

牛飼

汝が牛の角はまがれり
わが牛の尾はも短し、
笛と鞭われらはもちて
ゆきかへる、岡邊に、野邊に。
草とほく、牛は飢ゑたり
つかれては歩みも遲し、
日も落ちぬ、はや歸りなむ、
今の身に憂(うき)はなけれど
ただおそる、犠(ぎ)のために
この牛を賣る日にあふを。

古き詩より

秋の夜

落つる木の葉は雨のごと
きよき月かげ霜をなす
ふけゆく夜(よる)をただひとり
また寢(いね)がての悲しさよ
待つとも來べき人あらで
誰ゆゑ床の塵をはらはん。

はつ秋

そぞろにも秋の灯(ひ)ふけぬ
螢うつ扇はふれて
靑すだれすずしくゆらぐ
うは風のきよき手枕(たまくら)
かしたまへ、いざ戀人よ
天の川ともに見るべく。

さすらひ

桐の葉たたく雨とともに
いとしめやかに更けてゆく
秋の夜すがらかたれども
つきぬ嘆きの君とわれと

夢よりさめてうつらうつら
きくは悲しき蟲の聲
ふる郷今はいかならん。

旅かへり

谷のかけ橋うちすぎて
馬の背に見る罌粟の花
そのくれなゐのいやふかき
旅の愁は散りそめぬ。

ゆく春

小草のみどり日はみちて
春は流れてゆく河を
はさんでひろき沙より
水よりふかき愁かな。

一年ののち

川ばたの柳めざめて
雨とともに靑く夜あけぬ、
荒れはててかたく閉せる
門のうちにもなく鶯も
など去年の聲には似ざる。

無題

朱なる門はとざされて
春は滿ちたり池の面、
落ちて薔薇のくれなゐや
水は淺せりはますげを。
客來ることしげければ
たれをあるじと愁ふかな。

川のほとりにて

釣やめて眠はやまず
月落ちて舟はつながず、
夜のうちに風はふくとも
あしの花そよぐほとりに。

流れ

たえず東に流るれど
ああこの河のつれなさよ

都したひて泣くわれを
などとどまりて慰めぬ。

落　花

雨ふるまへはくれなゐの
花のかげなる葉を見しが、
はれて葉をわけたづぬるに
花のかげだになかりけり、
春はとなりにうつりけむ
蝶は墻をこえて行く。

夕　暮

夕日は山にうすづきて
思ひは遠し鐘の聲、
けぶる夕をかへり行く
俯の影こそさびしけれ。

夕　暮

蘆のほとりにたたずめば
波たち騷ぎ日も暮れぬ、

寒き潮はみちにけり
愁はふかし楊子江。

人をたづねて

水より水花より花にうかれつつ
君があたりにいたりけるかな

昔の歌より（一九〇九年—一九一一年）

我が歌をののしる人は多くともひとりの君に
ささげ來しもの

折にふれて　（治四十二年より同四十三年まで

ものはぢて逃げかくれする性なればいとよく戀に堪へ
あたふべき
高きことあへて望まずおのづから來るさだめの低きに
もつく
かかる身にいとまめやかにつかふなる涙ばかりをいま
たのむかな

わかれ居て君をおもふにありわびぬ十のよろこび十のかなしみ

わかき日のわかき夢路に老い果てしおのれを見たり戀うせし時

崖に立つおもひもて戀ひ河わたる心地に君をいたはりにける

ひとたびは疑ひ二度はあやしみてなほわれを戀ふ人うれしけれ

わが戀は青海原にすむといへど呼べばただちに胸にくるかな

いまはしき戀とつぶやきさて人をおもふにまたも涙ながれぬ

危しと去にがてに言ふ遲かりきわれに來しときほほゑみし君

戀はうせぬ熱き火の雨灰の雨わがまうへより降りも來よかし

わが前に衣も着けずて品たかく白き手首をさしのべし君

あひ見ては心ある目と心なき目とあひ見てはほほゑみしかな

知らぬ人前に來りてひざまづき手とりて泣かばいかにしたまふ

わがたのむわが目わが口など今日は臆して君にすげなかりしか

棄てられてそのまま塵に腐れゆく瓜の皮ともおもひたまふや

火藥庫にちかき危し夜毎立ち君がすまひを守らむとおもふ

そこひなく澄める青空ゆく雲のはかなきこともものたまひしかな

はじめ見し日は百合つぎに見しときは撫子いまは薔薇なす君

素足よし白しちひさしその足にわれは踏まれてあらむとねがふ

牧草のひまに見えたる遠山のひくく靑きに似たる君かな

若葉する垣のかくれにひるがへる紅き袂を泣きつつも見る

わきいづる春の潮のごとくなる湯槽のふちにものをこそおもへ

われいまだ女を泣かすすべ知らずふたりゐる時ひとり泣くのみ

二十二の歳はおもはずわが歳にひとしき君と思ひ染みにき

乾きたる胸をあはれみ夜ごと夜ごと緊き涙をたまひける君

かすかなる葉のそよぎにもをののきぬ君の死ぬやとわれの死ぬやと

泣きえじと嘆くしたよりはらはらと涙ながるるわかれ際かな

さかんなる日の短きは若く死ぬさだめゆゑにやけふおとろへぬ

春の夜は若き愁のさはなれば靜かにひとり泣くもあるべし

いとくやし少女なりせばとげがたき望いだきて泣かましものを

堪へがたき心もつ子は捨てたまへ君の涙を奪ふのみゆゑ

業平に小町にわれら似ざるべしわれはただわれ君はただ君

君ならでいかで手をとるわれならむわが手ふたつは君ゆゑにあり

われもまた戀男かな戀するとなにもせずして物思ひする

沖をゆく千石船にいつの日かふたり寢ねたる心地こそすれ

戀しぬと誰も知らぬがうれしくもまた悲しきに掌に書きて見る

秋の海うかぶ舟だに多からずあはれは胸に等しかりけり

足らはぬを憂しとおもひて足る日待つをとめ心をほほゑみて見る

ゆふづつと白き薔薇(さうび)とをとめ子はうつろひやすくあれなとねがふ

今見るは若くはなある君ならずかたちはもとにかはらざれども

いつまでも長生してとみ言葉のかなしきままに死なんとぞおもふ

浪よわが大わだつみの若人(わかうど)よわれをあはれみ身を奪へかし

さばかりにつれなきことの限りをば覺えてなどかわれに來ませし

かげ草はかくてあれかし光には堪へぬばかりの弱き身なれば

鐘なりぬ胸をとざさぬ夜なればかさびしと人に泣く夜なればか

いつはりにほほゑみかつはあはれみぬふみするをりのそのまごころを

うたびとは二十五にして死にぬべしされど千とせも忘れたまふな

はじめ見てうれしくつぎにかなしかりき言(こと)もかはさずはなれぬる人

かなしみに堪へずして

いつはりをにくめる身にもまぬかれぬいつはりにつぐいつはりの歌

秋風歎 ――ふるさとにて――

（明治四十二年六月より同年十月まで）

世をすねて

なつかしき人の數よりいと多しわが憎むひとわれ憎むひと

一夏のよろこび

とある夜はそろひの浴衣はま風に旗のやうにも吹かれ
つつゐし
天の川ともにながめて磯を行き西瓜畑を行きてなげき
ぬ

その人に

女とはよわし悲ししいと脆しいかなる人に抱かるるら
む

鹿にあたふる

棹鹿はとふべき妻をもつものをわれは山邊にただひと
り聽く

ことありし日

あなどりの中に老ゆべき運命(さだめ)ゆゑ十の死になほそむき
來りぬ

はかなき自負

世に一の歌人うまるいやふかきくるしみのためかなし
みのため

女の言葉

世におほきつたなき歌とうた人の中にまぢれる歌とう
た人

男の言葉

つたなきは君をうたはぬわが歌かおろかは君を戀はぬ
わが身か

白罌粟

月よりも白きを見ればいにし年君がおとせし涙ならじ
か

なみだ三首

ほそき影いさごに落つる秋の夜はいさり火をなすわが
涙かな
こころみな流れて落つる心地するかかる涙のしげき日
にあひぬ
今日しるは憂さとかなしさくるしさのみちて溢るるあ
だ涙なれ

漁村をすぎて

やぶれたる舟は軒端にうかばせつ長雨つづく秋のひと

日を

網小屋にて

いさり火はなにを見守る網小屋にひとりかなしくわが寢ぬる時

こころの日記（明治四十四年五月より同年九月まで）

勞働の途上にて

うつし世にわれを愛で治る神なくばこのくるしみを與へたまはじ

ある人に

わがねがひこばみたまふなかくいふをおんかなしみをわかちたまへと

自棄　八月三十一日

上もなくめでたかりける人の世を逐はれし身かやなべてをいとふ

そのつぎには

あだなりきあはれと思ふ人もなくのこる命は醉ひてすぐさん

偶感　九月二十五日

荒山のいただきの岩にのぼせおきて神はのたまふ泣きて歌へと

「靈魂の秋」以後（一九一六年―一九一七年）

哲學者と詩人とに

哲學者よ、私の感傷をゆるしてくれ、
詩人よ、私の思辨をゆるしてくれ、
私は君たちの前に出しやばるまいから、
この蝙蝠に、せめて夕方の舞踏をゆるしてくれ。

ホレエシオはどうしたか？

ホレエシオよ、君はまだ生きてゐるか？
「しばらく幸福より遠ざかり、
からき浮世にながらへて」
君はまだ眞理を見出さないか？
或は「ハムレット傳」でも起稿してゐるのか？
それとも「天地間の不可思議について」といふ
博士論文でも提出したか？

いや、ホレエシオよ、
君はかのワイルドがかつて道破したやうに
舞臺の外ではもう死んでしまつたのではない、
君はなほ我々の間にたしかに生きてゐる、
ただ然し、君はあまりに本當に生きてゐる、
博士になつたり著述をしたりするにしては！
そしてそのホレエシオとは誰であらう？――

ホレエシオよ、私は誰よりもよく君の近況を知つてゐる、
あんな恐ろしい悲劇を見た人が
どうして哲學者になれたらう！
どうして哲學者でゐられたらう！
君は沈默したに違ひない、
博學な饒舌がただの饒舌にすぎぬと悟つたに違ひな

い、
君は哲學者といふ莫迦げた商賣をやめたに違ひない。

この杯の味は自分で知れ

世界の苦い杯を乾さなかつた人に
何を私は語らうか？
美しい戀の歴史を語らうか？
その底によどんだ苦いをりをばどうしよう！
一代の豪奢を極めた富豪の生活を語らうか？
その裏にある苦い惡事をどうしよう！
世にも稀れなる天才の名譽を語らうか？
そのはらはれた苦い犧牲をどうしよう！
幸福に過ぎた一生を語らうか？
その果てに來る苦い終りをどうしよう！
「ああ、あんなに淸く、甘かつた
この世は何處へ行つたのだ？」
そのあざやかな脣も色あせて
くらい眼をして嘆く日の、
その責任を身に引受ける人はない。
世界の苦い杯を乾さなかつた人に
私も語るべきものをもたぬ。
かばかり苦い杯を君はもの欲しさうに眺めるか？
だが君に、誰も眞實の味をかたらない、
やがて現實が來てその杯を君に飮ますまで。

「運命を愛する」（斷片）

死よ、私は汝に感謝する、
汝がもしも無かつたなら、
生はこんなに尊くなかつたらう！
老年よ、私は汝に感謝する、
汝がもしも無かつたなら、

青春はこんなに鋭くなかつたらう！
別離よ、私は汝に感謝する、
汝がもしも無かつたなら、
歡會はこんなに鋭くなかつたらう！
不幸よ、私は汝に感謝する、
汝がもしも無かつたなら、
幸福はこんなに鋭くなかつたらう！
苦痛よ、私は汝に感謝する、
汝がもしも無かつたなら、
快樂はこんなに鋭くなかつたらう！

ああ、このけなげな感謝から
私の「運命の愛（アモオル・ファティ）」が生れて來い、
悲壯な生涯を外にして
何處に美しい生涯があり得るか！……

シルス・マリアの隱遁者に

超人よ、權力意志よ、强者の德よ、
その言葉はかぎりなく高く響けど、
されどああ、弱し、弱し、
ケエザル・ボルジア——
汝はかくのごとくに談らざりしを！
ニイチエよ、ああニイチエよ、
我れはよく知る君の嘆きを、
はにかみて、その戀をだに
その輕蔑したる「女」のまへに
うちあけざりしその心を——
君にとりて、そはあまりにも卑しければなり。
超人よ、權力意志よ、强者の德よ、
そはつひに賤民のなす厚顏無恥の德！
精神上の貴族はただ滅亡にのみよく適したり。

ニイチエよ、ああニイチエよ、
惡魔をよそほひし好人物よ、
君の哲學はただ君の性格に對する抗辯(プロテスト)のみ。

惡意なき眼よ

眼(め)よ、眼(め)よ、惡意のかつて輝きし事なき眼(め)よ、
そは空虚なり！
その中にかつて生の光は燃えたるか？
我が眼よ、空虚なる眼よ、
汝を善良といふとき、
見よ、すべての眼は笑へり――
見よ、その狡猾なる眼を！
彼等の眼はあらゆる不德と生命とに輝けり――
惡意の讃美者、
汝は彼等の笑ひにうかぶ
惡意をしづかに堪へ忍ぶべし、
そはおろかなる善良に
惠みふかき神が與へし賞與なれば。
眼よ、眼よ、惡意の代りに涙ある眼よ！

敵

かなしみの我れをあふれて
よそ人の胸をも浸す、
我が友のふかき愁の
その上になほもかさなる。

我れを知り、愛する友を
いくたりか我れは持てども、
我が敵の我れを攻むるとき
甦るは我れ一人のみ。

我が敵は我れを饑(う)ゑしむ、

我が敵は我れを死なしむ、
さはれ敵の勝利の底の
そのにがき惱みはいかに。

夢さめて夜半の寢床に
彼やいかに我れを思はん。
若し彼に何事の惱みもなくば
さこそとて笑はんとぞ思ふ。

或る友情から

汝が持ちものを我れに與へよ、
かく友は我れに求めき、
友情のしるしを求むるらんと
もろ手にもちし最後のものを、
愛とまことを、
我は素直に差出しぬ。

彼は笑へり、——
笑ひ嘲りて、彼はそを地になげうちぬ、
汝れは愚かし、また貧し、
彼はかく言ひて、
他の友と共に我れをそしりぬ。

まことなり、彼の與へしそのものぞ
我が持ちものには過ぎたりき。
思ふに彼は我が死せしのちも我れをそしらん。
ああ、世界を嘆け！
人はあまりに賢くなりぬ！

友情のをはり

人生のすべての美しきものは
かくも苦々しき終りを來す。

樂しき生ののちに死の來るごとく、
宴樂ののちに悔恨の來るがごとく、
嘲りと憎しみと苦き誹謗に、
あはれ、美しき友情はかはりぬ。
夢みるがごとく醉へるその眼に
君子と見えたりしものは卑しき小人にして、
寶石を見出でぬと喜びし口は
たのみがたなき人心よと呟くのみ。
このとき、昔のこころよき團欒を顧れば、
曾てかくも親しみしことのうら恥しく、
罪の如き痛みと苦々しさを覺ゆ。
人生のすべての美しきものは
かくも苦々しき終りを來す。

不幸な人間の哲學

不幸な人間の哲學――

ああ、それはどんなにあはれなものだらう！
マアカス・オオレリアスの賢い言葉も、
ショオペンハウエルの幸福の教も、
不幸な人間の慰めであるかぎりは、
ああ、それはどんなにあはれなものであらう！
不幸な人間の哲學――
このがらくため、それは不幸の上塗になるだけさ。

トリスタン

我に擇ばれ我に滅ぼされむ………

ワグネル「トリスタンとイソルデ」

その愛するものを滅ぼして
愛ははじめて滿ち足らふ、
「おまへを愛することにより
愛するおまへを滅ぼす」と――
イソルデの言葉、イソルデの戀！

愛のはげしさは憎みに似る、
愛することは――常に滅ぼすこと、
されどこればかりは愛する者の知らぬこと！

トリスタンよ、トリスタンよ、
死にいたるまでの愛はいかに身を燃やし
誘惑に身をまかすことはいかに甘いか、
この二つを知つたとき――
愛の哲學が何の用がある？
そもそも生きてゐる事に何の必要がある？

生の言葉

一

ああ汝等、何ぞ汝等は愚かなる！
汝等は言ふ、酒は罪惡の源泉なりと。
世の罪惡となづくべき罪惡はみな
ただ醉はざるもののみこれをなすを知らずや。
それをも悟らず、得々として酒を貶す、
ああ汝等はいかに醒めたることよ！
永刧に醉ふこと能はざるもの、
酒は汝等の汚れと僞善とを洗ふに堪へざるべし。

二

生きよ、
この生を肯定せよ、
あらゆる詭辯と思辨とをもつて！
心の底の奥底に此の生の無意義を感じつつも
全力を擧げてそれを自分に押しかくし、
眞實な止みがたいこの生の要求が、
なんであやまりであるものかと、
確信をもつて、斷乎として言はねばならぬ、
萬人に向つてではなく、
ああ、ただ自分を說得するために。
人間のすべての言葉は、ただそのためにある。

アダム以來の人間の、――これぞ不文律。

三

生とは？
不斷の戰ひ、不斷の進擊、邪惡の勝利！
（その邪惡こそは人生の至上の善ぞ）
あらゆる德の說教が何の役に立つ？
滅亡を拒んで、なほ德が世にあり得るか？
さればただ生きよ、邪惡に、厚顏無恥に――
しかも、しかも、遂ひにその生は終る……
いかに根強いエゴイズムをも
ああ、死はただ一擊の下にほろぼし去る！
いかに特別製の厚顏無恥でも
死の神にむかつてはもう駄目だ！
死とは？
無言の說教、無言の審判、有德の勝利！

四

「生は死と結ぶことなく、
死は生に迫らぬならば、
すべての矛盾は影を隱し、神の姿は現れて、
不變の眞理、不滅の光明は輝くだらうに。」
「いな、生と死を離す何ものもなく、
すべての救ひのないのにも絕望することなく、
この恐ろしい眞實を直視するだけに勇ましい心にとつては
神も、永遠も、ただ空しい言葉にすぎぬ。」

詩人より批評家に

我れ愚かなる者の常に開ける口を憎む。
汝等の吐く息は世界を暗うす、
汝等の吐く言葉は人間を暗うす。
「汝等の口もて開きし門を我れ何處に建てしや？」
ああ汝等、目のあるところにもなほ口を持つ者よ、
かつて詩人キイツを殺せしは汝等なりき、

思ふに汝等は最後の詩人を踏み殺さん。
かくて此の古き世界は幕とならん。
愚かなる者よ、汝等は常に勝利者なり。

復讐を誓へる詩人への忠告

汝れを嘲りそしりたる者の言葉を
不朽の詩句にして世に殘さんは、
世にもむづかしき事なれども、
またいと皮肉なる事ならずや。
されどその者の名をかかぐるは、
いと易くして、いと間の拔けし事と知れ。

備忘錄

一 理想家の碑銘

彼はこの人生をあまりに愛しすぎた、
人生に堪へることが出來なかつたほどに。
彼はその少女をあまりに愛しすぎた、
彼女を妻とするに堪へなかつたほどに。

詩人

いと熱き戀を覺えて、その戀人と相かたるとき、
しかも、汝ニコラウス・レエナウよ、
汝は、永刧の世界の苦みを忘れ得ざりき。

疑問

わが胸の焰の中に、汝の涙は落ちて消ゆ、
この焰消えし時、汝の涙はなほ盡きざるか？

死の臭ひをもてる眞理

知られざる者は尊く、敗れたる者は正し、
歷史の行間は明かにそを我等に談る。
されどこの眞理は餘りに死の臭ひをもつ。

箴言

智にして喜び薄からんより、
食ふものの旨(うま)きをば樂しめ。

道徳

妻を買ふものは君子なり、
娼婦を買ふものは蕩兒なり。
——道徳はかく定めたり。

天國

汝等天國を求むるか？
高く正しき人の四圍はこれ天國なり。
見よ、基督の世に在りしとき、
基督の行くところは悉く天國となりき。

基督を描かんとする畫家

基督を見ずして基督を描かんはかたし、
さらばいかにして我等基督を見るべき、
ただ十字架を負ひて彼に從ふものこれを見ん。

生命の祝福

「悲みは人を賢くす……」
されど賢くなりしものは死者に似たり。
智慧の木は呪ひの木にて、
生命(いのち)の木にみのる罪の果(み)のみひとり甘し。

素食

幸福よりも不幸が人間を高める、
喜びよりも悲みが人間の心により旨(うま)く味つける。
——然し、人間はそれを欲しない！

モラリスト曰く

最も美しい詩が最も卑劣な心からでも生れること、
ああこの呪咀(のろひ)よ、——
このにがい眞實を知つてなほかつ
誰か藝術をたふとぶものぞ！

絞首臺の上にて

この邪惡なる人間に、
より邪惡なる人間は絞首臺を贈(おく)りぬ！
ああ泥坊よ、汝の邪惡のけちなりしこと、
これぞ汝が犯せる唯一の罪惡なりしぞ！

かの露探、前田清二とおなじやうに。

遲かつた！

人の心のはじめの呪ひ――
このいまいましい「遲かつた！」が
アダムとイヴのはじめの苦痛、
心を燒き盡くすやうなこの後悔が
人類のはじめて知つた惱みであつた！
見よ、その日その日をだまされて
母の胎から墓の闇まで五十年、
うつかりほつき廻つて來たのちに、
臨終の床にはじめて絕望の聲をあげる、――
「なぜ俺はぼんやり生きて來たんだらう、
俺は莫迦だ、ああどうしよう、どうしよう！」
だが「遲かつた！　遲かつた！」――

一愛國者の叫び

我が日本といふ國はまことに結構な國である、
人間はみな悧巧で、
くだらぬ不健全な考へを起すやうな事はなくつて、
金持を尊敬することを知つてゐる。

小學校の生徒の作文にもあるやうに、
萬世一系の　皇室を上にいただき、
世界の一等國、東洋の盟主として、
さすがの獨逸も日本の名を聞くとぶるぶるふるふ。

我が日本といふ國はまことに結構な國である、
この國に生れてゐながらまだなんだかだと
不足をならべ立てるやうな非國民は
獨探にして、なぐり殺してしまへ、

失業者の詩

人多し！　人多し
世をひろしと云ひしはいつの世のこと、
などかくも人の多きや？
ただ增すばかりなるは地獄ならずや。

人多し！　人多し！
子を生むことを罪せざる世は
人の人を食ふをも罪せざるか？
ああ、世のをはりの遲きは罪の重きなり。

人多し！　人多し！
人の仕事を奪ふためにあらゆる力を費せば
誰れか、などその業にはげみえんや！
かかる世にありてその業にはげめる人は
しらぬ間にその職を奪はるるなり。

人多し！　人多し！
働けよ、働けよとは金持と博士の言葉、
さらば働くべき仕事を與へよ！
その仕事をも與へずして
なまけ者よと罵るは賢き人の道なるか？

ある對話

「罪に生れて罪に死ぬ
われは一人のわれなれば
すてて去れかし、ありがたき
その說教を耳にいれんより、
まづ一杯の酒を口にいれん」

「ああ、不信者よ、ああ人は

かくまで神を忘るるを得るか！」

「神を忘るるとは何のこと、
もともと神を知らぬ身の
いかでか神を忘れ得ん」

ある時の詩

自分の身體を滅ぼすか、
それとも心を滅ぼすか？
この外には何の救抜もない！
心よ、心よ、我が心よ、
おまへはなぜこんなにも強いのか？
私の身體が歳月に、
あるひは病に、辛勞に、
秒より秒におとろへて
甕のわれ目のはしるやう――
さうしてつひに裂けて砕けてしまふのに
おまへはなぜそんなにもかたいのだ？
いや、いや、心よ、我が心よ、
おまへも痛んでゐる、泣いてゐる、
ああおまへの傷は、かなしみは
目に見えないでゐるばかり、
目に見えぬだけおまへこそ、
おまへのなやみがより深い！
ああ、おまへは疾くに、疾くに砕けてをつたのだ！

「さやうなら！」

「さやうなら！」といふ言葉ほど、
無限を思はせる言葉はない。
すべての美しい言葉のうちで、
これ位わたしの魂を震蕩する言葉はない。

それは厭はしいものが愛すべきものとなる始め、」
醜いものが美しいものとなるはじめ、
悲しい戀が樂しい囘想となる始め、
辛い試煉が尊い經驗となるはじめだ。

友よ、君はわたしを愛するか？
そんならその暖かい愛のうちに、
ふたりは悲しく別れなければならぬ――
永遠に美しい友を思慕せんために。

女よ、おまへはわたしを愛するか？
そんならその溫かい接吻のもとに、
ふたりは泣いて離れなければならぬ――
この美しい「さやうなら」を
最期の時までも味はんがために。

人間が結局美しく愛すべきものであるのは、」
永久に去つて返り來ることがないからだ。

過去が美しくまた慕はしいのは、
ふたたび返すことが出來ないからだ。――
そして、わたしもこの世界に、
美しい、そして悲しい「さやうなら！」を、
また、この世界もわたしに對して、
無限の愛のこもつた「さやうなら！」を――
その時が永遠の生のはじまりだ、
世界はわたしにとつて美しい、願はしいものになり、
わたしはこの世界にとつて美しい人間となるのだ。
そのゆゑに別れの時は遂ひにわたしにも來なければならぬ。

この世を尊くするためにこの世を棄てる、
棄てなければならぬために尊いこの世！
そこに含まれてゐる悲しい矛盾、――
この悲劇的な宿命の中から
わたしは勇ましく叫ばう「さやうなら！」と。

さびしき生活より

（一九一六年——一九一八年）

さびしくも慌しくも半ばすぎしが、
あまりに影うすかりしこの生涯も、
はなやかに美しく終る日あらん、
ねがはくば友よその時、思ひ出でよ、
この歌と、この歌のふかきこころを。

知られざるもの

わが身のうしろに忍ぶは誰ぞ?
わが手をしづかにとらふるは誰ぞ?
わが心を軟かに抱くは誰ぞ?
我はその人を知らず……

朝に來り、夕に來り、
われと孤獨を共にするもの、——
ああ、その人の名は何とか云ふ?
されどその名を知るものなし。

わが聲に我はその人の聲をきく、
その人の眼は鏡の中のわが眼（め）にあり。
こは我なるか? はた我が影か?
あらず、そは知られざるあるものなり——

しかもその人はわが心臟の一室を占め、
その窓によりて歌をうたへり。
人に知られで失せゆくべき流浪者の荒屋（あばらや）になほ、
ああ、なほその室（へや）に住む人あり。

大人びし思ひ

靈はしづかにも我に落着き、
我は微笑して見る、我が憂愁を。
冷かなる心もて、おのが熱き悲嘆を眺め、
今我れはかくもたくみに
厭世家の役を勤むるよとうちうなづきて
かくも微笑するこの心はいかに大人びしよ。

「より深き憂愁により美なる歌を――
かくて詩人はすぐれたるものとなるべし、
安く賣るな、賣るな、汝が嘆きを」と靈は言ふ。
詩人はいまや商人となりしか？
あらず、あらず、そは大人びしのみ、――
我が面ははればれと嘆きながめ、
我が心はうちに笑はんとす。

秋風に寄す

秋風よ、何處より汝は來りし？
我が窓にさびしくも汝は奏づる
我が歌のごとくあはれなる歌を。

秋風よ、汝が息のふるれば
果實はみのりあからむ、
さるになど、我が胸にふれて痛ましむるか？

秋の嘆き

軒端より雨だれの音、たえまなく敷石に泣く。
闇の中に横はりて、頰杖つきて、面を伏せて、」
わが目よりもまた音もなく何物か落つ、
ああこは何ぞ？　秋雨のなげきに、
聲もなき嘆きを添ふるは？
　我が靈も秋となりしか？

秋のながめ

凮よ、吹け、吹け、枯れた木の
枯れた木の葉を吹き散らせ、
我が心にも木の葉はふるへる、
昔の記憶が散りまどふ。

凮よ、吹け、吹け、果樹園の
あかき木の實を吹き落せ、
我より落つる果は小(ち)さく、すくなく、
あだに生きたる幾とせの嘆きのみ繁し。

心の秋にちかづきて、
墓のかなたに夢はしり、
をはりの秋のまたと來(こ)ぬ眺めに
かつて知らぬ冷かなる涙をそそぐ。」

ああ、かつてかくもやさしく我を吹きし凮、
また我が心を醉はしめし秋のながめに、
ほろび行くべきおのが身を、
すでに滅(ほろ)びしおのれをながめ、

いとも奇異なる思ひして、
冷やかに、人のために、我は泣きけり、
漂流の年をかさねて、はるばると歸り來りて
おのが墓を見る人の泣くがごとくに。

憂愁のうちより

鳥の聲も、木の葉のそよぎも、
空の色も、花の匂ひも、
價なきものとなりはて、
幾とせを我はすごしぬ。

憂ひある胸にうつるは
いとふかきその憂ひのみ、」
うるはしき自然のいろも
いかでその嘆きを消さん。

我が青春は我れをすて去り、
我が涙は目盞のうちに乾けり。
かくてなほ我が生くるとき、
ああ、死こそ生にまされる。

涙の谷

喜びの道を行き盡せば、
幸なきものの涙の谷に出でん、
そこにこそ、人は人をば見出でなん、」
そこにこそ、人はいこはん、永遠に。」

今日

「今日」に生くる事を知らざるもの、
「昨日」を追ひて空しく嘆き、
「明日」のために「今日」をいやしむ。
「今日」は明日汝を嘆かしめ、
「明日」はまた遂ひに追ひつかぬ汝を嘲る。
さらばただ生きよ、今日を、今日を。

東京市に神はゐまさん

雨ふれば沼となり、風吹けば沙漠となる
この都さへ樂園と人は思ふよ。
ペンキ塗の會堂より讃美歌ひびき、
ここになほ神はゐますと告げしらす。

さなり、さなり、かくも悲しきところゆゑ
神はゐまさん。神は悲哀を餌となせば。

La vida es sueño.（生は夢なり）

×

その不幸を泣く時あり、
その幸福をたたふる時あり、
あはれその短き生は美しき夢。

×

夢にしてうつつを思へば、
うつつより夢を思へば、
ときがたし、この生が夢かうつつか。

×

我が生はいづくにありや？
ここにあるこれか？　これならば、
こは我が頭腦の考へしものにあらぬか？

×

この生がむしろ死なるか？
かの死がまことの生なるか？
知らずして、知らぬが故に、我もかくてあるよ。

×

一瞬に永遠をとらへしものに、
五十年の夢を何せん、
しかも夢に時間はあらじ。

×

時間と空間との上に、飛翔せよ、我が靈（たましひ）よ。
一瞬に永遠を生き、永遠を瞬間となし、
無限の世を包みし時は、既にその外にあれ。

×

我なくば世界はあらじ、
世界なくば我もあらじ、
しかもなど汝は泣くか？

追憶の戀

靑蚊帳は風にゆらぎて、
その中に我が讀みし書、
その中に彼女の縫ひし着物、——
その書物も、着物も、
やがて用なきものとなれり。
（その甘きささやきをなど
洩らすべき、年へたる今日。）
窓のそと木の葉の上に、さびしき月は
ひそやかに二人をのぞきぬ。

はじめての接吻、——
我は知る、その脣の
いかに小さく、いかに軟かなりしかを。
かたく祕められしこの祕密を
ふるさとに持ち歸りてし
彼女も、ここに我も、秋となれども、
美しき夏の一夜を
忘れざるべし、我も彼女も。

讀書子の告白

書物の中に十年は過ぎたり——
しかも最も惡しき書物の中に！
そは弱き心をより弱くしぬ、
我が最もよき靑春はかくて過ぎたり。

ああ我は書物に讀まれぬ——
されど書物の外に、何か我をば慰めたる？
生活は書物の與ふるものをだに我に與へしか？
汝惡しき書物よ、尙も我を呑めかし！

永遠の嘆き（二つの斷片）

一

最も賢き者もつまらなき最後を遂げ、」
美人の笑ひも消えてあとなし。
ああこの古き感慨の
永遠にあらたなるを、
誰か心に嘆かざる？

春は永遠にとどめがたく、」
命は束の間の輝きのみ。
ああこの古き感慨の
またあらたなるその生を、
誰か心に嘆かざる？

最もうるはしき戀も醜き終りを遂げ、」
うれしき會合(であひ)も悲しき別れ。
ああこの古き感慨の
永遠にあらたなるを、
誰か心に嘆かざる？

生は絶えざる責苦(せめく)にて、
そは死をもつて酬いらる。
ああこの古き感慨の
またあらたなるその生を、
誰か心に嘆かざる？

二

ああ日はしづむ、日はしづむ、
人生の日はいかにうるはしく輝くとも、
つひにはしづむ——しづみては、
天(そら)の日のごとく再びのぼる事なし、
さてその後(のち)は——永遠(とは)の闇黒、永遠(とは)の空虚！

はてなき空虚に
わが魂(たま)をののく!
永遠よ!
おそろしきこの一言(ひとこと)に
命はふるふ!

知られざるものよ、果てなき力よ!
ああ、汝は我をなにゆゑに
この恐しき生のただ中に誘(いざな)ひしか?
しかもまた我身にとりて餘りに大いなる運命へと
恐ろしき死へと我を誘(さそ)ふか?

我を動かすその力、
我に知られざるそのものよ!
——その果てなきにわが魂(たま)をののく!
ああ魂(たましひ)よ、今こそは
裂けて碎けよ!

裂けし胸より

「かぎりなき苦痛の瓶(かめ)と思ひしに、
そは裂けたり、ああ、この胸は!」
裂けし胸より——かくも悲痛にあふれ出づる
この嘆息は、これも詩なるか?

寂しくすぎし青春の名殘を我は惜しむ、
またも得がたきすぎにし戀——
その眼(め)も、その脣(くちびる)も、ああ、我を吸ひとる——
永遠に失はれし者に、ああ何故のこの幻!

失ひてまた返しがたきそのものを、
すぎてかへらぬその過去を、
つひにまた見ることも得ぬ友を
我は求むる——慰めがたき渇望もて!

あまりに自ら恃みしその倨傲を
運命は見のがすことなし。
かぎりなき苦痛に傲りしこの胸を、
無慘にも彼は碎きぬ、ただ一撃に。

裂けし胸より、かくも烈しくほとばしる
わが血、はたして美學にかなふか？
この嘆息は批評に堪ふるか？
知らず、知らねどとむるすべなし。

過去の人

うつくしき少女の涙を、
いつの日かまた見るを得ん！
うるはしき夫人の微笑を、
いつの日かまたも捉へん！

すべては過ぎぬ！
わがために、ああ過ぎ去りぬ！
世界も、夢も……

ああ、あはれなる過去の人、
思出の汝れにのこるも、
そはただ汝をあざけるのみ。

よろこびはすべて滅びて、
かなしみぞ汝れのあるじよ。
ああよしや、なほ幸福を持つもの、
あなあはれ、幸福を失へるもの！

青春を送る歌

ああ我が青春よ、

汝はまことに老年の如くなりき。
一日の憩ひもなくして、日より日に追はれて、
ただ糧を求むるに急なりしのみ！

ああ我が青春よ、
誰か汝を愛したる？　誰か汝を慰めたる？
いとつつましき願ひをも深くかくして、
ただ糧を求むるに急なりしのみ！

ああ我が青春よ、
汝れはかくてとこしへに我に過ぎしか？
うるはしき花にそむきて、暗き小路に、
ただ糧を求むるに急なりしのみ！

ああ我が青春よ、
汝れはとこしへに返る時なく我に死せしか？
生の闇路に我を棄てしか？——さびし、思ひ出——
ただ糧を求むるに急なりしのみ！

憂鬱の牛

胸に充つるこのにがにがしさを、
云ひようもなきにがにがしさを、
（それに對しては未だ一つの言葉もあらず、
我が前にこの感情を味ひし人のなければ）
我は惜みつつ、
くりかへしくりかへし反芻する
我れは牛、憂鬱の牛！

もくもくと、重きあゆみに
いと遥かなる人生の路を辿りて、
かへり來し暗き厩にひとりつくばひ、
この苦しさを、寂しさを、憤ろしさを——
にがにがしさを——しみじみと我れは味ふ。

ああ我が苦痛は我が食餌となりぬ！
我れは牛、憂鬱の牛！

我が生の路のいかに嶮しかりしか、
脊におかれたる重荷のいかに重かりしか、
我れはすでにそれを思はず、
もくもくと、ただもくもくと、ひとりしづかに
かずかずの苦みを反芻しつつ
鳴きもせず、躄立てもせず、ただ眠らんとのみ――
我れは牛、憂鬱の牛！

むかしの夢

網小屋に、網の上に寢て、
海を見て、隱岐の島を見て、
わがゑがきしその面かげを
永遠にとどむべきものはあらぬか？

ふるさとのひと夏ひと秋――
そこにしてわが得たるくち、
そこにしてわがみたる夢、
永遠にとどむべきものはあらぬか？

永遠に去りてかへらぬ
二度とまたかへる日のなき
思出よ――我がなきあとの
墓のほとりに吹く風となりてひくくささやけ！

氷の墓にて

ここに眠る、熱き心は、
渇き渇きて焦げし心は、
太陽に堪へざりし心は、
ああ、青春はここに眠る、――

この氷の墓に。

すべての熱く熱烈に燃えし心を、
無關心の氷は埋む、
老年の氷は！
（時ならずして大人びしこの心を
時ならぬ雪は埋むる。）

小さき苦痛はかたらんとする、
大いなる苦痛は沈黙せんとする、
幸福は醒めんとすれど、眠らんとする
ああ弱き弱き破(や)れし心は、
さびしき靑春の夢と淚は！

幾たびとなき北極光に
なめらかなる薔薇もて飾らるる墓の
なかに憩(いこ)へるさびしきものよ、

つかれたるものよ、さらば眠れよ、
さむる時なく眠れかし、永遠にしづかなれかし。

ああ弱き弱き若き心は
その戀人と――おぼこなるその「夢」とともに、
ここに眠る、世の終るまで、
ああ、靑春はここに眠る、――
この氷の墓に。

秋の歌

一

秋よ、さびしく暗き秋、
しのびやかに我れをおとづれ、
水の如く我が胸に流れ入る秋、
秋よ、汝のために我れ、
いまだ歌はれざりし歌をうたはん、

いな、つひに歌はれざる歌をうたはん。
――これは我が歌なり、秋の子供の我が歌なり。

二

秋はさびしき心のうちに
さびしき歌を夜すがら歌ふ、
軒をめぐる雨だれの音、
戸におとづるる風のささやき、
秋はさびしき我が生に
夜もすがら守唄うたふ、
やさしき母のごとくに
よりそひて、我が搖籃（ゆりかご）に、
秋はいく度かへり來て、またかへり來て、
世にひとりなるみなし兒を眠りに誘（さそ）ふ。

三

音もなく落つる秋の木の葉、
音もなくふるふおとろへし蛾の翼、
音もなく出づる我が嘆息（ためいき）、
ああ、このすべてに、いかにああ死はかくれたる！

四

こぼれ落つる秋の一葉に
天地の祕密も、
人間の運命も、
我が生の深き意味（いはれ）も、
すべてがこもり、すべてが讀まる。

五

水の如く悲を流れ、
我がうへをすぐる秋風、
むかしの夢のきれぎれを
落葉とともに吹きつくるとき、
さびしくも世をばさまよふ
我が胸に、いかなる嘆き。
ああ、つねにあらたなるこの悲みの
落葉の如く我を追うとき、また秋風は
廣き街路の上にして

はからずも我れに吹きたり、
秋風よ、このさびしきものをよりさびしげに
汝が見たるとき、暗き都會のさすらひ人は、
死せりとばかり思ひてし人に肩たたかれて
色かへし人の如くに、
秋ならぬ死せる目に見ぬ風のおもてを。

秋の雨

枯れた木の葉に落ちる雨、
軒端の白い蜘蛛の巣にふりかかる雨、
とりはづされたすだれの上に、
帽もかむらぬ頭の上に、
さては萎れた望の上に、
ああ、雨はそそぐよ。

子爵の邸の塀にのぼり、
無花果の實をむしる書生の眼鏡に、
下から笊を受けてゐる女中の顏に、
「無花果の葉」を互にとつてしまつたやうな
笑ひを見せた眼のなかにさへ
ああ、雨はそそぐよ。

下町の人に出水の心配させて、
胸を病む夫人に惡い夢を齎らし、
若い詩人の年とるぐらゐ、
少女の顏色さへもくらくなるまで、
しふねく、きりもなく、憂鬱に
世界の上にふりそそぐ。

町中の笑ひの中にもやがては來る
悲しい運命の姿を見せて、
喜びの上に冷たく、悲みにここちよく、
寂しいものを更に寂しくするために

秋雨はしとしととふる、
きのふも、けふも。

友のために

「靈魂の秋」の一冊の扉に題して

その美しき夢をとこしへの世に
汝がつなぐとき、汝れは生くるを、
こはすなかれ、砕くなかれ、汝が美しき玉を、
こよなくも生きむためには
避くるなかれ、その苦みを。

永遠はこの「今」にあり

×

一瞬の生の中にして
永遠を我れに思ひぬ、
我が生は永遠の鏡にして、
現在は過去と未來を重ねたる
色とおもへば、——あはれ尊し、この生は。

×

うつくしきこの一瞬に
かぎりなき永遠を汝が生くるとき、
生も死も、すでにあとなし、
そのときぞ、汝れは神なる、
不死の神、至高の神ぞ——その接吻のとき。

墓のかなたよりの詩篇

永遠の愛

愛する人よ、君により
永遠を我れは愛する、
そのさびしき面に、やさしき手に、
我れは永遠のあらはれを見る。

君によつて我が生くるとき、
我が生は墓のかなたの
限りなきいのちを捉ふ。

その永遠の命のために
一瞬の生を替ふるとき、
不滅の瞬間を我が得たるとき、
我れははじめて生きたりと
我が墓の上に記さしめん。
さらば愛する人よ、我がいのちを
君がいのちに溶くをゆるせよ。

不死

君を得ずに生きてあるより、
君を得て死なんとおもふ。
いとたかき譽を得るも
身を墓となして生きんより、

世に忘れられ、沙漠のはてに
ここに眠るとも知らずに朽ちて行くとも、
君とあらまし、君とあらば、
われ等は神ぞ、
うつくしき神と女神ぞ、
ふたはしらの不滅の神ぞ。

かなしき愛

私がおまへのために感じたことを
おまへは私の墓でさとるだらう！
人に忘れられた小さな墓は
道行く人にかたるだらう、
「この下に生の戰ひに敗れたものが、
死の中に勝利を見出したものが、
地上に幸福を求めて見出さなかつたものが、
眞實に女を愛し、愛する女のために命を捧げたものが、
靜かに、幸福に眠つてゐる」と。

道行く人は死者を敬ふ心から、
古のギリシヤの人がしたやうに、
挨拶をして過ぎるだらう。
然し、本當に私の生と悲みを知るものは、
そのために私が傷いたおまへだけだ！
そのために私が命を捧げたおまへだけだ！
私がおまへのために感じたことは、
それは私の生よりも偉大であつた！
私は私の私をばおまへの中に溶かしたのだ、
そして私はおまへによつて生きたのだ。
ああ、それをおまへは悟らなかつた！
私はおまへのために私の凡てを投出して
「私はあなたを愛します！」と
おまへの足もとに跪いて
そして傷いた胸に劍を立てたのだ！
いや、いや、それも私の心のうちでしたばかり。
「私はあなたを愛します！」と

この厚顔な氣の利かない言葉をもつて
どうして私はおまへを傷けることが出來たらう！
そして心の痛みに堪へられなくなつたとき、
ああ私はひとり、たつたひとりで死んだのだ！
そしておまへはあんなにも親しく語つた友達を
しかもあんなにも愼みぶかかつた友達を
なんの故とも知れないで此世を去つた友達を
年へてのちに訪ねたとき、ああそのときに、
私がおまへのために感じたことを
おまへは私の墓でさとるだらう！
そのときおまへのその胸にふるへるものは何であら
う？
ああ、私はそれを知らない、知り得ない！

生の眞晝に

もつとも働いたのちの眠はもつとも深い、

はげしい疲れは樂し眠を誘ふ。
苦しい一日の終りに私は心に告げる、
「心よ、心よ、今日はこれきりだ、
おまへはこれで今日は眠つてよい、
明日の日が來て呼びおこすまで」と。

私がもはや生の鎖を解かれるときに、
私は樂しい永遠を期待して心にかう告げよう、
「心よ、心よ、もうこれですつかり終る、
もう今度こそはおまへは本當に眠つてよい、
もう二度と呼び起す朝は來ないから、
しづかに、ゆつくり落着いてお眠り」と。

かうしてふだん神を信ぜぬ身ながらも
ただ何とはなしにつつましい祈りをあげて、」
眠る氣持は、どんなに樂しからう。
一日のたそがれさへもさうなのだから、
一生の生のたそがれはどんなだらう？
ああ、そのために私はもつと、もつと懸命に働かう。

泣き笑ひ（一九一四年―一九一六年）

このをかしな歌の中になほ
私の眞面目な惱みがある。
私の笑ひを諸君は泣くか、
諸君が笑へば私は泣く。

詩人は痴人

詩人は痴人、
人生の道化者、
痴人の自負、
痴人の愚痴、
道化者の踊り、
道化者の涙、
――莫迦らし、莫迦らし。

詩人は奇人、
世界の微塵(みぢん)、
歌うたふ塵、
空虚な誇り、
びつこの思想家、
めくらの見物、
――莫迦らし、莫迦らし。

愛する詩人のための戯詩

ヹルレエヌの頭を鴉がほじる、
これはたいさう大きな旨(うま)さうな柿だわいと
鴉が、眼のぎよろりとした惡魔がほじる、
そこでその痛さにたまらずヹルレエヌは
いきなり酒場へ飛び込んでひつかける、
快樂と苦痛とからしぼり上げたやうなアブサントを！

——ああ、かあいさうなヱルレエヌ！

道化者ヨリックの告白

「幸福が遲く來たなら」と
私は昔からうたつたが、
幸福はやつぱり遲く來た。
「詩は豫言だ」と私は言つた、
それもやつぱりそのとほり。

私が妻帶したのちに
第二の我が見つかつた、
あのギリシアの生んだ一等えらいやつ、」
アリストファネスの言つたやうな
自分の半分が見つかつた！

ああ、このいまいましい「遲かつた！」が
どんなに人を殺したか、
どんなに不幸をこの世に齎したか、
その研究は哲學者、
その實驗はこの私！

だが待てヨリック、はやまるな、
お前が第二の我と思つたのが、
もしとんでもない間違ひで
どんなにしても合はなかつたらどうするか？
はい、それでこそ、私らしいぢやありませんか！

どうせ私は道化者、
退屈してる人達の退屈ざましに慰みに
もつと、もつと生きながらへて、
どこまで逆(ぎやく)に行く運命か、
とんづまりまでごらんに入れようと、

さうも思ひはしたものの、
ああ、その惱みと心配に
心が破れた、まふたつに！
もう駄目だ、――ところでどうだらう、
これが一層人を笑はせる――

してはならぬ告白

友よ、私を微笑して、私を愛せよ。
私は可笑しな男だ、また氣の毒な男でもある。
私は狂人だ、けれどやさしい狂人だ。
私は皮肉屋だ、けれどただ自分にばかり。
私は暴君だ、けれどただ自分にばかり。
私は嘲笑する、ただつねに自分自身を、
打ち碎く、ただ自分自身を。
世を憎むまへに自分を卑しみ、
運命のむごい手荒な折檻にも、

なほその罪の深くして、罰の輕きに當惑する。
二なき友よと許し合つた友に嘲弄されたのも、
自分の罪の一つに數へる。
卑しい性根は承知のうへで女を慕ひ、
それをば戀人と呼ぶにもその分に過ぎるをおもふ。
年上の氣の利かない女を自分の妻と呼ぶのさへ
身の程知らずな事だと思ふ。
また莫迦者と自ら呼ぶを喜び、
單純な男と人に呼ばれて雀躍し、
憎まれ、嘲られて、その敵を反つて懷しみ、
暴君の鞭に接吻し、惡人の陷穽に落ちて、
彼等の尙ほ自分を棄てぬ事を喜び、
薄運をひそかに享樂し、
運命の道化役なる自れの澁面を觀ては樂しむ。
友よ、私が自分に與へる低能兒、莫迦、とんちき、
好人物なる名前は「巧みたる假面」でない、
また「おのが聰明を衒ふ反語」でもない、

「四圍の眼を恐れて强ひてする轉倒の見榮（みえ）」でもない、
それは實に、奴隷の快樂であつて、
またマゾフィズムの一種かも知れない。
ここに於て、無神論者は基督の教へに近づき、
ニヒリストは人道主義の使徒となる。
こんなやさしい狂人を、諸君は尙は憎まうとするか？
いや、憎まれるのは嬉しい事だが、
憎むに當らぬ道化者、微笑して愛せよ、友よ。
かう求めるのが矛盾ならば、またそのために！

悲しいユウモリスト

昔むかし、プロメテウスのしたやうに、
一等えらい藝術家は「憂愁」の像を造つた、
その土を死海の底からすくつて、
指をふれただけでもこはれさうな脆い像を。
「これに我が世界の苦痛を注ぎ込み、
乾くことなき眼を與へん。
若し世に笑ひの數の增えなば、
これを碎きて、水もて溶き、
涙なき人にこれを呑ましめよ」
天上のロダンはかう言つて、
この像を地上に送つた。
「憂愁」の像は世界の苦痛に泣き、
「笑ひの數の、など涙の數にまさらざる、
笑へよ友」と滑稽きはまる滿面しては、
碎かれる日がおそいとて、
神を大層うらんだ――とヨリックの話。
――ああ、かあいさうなヨリック！

でたらめ　一名、世界の不運

おふくろがおれを生んだ日、
世界は「しまつた！」と（悧巧者なら）言つた筈。

かうして世界の不運ははじまる。
この時から涙の價は下落した。
この時から神の攝理は怪しくなつた。
この時から富の暴力は加はつた。
この時から女は惡魔の手先きとなつた。
この時から理想は莫迦げた夢となつた。
この時から地球は無益に廻轉する。
この時から世界の頭は苦勞の白髮に白くなつた——
世界に「頭」があるものなら。

勞働者の對話

若い勞働者

「かういふ暑い日にや仕事なんざしたくねえや、
一度やそこら食はなくたつて、家で寢てゐたいや、
然し餓鬼の二人もあつて、から米が高くなつちや、
三度が三度食はずとも働かなくちやならねえ、
今更嚊なんざ持たなきやよかつた！」

年寄の勞働者

「こぼすなよ、お前なんざまだ二人だ、俺を見ろ、
四人も抱へて、それに嚊が病身と來てらあ、
俺はいつもから諦めてるよ、人が一人前になると
苦勞と心配の海に泳がなきやならぬものだ、
手足は働くためについてるんだ、貧乏するなあお前の
因縁だ、
驚くこたあねえ、水と天道樣はついて廻る」

若い勞働者

「だつて一人なら呑氣だぜ、米がいくらしたつて、
自分だけ食はなきや稼がずにすむ、家内持だとさうは
行かねえ、
どうせこちとらは嚊なんぞ持てる分際ぢやねえんだ、
だが嚊でも持たなきややつて行けねえ、それに始めは
俺だつて
共稼ぎをしようと思つてたんだ、それが一年すりや

餓鬼を生んだぢやねえか、俺は餓鬼が出来るなんて事は
考へて見た事もねえんだが、くそ忌々しい……」

ブックメエカアの悲運

人はみなその最も恐るるものに出遭ふ。
我は我が最も恐れし運命に遭へり、
我はブックメエカアになれり！
「君もたうとうブックメエカアに墮落したね、」
こんな事迄して生きてるのは恥晒しだよ！」と
かの賢き屋根裏の先輩はヨリックに言へり。
世にミゼラブルなるものは多きも
思想商人が最も悲し、
つぎはぎとごまかしとの輕業なれば。
されど心ひそかに、ヨリックの思へらく、
いかにすぐれし詩人も哲學者も
畢竟ブックメエカアの外の何ものぞ？
すべての哲學體系はつぎはぎの極致、
すべての著述はごまかしの產物ならずや、
人間のする事はみな不合理なれば。
いな、さらにこの莫迦げたる人間を、
この滅茶苦茶なる世界とよぶ書物をば、
つくり神こそ、最大のブックメエカア！
その神こそは、首をくくつて死ぬべきなれ！
　この世をつくりし神はたしかに無責任、
　無責任なるこの書物をば、
　まじめに讀むな、ヨリック、
　泣くな、泣くな、ヨリック。

好人物の死

Yes, Yes 何でも Yes で通したものが、
人にむかつて曾て一度も No の言へなかつたものが、

つひに人生を否定するやうになつたのは、
すべての Yes をたつた一つの No でもつて
帳消しにしてしまつたのは、
をかしい事だが、もつともだ！

人間 二篇

×

人間は常に自分に似た運命を求める、
ルイ十六世はヒュウムの英國史から
チヤアルズ一世を見出した。
どんな孤獨の好きな厭世家でも、
書物の中に自分に似た先人を求める。
人生の中、一等貴いものは道連れだ、
戰爭で死ぬのがさして苦痛でないのは
澤山道連れがあるからだ。
ああ人間は何と云ふ社交的動物だらう。

×

人間であるのは悲しい、
若し私に我儘が許されてゐたなら、
自由意志と云ふものが實際あつたならば、
私を造らうとする神の前に進み出て、
人間にしないで草にして下さいと言つたものを。
草なら呑氣だ、何も考へないから。
だが造つて貰つてからでなければ人間は
神の前に進み出て註文する事が出來ないのだ。
人間であるより悲しい事は地上にない、
智惠の實を食つたアダムの罪を
限りなき世までも償はねばならぬ故。

本當をうたつた詩

輝きにほふ世界と思つた此の世界は
暗い牢獄(らうや)に過ぎなかつた。

人の心を純化するものと思つた藝術は
人間の思ひ附いた一等惡い洒落だつた。
美しい天才かと思つた自分は
醜い道化者に過ぎなかつた。
ああ、このあさましい現實に
十分堪へしのんで行くためには、
どれだけの厚顔、どれだけの鈍感が要ることか！
あいにく、それを自分は持合はさない、
――これが本當をうたつた詩だ！――

ノオトよりの斷片

（一九〇九年――一九一八年）

心おぼえに書きとどめたる
束の間の心のゆらぎ、
あつめ來て、詩となづくるを
あつかましと、人よ、とがむるな、
かかるフラグメントにこそ、まことはこもる。

×

ちりくる四月の花を見るとき、
コンヴェンショナルな悲みに襲はる、」
すたれたる悲みをまたも悲む。
ちりくる四月の花を見るとき、
春のなかばにして秋の悲みを知る、」
美しきものの短命をさらにさとりて。」

×

ひとり寢のせまき青蚊帳(あをがや)、
癒えがたき嘆きをつつむ。
かぎりなきさびしき生を
もだしつつはこびゆく時、
ひとり身のなげきの床は
夏の夜も冬のここちする。

×

エテルカに

身をくるしみにゆだぬるは
ああ、ただ一人(ひとり)のあればこそ。
ひろき世界に一人のみ
我れを涙にひき入るる。

×

人の心の沙漠のなかに
花の咲く日はいつだらう？
まことの愛が

むくいられる日はいつだらう？
あゝその日こそ、
はじめて生きる價値がある。

×

書棚のうしろでなくこほろぎ、
寢もやらで、今夜もひと夜、
ああ、私の心は何をおもふ？
やつぱりあのこと、あの人のこと。

×

老人のための子守唄

ねむれ、ねむれ、疲れた人よ、
おまへは十分はたらいた、
もう眠つてよい、眠つてよい、
それがはたらいた報酬だよ。

×

影のごとく我れは生きたり、
死は我れにまことの形をあたふ。
我がこの世より去りしとき、
人はよりよく我れを見ん。

×

小さき悲劇

雜草の中によわよわしく菫はさきぬ、
そは荒き手につまれて萎れぬ、
ただそれのみ——
幾千度となくくりかへさるる女の悲劇。

×

青ざめて、また靑ざめて、
瘠せはてて、衰へはてて、
墓場より迷ひ出でし人のごとく、
無人島よりかへりたる人のごとく、
市街を行けど、裏道を行けど、
ゆきずりに我れをながめて、
あはれよといふ戀の道知る女もなし。
げにここはフィレンチェならねば、

げに我れはダンテにあらねば、
いと卑しき市人は笑ひて見送り、
いと小さき詩人は嘆きてのがる。
……………………
光にそむきて、我れは色なき生を營む、
影もたぬシュレミイルならねど、
あかるみを常に恐れつ、たとへ身に影は添ふとも、
日光のもとに我れ自ら影のごとく、
月光のもとにうかばれぬ幽靈のごとく、
あやしく凄き顔してふらふらとさまよひ行くを、——
憂愁の正しき形は、人よ、この影に見よ。

註。シュレミイルは獨逸の詩人アダルベルト・シャミッソオの小說の主人公。惡魔に影を賣り、そのために苦難を受く。

×

憂鬱の人

我が憂鬱なる面は
世界の苦惱の象徵なりき。
我れをうつせし鏡はその面を忘れざるべく、
我れを傷けし手は我が惱みを免れざるべし。
世界よ、我が面は汝の瞳の中にありき、
我が憂鬱は汝の瞳を充たせり。
さて他日、我が原子の他の形をとりて現れしとき、
彼はその鏡にいとも悲しげなる面を見るべし、
彼は驚きて、そを凝視せん、
その時幸福に醉へる彼の心は
なにとなき恐怖をおぼえ、
憂鬱は彼の面に影をささん、——
世界の惱みを彼は見ん、彼の面に。

×

酒よ、なんぢ愁を燃きつくす火よ、
我れはささげん青春を、この愁ひの時を、
汝のために、汝の燃料にこはふさへり。

×

醒めたるホメロスたるを得ぬもの、
せめては酔ひ狂へるホメロスたらん。
美しく冷たき徳をたたふるを得ぬもの、」
せめては熱く濁れる酒をたたへん。

×

ひとり苦み得れど、
しかも楽とともに樂むあたはず——
永遠の苦難のためにつくられしこの
おろかなる性格のいかに厭(いと)はしきよ。
あはれ、汝が生きんそのときこそ
汝は汝を殺さざるべからず!

×

シルレルに寄す

くされ林檎の香を嗅(か)ぎて
君が心の天翔(あまかけ)るとき、
われはこの身を紙となし
君が机にのらましを、
あはれ、わが Schöne Seele(シヨエネ ゼエレ) よ、
君が心の理想をば
めぐめよ、われに、わが胸に。

註。シルレルは腐りし林檎の香を嗅ぎて感興を喚びしと云ふ。

×

風は世界の隅を吹き、
人の心にかなしみを
鳥の心に恐れを蒔きて、
風は心の隅まで拂ひて、
人の心より鳥の心へ出ては入り、
かたみの靈(たましひ)を結べども、
人も知らず、鳥も知らず……

×

空より落つる雨の一粒一粒に
こもる魂(たましひ)——
屋根に落ち、木の上に落ち、

溶けて流れて、川となり、海にそそげば、
その一粒の魂は海一面の魂となる。
一人の人間の魂は全世界の魂にて、
一筋の髮にやどれる魂は全人類の魂なれ。

×

未だ生れざる天才のために、
未だ咲かざる薔薇のために、
未だ吹かれざる笛のために、
未だなりたたぬ戀のために、
未だ流されぬ涙のために、
我れはうたはん、我が歌を——
未だ世になきもののため
うたふはいかにふさはしき、
未だたたへられざる我が歌を、
未だ知らざる我が歌を。

×

フロオレンス・ラバディイの死

いかばかりわが愛せし人、
わがさびしき生活をなぐさめし人、
花のごとくなりし美しき人は去れり、
おもき轍(わだち)は君を轢きたり——
君がもてりし美しき戀、たかき望も、
稻妻のごとくにいち早くそは碎きぬ——
さびしかりしその面影の、
けふの日を示せりしことをけふぞ悟りて、
運命のあやしき法則(おきて)に恐れまどひつ、
さはれわづかに慰まん、君が名のより美しくわれに響くを。

×

たのしき夜をもちきたすゆゑに、
ただそのゆゑにのみ我れは晝を愛す。

×

まつりの後の花環

青春の祭ははてぬ、

さわがしき歌も消えさり、
わが愛のうぢ神の社(やしろ)のまへに
紙くづと木ぎれぞ惑ふ。
翌日の萎れし花環、
きのふの薔薇よ、
今日(けふ)の日に汝れを抱くは、
他人(よそびと)にすてられてわれにかへりし
はつ戀の人を抱くがごとし。
かき抱き、褪せし香(か)をかぎ、
はてもなき涙もてしとどに濡らす
まつりのあとのこの花環を……

×

しづめ、しづめ、おお太陽！
飛び去れ、飛び去れ、おお小鳥よ！
消えゆけ、消えゆけ、樂(がく)の音(ね)よ！
萎れよ、萎れよ、薔薇の花よ！
美しきものは滅びざるを得ず、
いな、滅び去るもののみが美しければ——
あやしきは、げに、この世の法則(おきて)
死なざれば人は生くること難し……
美しく生くることかたし、死のあらぬとき！

×

若き心は何をか思ひし——
神を呪ふと、
かの高く据はれる首に斧いるるとを
世に足らひたる歡び(よろこび)と思ひき。
若き心は何をか思ひし——
美しき人を慕ひて、
その人のまへにうちひざまづき、
愛を告げつつこの胸を刺さんと思ひき。

×

我が詩集にしるさんとて

いろいろの美しい日の記念として、
このさびしく淨(きよ)らかな詩(うた)のひと卷——

悲しく不幸な人をなぐさめ癒やし、
幸福な人の心の硬(かた)くなるをさまたげ、
疲れし人に力づけ、思ひあがつた人をいましめる
このひと卷は、うれしくも我か最後(をはり)まで
うつくしくした友だちに献げられてある。

×

「靈魂の秋」を讀みて

わが歌を讀みて涙ながる、——
われいまだなに人の歌にもかくばかり泣きしことな
し、
われいまだかくばかり悲みし人を見しことなし、
汝はその巣を奪はれし燕の屋根にゐて啼くがごとく、
秘密なる風の葉のめぐりにささやくごとく、
いひしらぬ絶望のなかに囚人のなげくがごとく、
かなしくも、かなしくもしらべてき、その草笛を——
されどあああわが歌よ、誰かまた汝をきかん、
げに汝はただわがためにのみあるなれば。

×

涙を糧(かて)とする人に
わが詩はあたふ慰めを、
枕たたきて夜もすがら
かなしむ人に慰めを。

×

わがなやみのいかに深かりしか、
わが死してのち、わが歌よ、
汝(なんぢ)によりてわが手より失はれし人、
わが手に來らざりし人は知らん。
されどそは汝れが力にすぎたるか。

×

沈默はたえず歌にやぶらる、——
かくも寂しき十年のわが生活を
われは嘆き來りぬ、その十年を。
されどのこりしわが歌は
かくも幸(さち)ある十年と、われにささやく。

×

蚊帳はわが嘆きを蔽うて垂れたり、
枕は涙をうくる臺となれり――
そはあまりに狹し、あまりに小さし、
いなわが嘆きの、わが涙の
あまりに繁く、あまりに大なればなり。

×

その最も愛するものに別れを告ぐる
その癒やしがたき別れを、
ふたたび逢ひがたき人に別れを告ぐる
そのしのびがたき別れを、
われは惜む、ふたたび別れに嘆かんために。

×

窓の埃のうす紫に、西日はたゆたふ、
かくもためらふ行く人を、死にゆく人を
ひきとどめよと俗なる人はかたれども、
ゆかしめよ、ゆかしめよ、その輝きをこの胸に、
とこしへに美しくとどめんために。

×

老年の喜び

人若くして死すべからず、
そは人の住むことなくして壞さるる家にも似たり、
人のつまぬ間に萎れゆく花にも似たり、
とつがずして失する美しき少女を誰か惜まざらんや、
よきことをなさずして死に行く若人を誰か悲しまざら
んや。

×

人はかつて死のために生きしことなし、
ただつねに老いんがために生きたりしのみ。
老こそは神の第一のおくりものなれ。

×

老年の讚美

老年を知らずしてこの世を去るは
愛を知らずして去りし者よりも悲し、
まことに青春をすごさざりしもの、

青春を不斷の宴樂と名づけたれども、
青春は禍ひにして老年はその報いなるを、
あしきものは皆ほろびゆき、
よきものはみな實をむすぶ——たのしき時なるを。

×

老年を樂しませんとせば
青春をやぶらざるべからず、
ああ、熱き心の浪費者よ、
髮白くなるまでながらふるな、
若くして美しく死ぬるこそ
きよき詩人にふさはしき。

×

おお秋よ、わが生のみのりの時よ、
おお秋よ、汝がたわわなる實りは
わが惱みの植ゑしものと知らずや、
わが青春の涙のつちかひしものと知らずや。

×

愁あるものの愁をつつむ夜、
おち來れ、おち來れ、わが心のうへに——
そはすでに眠るべきときとなりたればなり。

×

「主よ、われ信ず、わが信なきを助けたまへ」
この憐れなる祈をも基督はききいれたまふ。
幼かりし時、われ泣けば必ず母は來ましぬ、
われ祈らば神も來たまふべし。
かつてわれ饑ゑ渴きて街をさまよひしかど、
いまだ神をば知らざりき。
上もなく不幸なるものと自らを呼べども、
悲みなくして、いかに多くの歲月はすごされけん、
かくも夜やすくねむりうることを悲しむ。
ねがはくはこの救ひがたきものを
その救ひがたきが故に主の救ひまさんことを。

×

一度地にうち倒されずば

人はまことに神を見ることかたし。

×

うつし世に得たりとせず、
しかも神を信ぜずば、
ああ我れはいかになるべき。

×

ツルゲエネフの肖像に

白頭の賢き人よ、
露西亞が生める憂鬱の影、
汝がをしへし眞理こそ
我が心臓に、とこしへに響きわたるを、
あやしくも人はかへりみずして
汝を低く、低く、貶(おとし)めぬ、今日(けふ)。
さればぞ我れも、我が詩もここに、アナクロニズム！

×

死の讃歌

渇けるものの一杯の水を求むるごとく
我れは自由を求めき、
我れは平等を求めき、
我れは安息を求めき、
死はそのすべてを我れに與ふ。

×

さびしきものの慰めに
さびしき花はふさへるを、
かなしきものの友だちに
かなしき人はふさへるを、
胸にひめたるくるしみを
かたりあかさん人もなく、
きのふは野邊に出でて泣き
けふは窓邊にさしぐむと
君が言葉のかなしさに、
われも嘆きをわかたんと
さびしく笑みて手をとりて、
かくて夫と、妻となり、

高ねの花も野の花も
おなじ終りはもろかるに、
摘みすてられし一輪を
ひろひてさしぬわが瓶に。

×

人の群れに行くとき、
我れは一個の痴漢なり、
彼等の嘲りは悉く正し。
されど、野に行かば、
我れは夢の世界の王者なり、
山も森も喜び迎ふ。

×

夜は我れを晝よりすくひ、
悲みは我れを放心より、
病は我れを勞働より、
死は我れを生より救ふ、

×

世のかたぶくを我れは見たりき、
我が物狂はしき衰へのうちに。

×

我れは途上常に多くの寳を失し、
かへつて多くの傷を受く。
我れはあだかも寳を撒くべく町に出で、
傷くべく人の間を行くものの如し。

×

空には星のかず、地の上には我が戀もあり、
喜べ、心よ、樂しめ、眼よ、幸福はここに横はる。

×

やみ間なく、時の車のめぐるにつれて、
夢はつひにさめざるべからず、
人はつひに老いざるべからず、
かの人の髮白くなり、
我がこころ石の如くならん。
さらばただ今こそは、我等の時ぞ、

今のみが生くべき時ぞ、青春を樂しまんときぞ。

×

戀はよきをとらずして、近きをとる。
戀は博奕（ばくち）のみ、しかり、世の常の戀は。
されど近きをとらずして、よきをとる時、
偶然をとらず、必然をおもふの時、
その戀は天上のものに至らざるべからず。

×

淚にしめりしパンならで
いかでわが靈（たましひ）を滿たすべき、
この悲みにみつる世にありては。

×

夢は黃金時代の唯一の遺物——
夢は美し——
されどその破るるは惜しむべきなり。
げに、かくばかり脆きものなし、
げに、かくばかり手にとり難きものはなし。
されど知れよ、その破るるがゆゑに、
手にとり難きゆゑに、夢の美しきを。

×

奴隷の歌

もろもろの才たかき詩人は
うつくしき戀をうたひぬ、
人はいまそのなかに奴隷の歌を、
日毎に重き荷をになひつつ
生くるにあらで生きさせらるる
黃なる黑奴（ニグロ）の呻きの聲を、
しかもつひに運命に屈せんとせぬ
小さきチタアンの大いなる嘆息を聞く。

×

絕えざる歌のながれの末に
人はいと拙（つたな）き、さはれ痛ましき
一ふしを見出でぬ——
それこそは我が歌なれ、

若くして老いたる日本人の歌なれ。

×

桐の葉は夜の空に黒くをどれり、
悲しき運命の住む小さき家の上に
悲しき歌を夜すがらうたふ。

×

家なき人に自由あり、
國なき民に自由あり、
晝間は雲とともに行き、
夜は星かげを見てねむる。
まことの生を送るべき人には
ただ野と森と海とあれ。

×

われは幸福の色盲なり、
にごりなきその青きいろ——
天の青、海の青、
さながらに見ることかたし、
わが心よりわきあがるくろき煙の
そのきよらけき色をかきにごすため——
われは幸福の色盲なり……

×

かしこき人の言葉にはわれ倦みたり、
われは愚かなる人の行ひにこがる。

慰めの國

慰められつ、慰めつ、
人の世は御空に通ふ。
枯木には小鳥ぞならぶ、
荒き世に、飛ぶも憩ふも、
離れざらまし、とこしへに。

「靈魂の秋」

序に代へて

詩は救ひではなくとも
すくなくとも慰めである、
わが貧しい詩もまた慰めである。
多くの人にではなくとも、
すくなくとも自分にだけでも。
詩は自分のための子守唄だ。

前の集を出してから
もう三年になる、
この三年の間に
私の心境は變つた、
いくらかすすんだに違ひない。
私はより客觀的になつた、
私はもはや自分一個には執しない、
私は今ほのかなる光をのぞむ。
私の詩風もここに一轉化した。

この集はその轉成の過渡を示すであらう、
今日の後に、より美しい明日よ來れ。

私は所謂「詩」を棄てたい、
「詩」はあまりによそ行きで、氣が利きすぎる。
もつときぢを出せ、もつとすつぱだかになれ、
その心もて、なほ今日は自らいたむ
なほここには餘りに多くの「詩」があれば、
「詩」のないところ、そこに私の求める詩があれば。

「詩」と「詩人」とに充ち滿ちたこの宴席で、
わが孤獨のみいやまさる。

私はただ眞實に徹せんことをねがふ、
そこに私の考へる詩を信ずれば、
私はより孤獨へとつきすすむ。

友はなし、群れの中には。
わが孤獨のきはまるところ、
すべては、友となる。

一九二二年四月

註。前集は「春月小曲集」、再び詩に還れる動機はその序文中に記す。

眞實の生を求めて

――自分と人との生活から――

月光

驟雨のあつた日の晩のことである。
いつものやうに
寢入る前の讀書を床の中でしてゐると、
ふツと電燈が消えた。
停電だナと思つて、何氣なく眼を上げると、
半ば窓帷を閉いた硝子戸の外につるされてゐる簾越しに、
一條の光が忍びやかに
机の上に原稿紙を白く浮き上らせてゐた。
晝間の眩しい外光を避けるために、
硝子戸の下部に貼り付けた硝子紙の薔薇が二三輪、
丁度水の上を流れてゐるやうに、
霞のやうな輝きの中に仄かに紅く漂うてゐた。
私は今迄知らなかつた美しい畫面をそこに見た。
ああ、こんなに月の光が射し込んでゐたのだナ、
今迄、電燈の光のために
氣付かないでゐた私のまはりには、
こんなにも柔かな月影が、
愛する人の息吹のやうに
こまやかに漂つてゐたのだと考へると、
人間の忘却してゐる時にすら、
やさしく愛撫する自然の慈しみを感じないではゐられない。
一人の不幸な、人生の試みに失敗した男が、
病んで、寂しい田舍に病み臥しながら、
今迄は全く無視してゐた
見馴れた、寂しい顏付をした女から

氣心の變らない愛情のこもつた看護を受けて、
今迄のおのれの夢をあはれんで、
今始めて知つた女性の眞實の愛に感謝するやうに、
この月の光に感謝する。
私は目を擧げて
硝子越しに狹い陋巷の夜空を見上げた、
そこには漸く葉をひろげて來た
青桐の梢のかすかな戰ぎの中に、
まだ滿月になり切らない月が
半ば身をひそめてゐる。
私はぢつとそれを仰いだ、
ああ、靜かな月よ、
おまへのやさしい銀の微笑に身をまかせながら、
かうしてこの姿で、夢の中にまぎれ込むやうな思ひの
　中に
眠らずに明かす一夜の靜かな悅びは、
寂しい私にはどんなであらう。

霧

ああ、今夜の月はひどい霧につつまれてゐる、
なぜあの霧はいつまでもかかるのか、
おれが自分の家にかへるまで
やはりあのままでゐると見える。

いつでも心にはあまりかからぬこのおれが
今日はあの女の兒の言葉が氣にかかる、
「おまへのお父さんは？」とおれが訊いた時、
その女の兒は非常に非常に寂しい顏付をして言つた、
「わたしのお父さんですか？
お父さんはわたしが四つの時、
お寺へ行つちまつたさうです、
わたしのお母さんがさう言ひました、
お寺のお坊さんになつたんだつて……」

ああ、今夜の霧はひどい、
歩けば歩くほど街には霧がふかい、
霧は今おれの家をもつつんでゐるだらう。
おれは行きたい、おれの一大事のために、
三十年を持戒勤行にいそしんでゐた男が
還俗をした、喜んでくれと、
おれのところへ言つて來た時に、
このおれが出家遁世の願ひに燃える、
おれは行きたい、あの寺へ、
千年の法燈今は絶えなんとする寺へ。

妻がどんなに泣いたとて
妻には言つて言ひ聞かせる、
あれはこのおれを行かせてくれる、
この頃おれが讀んで聞かす經典を
あんなに眞實に聞いてくれるんだからな。

だが、子供はそばで無心に笑ふ、
六つになる娘は母親の顏をのぞき、
三つになる男の兒はおれの膝に這ひあがる。
二人は大きくなつて人に問はれたら言ふだらう、
「わたしのお父さんは
お寺のお坊さんになつたんだよ、
わたしのお母さんがさう言つたよ」と。

かう考へると、おれの心に
苦しい惱ましい煩惱の霧が一杯になる。
だが、おれは行かねばならない、
妻を思ひ、かつ、子を思ひ、
出家遁世の願ひに燃える、
この大正十年の秋十月の夜。

雪

硝子戸を、さらさらさらと
かすめるもの、
かすかな、ありとしもないそのおとなひ、
ある夜の團欒に
親しい友の二人三人
うちとけた四方山の話のもなか
ひとしきり笑ひ聲のをさまつたとき、
ひかへめに、遠慮がちに
そと、戸にふれるその指の音。

「おや、雨かしら？」と
今迄一番餘計に話し、一番餘計に笑つてゐた
客の一人が主人の顔を見ると、
「困つたナ」と
來る度び痩せて見える
遠い郊外から出て來る客が、
窓掛けの垂れた窓を見ながら氣遣つて言ふ。
雨にしてはやはらかすぎる、
何處かの子供のいたづらのやうに、
さらさらさらとかすめる
何だらう、その輕い指の音。

その時、玄關の方から
「まあ雪ですよ！」と主婦は叫ぶ、
若々しい少女のやうないきいきしさで……
「雪だつて！」と叫ぶとき
三十過ぎた主人の心にも
十三のむかしの心がよみがへる、
あの故里の白い野原を
小犬といつしよに、騒ぎまくつて
走りまはつたころの鮮しさが……

そしてまた、
話し疲れた客の顏も活氣づいてくる
ああ、何といふ魔力をもつか、雪！

つと立つて、窓をあければ
ちらちらちらと、舞ひつもつれつ
見上げる空は一杯の雪だ！
闇の中からまつしろに果てもなく落ちてくる雪、
春のはじめの雪、慰めの雪！
しばし、その白いをどりを
千變萬化する繪模樣をながめてあれば、
世のくるしみも、惱みもわすれ
むかしの傷も、今の痛みも
人のつらさも、自分の愚かさも
すべてを忘れ、
雪をよろこぶ十三の子供にかへり
平和な氣持に
硬くなつた胸もやはらいでくる、
ああ雪よ、
おまへは何といふやさしい天使だ、
おまへは汚れた心も淸くする
世をも人をもなつかしくする。

「ひどく降りますね
今夜はだいぶつもりますよ」と
遠い郊外にかへる友は
もとの座にかへつた主人を見ながら、
もう覺悟をきめたらしく
じつくり腰を落ちつけながら言ふ。

そのまま話はもとにかへる、
話し好きの客は
のみさしの湯呑みを乾(ほ)して
とぎれた話題の糸をつぎたす、

いつも語つて語り倦まない
道の話……
わが友ながら
何となく有難い心もて
いつも主人の聞く話……
道を求めるこころざし
日ましにまさるこの頃の心もて、
藝術の信と愛とは失はねど
なにか寂しく、たよりなく、
何に救ひを求めむといささか迷ふ心もて、
いつも、しみじみ聞く話、
聞き倦きぬ話……

あまたの話の中の
一つのたふとい話。

才學一世を蔽うてゐる
時の名僧善知識、
源信僧都が
ゆるやかな牛車にめされて、
ある日、朝廷からのかへり路に、
洛陽の町のほとりで
ふと行きあはれたのは
汚ならしい跣足の乞食坊主、
梯子をかついで
すたすたと行く。
おお、あの方こそわしを救うてくれる
あの方こそと、
僧都は顔も輝いて
急ぎ車を下りて、
もしもしと呼びとめて、
どうぞ暫くお待ち下され
たつてお願ひいたしたい事がある、
身は高い位階にのぼり

あらゆる經文もきはめながらも、
この年になつて
今にわからぬ法(のり)の奥、
どうぞ敎へてくだされと
紫衣の身をへりくだつての賴み狀。
しかるに件の乞食坊主は
わしは無學な乞食坊主、
どうしてあなたのやうな
才學秀でた立派な名僧に
お敎へ申すことが出來ようと、
すげもなくふりすてて行かうとする。
その袖をしつかり引きとめて
なほも是非にと
折入つての僧都の言葉に、
いなみかねたか、さすがの乞食坊主も
「身を棄ててこそ」とただ一言(ひとこと)
言ひすてたまま、
すたすたと行つてしまつた。
あはれ、その意味ふかいたふとい言葉!
金枝玉葉の身をもつて
身は一所不住の乞食坊主、
井戸を掘り、道を直し
車の後押しなどをしながら、
世のため、人のため
諸國行脚のこころざしも
世に有難い空也上人の話……

かかる靜かな、しめやかな
親しい友だちの親しい話のうちに、
春あさい夜は更けまさり
窓の外には、しのびやかに
さらさらさらと
さらに靜かに
はてもなく雪は落ちくる……

それはゆうべのことである……

けさ、起きてみれば
ああ、何たる奇蹟！
わがむさくるしいあばら屋も
今朝は、ああ、何たる奇觀！
まるでメエルヘンの宮殿そつくり
何處もかしこもまつ白に
淨く、ゆたかに
飾られてゐる……

銀座のショウウォンドウに見すごして來た
去年のクリスマス・デコレエションを
おくればせに
自然はわたしに見せてくれるのか？……
だが、自然の方がずつと上手だ。

わが家を蔽うてゐる一本の樹の
枯枝もまた時ならぬ春、
犬が來て嗅ぐはきだめも
投げ出されたままの炭俵も
鼻緒の切れた足駄の片方も
みな一樣に白く淨化して、
きたならしいもの、見窄らしいものを
みんな淸らに、なつかしくする
雪は自然のデコレエション、
ああ、いかなる地上の藝術家か
かくもたくみに畫き得よう。

いま、この雪景色をながめつつおもひ出づ、
昨夜の話……
わが心の救ひは何か？
藝術か、藝術をすてたところか？

そのわかれ日に今ぞ立つと
はつきりと心に感じつつも、
しみじみとこの雪をながめてあれば、」
わが詩また
このわれにかくもあれと
慰められる心地する。

雪見にころぶところまでと
口ばかりでなく
ほんとに出かけて行つた
昔の人の風流は、
今の詩人にはのぞまれずとも、
せめては、方一間の庭をながめて
深くも悟れ、自然のこのたくみ、この啓示を。

美しい藝術の衣(ころも)で
あらゆる人生の汚れをも
惡をも、罪をも、不淨をも、蔽ひつつむこと、
かくも淸らにうるはしい業(わざ)、
それがほんとの藝術である。
われらのつたない手の業(わざ)も
このやうにあれかしと祈る、
たとひ三日の後には
消えてあとなくならうとも。

郊外散策

草はみな枯れてゐる草はみな、
日は暖かにてらす日は暖かに。

ぬかるみがみな乾き
ふつくり黑い土くれが、
たまに通つたゴム裏の
空氣草履のデリケエトな斑點を、

また自轉車の輪のあとを、
駒下駄のあとを、犬の足あとを、
粘土細工の繪のやうに
ほんのり見せてゐる路を
スレエト葺きの赤い瓦の
小さな洋館のたつてゐる傍らを
爪先上りのぼつて行くと、
右には小松と櫻の若木のかはいい林、
左にはうツちやりばなしの草地。

樹はみなのびてゐる樹はみな、
日は暖かにてらす日は暖かに。

「あんな西洋館だといくら位でたつでせうね？」
「さうだね、まあ二千圓位だらうか……」
「二千圓……何だか、二千圓ぽッち
すぐ出來るやうな氣がするではありませんか、」

こんなにして歩いてゐると
「大變ゆたかなやうな氣がしますわ」
そりやゆたかでとも、
かうして暖かい日を浴びて
こんなに話しながら歩いてゐるのが幸福なのだ、
せいぜい素敵なお城をたてる話でもしようぢやない
か、
二千圓だらうが二萬圓だらうが
話す分にはかまはないからね」
「全くね、空想にゐがいてゐるうちがいいんだわね」
輕い笑ひをうかべた目と目を見合せながら
こんなに話しながら來かかつた枯草の堤、
「少しやすみませうよ
腰かけるには丁度いいわ」

人ひとり通らない人ひとり、
日は暖かにてらす日は暖かに。

手近の笹をそのほつそりと痩せた手でむしり
こまかくそれを指さきで揉みながら
女はいい氣持で默つてゐる、
男はポケットから卷煙草を出して火をつけて
口にくはへながら
自分も默つて笹をいぢつてみる。
枯れた笹だがむしつてみると
根元は綠にもえてゐる、
もう少しすれば、このあたり一帶が
草いきれする草むらとなるのだ。
そして紅（あか）だの白だのの夏花が咲き亂れるのだ。
遠い丘の上、すぐそばの傾斜地、
ここもかしこも、何々、何々住宅地と標札打つた
安普請の小さな家がたちかかつてゐる、
まだ生活の始まらぬあかんぼのやうに。
「ほんとに靜かでいいわね、この邊は
わたしたちもいつそ此方へ越して來ませうか……」
「二千圓でなく、二十圓の家（うち）にかい？」
たのしげな笑ひ、やさしい目つき。

野はみな家となる廣い野は、
日は暖かにてらす日は暖かに。

夏の夜

轣轆とたぎり落ちる關口の瀧、
眼（め）の下に白く渦卷くその水よ。
話し聲さへ奪（と）つてしまふその音きけば、
心湧き立ち、歌はずにはゐられない、何か、歌を、
「何の歌をうたひませう」
「ロオレライをうたひませうよ」

伴奏をする水の音、關口の瀧、

橋のてすりに兩手をかけて
三人の肩をならべて、醉かぎり、
「歌ひませうよ、ロオレライを」
「あのかなしいロオレライを」

鞺鞳と水音まさる關口の瀧、
青白いあかりをめぐる水の韻、
「わたしの眼には涙が一杯よ」
「わたしも涙が一杯よ、こんなに歌つてたつて
わたしたちの若い命も、美しい誇りも
この水とおんなじに流れて行つてしまふんですもの」

この夜の景色、この思ひ出は
國にかへつて人妻となる日が來れば
「ほんとにあの夜は樂しかつたのね」と
いつまでもいつまでも書きかはし、
互ひに自分たちの良人(おつと)にも話し聞かすであらう、」

純潔の中の純潔、幸福の中のこの幸福を。

美しく渦卷きかへす關口の瀧、
つい瀧の下まで來てくるくるまはる舟の中から
おもしろさうに呼びかける中學生も、
うしろを通る早稻田の大學生も更に氣にせず、
今度はうたふセレナアド、
この美しい夏の夜に。

秋の日の午後

狹い書齋に、朝から默然と端坐して
ペンのみは手から離さず、
身のまはりにはもみくちやにした反古の山、」
書くのも書くのもみな意に滿たず
お茶をのんでは煙草をすひ
煙草をすつてはまたお茶をのむ。

鎖をつけられ鳥のやうに
飛び立つ思ひは、またもうしろへ引き戻される。
いつまでもこれでは果てがない、
たうとうあぐみ果てて、ペンをおき
神樂坂にでも散歩に出かけて見よう、
山本に入つて一杯の珈琲でものんでゐるうちには
何かいい考へも浮ぶだらうと
帽子をとつて、外に飛出せば
外は靜かな秋晴れである。
はや傾いた日影は
石造の銀行の鎧戸にパッとさして、
疲れ切つて戸山ヶ原から歸つてくる
一小隊の兵隊が、農具を擔いで
野良から歸るお百姓のやうな恰好をして、
足並みも亂して行く影を
埃たつ路上に長く曳いてゐる、
ああ、あの一日の調練にがつたり疲れた有様よ！

朝からの甲斐なき苦行——
抑もこれらの苦行には何の意味がある？
ああ、いつも自分の心に潜んでゐるものが
今も自分の心を嚙む。
絶えず內から自分の力をそぎ、重い手綱となつて
自分の心を引き止める、
苦々しい無氣力な灰色のわが懷疑——
「おれは果して藝術家だらうか？」
才なきものの悲しみは自嘲と自卑とをもつて
今日もまたこの街頭を歩む自分を憂鬱にする。
客足さびれた田舍の宿屋のやうに
この頭には待ちのぞむ客も立ちよらず、
入りくるものは地廻りの無賴漢、乞食のたぐゐ、
かしましく、うるさく、跫を亂して
猥りがましい饒舌もて心をかき亂す、
この頭をどうして高くもたげられよう。

うつむきながら歩いて行けば
こんな時きまつてささやく絶望の聲がささやく、
苦々しい無氣力な灰色のわが懷疑、この暗い疑ひ、
「だが、抑も、藝術とは何だ？
この白紙を黒くする技術に何の意義がある？
そのために今日も一日、こんなに惱む
この苦しみは何故ぞ？
かうして空(あだ)にすぎるのではなからうか、わが生涯は、
その肝腎な一大事にはつひに觸れることなく……
無益な努力、何かの錯誤でこれはないだらうか？」

またしても、惡魔の聲……
いや、これこそ神の聲かも知れないと思ふ心を、
その誘(いざな)ひを振り捨てんとするやうに、
つと眼(め)をあげる、その眼(め)のまつかうに
こちらへ一直線に歩いて來(く)る
雲突く巨漢。

その首だけ人々の頭上にぬきんでて
高い額に秋の日を受けた童顔、
何をも見ず、スタスタと
握太のステッキをつかんで、
眼はその身體を打ち忘れて
遠い地平線を高くのぞんで
瞬きもせず。

ああ、わが素朴、熱烈な創作家よ、
「物言はぬ顏」の詩人よ、「血で書いた書」の作者よ、」
わが親しき小川未明氏よ。

小川さんがこの道を日に幾度びも
散歩するのは言ふまでもない、
また、これ迄自分が行きあつた事も度々である。
だが今日の小川さんは
とりわけ親しい氣もちがする、

聲をかけようとて、まづ帽子に手をかけたとき、
氏はふッと氣が付いたやうに
輝く瞳をわが方に向けて
その愛らしい口元に微笑をたたへて
「やア！」と會釋して、
「生田君！　暑いですなア！」と叫ぶ。
その聲には何といふ温かさ親しさ、
ああ、かの人生を彩る黑い悲痛の詩人の聲の明るさ。
「少し遊びに來ませんか」
にこにこして、小さなお辭儀を續けざまにして
やがて別れて行くその姿を
しばし路傍に佇んで、目送すれば、
あだかも鷲のやうに、彼方秩父の山の上高く
入日の光を含む赤い雲をめがけて
そのまま天上さして歩み上らんとするやうに
ましぐらに行く。

ああ、この大家も疲れ切つて街へ出たのだ、
朝からの苦吟に惱み疲れて
靈感の火を喚ぶべく街に出て行つたのだ、
街から街へとさまようて
この人生を黑く押し包むあらゆる不合理、あらゆる暴
虐——
坂道の半ばで無情な馬子の手に亂打されて
身をふるはせて悲しげに低く嘶き
息たえだえの痩馬の苦惱を見れば、
何處で飮んだかぐでんぐでんに醉つぱらひ
濁つた聲で高く笑つたり、左團次の聲色をつかひ、
道行く人の忽ちつくる輪の中で
頻りにおどけ、頻りに嗤はれて得意滿面の
ぼろぼろの着物に細帶しめた人足の姿を見れば、
または自動車の轢き捨ててゆく子供の泣聲をきき
空中の電線に落ちなんとしてかかる工夫の姿を見れ
ば、

弱者と正義との支持者なるわが多感の詩人は
その眼はらんらんと輝き、その胸はふるへ、
激越の情、愛憐の念ひとどめがたく
今や感興油然として湧き起り、
これ書かざるべからず、書かざるべからず、
正義のために、弱者のためにと
かの梢の上の櫓のやうな二階の書齋をさして
ましぐらに歸つて行くのだ。
その二十二三の青年のやうに
若々しい瞳の燃ゆる輝き見れば、
いかなる靈感の火がそこに燃えてゐることぞ、
一秒の時さへも今はもどかしく
ましぐらに歸り行くその巨大なる姿見れば
わが暗く沈んだ心にも一道の光はさす。

書かざるべからず、書かざるべからず、
藝術家の生活は
日々の苦役にして、また日々の享樂、
その惱みの中に慰めあり
その苦樂がただちに自らの救ひとなるは藝術、
これぞ人間の欲望にして、しかも善なるものの唯一、
あらゆる贅澤を捨ててかへりみず
一意、藝術のために身をささげて
十年の苦節を守つて督て動ぜざる
かの淸節の藝術家の精進を思へば、
わが疑ひの暗雲の中よりも一道の光は落ち來つて
銷沈の底なるわが心にも無量の慰めが湧く。
生きるといふ事は果して意義のあることかどうか
それは分らないが、しかもわれわれは
生きねばならない、丁度そのやうに、
書くといふ事に何の意義があるかは知らずとも
書かざるべからず、書かざるべからず。
はきだめにもたまたま鶴が下りてくる事もある、
この荒屋なす頭にも

いかなる天來の妙想が宿らない事もあるまい、
とにかく珈琲でものみながら考へて見よう、
今夜こそ、久しくも行き惱んだ章も終へようと、
われもまた頭を高くもたげて
入日の黄色い光もすでに薄れた街上を
秋風に吹かれつつ、
ひとり飄々と行く。

窓下の水

ふと氣が付けば、もう眞夜中だ、
頭はいたづらに熱して、身うちには漲る疲れ。
あたりはひつそりとして、耳がしんとする、
その中に、微かに、何の囁きか。

人みな寢しづまつたこの眞夜中に、
さらさら、さらさらと、忍び忍んで
ありとしもない水の音がする。
何處でするのか、めづらしいその水の音。
眞夏の砂地を流れる小川のやうに、
涸れて乾いた詩人の頭へと
したたるやうな、微かな水の音。
つい耳元で、ペンとる右手の下でする。

わが家のまもりの樹から落ちた
落葉の下をくぐりくぐつて、
やがては海に入つて潮となる水が、
家のめぐりの溝を流れてゐる。

この貧弱なテノルうたひの息切れに
ピアニストの眞白な指がもどかしく先走るやうに、
耳が痛くなるほどのこの靜けさの中に
溝を流れる水の音がする。

思想の絲切れて、ほつと溜息ひとつ、
親指と中指とで顳顬（こめかみ）を抑へるとき、この眞夜中に、
わたしの書齋の窓の三尺下を
流れる水の音がする。

創作家の祈り

神よ、知られざるわたしの神よ、
わがこの業（わざ）を完（まつた）からしめたまへ、
わが魂をこめ、惱みをこめ、
日も夜も勵むこの業（わざ）を。
神あらば、神よ、この身を助け給へ、
あてのない祈りを祈りつつ
わたしの心は祈りに合掌する、
ああ、この熱望を充たしたまへ。

わたしは燃える、燃えるだけ
わたしは燃え盡き、滅ぶのだ。
滅ぶがましよ、滅ぶを恐れ
永久に火を點じない醜さよりは。
燃えよ、燃えよ、この心、
その一瞬の火花の中に
汝の永遠は閃くのだ、
神よ、それまで消すな火を。

寂しい私

今日も寂しく道を行く、
見知らぬ人の中を行く。
丁度異國の町を行くやうに、
誰れにも知られず、誰れをも知らず、
賑かな町のまんなかで
ひしひしと

世の寂しさにひたされる、
私はこんなにも寂しい私だ。

すべてが私には悲しく見える、
さびれた店さきのお婆さんも、
店ざらしになつた品物も、
それを買つてゐる職人も、
自分の前を行く若い女も、
それを見かへる學生も
自動車の上にすましてゐる紳士の顔も、
すべてが私には悲しく見える。

しみじみと
この人の世の無常をおもひ、
百年の後には
ここに見られる人のすべてが
みんな此の世にもうゐなくて、

ここには
まだ此の世には生れてゐない
われわれの相見ることも
想像することも出來ない人たちが、
このやうに歩いてゐるのだとおもへば、
すべてが私には悲しく見える。

そんなとき
たまたま友達に出逢つたなら、
なつかしさ、うれしさが一杯に湧き上つてくる、
長い旅から歸つた時のやうに
死んだと思つた人と逢つた時のやうに。
また、かうして通りで出逢つたと云ふことが
（このありふれたことが）
再び繰返すことのない
不思議なめぐり合せのやうに思はれて、
その一瞬を限りなく尊く思ふ、

その感動が私には悲しい。

かうした寂しい心に私はなつてしまつた、」
永遠の世界をひたすら望み求めて
つかのまの人生の遭逢を悲しみ、
はかない現象としてうつり消える
われらが生の無常迅速を嘆き、
見るもの凡てに心痛みつつ
今日も寂しく道を行く、
見知らぬ人の中を行く。

これが生命をこめた作品を書き出してからの私だ、」
心をうちこめてわが生を地に刻まんとするに、
かくてはじめてわが影は色を得べきに
こんなにも孤独の思ひ深まるは何故だらう。
ああ、そして、これは何故だらう、
この紗のやうな憂鬱は？

わたしは疲れた

「わたしは疲れた、ねむりたい」
若いときにわたしはかう言つた、
「さあ、二つの眼をお閉ぢ」
やがて死はわたしにかう言ふだらう——

こんなに歌つたその人も、
たうとうその眼を閉ぢてしまつた、
二度と開く日のないその眼は、
二度と開かぬ墓にはひつた。

「わたしは疲れた、ねむりたい」
わたしも今こんなに言ふ、
「さあ、二つの眼をお閉ぢ」
やがてわたしもこんなに言はれよう。

朝鮮にて

雪がしんしんとひどく降り出す朝だつた、」
いやに默つてごろりと肱枕、
この失敗商人はこの色町で
おはぎの餅をこしらへて、
その餅の箱を肩にして
女衆の部屋から部屋へ御用聞き、
今日はぞつこん厭さうに
餅が出來ても起き上らず、
いやに默つてごろりと肱枕、
「しやうがないね、
それぢやおまへが賣つて來い、
そんな本など讀んだとて何になる、
一つでも餅を賣つて來い」
から母親にきめつけられて、
行かねばわるし、行きたくはなし
ぐづりぐづりとしてゐると、
「そいつをやつたとて餅が賣れるか、
餅を賣るより、少しでも
何か仕事を見付けて來い」
この父親のいきなり怒鳴つた聲を聞き、
すつかり少年は憤慨して、
赤い古毛布をすつぽり頭からひツかぶり、
雪がしんしんひどく降り積む街から街を
あてもなくほツつき歩いて、
手足も凍え、ぞつと身體の胴中まで冷えた、
たつた一匹むかう行く白い小犬が
赤い犬でも來たかと云つた風に、
尾を振つて見るそのやさしさに、
ピイピイと口笛なんか吹きながら
寂しい山手通りに來た時に、
そこの小さな新聞社の前で

見付けた、見付けた、「解版工募集」
これに定めたと赤毛布
雪をはらふと、白犬は
びつくり三寶、遁げて行つた、
あの白犬は遁げて行つた、
雪のしんしん積る路。

田園秋景

明け方から風が出て、今日も秋晴れ、
村の代用教員の若い男が
寢すごした眼をしばたたきながら、
學校さして、小藪を拔けて行くときに、
けたたましく山鳩が一羽、叢から飛び出した。
すると三尺ばかりの茅萱の中から
赤い襷をかけた一人の娘がひよつこり出て來た、
鎌の先きで草をわけながら。

何やら考へ込んでゐたので、それには氣も付かず、
山鳩のあとを追ふやうに
男はさつさと急いで行つてしまつた。
その後姿をぢつと見送つて
やがて娘は小川のほとりに下りて、
小籠の中から砥石を出して
片膝立てて、鎌の刄を清水に濡らしては
片手を柄、片手を刄先にあててとぎ出した。

彼女が身體をゆすぶるにつれて
さし昇る日影に鎌の刄はきらめき冴える、
しばらく餘念もなしにといでゐる
あからんだ頰にふりかかる鬢のみだれ毛、
ふと何を思つたかにつこり笑ふ
何か嬉しいことを待ちのぞんでつくる笑ひである。
そして、したたる雫を一ふり振つて

その儘また草の中に隠れてしまふ。

さくさくと草を刈る音、その秋の音、
このあたりの草刈はみな娘の役目とて
深草の中に日ぐらし、何處迄も身をめぐる綠に
おのづと眼も細くなり、草々の根元をつかみ、
桔梗撫子、更にかまはず、利鎌を入れる氣持よさ。
ばらばらと降るやうな露に
甲掛がしつとり濡れる、
小聲でゆるやかな唄の聲、望みと夢とが出すその爽か
な聲。

夏の朝のイメエジ

眞白くかがやく砂道は
海より村へと一筋に、
爽かに續る桑畑の中を
まつしろな二つの足が急ぐ。

私の愛する女の足が急ぐ、
網小屋に、昨夜、（あの夢の時……）
置き忘れた風呂敷包みを
小脇にひそめて急ぐその白い足。

ぐつすりと寢た若い男の
さめた眼にうつる夏の朝かげ、
障子にゆらぐ木の葉を見れば
なにがなしに浮ぶ微笑とそのイメエジ……

多分、彼女は行つたであらう、
この家の裏手でわかれようとして
ふと氣付いた時のあの當惑、
「引返して僕が取つて來よう」と見かへると、
「どうせあんな風呂敷なくなつたつていいんですけど

も……」と彼女はすこしあからんで
「わたしがあすの朝早く取つて來ますわ……」と、それ
も口の中、
夜の闇の中に一きは黒く媚の目は燃えて熱く……
だが、多分、彼女も寢すごしたらう。

そして母親に、朝露をふんで來ると言つて
めづらしい身養生をわらはれてあかくなる
かあいらしいあの子にも、あの大膽さ！
愛するものの、愛する時は別だ……
しかも美しい靜かな海邊の夏の夜なれば！

網小屋に咽せるやうに漂ふ潮の香に
なづみ浸されて行くささやきのひまに
ふと目を落すあしもとにくつきり浮いた素足のふたな
らび、
うつむいた顏より鮮かに、愛する心ををどらせる……

いつの日の夢か、はるかにはるかに遠い昔の夢か、
また今、この床の中でゑがいだイメエジにすぎないの
か……

ぐつすりと夢もなく寢た夜の朝を
身伸びをして、さて、寢入らぬさきの枕もとへと
横ざまに手をさしのべてとる煙草盆、
敷島の煙を靑くふかしつつ思ひ耽る眼に
眞白く搖れる二つのスマアトな足のイメエジ、
その痴れたるを恥ぢもせぬ二分……三分……
外にははや今日の暑さをしらせ顏に、蟬がヂヂとなき
出す……

砂山の晝

砂山に
砂白くてる、

砂山に
ねころんでおもふ
愛する人を。

投げ出した
足さきに
蟻地獄の穴一つ、
さらさらと
砂の音。

砂山の
この砂時計、
砂とともに
落ちてゆく
一つの命。

砂山に
砂白くてる、
春の晝すぎ、
ねころんで寂しむ
わが戀を。

夕暮が來て

夕暮が來て、
われらの心の中の
もろもろの欲望が聲をひそめるとき、
はじめての星が出て
靜かになつた心にのぞむとき、
われは聽く
はるかにはるかに遠い世界の外に
無限の時の前からわれらを待ちつつ
且つはわれらを呼ばふその精靈の聲を、
魂の奥深く

しのび入るその聲なき聲を、
常に聽かれずして消えるそのささやきを。

夕暮が來て
悲のどよめきがをさまるとき、
人みなの足どりもたゆく
それぞれの家路へ急ぐとき、
一日の蕣めきに騷がしく亂れた心も
やすらかな夜の幸福をおもひみるとき、
わが心の中に
淸らかなものがめざめる。
すべてのおろかな願ひをはなれて
ひとへに果てなき甘き渇望に騙られて
靜かに耳をすませば、
かすかにかすかに永遠の聲を聞くかとぞおもふ。

重荷を負うて

重荷を負うて、遠い道行く旅人は、
道の半ばに、
精根盡きて、息切れして、
いつそこの荷を投げ出さうかと
心弱くも、思ひ惑ふことの數々あり、
しかも、彼の理性は儼としてこれを拒む。
思ひ返して、またとぼとぼと
果てなき旅に喘ぎ喘げば、
いつかはわれも
わがめざす心願の國、
なつかしい心の故郷にたどりつき、
心おきなくゆるやかに
憩ひくつろぐことも得ようと、
ただそれのみが慰めである。

げに、人生の旅は、靴底に
小豆を入れて歩く旅だ。
人みな肩に負はされた重荷數々、
どんなに美しい景色があつたとて、
しみじみ眺める心の隙もないものを、
いや、おのが苦痛さへ嘆くひまさへないものを」
その上さらに悲しきは、
日より日へ、
手から口へのなりはひに
いつか心も卑しくなりまさる。
ああ、人間のこれが運命(さだめ)か、
せめては、しばし、見のがせよ、道の半ばに。」

道の半ばに、息もたえだえ、
しばし重荷をそと地に置いて
路傍に腰をおろしつつ、
越し方遠くかへりみれば、
はるかにも、道は八曲り七曲り、
よくぞここまで來たものと
われ自らに驚かる。
幾山河の彼方には、雲か霞か立ち罩めて、
ありし惱みのあとさへも
何處(いづこ)と指して言ふべきよしもなく、
ただ身にかかる衰へに、足の疲れに、
いかにはるかに來たものと
われ自らに驚かる。

されど、行手を見わたせば、更に道は遙々(はるばる)、
自分は何處までも行かねばならぬのだ。
何處を果てとも見えわかぬ、
山脈(やまなみ)遠く流れ落ちて
天(そら)と溶け合つたかの地平の果てに、
わが求めるものはある。

山のかなたか、そのまたかなたか、
それからずつと海越えて
行つたかなたか、何處かにある。
たとひ何處にもなくとも
やつぱり自分は行くのだ、
たとひ道の半ばに斃るとも
自分は行くのだ、
重荷を負うて
つらい人生の路に喘ぎつつ……

人生の途半ばにして

十八、十九、二十歳
二十歳の夢は
短かかつた……
二十一、二十二、二十三、
春とし言へば美しくとも
弱く、醜く、あさましく
いつも希望にあざむかれ
ふみにじられて歩いて來た、
花とも言へぬその頃も
思ひ出ではなつかしく
若やかしくも見かへれども、
花はすべて散つた、
殘つたのは
木の葉ばかりだ。

二十四、二十五、二十六、
それは惱みに充ちた年月、
幾度びとなく
死なうとまでも思ひつめたか、
その憂鬱な年月さへも
樂しい日のやうに飛んでしまふ、
迅く、空しく……

二十七、二十八、二十九歳
やや明るくはなりながら
なほ、自らを信じ得ず、
やはり迷うてゐるうちに
葉はみな散つた、
殘つたのは
ただ枝ばかりだ。

もうわたしも三十歳、
ああ、もう三十歳、
男盛りと人は言ふ
まだ青年のうちだとも言ふ。
これからがほんとに働く時だ、
さう自分でも思ひながらも、
餘りに早く日が傾くと
まづ心に馴れた嘆き先き立ち、
そして、一つの實もむすばない
このあらはな枝がそのままに
わが一生の姿ではなからうかと
痛みつつ、なほ眞實を求めてやまず、
人生の途半ばにして、しばし彳み
はるかに前方をわたしは眺めてゐる……

慰め

不幸によりてむすばれたる愛は
愛のなかの最も美しくまた堅きものぞ、
かたみの罪もてむすばれたる男女は
離るる日なき永遠の伴侶なり。

幸多き世のけがれたる道をはなれて、
寂しき、さはれ慰めの國を歩めば、
そぞろに天のめぐみを日影に汲みて
やぶられたる胸はあだかも癒え着くを覺ゆ。

幸なきものに何等の幸ひぞや、
幸なき愛の伴侶を得るとおもへば、
かずかずの罪を犯せし汚れし手も
愛の祈りに合せらるべき今日をおもへば。

おろかなる心

おろかなる心を、
神よ、まもりたまへ、
世の賢き人々のなかに
傷つき迷ふ
おろかなる心を。

おろかなればこそ
汝は救はれむ、
まことの光りに
照らされむ、
おろかなればこそ。

寂しき心

人の心を心にむすぶ
目に見えぬ紐、
その一條（ひとすぢ）は
世の悲しみよ、寂しさよ。

生きとし生ける人の胸に
限りも知れぬ寂しさが、
雲のごとくに湧くときは、
離れ離れし人も相寄る。

煩惱具足（ぼんなうぐそく）の身をもちて
世の妄執（まうしふ）に身をまかす
はかなき人心（ひとごころ）、
それをもかすかに照らす光。

その束の間の閃きは
人のさだめの寂しさよ、
この寂しさを知らぬ人は
まことを知らず、愛を知らず。

寂しき心、この心、
痛み傷つき、相寄れば、
冬枯の野も花咲かん、
花は心のまことのみ。

弱き心

弱し、弱し、わが心は弱し、
わが心は美し、
若き、若き處女の心よ！

目蓋のささへ得ぬ涙は
しづかに、しづかに
地に落ちて淸き水となる。

かぎりなき憐憫のうちに
あらゆる憎惡は溶け、
世の寂しさぞ胸に充つる。

裏切りし友も悲しく、
我れを苦しめ惱ませし
卑しきものの沒落を泣く。

正しきものの悲運も、
惡しきものの榮華も、
すべてはかなく、すべて悲し。

かくも涙に富める心に、
かくも弱くおろかなる心に、
この寂しさぞこよなき幸。

眞珠の心

人生の僞りはそが涙もて淸めらる、
運命の惡意をも、おほどかの微笑もて
いとも氣高く堪へ忍ぶ人の、
人には見せぬその涙もて。

永遠の仇敵、運命とさへ和睦しつ、
人にはつねに微笑めるその魂は
夜半にひそかに泣くことあらん、
そのとき樹々の葉に、露とあらはる。

その眞珠の露したたらす眞珠の心は
もとよりこの世のものにあらねば、

早くも天のふるさとに呼びかへさる、
あだかも水のふたたび天へのぼり行くごと。」

さればその人若くして世を去るとも
そは世のつねの悲しみならず、
運命の上になほ高く立つその絶對者の
そのみなもとに溶け入るなれば。

誰れかは運命に敗れたる人と言はん、」
また運命にうち克てる人と言はん、
かの空色の盃の中に
美しき眞珠と溶けしその魂を。

美しき心の悲劇

世界のためにはあまりに弱かつた、
あまりに美しかつた、その胸は、
それゆゑ裂けねばならなかつた。

ああ、今裂けしその胸から
かなしく流れるその血をば、
思ひやりなき人々の
いかにいやしといやしむとも、
美しき夢をゆめみて鼓動せし
その束の間は消すをえじ。

世界のためにはあまりに弱かつた、
あまりに美しかつた、その胸は、
つひに醜いむくろとなつてしまつた。

ああ、この悲劇、
美しい心のこの悲劇——
そのために、わたし、か弱いこの詩人は
捧ぐべき哀歌もつひになし得ず。

明日はすでにその敵を忘る、
この心こそうれしけれ。

智慧

一

裏切りて、
裏切られて、
かつ惑ひ、かつ疑へば、
心は濁り、黒ずめども、
時たてば濁れる水も
いつしか澄みて、
淸らけき流れとならん。

すさまじき時の篩は
やむこともなく
ふるひ落す、惡と汚れを。

少女はかたる

少女はかたる、
われは君をば救はんと、
世の迷へる人よ、惱める人よ、
われに來れと。

その美しき夢、美しき心、
君がのぞみのたふとさは
ただ見る身にもうれしくて、
われも讃へん、をとめ心を。

斷章

今日三たび胸を打ちて
復讐を誓ひ、

悪しき友と悪しき心は
選りわけられ、吹きすてらる。
のこれるは眞珠、眞寶、
はなさじと胸に抱かん。

二

いく度びも裏切られ、
いく度びも欺かれて、
心はかたく、かたく石となるも、
その底より水は湧きいで、
つらぬきて泉は流る。

鞭たれ、打たれ、痛められ、
裂けし胸より血は迸る、
息もたえだえ、手足もふるひ、
地にふして、地に額づけど、
なほ打てる生命の鼓動。

この智慧に、この信仰に、
かずならぬ身にも慰めあり、
迷妄の心にも悟りはあり、
神はあり、天國はあり、不滅あり、
うららかに春の日は照る。

友情を歌ふ

長き惑ひ、長き試練、
若く、若き心をも
つひには白き髪とする
この生の悩み痛みの
そのただなかに、
常にかたへに來て助け、
いざ、歩をあげよ
なほ一度びと、

あひ共に知れるいつはりもて
心を強め勵まして、
果て知れぬ道に誘ひ出づる
その友情こそは、
男子にして始めて得べき
人の世のこよなき幸、
數知れぬ失望に傷きし胸に
ほのかに春の波を寄せて、
すべての疑惑をも洗ひ去らん。

異教徒の聖歌

悲しみなくして、いかに多くの歲月はすごされけん、
夜やすく寢ねたりし歲月のいかに多かりけん。
かくも信弱く、汚れし魂にも、
時ありて、虚ろなる不安は芽ぐみ來りて、
希求のおもひいや切に湧き上りくる。

久しくもあくがれて迷ひすぐせし
いつはりのうるはしさは息のごとし、
けがれたるものよりかへるはこれ信なり。

美の國はこの世にあらず、
この世にあれども人は美となさず、
美の美をもつて呼ばるる地こそは天國なれ。

人、雪をもて美となすべし、
その雪の消えにし時に
花咲きみのるを美となすべし、
されど人のおもてかたちを憎めば
その心はつひに知らむともせず。

この迷妄の世にありて
われもすぐれし異教徒なれば、
年長く人々と娼婦を競ひたりしが、
けふ、ゆくりなくも酒場の卓にして

天上の階は魂ををののかしめぬ。
すべての裝ひ、すべての飾り、
みな地に棄てよ、
さて、うるはしき心は花咲かん、
けがれたるものよりかへるはこれ愛なり。

基督を抱けるマリア、
その子を抱けるあらゆる母、
主の尊きみ足に香油をそそげる
悔い改めしマグダラのマリア、
よき妻となりしあらゆる汚れし女、
ダンテがベアトリチェ、
わが戀人も、
いまぞなべてはひとつなる、
ここにこそまことの愛あり、信仰あり。

すべての豫言者、すべての聖徒、
すべての殉教者の街ゆくとき、
あざけりは雨と降らむも、
そは魂のうるはしき花と知らずや、
われら人みなたはれ女の白き腕に
その美をひたすらあがめ奉りて
まことの生命の光に面を蔽ふ、
ああ、その迷妄の永遠にわれを棄てむことを。
われ等ねかはくば、永くたたへむ、まことの美を、
基督の聖き心を――
さなり、基督こそは美の權化なれば。

座談のやうな詩

哲學無駄話

システム、システム、またシステム、
築いてはこはし、こはしては築く、」
どこまで行つてもきりがない、」
何といふ退屈な積木細工だ。

哲學のシステムは、
それがシステムであるだけで旣に誤謬である。」
世界は矛盾で成り立つてゐる、
なんで書物なんかで統一されようか。

何でもいい、抽象名詞を一つ選んでくれ、

そしたら、それでおれは一つの哲學體系を立てて見せる、
理性、意志、無意識から、精神生活まで……
まだまだ面白さうな言葉はたんとある筈だ。

ロジックがもし眞理の道ならば
一番ずるい三百代言が哲學者の王だ、
理窟はなんとでもつく、
そこでパラダイスの蛇は眞理をかたる。

どんなにえらい哲學者でも
齒痛を訴へないものはないと、
シェクスピアは意地悪な奴だ、
哲學者とても人間ぢやないか。

人間なればこそ、その哲學に意義がある、
殊に日本に多い書物の蟲が何をする？

だが、また人間なればこそ、その哲學者は
哲學で果して救はれたか。

ところが日本の哲學者は秀才ぞろひ、
銀時計には値するとも、
鼻祖ソクラテスの杯には値せじ、
喜んで讀む、嚙みに嚙む、宇宙のシンまでも。

篤學無比のワグネル先生、
メフィストさへ捨てておく、
學究先生のこの至上の幸福は
まさにこれ地上の樂園か。

カント、ヘエゲル、スピノオザ、
一時はやつたオイッケン、
コオエン、リップス、ヴィンデルバント、」
まだまだあとはたんとある。

諸君の研究に差支へる事は決してない、
安んじて本を讀み給へ、近眼零度まで。
殊に戰爭もすんで、獨逸の本も續々くる、」
ただ、丸善で買ふと少々高いばかりだ。

哲學者とは畢竟これペダントか、
ペダントの事なら、そんなら古いほどましだ、
二律背反、先驗的、的々づくめで一層何が何だか分ら
なくなる、
そこで立派な髭の裝釘をもつた生きた哲學辭典が尊敬
される。

凡てのものは、それ自ら矛盾の上に成り立つてゐる、
これが人生の悲しい約束である。
哲學とてもその通り、
畢竟、哲學も理智の文學のみ。

哲學によつて救はれようなどと
蟲のよい事を思つたのが抑も怪しからぬ話だ、
それにその失望の憤りを、勤直謹嚴な
哲學先生にもつてゆくなどとは不屆千萬だ。

ああ、眞理は言葉になつたとき眞理でない、」
一切はこれ不立文字、
如かじ、一切の言葉を捨てて、
自然の文字を讀まんには。

眞理はただ依心傳心の宇宙の祕密、
拈華微笑は釋迦の皆傳、
教外別傳の禪に參じて
耳ならずして聞け、隻手の聲を。

凡てのものは、それ自ら矛盾の上に成り立つてゐる、」
これが人生の悲しい約束である。
それを悟らば、哲學者を
そんなに誹謗するものでない。

少くとも、彼の腦髓と彼の近眼とに敬意を表し、」
大學教授、文學博士の肩書に一層畏れ入つて、」
おまへの無學を恥ぢてひつこんでゐろ、
頭のわるい詩人よ、汝、論理の不能者よ。

詩論斷片

詩は誰が見てもいいと感じる詩がいいのだ、」
心にぴつたりくる詩、
忘れようとして忘れられない詩、
おのづと口にのぼる詩、
それがほんとの詩だ。

むづかしい理窟をつけて感心される詩、

新奇なはやりの様式を機敏にまねた詩、
作者の名がなければ誰の詩かわからない詩、
やかましいテクニックで小器用にまとめあげた詩、
そんな詩をかくのは恥だ。

誰の心にも理窟なしにぴつたりくる詩がいいのだ、
自分の個性の泉から湧き出した詩がいいのだ、
自分の肉體の一部分であるやうな詩がいいのだ、
それはまづくとも意味があり、永遠に古くならない、
それでなければうそだ、破つてすてしまへ。

二つの詩

丁度かの日本橋の下を流れる水のやうに、
この詩には、才氣がギラギラと上に浮いてゐる、
その石油は、日光を受けて
さながら虹ともまがふ光彩の輪をゑがく。

だが、その泥水の上の魔法の輪は、
私には、むしろ、不氣味だ。
それなくば、泥水もなほ忍ぶことが出來る、
そのどろどろの汚濁は反つてその深さを思はす。
呪ふべき才氣よ、おまへは何といふ餘計な戯れ事。

私の愛するものは、然し、そこにはない。
田舍の草徑のほとりに、忍びやかに、
音もなく行く、平凡な淺い小流れ。
半ば草にかくれて、恥かしさうに
すくすく伸びた靑蘆の根もとを洗ふ、
その淸らかな水の中に私は住みたい、私が魚ならば。

幸福な詩人に

身はけがらはしい不倫を行ひつつ
歌は美しい言葉でうたふ、——

それが詩人に與へられた特權である！
不倫な戀、恥かしいその行ひは
身をかへりみるに堪へざらしめても、」
しかもその歡は何といふ美しさ！

かくて詩人は幸福である、
彼の罪は、彼の琴のしらべをかき亂さねば。」
人の妻をばぬすむとも、
友をきずつけ、誣ふるとも、
そは詩とは關係のない散文のこと、
彼の詩の世界には、ただ美しい言葉で十分である！

ああ、詩人でないものは禍ひである！
世俗の道德の軛にかけられて
地蟲のやうに蠢いてゐる
俗人どもの、何たる悲慘！
されど、その悲慘の中に惱みて
まことの人生の痛み、深みをさぐる
俗人こそは、「生の詩人」か――

そして詩人は、ただの「詩の死人」か、
若し、詩人がその生活の底に徹せず、
水草か、藻の花の美しさもて人をあざむき、」
その魂の底の泥土の、澱めるものを、
闇をば見じと眼ふたげば。

或る靑年詩人に

自分の着物を着るがよい、
自分の帽子をかぶるがよい、
さうして自分の靴で歩いて行け、
それでこそ君は一人前だ、
何だ、君のそのざまは！
なるほど君の着物は風變りだね、

晩年のヹルハアレンの着物のやうだな、
それから君の帽子はすてきだ、
ホイットマンのとそつくりぢやないか、
それから君の靴はトロオペルののやうだな、
すてき！　すてき！
さうして君の歩いてゐる姿を見ると、
僕はホイットマン先生ぢやないかと思つて
すんでのこと帽子に手をかけようとした位だ、」
またヹルハアレン先生ぢやないかと思つて
わざわざ後戻りして顔を覗き込んだ位だ。
だが、君はやつぱり君だつた、
昔のままの、初心（うぶ）な素直な君だつた。
僕は君が好きだよ、
君のまだ髭も生えない色の黒い顔が好きだよ、」
だが君、そのざまは何だ？
君はそれでおれはえらいと思つてゐるのか？
大變鼻息の荒いことを言つて、
まるで地球を手玉にとつてゐるやうなことを言つてる
　ぢやないか、
それだから君は可愛いよ。
だが、そのままでは飛んだことになるぜ、
僕はそれが氣の毒でならないんだ。
まあ少し考へたまへよ、
ヹルハアレンの着物を着たつてヹルハアレンにはなれ
　ない、
ホイットマンの帽子をかぶつたつてホイットマンにはな
　れない、
たとへ一寸の間買ひ被つて貰へることが出來たつて
そんな恥辱がどうして君の光榮になる？
それよりやつぱり君の着物を着て、
君の帽子をかぶつて、
君の靴をはいて歩きたまへ！
どんなに見すぼらしからうと、貧弱だらうと、
自分が自分でゐるといふことほど、

それほど誇るべき光榮はない筈だ、
第一、どんなに氣安いか知れないぜ、
僕の言ひたいことはこれだけだよ。
昔のままの、初心な素直な靑年詩人、
僕は君が始きだ、けれども君、
ヹルハアレンの着物の中から乳の臭ひがしたり
ホイットマンの帽子の下からその色の黑い
子供らしい顏がのぞいてゐたりするのを見ると、
どうも我慢が出來なくなる——
腹が立つからではない、實は可笑しいから——
それでこんな餘計な忠告もして見るのだ。
自分のこと、自分のこと、
自分が自分でゐることだ！
ではさやうなら！
前途有望の靑年詩人——

（一九一九年十二月二日）

道化帽をかぶつて

御存知の道化者

一

笑ひが種切れだ、これではならぬ、
道化帽をかぶつて、
先づこの拙者がまかり出る、
笑へぬお方は苦笑ひでもなされ。

二

天才（童謠）

きちがひ、出て來い、出て來い、
天才にしてやるぞ、
天才の菓子は甘いぞ
おなかをくだしても知らんぞ。

三

ジャップ（童謡）

毛唐毛唐と莫迦にした
毛唐がジャップをとつちめる、
チャンコロ、ヨボよと莫迦にすな
今に倭人どもをとつちめるぞ。

四

詩人貧乏

縦につめたが散文で、
横にのばすが詩でせうか。
この紙の高價な時節がら、
まあ、なんて勿體ない、餘白だらけ。
さてこそ、詩人は貧乏よ、

この經濟知らぬを見て御覽。

五

太陽の黒點

太陽の黒點、澆季、澆季、世は澆季だ、
無茶に寒いかとおもふと滅法暑い、
てんで調節がとれなくなつてしまつた。
そこで人の心も御同樣調子外れ、
無法に熱くなつた奴は戰爭、暗殺、過激思想、
無茶に冷たくなつた奴は保險鬼、色魔、高利貸、
ああこれもみんな太陽の黒點からだ。
泣きたいけれど、
泣かずに、いつそ、笑ひませう、
泣くのはからだに毒だから。

をかしき發作

女子の身にときごとの煩ひあるが如く
われの心またときごとの惱みあり、
そはわが女性的なる心の罰なるか、
知らず、知らねど止むるすべなし。
その日來れば堪へ忍びしすべてが憤ろしく、
人みなわれを侮るとおもひ、
卑しき人々の誹りの身を嚙むごとく、
彼等を一擧にしてとりひしがんとし
反つて平生の鋭さを失へども、
なほその心やむことを知らず、
かくてわれはユウモラスな文をつづりて
これに題して「手套を投ぐ」とせり。
友は笑へり、われも笑ひぬ。
かくて應えたり、わがときごとの

をかしき發作、ヒステリイの發作——
これもまたわが詩人なればか、
彼等はわれを詩人にあらずと蔭口すれど。

「弱氣」である私は

人に笑はれようが誹られようが、
齒牙にもかけないつもりだ。
これが、人間社同人の用語例に從へば、
極端に「弱氣」である私の、
自分を完成して行く爲めの
何よりの修養なのだ。

弱いといふことは罪惡だ、
弱いものはつひに自己を生きない、
いつも人の鼻息ばかり伺つて、
卑屈と生ぬるい妥協との

泥沼に喘がなければならぬ。
そのあさましさを私は餘りに知りすぎてゐる。

人間の惡意と嘲笑との中に、
自信をもつて突立つ時、
そこに男子がある。
弱いものは世間に虐げられるよりは、
むしろ自分自身によつて一層虐げられる。
そのおどおどした眼付！
何といふ醜さだらう。
私はその醜さを餘りに知りすぎてゐる。

強くならなければならぬ、
より強く、更により強く！
碎けても岩にぶツ突かれ。
粉微塵に碎け散れ。
碎けても自分を曲げるな！

私は「弱氣」のあさましい醜いこの自分を
この烈しい言葉を以て叱咤する。
もう私は人に笑はれようが誹られようが、
齒牙にもかけないつもりだ。

澄める青空

天地の寂びにしたしめば
詩（うた）のこころはなくもがな、
天地をかぎる我（が）のなくば
われも葉ずゑの露の玉。

序

この集に收めた詩は、すべて本年に入つてからの新作のみである。中には一二、舊稿に屬するものもあるが、それもみな未發表のもののみである。

一つの詩集は、出來る事ならば、その集獨特の意義を有ちたいものである。一つ一つの集に、それぞれ異つた特色が見出されるならば、そしてそれによつてその詩人の內生活の開展と、努力精進のあととが見出されるならば、まことによろこばしい事である。ねがはくば、私の集もさうありたいものである。

私の心境も、今刻々に推移して行かうとしてゐる。そして、今日現在の私の心境は、この集によつて推斷していただいて、毫も不服はない。

私の心も、今や漸く、日に日に靜平にならうとしてゐる。そして、更に淸澄になり、更に透徹したいものである。この希願をもつて、朝夕、私はわが書齋の窓から方一間の青空をのぞむのである。

澄める青空――それは今、私の魂の上に、底深く、且つうららかにかかる。私の魂は、翼を失つた鳥のやうに、今その青空を仰いで歌ふ、その歌が、ここに集められた大部分である。げに、その青空こそ、私の日夜翹望する永劫無限の世界の象徵でなければならない。おもふに、かの無限の大氣の中に、私の魂が、芥子粒の一點として溶け去るの日、私のまことの生命は、そこにはじまるであらう。

私は今非常に孤獨な氣持である。昔ながらの孤獨寂寥であるが、今は日に日にその寂寥の影が身を包むのを感ずる。詩人として、私は依然として、この土地に於ける異邦人である。今は理解されようと望む心もない。反つて、ますます同時代の詩流と逆行して、愈々その理解に難い方向へとむかふ。だが、たとひ私の行手は、冷たい純白の北極であらうとも、私は勇ましく進んで行か

う。いかなる運命にも、敢然として立ち向はう。專念、眞實の生を求め、求道の途を獨り往かう。これが私の謂ふ寂寞道である。眞實を求めて行く者のめざす境は、詩歌の陶醉境ではない。その意味で、私が一般に解せられる意味の詩人に滿足出來なくなつたのは至當である。今、私は一つの大きな矛盾に相面してゐる……。

私が前集「慰めの國」で初めて開拓した新しい詩風――かの「雪」や「秋の日の午後」のやうな作品が代表してゐる――を繼承する長篇の詩は、この集の叢書としての性質上、その一二の外、すべてこれを次ぎの集のために保留して、ここには比較的短章に屬するもののみを收めた。そして、如上の私の新傾向は、その破壞的態度、その自由と放膽の故を以て、畏友福士幸次郎君達の非難を得たが、さうした行き方も、前に述べたやうな私の現在の心持をかへりみたならば、自然の發現である事が肯かれるであらう。問題は瑣末な形式の上に存しないで、その根本の精神、その信念、その生き方の上に存するであらう。

私は今、「詩(ディヒツング)」よりも「眞(ワアルハイト)」を重んじてゐる。

そして眞とは？ それを今私は語るべきであらうか？

然し、それを語る前に、私はそれを眞に知らなければならない。否、まのあたりそれを目睹しなければならない……今私は弱小な一求道者に過ぎない。

天地の寂(さ)びにしたしめば
詩(うた)のこころはなくもがな、
天地をかざる我(が)のなくば
われも葉ずゑの露の玉。

大正十一年八月

註。本集は一九二二年九月「現代詩人叢書」中の一卷として刊行。

澄める青空

寂寞道

日暮れて途(みち)遠し、
ゆけどもゆけども果てしない路、
夕ぐれの雰は紫色にかがやいてゐる。

都の方(かた)をのぞめども
空をかぎるは黒い森のかげ、
一つのあかりもわれを導かず。

春は菜種の畑越えて
櫻の丘にそそり立つ洋館の上、
青空はわが希望(のぞみ)をば照りかへしたに……

野も畑も今は一樣の雰景色、
ほのかに忍びよる夕闇のもとに
雰は紫色にかがやいてゐる。

「日暮れて途(みち)遠し、わが生(せい)旣に蹉跎(さだ)たり」と
昔の人の歎息が
またあたらしくわが心から湧きあがる。

いつかわたしの心も衰へて
中年の阪にちかづけば、
ある限りの聲をもて
遠い野のかたに叫んだあとの寂寥、
ああ、果てしないその寂寥……

それは昔の寂寥とはちがふ、
ありあまる力の抑壓の生むそれとはちがふ、
それは徒費せられた精力の空隙(くうげき)から生れる

ロスト、ロスト！　滅入るやうなこの空虚感……

心にのこる思ひ出は
ああ、ただにがし……
そのにがい思ひ出さへも
今はなつかし、うつくしし。

思ひ出か、それが生か、
昔の空の反映のわづかに心を紅(あか)くいろどるも暫し、
いま、空は黒み、路は遠し。

人里はなれ、雪の沙漠を
この寂寥をいだきしめ
ひとり辿れば、つひに行く道はこれぞと知る。

寂寥の冬の色、孤獨の夜陰、
更に濃くなれ、深くなれ！　わが行手にも、

人影なく、荒涼の雪の野にも、なほ路はあり。

行け、この寂寞道を！
この路を行かすば、つひに道をえじ！
身は凍るとも、いかに心はつらくとも。

日暮れて途遠し、
凍る心に、凍る眼(まなこ)に
夕ぐれの雪は紫色にかがやいてゐる……

孤獨と氷

ここは何でも凍つてしまふ
愛も、夢想も、生すらもみな氷となつてしまふ、
氷海の上を漂ふ氷塊の一つ一つに
私は見分ける、
失はれて久しい私の物を、私の舊知の友を。

ああ、淨らかな變形(メタモルフオセ)！
すべてはここに永遠の象(かたち)をとり
永遠の息吹(いぶき)をわが方(かた)におくる、
あまりに冷たい死の息吹(いぶき)を！
しかもこの寂靜(じやくじやう)の中にまことの生ははじまる！

榮譽はただこれ一吹きの風、
愛撫のやはらかな手の動きもスクリインの一過、
燃える瞳も夜明けには消えるともしび――
今、われ凝然たる不動の中に合掌瞑目をねがひ、
動きの中にのみ生きるものを死なしむ！

北極の氷よ、私の墳墓よ、
私はおんみに挨拶をおくる、
おんみこそ、苦惱を滅ぼす涅槃(ねはん)なれば。
されど、一切の情の殺戮者なるおんみのところでは
その挨拶すらも凍つてしまふ。
おお、孤獨の圈(けん)！
ここには凡ての熱火は冷却し
すべての哀哭も沈默する――
生は凝結し、美は沈靜に歸す、
無上の沈默、無上の冷感！

すべての甘美な感傷の詩人は
これを孤獨の北極におくれ、
彼はここに死して、死の中に甦るであらう、
永久に若さをつつむ七重の氷の中に、――
青春はただ氷の中にのみ保存される。

不滅のユウトピアンをもここに送れ、
ここで汝の道化もまた不滅である、
汝の惡德も、汝の汚濁も、汝の無力も。

不滅の使徒は、また天才の美と、聖者の德とを要す、
淸淨無垢の氷は、その眞理をも汝に敎へるであらう。」

かずかずの若さが築くユウトピア、
それはただ氷の中にのみたもたれる花である、
さながらの、これは花氷、紅ゐにまた紫に
氷の薔薇とひらく、ひらいてはまた萎むことなし、」
この孤獨の苦行の中に、この無感無覺の中に。

さらばよし、私の魂を永く氷中に封じ込めて
無窮の無窮までねむりつづけよう、
かくてわれ生くべし、この孤獨の氷の中に、
ああ、冷然として、合掌瞑目しつつ。
――かくて、沈默の音樂は永久に鳴り響くであらう。

刻銘

私のなかに
いかに多くのものは死んで行つたか！
夜、灯を消して
頭を枕にうづめるとき、
私は今一夜を死ぬるのを知る、
しかも、すこやかに
朝の日かげとともによみがへる時、
私は自分の脈搏のいかに力づよきかを知る。
されど、その息づく假死のうち
我が身の底に
いかに多くものが死ねるかを知らず！

既に、既に、多くのものは死んで行つた、
秋來るごとに
私は彼等のなきがらを認む、
我が心の雜草の中に、
さながら蟲のごとくに横はるを。

秋來るごとに
私はわが死者をいたみつつ埋む。
そは、わが魂の細胞なり、
わが夢想なり、希望なり、また愛なり、
われ涙しつつその墓碑に銘す、
秋來るごとに。

秋

秋は私の季節である、
光りはいよいよ澄んで青く
風は私語にまでしめやぎ
靈性の眼いよいよ冴えて
心ほがらかになる、
ああ、秋、靈魂の秋！

木の果の熟れる秋
とりいれのゆたかな秋、
それは私の秋でない。
私には、私の生の不作も何であらう、
寂然として、ひとり瞑想に耽るとき、
ああ、甦る、秋の靈魂！

青空を慕ふ

澄める青空——かぎりなく
ひろがり深む空こそは、わが故郷か。
ああ、永遠の象徴よ、汝れ、青く澄む空！
無限なるものの——おそらくは神の——姿して、
かくもほがらかにわれにのぞめば。

あまりに地上の賤しければ、
ひとへに、青空にのみ心はむかふ。
わが心も、今、ひと日ひと日に

青空の如く澄まんことをおもふ。
ほがらかに澄まんことをねがふ。

青空を仰ぐごとに
故郷(ふるさと)近しとおもふ……

われもまた、旅路の果ても遠からじ、
かの青空一抹の雲と化し去る日は
いかに美しく、いかに樂しいであらう。

水となつたシェリイ・アドネエス、
火となつたエムペドクレエス、
あるは木となり草となる
古い神話さへも身になつかしく、
われも今、原(もと)の象(すがた)にあこがれる。

地の賤しさに力つく角力者(かくりきしや)の世にもあれば、
神話の國の澄みわたる故郷(ふるさと)戀し。

私も行かう、エリジウムに——
薔薇いろの光のなかに
われも光となりて舞ふため。
されど、德なきものの、それも甲斐なし。

德もなく、悟りもなくて、土となる
わが身の果ては——一抹の灰ともあれ、
しかもつひには、われも雲ともなるであらう……
かぎりなく澄める青空、仰ぎみれば、
私の心は雲となる、この身のままに
雲と溶け入る、かの青い無窮の中に。

月夜の青桐

仰げば空はるかなり、
月幽(かす)か、光ほのかにちらばふ中に
まるく大きく劃(くぎ)る影、

青桐の梢にかかる夜のかげ
さやさやとひそめき語るその言葉、
いまはおのれも解し得たり。

天地の寂にしたしめば
月に心もしめやぎつ。

月遠く、光は近し、行く道いかに
遠くとも、救ひは身にぞ射し込む。
さやさやと夜風にふれて桐の葉は鳴る
きらきらと光にふれて露はきらめく。
天地をかぎる我のなくば
われも葉末の露の玉。

仰げば空はるかなり、
月の夜の青桐のもと。

夕暮感

夕暮の甘い憂鬱は現實の上に幕をおろす、
それは夏の盛りでも、いつも秋だ、
秋はその夕暮の半時間を胸一杯になる。
空が白けて、黒い細い木の枝の網を
數限りなく張らせてゐる中に動いてゐた
木の葉が、ただその暫し鳴りしづめ、
それが全く黒い物影となるまでの半時間、
私の胸に寄せくる霧は秋の匂ひである。

夕暮ごとに、私は遙かな事物に思ひを馳す、
無限なるものの呼吸を身に近く感ずる、
頭腦は眠つて、ただ心情のみが脈うつとき
私の心はつねに秋思の音樂となる。
既に、十年の昔もさうであつた、

そのとき私は夕暮の甘い憂鬱を歌に出した、
今、私は夕暮の半時間をたのしみ味はひ
私の歌が脣の上に死ぬのをかへりみない。

たそがれの時

晝でもなく、夜でもない時、
晝よりもしめやかに
夜よりも深い時、
すべては、遠く、遠くおぼめき、
しかもより近くわが心につながる
したはしいたそがれの時！

晝に生れず、夜に生れず、
たそがれの時にのみ
わが身にふれる影がある、
かげろふのありなしの影——
永遠の影ぞおぼめく、
心なごめるそのたそがれに！

澄心

年を經て、世の寂しさの限りきはめて、
さしも私の悲しみも、今は心の底深く
さながら滓が水底に澱むが如く澱んでは、
かつてあんなにも表面に浮いてゐた
あのあさましい煩惱の濁りも暫し失ふ。

身の弱さ、今なほ少しでも振り動かせば
ゆらゆらとのぼつてくる、古い私の悲しみは
ああ、やつぱりそこに、寂しさの壺の底より。
だが、今は私も靜かにならうとする……
天地の法を身にかねし高き聖の道をおもうて。

靜かに、靜かに、つらい運命を堪へしのぶ
心は長い年月の霜に嵐に鍛へられたか、
今は悲しい人の世も、おのれもおなじ微笑のみ、」
天地の法にしたがひて、安らかに生きて行かう、」
久遠淨土の光のもとに世をばながめて。

故人を憶ふ

秋來るごとに
高く澄む空をのぞんで、
私は多くの逝ける人を思ひ出す。

秋を重ねること今や三十にして、
あまりに多くの人はすでに逝つた！
十七にして死に近づく歌を作りしものを殘して。

その世にありし日には厭はしかつた性情の友も、」
一日不幸にして敵となつて別れた友も、
思ひ出づれば、今いかになつかしきぞ。

おもへば、不思議なことである、
彼等わが目より遠く遠く消え失せてのち
いよいよ心に親しく偲ばるるとは！

まことに死こそはやさしき宥和者、死者の思ひ出は
近親の心に尊く、年毎に精靈を祀らしめるとも——
なぜ相別れた死者がかくも身に親しく感じられるであ
　らう？

彼等その肉身の繫縛をのがれたれば
靈の力たかまりて、よくわが靈にふれるのか、
はたわれ、既に地上の外に一歩踏み出したのか。

秋來るごとに、

私の靈の眼は
青空はるかに多くの逝ける者の姿をのぞむ。

永遠の思慕

一

果て知れぬものわが身をめぐる、
底知れぬもの上にひろごる!——
思ひみるだにおそろしきこの天地(あめつち)の
無限のひろがりの中の芥子粒の一點として
湧き出でてうごめくもの——これがこの身か。

時間の海のはかなき泡と湧き出でて
永遠にいたらんとねがふ!

二

身をめぐりほのかなる影はおぼめく、
漂ふ影をとらへんとつとむれど甲斐なし。
掌(てのひら)をひらけば、つねにただ物影もなし、
見るは運(さら)なき身のほどを語る手の筋のみ。
ああ、そはかげろふか幻か、——目に見えぬ影!

ありとしも見えぬイデアの影をのぞみ
この世にてまのあたり神にまみえんとねがふ!

三

朝に夕に、雲と湧き、風と生れ、
水と流れ、木の葉と現じ、
月とかがやき、露とおく、
天地(あめつち)のあやしき現象(すがたかたち)を見つつ
ああ、更に何を見んとする。
天地(あめつち)の意(こころ)はここに刻まれて
神のすがたも見ゆるものを。

四

かぎりなき青空の光のもとになほ

ああ、更に何を望むや。影の影を追うて、
むなしくも喘ぎつとむる天と地の侏儒！
芥子粒の世界の中になほ無窮の空の象宿る。
見よ、方一尺の、行潦にもうつる青空！

永遠は時間の如く、時間は永遠の如し。
汝は神の裏にあらはれ、神は汝の裏にあらはる。

五

遠き影こそ身に近き身の靈魂の影なるを、
ただ、身の鏡くもるゆゑ神の姿は見えわかず。
待てしばし、汝が生のをはりの日には、
その影ぞ、おのづから汝れに來べきを、
いな、青空に溶け入る日、汝れみづからぞその影なる。

天地をへだつ我をだにほろぼせば
汝れも行く雲、流れ水。

解脱

三月、四月、五月、六月は過ぎた、
いまは七月、わが生の夏——
七月のさかりに早や秋の來て
木の葉黃ばむよ、その病葉は。

病葉はバサリと音して
わが心の庭を秋にいろどる——
そのながめさへ、今は心をおどろかせもせず、
春すでに秋なりしもの、われなれば。

わがする業は空しきか？……
「空しくも、なほ働かう、苦しまう！」
健氣な心よ！　されど、肉は弱い、
おまへは疲れた——すべての無理は、二重に人を疲

らす！

「空しくも、なほ働かう、苦しまう！」
この健氣なヒロイズムの下には
なほめめしい空だのみがひそんでゐる、
それをも掻き捨てよ、鋭い目もてしらべつつ。

恥づらくは、常に名聞に餓ゑて
かつて酬いを忘れえぬみにくい心よ、
それが棄却の詩人の本體である——
厭離の讃美の下には、いかなる妄執かひそむ！

みにくい心、あさましきわれ、
澄みわたれ、さらに、ほがらかになれ。
そして、病葉のごとくおまへの望は落つるとも
靜かに微笑んで言へ、「それでいい！」と……

鳥の巢

私の胸は鳥の巢である、
そこに嘴の太いみにくい鳥が棲み
たえ間なしに眞黑な卵を生む。

私の胸の鳥は鳶か、鴉か、いな、
ノアの洪水で死んだ筈の惡鳥、
いつもしやがれた聲で啼きさわぐ。

惡鳥の熱にかへされて、その巢一杯に
生みつけられた卵の殼の中から
たえ間なしに眞黑な鳥が出てくる。

ああ、神聖なエーテルによつて彼等を追ふまでは
私の胸は惡鳥の棲家である。

そしてその悪鳥の名は煩惱である。

春である

春である。一冬の鬱々たる冬眠からさめて
書齋の穴を這ひ出した細長い詩人が、
土と、草と、水との上を滑つて行き
綠の丘の綠の梢から、四方を窺へば、
春である。ああ、いかに長かりし冬眠ぞ、
その空しい假死のうちに、いかに世界は一變したこと
ぞ、
何と驚いたことか――世は、既に春である。
書物よ、さやうなら！　これから自然を私は讀むんだ。

麥生の中

靑々とした麥圃の麥の波間に
こつそりかくれて何をする？
小さな眞黑な頭がひとつ
ぴよいと引込んで、またぴよいと出て
しきりに動く、しきりに搖れる、――
あれは土からはじけ出た春の子供だ。

土から飛び出たいたづらものは
雲雀の巣でもさがしてゐるのかしら？
靑い麥の波間におもしろさうに
ポッカリ浮いたり沈んだり、――
大海の中に漂ふ椰子の實か――
あの眞黑な頭ひとつに、春がみごもつてゐる。

靑々とした麥圃の麥生の海の
あの眞黑なかあいらしい漂流物へ
靑い波がさわさわ搖れて行く――
おや、何だらうと見てゐると

ウウ……とふざけるやうな犬の聲……
——ははア、いたづら仲間だ。

丘の上に坐折して、行きづまつた春の詩人が
「おれの詩想も涸れたか……」と悲しみながら
見るともなしに見わたす野邊の——
彼の視線の中心をなす、
麥生の中に樂しくゆらいでゐる
小さないたづらものの眞黑な頭！

「あゝ、おれも子供になりたい——
——あれが詩なんだ、あの子供のいたづらが！」

睡蓮の花

夫婦といふものは寂しいものだ
殊に滿足し合つてゐる夫婦といふものは。

生活の喜びは年々に少なくなる、
かへつて大きな變動でもあつてくれればいいと
そんな事さへ考へる程、いつか二人の心には、
何とも言へない寂寥が襲つて來てゐた。
一緒になつてから、もう七八年、
まだ子もなく、財産もなく、地位もない、
やつぱり昔の通りの貧しい夫婦暮しの
來る日も來る日もが、ただ單調に、
無意味に、味氣なく、流れて行くのだ。
夫の心は仕事に疲れる毎にものうく沈んで來て
たまたま嵐のやうに荒れることがあつても、
妻の心はもはやそれを靜かにぢつと眺めてゐる。

或日、さうした嵐の過ぎた後の日である、
「何處かへ行つて見ようか」と、めづらしくも、
出不精の夫が妻にやさしく誘ひかけると、
妻は喜んで、いそいそと白粉を塗りにかかつた。

省線の電車に乘つて、とある近郊の遊園に行つて、
杉の木の高くすくすくと群れ茂つた中を
蘆や蒲の生ひ重つた池のほとりに出て行つた時、
ふと何がなしに、夫は妻の姿をかへりみて思つた、
「これが人生だ、自分もこんな地 味な人間になつたの
だ……」

やがて疲れてベンチに腰かけて妻は言つた、
「まア、御らんなさい、睡蓮の花が咲いてゐます」
河骨や蒲の間に、ほの白く睡蓮の花が一つ
しづかに浮んでゐる、夫もぢつとそれを眺めた、
そして顏見合せて、二人は……默つて微笑んだ……

海濱の初秋

まづ、秋は木の葉におとづれ來て、
小さく小さくなつた木の葉が
大空にたよりなく顫へてゐる、
褐色にまろめられた枯葉が
ばさりと窓から疊の上へ落ちる、
ちやうど小鳥の死骸のやうに。

その疊には、晝すぎの風にゆだねて、
靑白い靜脈の浮いた女の手が
蛇のぬけがらのやうに投げ出されてゐる、
彼女の身體も長々とよこたはつて、
ひと夏の樂欲の疲れものうく
その眼は半ば閉ぢられてゐる。

風は疲れた心にささやく、
靜かなれ、靜かなれ、
熟した心よ、落着けよと、——
げに、快樂は瞬く間だ、
そして後に殘るものは悔恨と疲勞とだ、
その衰へた心から今は理性にかへれ。

情熱の病を癒やすものは常に理性だ。

ああ、この夏！　この避暑地の夏の夜々！
燃える砂と冷たくさかまく波との間で
いかに多くの情熱の火は徒費されたであらう、
幾組のパアトナア、幾個の「ロマンス」——
それはあまりにはかないものである、
さながら濱邊の砂に消えて行く波の泡である。

見よ、その砂濱には、——このひと夏を
いかに澤山の西瓜が食はれたか——
その投げ捨てられた種子がはや芽を出してゐる、
ああ、いかに澤山の一組が爽かな浴衣がけで
夜の海岸を山の方へのぼつて行つたであらう、
そして彼女——美しい未亡人——は、そのリイペライ
　の女王であつた……
しかも、女はしばしば重く償はねばならない、
ああ、ただ一場の戯れを、一夜の愛撫を……
今や、そのすべては——愛も誓ひも——痕跡もない！
まづ、海岸地の並木の上に
二百十日前の風が吹くと、
木の葉はあわてふためいて中空に舞ふ、
そして、避暑客の浴衣姿も、夏帽子も、
みな木の葉のやうに吹き散らされてしまふ、
笑ひも、戯談も、戀の歡語も。

……今、ひとり、彼女は殘る……
彼女の疲勞と悔恨と、そして哀感とをもつて。
このひと夏の生活をかへりみれば
底知れぬ空虚の思ひがひたひたと迫る。
すべては夢だ、むなしい戯れだ、
ああ、あんなに年下の男——若い學生——を相手にし
て

面白さうにふざけてゐた自分があさましくなる……

今は秋である、四周はほがらかである、
眼をあけよ、眼を、半ば閉ぢられた眼を
青空はいかに澄んで清らかにうつるであらうか……
けれども、その空のやはらかな光さへもあまりに痛い、
あんなに夏のはげしい外光の中に泳いだ彼女であるのに……

然し、静かに眠つたやうに横はつてゐても、
その身にふれる秋の大氣のさやけさに、
今、彼女は知つたであらう、
秋がいかに悲しく、しかも安らかなるかを……

古風な詩人

私はつねにつねに、人生の無常迅速をなげき、
罪に生れた人間の業を怨嗟し、
厭離の心に、解脱を求め、
天上をのぞんで、心、雲と化す……

ああ、つねにつねに、私の胸に動くものは
すでに、すでに古い感懐だ、
屈原の、杜甫の、李白の、西行の……
ソロモンの、シェリイの、ハイネの、レオパルデイの……

私は古い、古風な詩人！
私は昔ながらの古い人間の悩みの外を知らぬ……
そしてその古い歌を悩みの中にうたひ、
これを失はれて久しい詩神への供養となす。

貘

夢を食ふ貘といふ獸がある……

みにくい獏はみにくい夢を食ふ、
おれは獏だ、みにくい獏だ、
それでいい――うまい夢にさへありつけば!

だが、もう夢もみんな食ひ盡した……
さて、これから何を食はう?
やはらかな夢の下から出たものは硬い現實、
その現實を、獏よ、おまへも食はねばならぬ!

食ひ付け、食ひ付け、その現實に、
でなければ、おまへは餓死ぬぞ!
獏は食ひ付く、現實に、硬くみにくい現實に……
それでいい――さて、おまへも一人前だ!

もう泣かない

あまりに涙の多かりし過去、

恥かしく、また呪はしいかな!
いま、私の涙は乾いてしまつた、
ちやうど八月の炎天の砂道のやうだ。

その私を、涕泣者、歔欷者と嘲つたものよ、
リテラリイ・テロリストよ、
君はこの私の渇きを知らぬのだ、
君はやつぱりおれを幸福だと思つてゐる。

おれはもう泣かない、
Too deep for tears!
それゆゑおれは微笑ふのだ、ああ、いかに苦く!
おれの目蓋は乾いてゐる、そしておれの魂は渇く……
今それを濕ほすものは、星から落つる一滴のみ……

旅

私はあまりに目のこまかな笊である、
喜びの水は速かに落ちてゆくけれど
悲しみの滓は、のこらず殘りとどまる、
どんな小さな悲しみでも、惱みでも。

ああ、あんまり澤山のものがたまるので
私は堪へられない、堪へられない、
私のまはりにみんな目のあらい笊ばかり、
輕々と動いて、笑つて、樂しさうなのに。

私は樂しめない、神樣の特別の思し召しで
私はどんな小さな苦痛からでもまぬがれない、
いろんな苦勞や屈托の滓に荷積まれて
私は澁面してゐる、私は不幸な笊である。

歸思

この世をかりのやどりとて、
世の喜びにも目は向けず
ただ悲しみをのみかき抱く、
悲しみはあの世につづく海なれば。

この世は異國、しばしさすらへば、
みづからふるさとに心はむかふ。
歸去來！　歸去來！　衷なるものかく聲々に唱ふ、
ねがふ、わが歸鄕の日、その海の凪なることを。

海濱にて永遠を思ふ

ひとり海濱に立つて、
寂寞のうちに永遠を思ふ。

流沙　海を埋めて
遠淺をつくり、廣き磯をつくりて、

磯はやがて砂畑となりし海邊に
たたずみて、瞳をひろくはなてば、
大山は紫にかをり、
低く左に船上山並ぶ。
かの山の麓こそ、
上代の海なりしならずや。

今われここに立つ、
ただ見る近き砂原に
海高鳴りて身を寄する。

ひとりその海の音聞きて
靜かにわれ永遠を思ふ。

ここわが立てるこの砂濱よ、
幾星霜ののち、幾百幾千の歳月の後、
やがては山か野か、流れか原か。

飛ぶ鳥に問ひよれども、
鳥は答へず、
這ふ蟹に問けども、
蟹もかたらず。

さびしさよ、あかき秋の日、
波の音に、ふとわれは覺ゆ、
永遠はわがとなりにあるにあらずや、
いな、わが裏にあるにあらずや。

　こはわが裏日本の秋の滯郷日錄に殘れるものの一つなり。
今、改竄してここに收む。

除夜の鐘

なり出づる
なり出づる

ああ除夜の鐘、
遥かに護國寺の鐘
目白の鐘、
ここにかしこに
ひびきひびいて
年をおくるとて鐘がなる
年を弔ふ鐘がなる。

また、この年も
いたづらに
生きながらへて、
人の世の卑しさに
また少し更に馴染みて、
なりひびく
なりひびく
その鐘の音(ね)きけば、
わが淸らかさ、純朴さを
弔ふ鐘の心地する。

（一九二三年の元旦に）

年の逝く夜に

すぎしひと年(とせ)をかへりみれば
喜びも、悲しみも
わがなしとげしもろもろの業(わざ)も
みな遠く、夢とおもはる。

かくてこの年をかさねて
わが生のをはりの日に
ありしくさぐさをかへりみれば
また遠き夢にすぎじ。

（一九二二年の除夜に）

青空

×

青空の
清きすがたを
こがれつつ、
にごりの中に
われ今日も生く。

×

たちまちに
くもる心も、
はてつひに
はるるをたのむ、
青空見れば。

閑寂心

春の山邊

春の曙
山邊に住めば
まあ、どんな氣持ちだらう、
東の空のしらむより
はやくも白く眼をばさまさす
あちらも櫻
こちらも櫻
四方(よも)の山邊はみな櫻。

春の夕暮
山邊に住めば
何の憂ひがありませう、
浮世のことはみんな塵
望みも野心もみんな夢、
花を雲かと
ながめてくらし、
花と一緒に散るばかり。

初夏

夏のはじめの
氣持のよさよ、
風かぐはしく
日影あまねく
綠の木の葉ざわざわと
影を投げれば、
影も靑々
ほのかに地上に搖れ搖れる、

黄蜂しづかに飛び
たまたま蝶も來る
睡氣きざして
うつらうつら故郷を思ふ。

夏來れば
海邊の畑はみな綠、
麻も干瓢も桑も綿も
綠ひといろ、
よせくる波の靑々と
天も靑々、
心さへ身さへ染まるか
その爽かさ、
朝は朝露、夜は天の川、
浴衣の糊もこはごはと
團扇片手に海に出た
あの故郷の夏げしき。

蘆の葉

さらさらと
さらさらと
晝も夜も
流れてやまず
河のながれは。

さやさやと
さやさやと
流れに添うて
搖れて行く
蘆のそよぎは。

さやさやと
さやさやと

蘆を吹く
風に吹かれて、
われも蘆の葉。

河邊に立てば
われも逝くもの
晝夜を舍てず、
さらさらと
さらさらと。

桐の葉

夕方、庭さきに庭椅子を立てて
それに腰かけて、仰いでみれば、
おお、さかんな靑さ、靑い世界。
たえずざわざわと搖れる中には
小鳥が飛び交うて囀りかはし、
見上げる日のさきに、時々糞を落す。

ふと、大きな鳥がしづかに舞ひ落ちるやうに
パサリと音して、地に落ちつく桐の一葉、
むざんに靑い根もとから折れて。

夏のさかりに滅びた桐の一葉、まだ靑いのに、」
私の望みの落ちたのもこれだつた、
夏のさかりに、ふたりはもう秋だ。

蔦の葉

這ひあがれ、這ひあがれ
靑桐の下の垣根を
軒燈の柱の上まで……

攀ぢのぼれ、攀ぢのぼれ、
つねに高くへ高くへと
天上する蛟龍の姿つくりて……

鎧のやうに、鱗のやうに、
青々と垣根に垂れる蔦の葉の
蔓は小さな足を出す。

詩人の家の垣を這ひまはり
詩人の眼に詩をそよがせつつ、
蔦の葉、蔦の葉、何處までのびる。

萩の葉

孫竹にすがりながら
あんまり高くほつそりした姿、
風をもいとふたをやめか。

あんまりやはらかで
あんまりしなしなしてゐる葉、
こんな女はふしあはせだ。

あんまりやはらかなので
蟲がところどころに穴をあけてゐる、
その葉がそよげば、何だか歔欷のやう。

萩の葉の模樣の中形を着て、
月夜の木かげで泣いてゐた
名も知らぬ女をおもひだす。

梢の雪

一

ふるとしの

雪やいづこと
ながむれば、
花の梢に
今ぞかかれる。

二

さびしさは
むかしながらの
すがたして、
空にしられぬ
雪ぞふりくる。

進　境

歩毎に新しい異なる景色が現れてくる、
おもしろや、この人の世、
その見馴れたものも
見馴れぬものも
みんな新し、うつくしし、
わが新しい心もてのぞむとき。

峽中郎興詩

山の停車場

山のあかつき
ほんのり青い山のあかつき、
明けゆく力は
山の持てる力なるか、
空氣の中に
山にのみ湧き出るやうな
なにか刺戟する芳烈なものがある。
停つて、またもや動き出る
山の停車場の
線路の上のうすあかり、
車窓まぢかに
三人の驛夫が立つてゐて
朝のあいさつをしてゐる、
みんな若くてたつしやな顏だ。
その三人がすぐに別れて
汽車は動きだす、
非常に高い山の間を
大杉が一本
立つてゐるほとりを。

山地小景

山から汽車は徐々に出る、
汽車の窓から下を見る、
小さな草地が目にうつる、
そこに小さな河原がある、
河原に小さな橋がある、
橋からむかうに小徑が見える、」

小徑は草家の前にかくれる、
なんとほのかな小さなけしき。

葡萄畑

湯のつかれ
いとねむたくはあり、
野を見れば
いと青くあり、
野をあゆまんと
ただひとり湯の宿いでて
草の道たどりて行けば、
葡萄の畑
いま花散りて、
青葉も蔓もしなしなと
組み寄せられた針金の棚のうへ
右へ左へ伸びいでてゆく、
そのうねうねのかたち見れば、
この山國の
神のむかしのおもはれる、
かの紫のかざりいただき
をどりくるうた酒の神
ここの土地にもをどつてゐたか、
この地の上にある斑點は
いまもおどるよ、
なほさらにおどりくるふよ
そよ風ふけば。

葡萄よみのれ

葡萄畑の棚の下に
せたけつかへて立つ人が、
葡萄の花の房を見て
指でつむなりあだ花を。

葡萄畑の棚の上に
俤みせる裏富士が、
ものいひたげの象して
われを見るなり旅人を。

葡萄畑の棚ありて
野も山畑も綠なり、
荒壁あるる小家さへ
葡萄の棚にかざられる。

葡萄よみのれ
紫の色濃くみのれ、
とりいれ時に
われも來ようぞ。
都の葡萄食べずして、
笹子を越えて
われもわぎもも食べに來ようぞ、
葡萄よみのれ。

野中の宿り

はつ夏の野中の宿り、
前は麥畑、葡萄の畑、
うしろは山の段畑、雜木の林、
家をめぐる青葉のなかに
ひねもすを小鳥はさへずり、
地つづきの寺の赤松に
松蟬が鳴いてはだまる、
畑中の草の蔭には蟲がなく。

はつ夏の野中の宿り、
日たけるまでねむりて飽かず、

ひねもすを思ふことなく
新聞も見ず、人にも會はず、
成敗利鈍も、世のなりゆきも
遙か武藏の野邊に捨て來て、
心ゆくままに湯槽にひたり
湯よりも溫かい自然に浸る。

はつ夏の野中の宿り、
麻の蚊帳靑々と垂れて
旅寢の夢をいつくしむままに、
障子あけてねむれば
火をしたふ蟲のかずかず
電燈の笠に群れつどひ、
つい目の前の野中の池に
夜もすがら水鷄（くひな）なく。

はつ夏の野中の宿り、
日も夜もなすこともなく
出ては野を步き
かへりては野をながめる、
うつらうつらの夢にさへ
野のかをり忍びただよふ、
旅人の心もて來た宿なれど
今は都の空を旅とおもひて。

花の盆地

甲斐の盆地は花の湖水か。

水のほとりも草みちも
やぶのほとりも賤（しづ）が軒邊も
花で一杯、
じやがいもの花、ゑんだうの花、
葡萄の花、紅い薔薇の花、

花で一杯、
たんぽぽの花、草藤の花、
白い野うばら、すひかつら、
花で一杯。

ふたりあゆみて
君がおゆびに
つみてとらせし花は木瓜(ぼけ)、
青い澄んだ空に見える
一かたまりの雲も花なら、
摘んで君にとやらましを。
山の上からこちら見る
富士のお山も花ならば、
摘みとつて
君とわれとの手にて持たうに。

甲斐の盆地は花の湖水か。

花うばら

土橋かかれる細谷川に
目もさやかなる花うばら、
その白いこと匂ふこと。
野にさいてちる花うばら、
眞實しづかな
花のそなたがうらやまし。

野ばらの路

野ばらの路よ、
家の垣根にも
竹藪のまはりにも、
小川のほとりにも
野ばらは白い。

はつ夏の野に
靑々とした草むらを
白くくぎつて
野ばらよかをる、
明日はちるのに
野ばらよかをる。

明日の身のこと
われもおもはず、
世をもおもはず、
小唄などくちずさみつつ
この朝もひとりさまよふ
野ばらの路を。

野ばらの里

河ばたに出ても野うばら
山裾に出ても野うばら
白々とにほふ野うばら。

靜かに水をたたへた池の
そのひろびろとした溜池に、
富士の雪より白く淸らに
ゆるやかに垂れたる野ばら、
花と影とはひとつに溶けて。

水の上遠いあたりに
點々と漂ふ花びら、
薔薇の家なるテラスをば
おもひ出させる
農家のうらの花の溜池。

晝顔の花

ふたり行く
野路のほとり、
くさむらに
たつた一つ咲いてゐる
晝顔の花。

しをらしや
うすべにの杯を
青草の中にささげて、
さみしげに
ほほゑんでゐる晝顔の花。

「つんで行かうか」と
男がいへば、
「およしなさいよ
かあいさうに、
つんだらすぐに
しぼんでしまひますよ」と
やさしげに花を見ながら
しみじみと女はとめる。

そのあくる日に
男がまたひとり來てみれば、
やつぱりそこに
つつましやかに
なほも咲いてゐる晝顔の花。

青葉の雨

はつ夏の雨は
しづかにしめやかに

山の青葉にふりそそぐ、
一山青く
數知れず
茂り重なる山の若葉に。

とりどりの
色にかたちに
とりどりの思ひをゑがく、
山の木の葉に
野の草の葉に
けふは朝から眞蒼な雨。

野のうへに爽かにわたり
野をぬらす雨、
河にのぞめる野ばらの上に
麥秋の麥の熟れ穗に
棚をささげし葡萄の花に
その棚の下なる蠶豆の葉に。」

塀の外なる櫻葉の
雨にぬれたる葉のかげに
小さなる身をひそめ、
小首かたむけ
遊びごとする小鳥二羽、
ほのあかき櫻の實ついばみおとす。」

ふたりして
世をかくれたる
山の湯の宿、
ふたりの外に客もなく
庭さきの芍藥の花くづれて、
靜かに今日も雨に暮るる。

野を吹く風

風は野を吹く、
はつ夏の風、
甲斐の盆地を吹きすぎる、
その盆に盛られた
葡萄の畑に、麥の畑に、竹藪に、
その畑の間の細路を
ゆつくりゆつくり辿つて行く
都から來た温泉の客に、
客の帽子に、セルのきものに。

風は野を吹く、
爽かな風が吹くところ
いろんな花が咲いてゐる、
豌豆も蠶豆ももう實をつけた中に
まだ薄紫に薄紅にもつれた豌豆の花、
もうすつかり坊主になつたのもあれば
まだ黄色く咲いたのもある蒲公英、
草むらに捨てられたやうに
ぽつつりと浮いてゐる晝顏、
灌木のしげみに蔓を這はせた草藤の花、
平たい農家の軒近にざくろの花、
それらの花模様の地をなすは白い野うばら、
その野うばらが風にちるちる。

風は野を吹く、
花から花へ
花粉をはこぶ蜜蜂と
花のなかだちを競ふやう、
花から花へとわたる風に
吹かれ吹かれてさまよへば、
都の客は、われも草かとおもひみる、
花のなかまのなきもよしや、

風に吹かれて、はなやかな
おもひもちれよ、今の身には
この新綠の野邊のにほひがなつかしと、
ひとりたのしく口笛を吹く
初夏の野を吹く風に吹かれて。

溪河の蟹

山ふところの湯の宿を出て、
葡萄畑のつらなつてゐる
野中の徑を歩いて行くと、
一條の河があつて
土橋がかかつてゐる。

河には大きな石、小さな石、
るゐるゐと重なり合つて
その間を淸らかな水が
チョロチョロと流れてゐる。

河の兩岸の崖からは
夏草がこんもり垂れかかつて、
その中にまつしろな野ばらのむれ、
かぐはしく薫り、散つては點々と
日に蒸された石をいろどる。

しばらくその土橋に立つて
晴ればれと底知れず澄んだみ空を
うすむらさきにかぎる山なみの
上にすゑられた白雪の富士をのぞめば、
駿靑くキラキラと光つてゐる。

目をおとす土橋の下に
丸い石、四角な石の間一尺、
谿河の水は淸らに音立てて

日の光しみいる底の石の間を
ツイと横ぎるは何の魚か。

崖の小徑に、合歡(ねむ)の木が
うすく紅らんだ枝の左右に
やはらかな葉をそろへてゐるほとりを、
しづかに河原へおりて行くと
袂にからむ野ばらの刺が。

足駄をぬぎ捨てて流れに立てば
水の冷たさ、山國の水の冷たさ、
おどろいて石から石へと隱れこむ
一寸ばかりの細い眞黑な魚のすばしこさ。

山水の冷たさを手にも觸れむと
しばしうづくまりてあれば、
その手は小石をひつくりかへす
半ば水に浸つた大きな石を、
ひつくりかへせば、おどろいた
ガサガサと這ひ出した一匹の蟹。

おどろいたこのいたづらものより
どんなにおまへはおどろいたか、蟹よ、
しづかに、くつろいで、自分に滿足して
その平たい石の下に、
平和な一生をおくるおまへは
うろたへて隣の石の下に這ひ込む。

彼も——都のざわめきの中に
絶えず揉まれ揉まれてゐる彼も——
おまへのやうに、おまへの石の下に
しづかにぢつと潜んでゐたいとねがふ。

蟹よ、おまへ溪河の隱者よ、

おまへは幸福だ、身を隱す石があるゆゑ。
その石をもたない彼は
笹子をこえて、四十にあまる隧道(トンネル)くぐり、
ここ甲斐の盆地に逃れて來たのだ
靜觀と安息との幸(さち)を求めて……

山莊閑居

山莊にこもりて三日、
寢たり起きたり
山を見たり野をながめたり
湯にひたり濃い茶をすすり
しづかに今日も詩をおもふ、
ゆるやかな澄める心に
時間がゆつくりゆつくり過ぎて行く。
晝寢の夢をおどろかす人もなく
手紙も來ず、新聞も來ず、
世とはなれては惱みもなく
賞めつ誹りつ言ひ爭ふこともなく、
渦卷きくるふ輪舞をぬけて
のんびりと澄んだ心に
かの犇めきの日もまるでさめた夢のやう。

おもへば何といふ慌しさ
わくわくと戸惑うた都の暮し、
何か書かうとしてゐると
「御免なさい」とおとなふ聲、
はじめての客、その氣質も知らぬ客に
どんな話題を持ち出さうかと惑ひ、
やむなくその生國などを訊ねる
氣くばりに慌しく時は過ぎ行く。

今日は氣分がわるいと

床をとつて寢ようとしてゐると、
「生田君ゐますか」と友達のこゑ、
よく笑ひ、よくしやべる友のいくたり
夜おそくまで話し込む、
その雜談にいつか自分も興がつて
いたむ頭もそのままに笑ひこける、
その翌日のぼんやりとした身の疲れ。

またはジヤアナリズムの面白づくな
ゴシツプの記事に氣分をそこね、
誰れが何と言つてゐたと人の陰口を
いたづら半分に傳へられては不快になり、
またその外の際限のない瑣事に煩はされて
かうして來る日も來る日もが
わけもなく慌しく無意味に過ぎる。
今はそのおとなふ人の聲もなく、

世の煩ひをはなれては
これは絶對に自分の時間、自分の身だ、
この山峽の靑い野中に
かうしてゐる事を誰が知らう、
心の濁りは澱み、澄みてのどかに
時間がゆつくりゆつくり過ぎて行く。

自然の詩

山ふところの
山の上にひろがつてゐる
コバルトの澄み切つた空に
織り出された老木(おいぎ)の木の葉、
絶間なくをどり戯るる、
葡萄と花とで充たされた
この盆地をめぐる
四圍の山から吹いてゐる

山氣の風に
木の葉はそよぐ、
そよぐのでなく
うたふのだ、
綠の舌をかぎりなく
ふるひ動かして
山邊はうたふ。

その木の葉の中に
草葉の中に
聲をきそうて
うたひさへずる
山の小鳥よ、
野の草蟲よ、
裏山遠く鶯なけば
軒近に雀がさけぶ、
松蟬、法師蟬、

黒い袋を下げた蜜蜂
重たげにうなれば、
夜は蛙が池になき
水鷄がなく。

この自然の名もない詩人たちの
ひとり氣ままに歌つてゐる
その聲々を心しづかにききながら、
默々と野路を通り
默々と蚊帳によこふす
都の詩人よ、
都にあつて我れこそはと
思ひあがつてゐた醜い詩人よ、
今こそおんみも詩人である。
聲もなく、言葉もなく、
自然の聲をしみじみと聞いて
われを忘れてその中に浸る今こそ。

詩人よ、おんみの言葉は
あまりに制限されてゐる、
風は、木の葉は、
小鳥は、蟲は、
彼等はどんなに自由に歌つてゐるぞ、
どんな思ひをも
やすやすと聲に出してうたつてゐるぞ、
ああ、おまへも
小鳥であつたらばとねがはぬか、
そしたら戀人のもとに飛んで行きたいと
歌つたのはむかしの詩人のことだ、
今おまへはこの美しい自然の中に浸つて
無心にうたはんがため
小鳥になりたいとはねがはぬか。

人間の子供たちより
もつと單純に、もつと美しいものよ、
小鳥よ、
小鳥よりもつとゆるやかな
おほらかな木の葉よ、風よ。
自然よ、
おんみがほんたうの詩人だ、」
そこに我執はない、
そこに虚榮もない、
野心もない、
自然の詩人に恥ぢよ
人間の詩人たち。

ああ、ほんたうの詩人は
野にある、山にある、
人間も默つて
自然の聲を聞いてゐるときが、」
ほんたうの詩人だ。

山の青空

甲斐に來て
湯の宿に來て、
かぎりなく澄める靑空
ながめくらして、
久々に晴れぬ心も。

塵の都の
塵の中より
大空を慕ひ仰げど、
名利の雲にさへられて
たちまちくもり、にごりくる。

はつ夏の山の空
靑やかにてりはえて、
白雲もみな
山の端にをさまりしづみ、
見るもさやかに心をどる。

人の世に
さはり多くて
はれわたる空も少きを、
靑空をけふも見飽きつ
山にこもれば。

靑空を慕ふ心に、
その靑空をひねもすながめ
その中にとけいりて、
われもアトムとならましと
ゆめみる心に、

永遠の相(すがた)を

この地上に求めてやまぬ
このいためる旅人の心に、
なほもてりはえて見せよ
山の青空。

一九二二年五月——六月
甲府市外里垣村にて

自然の恵み

――雪し解けなばあらはれん

ゲエテ

自序

雪がとけて、黒い土のあらはれる時が、北國の人たちにとつて、どんなに樂しい幸福な時であらうか。曾つて冬と春とのあはひに、みちのくに旅して、私はそれを心から感じることが出來た。幾月も幾月も雪に埋れた生活、それにも堪へてさへをれば、つひにはやはらかな風がそよいで、厚くかたまつた雪の層もとけはじめる。そして、その白い雪の下から、黒い土が顏を出す。それを見た時、人々は、多分、その上に接吻したい心すら起るであらう。

雪がとけると春だ。樹々の花が、みな一時に開くといふ北國の春は、丁度凍つてゐた水が一時に流れ出すやうに、また停滯してゐた生活機能が、一齊に動き出す時である。久し振りの土の上に出て、人々が凧を揚げたり、綱曳きをしたりして、春の回歸を祝ひ遊ぶその氣持は、かの復活祭の喜びにもまさるであらう。

そして、今ふたたび、春は孤獨な人間にもかへつて來る……。彼の冷たい頬にも、雪解の風は觸れはじめる……。彼も長い冬であつた。雪の中に道を失つて、夜陰の奥の一點の火を、それと目ざして行き惱んだ。「慰めの國」や「澄める青空」は、どちらかと云ふと、冬の氣分の集であつた。

「澄める青空」を讀んだ一友は、その詩境をマシュウ・アーノルドに近いと云つてくれた。ただ日本人の傳統的な超脱氣分が、いくらかそれをより自由にしてゐるとも云つてくれた。それはもとより溢美の言で當らないと思ふが、然し、それをやはらかな非難として見れば當つてゐる。求めようとする努力はある、然し、求め得てはゐない。これがほんたうのところである。自分は完成の人ではない、恐らく永遠にさうであらう。

だが、とにかく、遲々として歩いて行く。惠まれないといふ惠みを受けた一人の寂しい男が、躓いたり轉んだりして歩いて行く。眞實を求めて、詩と眞實との相剋に

苦しんだのも彼。智慧の微光を望んで、現實生活の闇黑に顫(わなな)いたのも彼。あらゆる二元の對立に——人生の矛盾と、自己分裂とに惱んでゐる彼にも、物心一如、一如不二の境界が、豫感される……。

知識は智慧ではない。推理は眞實ではない。それは土を蔽ふ雪、山を包む雲である。雪し解けなばあらはれんとは、ゲエテの智慧である。一切の知識の曇りを拭つて、天地の相(すがた)をそのままに眺め得た時、雲は開く萬岳の春の、そのすばらしい風景に、はじめて眼が開いた人のやうに、身も心もふるひわななくだらう。知識にくらまされ、推理に煩はされる事なく、素直な、溌剌とした、無垢な心で、自然を直接に如實に觀なければならない。秋冬を堪へ苦しんでゐたものの春は、ふたたび子供の心にかへることに外ならないであらう。

「澄める青空」を公けにしてから後、二年半の間の收穫をここに收めた。そのうち、「むかしの女」などの如く、その以前の時期に屬するものと、「廢屋の春」の如く、當時の未定稿にその後多少手を入れたものとは例外である。最も新しいのは、「風景小品」中の大半で、その中には、俳諧詩とも呼ぶべきものも多少ある。また、その前の感想的な詩の中には、多分のアッフェクテエションが露出してゐて、最も恥かしいものが多い。この未熟な衒氣がとれて、童心の純眞無垢にかへる日はいつのことやら。

大正十四年二月

雪深し

北國の鴉

それは一羽の鴉だ、
果てしなく降りつめた雪のおもてに
ただ一點、黒く動かぬ物の影。

北國の旅——
わびしい山また山の雪だまり、
遲々としてすすまぬ汽車のうち
ただぢつと据ゑてゐる瞳の
焦點となつた一羽の鴉。

見よ、ここにも見棄てられた一つの生、
これも寂寞道の行者か
黒衣の僧か、
ただ默として、飛ばず、啼かず。

何處を掘つても雪ばかり、
ああ、まだ冬か、冬か、
さがすに餌なく、
絕望に化石したものよ、
不滅の雪に、黒漆の一點火——
これぞ旅人の瞳だ、その魂だ。

ただ飛べ、
果てもない雪の上を。
飢ゑたる北國の鴉、
飛べ、孤寥の天の彼方、
眞はあり。

氷柱

雪の中の條(すぢ)
ひとすぢ、ながながに曳き、
雪のそこひに
見棄てられた野の墓場をめぐり、
たまたま河とあらはれ、
山から山へ
さしわたす樋(とひ)の腐れに
洩る水か、
丈餘の氷柱(つらら)かずかぎりなく
さむざむとつらなる、
年を越すかなしみの水晶
薄日にきらめき、
その劍(つるぎ)、鋭く痛く
心を刺す。

雪の青空

不踏(ふたふ)の雪
山の背かけて
つらなる果てに、
ほそぼそと彳む木立、
まばらまばらに、
針葉樹、落葉樹の枝の寒さよ。

その上に遥か、
青空——
氷りて動かず、
澄み冴えて、死の瞳なす。

日が照れば愈々わびし、
雪の上の青空。

雪のひとつ家

三月の末を、羽後は雪、
野のひとつ家の
雪にうもれて、
ほの見ゆる窓邊に
夜夜、誰か灯をともす、
ここになほ、温かに血は流ると。」

鷲鼻に眼するどき惡婆顏して
ここに、自然は冷然たり、
年年に、日も夜もさいなみ足らず
あはれ人々、
年の半ばは雪にうもれて
焚火のまはり繩をなふ、
かなしい虜に、とがめるな、責めるな戀を、」

をりをりに聞く火の戀を、」
燃え立つ戀を。

三月の末を、羽後の野に
ああ、春は遠い――
まだ長いその冬の夜を
野のひとつ家に火をともす、
ここになほ、若ものの血は燃ゆと。」

雪國の雪の中から
燃え立つ戀を、
火の戀を
とがめるな、責めるな、――
ああ、春は遠い――
雪のひとつ家。

雪の花

——秋田の乙女たちに——

秋田をとめは雪の花か、
黑い眉、紅い脣、
くつきりとかがやく白い肌へは
白樺の、その肌のつやつやと
その幹の直ぐに立つ
姿は春よ、雪の中でも。

雪は秋、雪は春かけて
ふりつもり、君をつつむとも、
その胸にをとめの血はもゆる
あたたかに、淨く、あかあか、
そのやさしの笑まひ、冴えた聲音、
人の世を暖かにする。

ふたたびは逢ふか逢はぬか、
たまたまに、この北國にたどり來て
いつもひとりの旅人は
苦しき旅の果てのながめに、
黑き眉、白き肌、やさしき心に
とりまかれては眼うるほふ。

この旅人に、せめては君よ
ひそかなる祈りをゆるしたまへ、
山なみにつらなる雪と
をたけびする海との間に咲く花よ、
妻となる日もとこしへにたもてその火を、
雪の中に一點の火と燃ゆる心を。

——大正十二年三月、秋田に旅して——

春　近　し

心の中の星

Zwei Dinge erfüllen das Gemüth mit immer neuerund zunehmender Bewunderung und Ehrfurcht, je öfter und anhaltender sich das Nachdenken damit beschäftigt: der bestirnte Himmel über mir und das moralische Gesetz in mir.

Kant.

私は靑空に星をさがした
眼に見えぬ一つの星を求めた、
むなしく、夜毎を、秋の夜毎を。
オリオン、シリウス、無數の星座に
無數の星は光りを競ふとき、

私の求める星は、影も見せず。

眼に見えぬ星がある、
天文學者の觀測はそれを見出す、
だが私の求める星を、彼等の望遠鏡も
つひに私に敎へてはくれない、
それは新しい大望遠鏡も及ばぬ空にある、
それは全くちがつた空のものであるから。

星は心の中にあつた、
私の心の濁りの中に——
ちやうど曇り翳(かげ)つた空のおくがに
人眼には見えず星のしづもるやうに、
濁りの底に、晝も夜(よ)も
しづかにも輝くよ、わが心の星は。

この星を信ぜよ、私の友よ、

空には輝く無數の星座
裏(うち)には消えぬ一つの光、
たとへ今その微光すらも見出しえずとも
私はたしかに信じてゐる、その底には
眼に見えぬ一つの星があると。

夜空さやかに晴れわたつて
銀河の中に、燦たる星斗を仰ぐとき、
人はわが心の裏(なか)の星を崇(あが)めるだらう、
それはカントの「道徳律」か、——
知らず、知らねどその星を發見せんと
私は身を献ぐ。私は心の天文學者だ。

美の頌歌

「滅び行くものは美しく、
美しきものは滅び行く——」

昔、私の胸に響いたこの言葉こそ、
私の生と詩作を貫く
つねに絶えせぬ咏嘆のリフレエンであつた。

すでに、多くのものは滅びて行つた、
あまりに美しくして、この濁生の
罪と汚れに堪へずして、あまりに早く
すでに、すでに、多くのものは天上に飛び去つた。
——そして、つねにつねに殘れるは自分である。

天上にその源(みなもと)をもつもの、
天上に飛びかへること、——
これぞ自然、(ここにのみただ不滅あるを、)——
しかも、私は失はれた美の墓畔に立つて
夜すがら嘆じたこといかに屢々であつたぞ。

いかに、いかに、幾久しく

汚れ、息詰み、ほの暗い地上の柵の中に立つて、
天上を思慕しつつ、
滅び失せた美のために
さびしく挽歌を奏でたのは、げに、この私であつた。

殘存者、——私であつた、
「ああ、美しいものの滅び行くのを
歇なくして眺め過されようか！」
かく、おのれに語つたのは（かの幾度びかの逮夜に）
つねに、つねに、理性なき詩人——私であつた。

たとひかのすぐれた天才の詩が
いかに力強い曲調をもつてゐたとしても、
それは過ぎ行く風の一吹きにも如かない。
しかもあはれな第二流のこの小詩人が
かかる自負の言葉を恥なくしてなほ口にするか——

しかも、自ら嘲りつつも、なほ私は言つた、
「ああ、私の詩は——然し、いかに小さくとも
永遠に滅び行くものに對する挽歌だ、
たとひその挽歌が、あはれにも、また可笑しく、
滅び行くものにもまして迅く滅び行くとも。」

——かくて、つひに、私は自分の醜さを知つた、
つねに、つねに殘存するもの、自分の醜さを。
言へらく、「我れも滅びん、いつかは我れも
滅び行くべき宿命の人間なれば。」
さらば、醜きもの、人間も——また美である。

人間は美し、美しきものを見得れば。
自然はその美しさを、彼に隱すことなく、
彼の眼は、その美に飽くことなし。
しかも、しかも、彼の見るものは、つねに幻、
彼はその眼もて、ただ夢見るのみと、つひに悟る。

失はれた美は、ただ幻に過ぎなかつたのだ、
この肉の眼をもて
誰かまことの美を見得たであらう——
そは、これザイスの女神(めがみ)の面(おも)か、
そのヴェエルを掲げるを敢てするものは死す。

そはこれザイスの女神か、まことの美は、
そを見得たるものは、また美となりて死す、
さらば、滅びゆくものはまことの美か、あらず、あらず、

美に照らされたるもの、——美の美に染(し)み、
美を反映し、美を宿した鏡、その影ぞ。

——まことの美はつひに滅ぶことなし、
されば、ロマンテイック・ペシミストよ
「滅び行くものは美しけれど
滅びざるものは更に美し」と、
いま、汝は歌はねばならぬ、そのヴリエーションを。
いかに、地上の美は迅く滅ぶとも
天上のその源(みなもと)は、つひに滅びず、——
あだかも、水面の影は砕けても、月の完(また)きがやうに。
かずかずの醜きが上に、美の影はさし、
さて語る、「ただ、美しきもののみぞ不滅なる」と。

南方の友に

今宵、雨來らんとして來らず、
ここは全くの無風帶、
行水を終へて着けた浴衣の下に
はやもあたらしい汗がにじむ。
今年の暑さは、三十年來の暑さですよと
夏の夜の露路(ろぢ)に涼みの女房達の話である、

夜分にも風がなくつて寝付かれもしない
この氣候は臺灣にそつくりだといふ。

この暑熱、この寝付かれぬ夜、
その臺灣のおなじ無風の熱夜を
君もなほ未だ寝ないでゐるであらう。
わかれて遠きこの年月を
君はいかに北の首都をば夢にゑがくか、
その面影のあやしくもわが座をめぐる、
わが南方の友よ！　張耀堂よ！
今宵、自分はしきりに君を思ひ出づ。

おもふ、かの銀座の漫歩——
カフエエ・ライオンの三階に、
圓柱のいただく造花の上に置かれた電燈が
造花の靑や紅をうるはしく透かせて
天井に反映してくるその光のもとで、
ぢつと顏を見合はせて微笑む
友と友との樂しい一夕を惜みつつ、
いかに君は高らかに語つたか、
いかに君は肉を食つたか！

また、淸新軒の食後に
君が南方の情熱をもて、
ピアノのキイを打ちなぐつたとき、
いかに、感じやすい詩人の胸が
ウェエタアの目色につれて顫いたかを、
思ひ出づれば、今、いかに遙かなるかな。
故國に歸つてから、今日が日まで
未だ曾つて心から哄笑したことがないと、
君がたよりの言葉の深くも偲ばる。

今は笑はず、ああ、君も今は寂しいか、
我等の友情の樂しい酒であつた

あの全亞細亞聯盟の夢は熟した、友よ今、
故國のために、日本のために、
郷人の同化事業のために君は働いてゐるか。
我も笑はず、ライフ・ワアク、未だ成らねど、
ただ、默して生の負債を償却しつつあり、
昔日の歡笑、再び求め難くて
君をおもへば、首都も寂し。
幸あれ友よ、張耀堂よ！

君は南方の人、我は北方の人、
君を生みしは、かの輝かしい高砂の國、
そこで君は棕櫚やバナナと一緒に育つたのだ、
日本の家の鴨居をうらむ六尺の長身にまで。
君は六尺の巨漢、我は瘦せこけた貧乏詩人、
だが、二人手を携へて歩むとき、
郷土と民族との溝渠を超えて
我は君を愛し、君は我を愛す。

廢屋の春

……今朝、はからずも俗事に强ひられて
私はこの近郊の一角をよぎつた、
絶えて久しいさまよひの道をよぎれば、
藪かげに曲る道かどの立樹一本、
たちまち、わがすべての記憶は蘇り出づ。

ああ、どうしてこの地上の一角を忘れてよからう、
これぞ私の青春のかたみ、
かつてかの人の住んだ家のあと——
ゆくりなく出て來たこの屋敷のあとを
のぞみ見て、しばし何事をもえわきまへず。

このなつかしい、かたみのこの舊屋は、
ああ、まだそのままになつてゐると見える、——

おそらくここに住むべく
人はなほ、その價値を自ら信じえないのだらう。

いつも、いつも、私の心は慌しい、
手から口への生活に追はれ追はれて、
日毎に心はすさみ、頭は荒れて、
昔の夢のあとを偲ぶよすがもない
その今日の私に
（昔日の美しい詩人のなれの果てに）
ああ、何といふ不思議だらう、
はからずも、かかる散文的な用事が
私の最も尊い思ひ出を
このすがれた胸に喚び出したとは！

聖地パレスティナに踏み入つた
十字軍の騎士のやうな心もて、
ここ、かの人の住居のあとに來てみれば、

ありし日の影もとどめず、
もう人が住まなくなつて久しい屋敷の中に、
垣の外に、梅の古木をいただいたきりぎしに、
今朝は土を高くもたげた霜柱、
春も來たと云ふのにこの霜柱、
ほのかにさしてくる日の目の色を見て
さとくづれ、また、さとくづをれる。

崖の上、靑苔を厚く鎧うてをりながら
古木の枝は、睡足らぬげに吹いてくる
二月の風の掌の中に、
鳥肌立つた老人の胴ぶるひして
天をのぞめば、その天を、繭に似たちぎれ雲、
小鳥のやうに群れて飛ぶ。

折れ、倒れ、破られて、今はありなしの垣をくぐれば、
さても驚かれるその荒廢の樣、

（ああ、何の理由がかくまでここを放棄したか）
古池のまはりをこめて
枝は地に這ふ松に笹の葉が雜然として、
げに、名園の昔を偲ばしめる
この熊笹や縞萱の殘骸も
無殘に踏み荒されて、
近道をする闖入者どもの狼藉を語つてゐる。」

この荒廢の中に數多入り組む梅の樹の
花美しく朝日を浴びて匂つてゐる
その下に、さてもぶしつけな野糞のひと山、」
ああ、わが昔日の思ひを嘲るやうに
なまなましくも輝いてゐる、
すべての美しい夢のあとを飾るには
これはあまりの皮肉である！
思ひ出づ、かの日、かのありし日に
わが心の祕密をあかしたとき、
われと同じく詩の道に志したかの友が
からからと笑つて言つたかの言葉……
「君はまだそんな莫迦な夢をみてるのか
自然主義の時代ぢやないか、
おれは君がジフィリスにでもかかつたなら
君も一人前になつたものと
喜んで祝福するが、
そんなロマンチシズムはもう時勢おくれだよ、」
やるならやるで、
底まで徹するんだ、肉まで行くんだ！」……

ああ、その頃は
實際、自然主義の時代であつた、
現實暴露の悲哀、
それが當時の合言葉だつた——
然るに、このおれは

何といふ反時勢者、
何といふアナクロニスト、
何といふあはれなロマンチシストだつたらう！

手を觸れ合つたこともなくして
すぎ去つた日の夢をおもへば、
相見ざること、はやも十年、
既に人妻である彼女をおもへば、
かずかずのよくない人の噂を聞けば、
（それをまこととは思はねど）
いかに屢々、わが心は痛んだ事であらう。）

……それも過ぎた。

その愼みぶかさ、その美しい夢……
それが何で自分の誇りであらう！
自分は經驗のない少年だつたのだ。

ただそれだけに過ぎないのだ。

プラトニック・ラヴ！
ああ、何たる愚かなイデエだらう！

だが、あまりに年の若いものにとつては
この外に何が與へられるか？
そのとき人は戀すべく十分に熟してゐないのである。
しかも、その上、
かくも、心弱いあはれな人間にとつては、
ああ、ただ永遠の悔恨があるのみである！

いま、このあさましいばかりの荒廢の中に立てば
なぜ、あの時に、あの園を
心ゆくまでそぞろあるきし、
この園に咲き出してゐた花を摘み摘み、
生活の曙に甘美な春を味ふこと、

ちやうど苜蓿の根を吸ひ盡す
子供のやうで自分はなぜなかつたのだ。

彼女と別れてからの自分は
いろいろと試みた、それも常にひかへ目に、
まだ一度も心ゆくまでの快樂を享けなかつた。
おもへば自分の半生は空に過ぎた。
力強い拳もなく、剃刀のやうな世智もなく、
とりわけ厚顔不敵の心術の天惠もなくて
ただ、ほんの僅かばかり夢みたばかりだ。
何といふあはれな男だ、このおれは！

この廢屋にも、れうらんの春はかへつて來ようとして
　ゐる、
だが、いかに花は咲き、風は薫るとも無駄だ、」
誰か再び我等の春をかへし得よう、
かの人はすでに人の妻、人の母、

われは今なほ零丁孤苦の貧詩人——
春は永遠に行つてしまつた——
「永遠に……永遠に！」
かうくり返して、私の心はむせぶやうだ。

ああ、早春の朝、昔の人の屋敷あとに來て見れば、
今も名殘の一木一草が、
わが空にすごした青春の思ひ出の
その一つ一つの苦い記念！
これがもし、かの折りの若い身空の事であれば
涙はいかばかり落ち落ちたことであらう。

世路艱難、貧しき半生の辛酸に
當年の意氣も銷磨し盡した
今日のこの中年の心にも、
言ひやうもない激情が雲と亂れて、
悵然としてわれ佇めば、

ひらひらと梅の花びら
涙のごとくわが肩に
ふたひらみひら散りかかる。

むかしの女

むかしのことはみんな忘れた！
（さう、口に出して言つてゐた自分だ……）

人通りの多い通りの坂の半ばで、
むかうからくる一人の女に、
ふと、何氣なく眼が落ちたとき——

「おや！」と、まるで誰かが言つたやうだつた。
眼はその女に釘づけにされた。

彼女もその眼をまともに据ゑた……

眼と眼はつながつた……そして切れた。

「……彼女だ！」と私は低く聲に出した、
そして又も振返つて、その若い女を見た。

眼と眼とは再びつながつた、
彼女も振返つて見てゐたのだ！

「彼女にちがひない！……あの眼だ！」
忽ち、十年の昔にかへつた、
自分が上京したばかしの筒袖の少年だつた時代に——

私は今にも聲をかけようとした、
「だが、待てよ、不思議なことがある！」
と、私は坂の下へと遠ざかる姿を目送しつつ考へた。

「彼女はあの時分おれより四つ年上だつた、

彼女はもう三十四五の筈である、
それにあの女は……まだ二十四五だ！」

やつぱり違ふのだ、あんなによく似てはゐるが……
彼女が今こんな若さであつたなら
おれはあんなに子供扱ひにはされなかつたらう。

おれはすつかり滅入り込んで家に歸つたので、
「どうかしたんですか？」と家のものが訊いた。
「ウン、何でもない」とおれは答へて、
長いこと、ぢつと灯かげを見ながら考へてゐた。

秋を歩む

秋が更けると、野にも山にも、
落葉が風に飛ぶ、心に迷ふ。

ふるいものはみんな枯れるのに
人の心の古傷のみはうづきだす。

ひとり、ひとり、佗しさまさる朝夕よ、
晝日さへ手足にいたくしむ秋を歩む、
街道はだんだん伸び走り、
數條の車のあとも伸び走り。

空の碧さよ、雲の白さよ、
その雲は秋風にはためく旗か、
かぎりなく澄む空ゆゑになほ佗びて
孤獨にしづむ旅人の胸にはた鳴る。

歩みつかれてふと見れば、道のかたはら
萩と薄と、一かたまりにやや埃ばみ、
風にみだれて顫へてゐる、
萩の葉は蟲ばみ、薄の穗は伸びほほけて。

ふたりで暮した十年を男はおもふ、
悲しく、つつましく、世の片隅に生きる身を
佗しと見れば、佗しい萩すすき、
その根もとに投げ捨てられた草鞋のかたあし
雨に朽ちたる姿にも、ああ、秋は身にしむ。

早春

枯れた蔦蔓の絡んでゐる竹垣の上に
南にむいて差出た古い梅の樹の
その枝にはもう小さな蕾らしいものが見える、
春が訪(おとづ)れてくると、
いつの歳にでも
いつの間にか、白い花が咲く、
今月けいつ頃咲くであらう……

さう思ひながら椽側に立つてゐると、
つひ目のさきを、
そ、そ、そ、そと行つてしまふ影、
小さな青いものの影……
高くはのぼらないで、そこここにとまり
音もなく、家の横へとかくれてしまつた。

何處へ行つたらう？
あれは鶯だつた——
去年の今頃、毎日私の家へ來て、
なつかしげにさまようてゐた鶯、
梅の花が咲くころ來ては美しい聲でなき、
この花の散る時分にはゐなくなつた
あのかあいらしい鶯——

多分、戸山ヶ原の林にすんでゐるか
或ひは、目白あたりの邸の庭園にゐるのか、

こんな町中の家並を
谷渡りする鳥たちのやうに、
そ、そ、そ、そと音もなく
おとづれ歩く、早春の訪問者！
おまへは私の小さな喜びの伴侶(とも)、
遠慮しないで、毎日來ておくれ。

春近し

停車場を出れば、驛前にならぶ茶屋、
「御休憩所」の小旗が軒端にピラピラして
紅い襷に姉さんかぶりの忙しさうな立働き、
入口の柱に馬を繋いで入つた馬子と話してゐる。
道を左に——陰氣くさく並んだ商家の間には、
たまたま自轉車の修繕屋があるとおもへば、
土龍(もぐらもち)とりの器械を賣つてゐる店がある。
——いかにも、郊外の町である。

町を出はづれて、街道を一筋、
はじめての道、しかも見覺えのある道、
いつか何處かで見たやうな道——を
行き行けば、行き逢ふものは
瘠せて小さな牛にひかせた荷車、
風呂敷包みを重たく背負うた老婆、
見おろす稻田の刈株になほ寒さは湛へても
麥の芽の青んで、春をほのめかしてゐる。

わき道すれば、ここは靜かな世の片隅、
この靜かな世の片隅が自分にふさはしい、
狹い小路の兩側にこんもりとアーチづくる
枯笹の床に、パッと二月の日がさして
風のない午後の暖かさに、そつと腰をおろして
外套のポケットから
エアシップをとり出してマッチの火をすれば、

火の色は見えずして、煙は立ち、
しづかにふかす一吹きに
靑くゆらゆらと立ちのぼる。

枯笹の堤の上は一帶の休閑地、
枯草の上からは、はや若草の芽生して
來らんとする春は、ここにもこもる。
かなたに櫻の若木、影を落して
惱めるものの寢床によく、
身をながながと差しのばし、
春ちかき午後の日の眼にまぶしく
うつらうつらの夢を催す。

風景小品

椿

藪かげの田舎家だ、
むざうさに荒繩かけた
生垣の雜木のなかに
たつた一輪、
細枝の花を見つけた。

小松山

サッと雨が來た、
むかうの靑い小松山が
一層靑く見える、
その中にひとところ
禿げこんだ赤土が
一きは目立つ――
十分ほどすると、
どつとそこを
水が流れ出した。

萱

まんまんとたたへた大河（たいか）、
その靑い水のおもてに
ひともとの萱がさし出て、
風吹けばしづかに動く。

山吹

ゆらゆらと

水のうへふかく垂れた枝、
垂るるほど花をつらねて
濃みどりに黄をばちりばめ、」
散る影の
はらはらと水にうかべる。

涼景

きれいな松だ、
長い長い松並木の
青い葉の網目が
海を漉(こ)してゐる。

春

山から出ると、
黄色な菜種の花ざかり、
ぢつと見てゐるとねむくなる。
遠くの村で、
鶏(とり)が時をつくる。
廣い湖水はぼつと霞んで、
舟が一つ、ぢつと動かない。

山川

山はみな崖のやうに
野を壓(あつ)してゐる、
見るかぎり黄色だ。
その中をたぎり落ちる山川、
濁川(にごりかは)——

水にふれる石みな赤く、
明礬色(みやうばんいろ)の濁り、さむざむと
ゆらめくは針金の橋。

河原は曝れて、石累々と、
うらがれの薄がたわむ
藏王の山風、
颯ッと湯上りの肌を刺す。

やがて積む
二尺の雪の前觸れだ。

山路

行つても行つても
おなじ雜木の路、
まがつてはつづく一筋——
何處やらに水の音、
枯草の下、落葉の下を。

頬かぶりした男——
枯薄。
誰も來ない、
鳥がチチと啼く。

急に人が戀しい、
日が落ちて、寒くなつた。

霜

まつしろな霜だ、
霜よけの藁が、畠の畝が
きらきらと朝日に光る寒さ。
「深い霜だで、ここらは……」
「うちん方はこんなでない」
二人とも髯もぢやの親爺だ。

山の湯歸りの自動車の上、
白い息を風がさらつて行く、
角ばつた左右の山が寒い――
もう村は見えない、
山蔭からつゞく路には
たゞ太い轍のあとが二すぢ。

夜霧

夜霧の晩であつた、
ひつそりとした片側町であつた。
私はものの象のぼんやりとしか見えぬ
その片側町を歩いてゐた。
私のむかうを一つの影が行く、
三十をすぎた女の影だ、
裾の方がひどくふくらんでゐる。
通りすぎて、ふりかへつて見ると、
その女の前かけを頭にかぶつて
七つ位の男の子が歩いてゐる、
母親の足よりさきへ、自分の足を
おづおづ出しながら。
ぼんやり立てこめた夜霧の中を
その一つの影がまぎれ込んで行く。

初秋

この人通りのない海邊の村に
誰も知り人のない私です、
まひるの日ざし強く射て
家の間から光る入江。

がらがら空の荷車をひいて
女の兒が二三人横から出て來た、

私は何か云ひたいのだが
默つてそれを見るのです。

白帆は遠く沖に泛びて
ほのかに見ゆるは伊豆の山か、
捨小舟三つ四つ並び
船蟲が群がり這つてゐます。

潮が次第に上げてくるころ
そこはかとなく歩いて行くと、
砂地に廣い廢園があつて
白い木槿の花が咲いてゐます。

薄に蔽はれた丘の上には
赤い屋根の洋館がたつてゐて、
高い風車の大きい矢が
海風の方向を示す初秋。

旅と家居

秋の客

ひとり海邊の町にやつて來て
見も知らぬ町をよこぎれど
あやしみ見る人もない。
ここは夏三月がほどの海水浴場、
たのしい若い人たちが
どんなに群れ戯れてゐたであらう。

今はもう十一月、
夏の姿は去つて遠く
秋の思ひを抱く秋の客ひとり、
ひねもす宿の二階のてすりにもたれ
目したにつらなる海をながめる。
鈍くくすんだ灰色の海のおもてに
一列に白くわき立つ波の高鳴り
ひねもす止まず、私の心、
なほその亂れをうつしやまず、
秋も十一月、秋の詩人、
ひねもす海と默語を交す。

さびれた濱で

波が砂地を嘗めてゐる、
砂地に横はる平たい岩に
碎けた波が白く飛び散る、
濱には人影一つない。

ここに飛びまはつてゐた

少女たちは何處へ行つたらう?
あの腹立たしげに吼えてゐる波の中へ
輕々と飛び込んでゐた若者達は?

彼等はゐない、彼等はゐない、
また夏が來て、この濱が
旗や天幕で飾られるとき、
彼等は再びここに歸つてくるであらうか?

彼等は再びここに來るかも知れない、
わたしは再びここに來るであらうか?
さびれた濱をひとりさまよひつつ
再び捉へがたいこの刹那の尊さを思ふ。

漁り火

秋ふけてすでにはるかに、
上總(かづさ)のみなみ勝浦の
宿の二階に客は一人、
人氣(ひとけ)なき部屋のつらなり
ことごとく共に海をきく。

朝より海はなごやかに、
目にむかふ潮見岬の
御社(みやしろ)の千木(ちぎ)のみたかく、
ああ何のこころか、夕空かけて
白い鳩が二つ飛んでゐる。

山なみ落つる興津(おきつ)ちかく
波は岩礁(いはね)に雪とくだけて、
夕ちかしと海のひとつら
碧(みどり)は深み、漁り船(いさりぶね)
歸らんとして見えなづむ。

秋刀魚(さんま)つる漁り火(いさりび)いくつ
はやも沖邊に螢なす、
そのもゆる火に愁ひをてらし
ひとり默(もだ)せる秋の旅人、
漁り火を見て何か云はぬか。

夕暮富士

犬山城の天守から
見おろす眞下——
淙々と流れる水を
眼で聽く。

鳶のやうに翼をひろげて
中空にかかる
樹々の梢の下に、
赤岩に白くはねる水。

流れに泛ぶ舟の小ささ、
砂洲の上にも
黒い點がひとつ、
オーイオーイと呼ぶ聲も微か……

對岸の水のまがる角、
ぽつちり置き去りにされた
小さな山——
「あれが夕暮富士といふのですよ」

可愛らしい富士ではないか、
あの上に夕日がかかるまで
私はぢつとぢつと
日本ラインの水を見てゐたいと思ふ。

蟋蟀橋

はつ夏の雨しめやかに、
岩に新樹に水の流れに
ふりそそぎては、ひと色の
みどりに溶くる山中（やまなか）の
こほろぎ橋の橋のうへ、
傘さしかざしたたずめば、
この身も葉末をすべり落つる
みどりの雨のしづくかと
おもふばかりの爽かさ。

柴山潟

蘆の若葉がさらさらと
ゆらめくたびに、捨小舟
かすかな波にゆらゆらと、
人影さへもゆれるとき、
思ひだしたか行々子、
蘆の若葉のはてに啼く。

旅情

旅をして、
地方の町のカフエエに入るのが
私は妙に好きだ、
その町の者のやうな顔をして
ゆつくり腰かけて
默つて麥酒を飲む。

はじめての金澤、
電車を下りたさかり場の
香林坊の手前、

カフエエ・ブラジルの片隅で
さうして入り替る客を見てゐると、
ほのかに旅情が催す。

五六人の可愛い少女の
白いエプロン、
年かさなのはとりすまして、
時々、兩側の壁一面の大鏡に
うつる姿を氣にして
髮に手をやつてみたりする。

年下の二人、何の氣もなく、
キヤッキヤッといつて
卓から卓へ追ひかけ合つて、
叱られて、きまりわるげに、
一人が自分のむかうの椅子に來て
ぢつと新聞を讀み出す。

十四五の丸顔の娘だ、
時々、顔をあげては
自分の顔を見て、ニッコリして
麥酒をつぐ、その二本目には
ほのかな醉ひもこころよく
いつか他愛のない無駄話。

新聞の小説が面白いといふ、
よく分るかと問へば分るといふ、
「あなたも小説がお好きですか」
「あまり好きぢやないが時々讀む」
かう答へてフッと笑ひ出せば、
少女も笑つて麥酒をつぐ。

それから一年たつて、また春の末、
京の旅の歸りに蘆原(あはら)にまはり、

また金澤のなつかしく
立寄つたブラジル、客も稀れに、
年かさの美人の女給はもうゐないで
あの娘がやつて來た、白いエプロン。

一年前の旅人と知るよしもなく
麥酒を持つて來てついでから、
また新聞を讀みはじめる、
やつぱり小說は面白いのか、
やや大人びたその顏の白粉のあと、
旅情にはかにわいて、寂しく麥酒のむ。

別宴

旅立ちのまへ、
停車場のレストオランで、
見送りの二人の靑年(わかもの)と

麥酒のみ、曹達水(ソオダ)のむ。

京都への初(はつ)の旅立ち、
嵯峨(さが)は若葉か、
御室(おむろ)は花か、
春におくれた四月盡(しぐわつじん)

旅をかたれば旅心地(たびごこち)
今夜は寢られぬナ、
まあいい、飲まう、
發車までまだ半時間。

春の夜の旅

右手にトランク、肱突いて、
ただ默々と、うなだれて、ぢつと目つぶる
わたしはひとりの旅人か、

急行列車の片隅に
春のひと夜を山から山へ
はるかに、はるかに、はこばれる。

わたしはさびしい旅人か、
地軸のはてまで、
何處といふめあてもなく
見知らぬ國へ、遠い他郷へ
ただ、空しく空しく、はこばれる、
人生をとほして、人里の限り貫ぬき。

春の夜の旅——はるかにも
はこばるる思ひはてなし、
何處かに、何處かにやすらふべき
樂しい寢床があるであらう、
わたしの故鄕はあるであらう、
はこべわが汽車、ひと夜をこめて。

ほのぐらい燈火(ともしび)、旅客の夢を照らす
中に醒めたるただひとり、
限りなき想ひを追へば
身の寂しさがひしひしと心をこめて、」
ただ深く、深く、地軸の國へと
落ちて行くかの想ひする、春の夜の旅。

ふるさと

夏のあけがた、
ふるさとの海のほとりに
搖れてゐる、
靑むでゐる、
砂の畑の
その葉はゆかし、
おもひいでてもさわやかな。

瓜の葉、麻の葉、桑の葉の
葉うら葉おもて
葉おもて葉うら、
みんなひといろ
靑い夢からぬけたいろ、
蚊帳(かや)をでてまた蚊帳かとおもふ
そのふるさとのなつかしや。

花咲かず

うす桃色の大きい花が
枝一杯に咲いてゐた赤城つつじ、
荷車につんで賣つてゐたのを
買つて來て庭にうつして
もう四年、ただの一輪もさかぬ
山戀ひしげにただ靑葉。

寂しい姿

家のものが我孫子(あびこ)に行つて
沼のほとりで取つて來た
いゝしどみの木と野すみれが、
小さなわが庭に植ゑられて
ちよんぼりとしてゐるのが
毎朝わたしの心にかかる、
丁度わたしが子供のときに
殖民地でくらした姿のやうで。

蔦の葉かげ

今年、蔦の葉は
靑々と大きくのびた、
粗末なうちの竹垣も

これでまづよくなつたと、
ぢつと見てゐると、
のび上つたその葉の下に
小さなやもり二つ、
びつくりしたやうに
身をひそめてゐる。

おや、おまへたちは
まだそこにゐたのか、
去年の造作のをりに
すみなれた壁板を追はれて、
それから何處へ行つたらうと
その後も時々氣になつたのに、
そんなところにゐたのか、
いいから、こはがらないで
いつまでも仲よくおくらし、」
その蔦の葉かげに。

旅をおもふ

旅すれば旅の心もいそがしき――
わが旅日記にはかう書いてある、
だが、家にすわつて旅をおもふと
すべてはなつかしく樂しいものだ、
苦しい長い汽車の旅、
慌しい發車のひまに買ひ込む
おきまりの辨當、土瓶のお茶までが。

京の四月の東山、西山かけて佛寺めぐりに
威勢のよかつた車夫の樣子もなつかしく、
裏日本の小さな湖水に波が立つて
佗しく雲の垂れた日の女中の話、
一時間、二時間、山の林をさまようて
人戀しさに、何處とも知れぬ水の音を

聞いてゐた時に出あつたあのお孃さんの顔——

心は人につながれ、旅につながれ、
旅からかへつて幾週日か、
もう旅の誘ひに堪へられない、
机の前で、心は遠くさすらうてゐる。

靑竹

きれいな藪だ、靑竹は
すいすい伸びる、
伸びゆくままに節遠く。

靑竹に節のあるやうに、
人の一生にも
苦勞の節がある。

靑竹のすぐな姿を
見てあれば、
苦しんで生きるもたのし。

新しい曉

いい曉だ。
霜がおりてゐて、空は神祕的に
靑く冴え冴えしてゐる。

熱い熱い火をおこす、
私たちの幸福のスパアクル——
活き活きした眞赤な火。

はじめてこの火をつくり出した
原始人の狂喜の聲が、
私の胸から木精する。

疲れた生命は蘇つた、
今日もまた、一日の勤めに
この心もて生きて行かう。

秋窓月夜

わが窓は
葉うら葉おもて裏枯れの
蔦の埀れ葉のかざる窓。

わが窓は
あつき秋陽のかげ落ちて
夕星一つ光る窓。

わが窓は
苦しき世にもなほ耐へて
生きて行かんと思ふ窓。

眞夜中に
窓より見れば秋の月
西へ西へと靜かに行く。

感想詩

或る時

一

おまへのやうなものが
善くならうだとか、
智慧だとか眞實だとか
云ひまはるのは、
身の程知らずの骨頂だよと
或る人が嘲つた。

生れつき善いものなら
今のままでいい筈だ、
自分は惡いものだから
善くならうと思ふのだ、
それが身の程知らずだとは
どうも合點が行かない事だ。

私だとて善くなりたい、
いくら笑はれても善くなりたい、
愚痴だから智慧を求めたい
虚榮だから眞實を求めたい、
それがわるければ
何とでも云つて嘲つてくれ。

二

えらくなりたい、
ほんとの意味で。
何と罵られても
默つてゐる心、
どんなに迫害されても

されるが儘、
どんな辛い時でも
笑つてゐたい。
えらくなりたい、
世間的でなしに。
そんなことさへ
思はぬほどに、
えらくなりたい。

三

此頃の詩は
おもちやのやうに綺麗だ、
見た目にパッとくる
まるで活動の繪看板のやうだ、
目あたらしい文字や
妙な言ひまはしをして
わけの分らない詩ばかりだ、
そんな詩を見てゐると
もつと素直な
もつと單純な
内容ばかりの詩が書きたくなつた、
何でもいいから
云ひたい事を云はう、
感じた事をそのまま書かう、
或る時、或る時の自分の息だ、
それが詩でなければ
詩でなくもいい。

四

なんにも分らないものが批評を書く、
そして威張つてゐる。
なんにも分らないものは幸福だ。

×

人を罵つて罵つて罵りぬいたとき

おまへは寂しくはないか、
寂しくなければ、とても救はれない。

×

悪く云ふものは悪く云はれるものよりも下だ、」
悪く云ふのは、相手よりも身を下す事だ、
それでもまだ悪く云ひたいのか。

歩み

寂しい時は
ただ歩くがよい。

賑かな町でもいいし、
ひつそりとした露路でもいいし、
埃にまみれた木のならぶ
公園の中でもいいし、
ただ歩くがよい。

ゆつくりと
ゆつくりと
歩いてゐると、
どんな小さなものでも目にとまる。

見なれた平凡なごくつまらぬことが
ふつと光彩をはなつて心を打つ時は、」
一つの幸福を見つけたのだ、
一つの眞實を見つけたのだ。

その日は尊い。

友達

仲のよい友達同志を見ると
いい氣もちだ、

互ひに信じ合ひ
互ひに愛し合つて、
一人が倒れさうになると
みんなして支へてやる、
一人に善い事があると
みんなして喜ぶ、
その寸分隙もない友情が
みてゐて羨ましい程だ。

蔭で悪口を言ひ合ひ、
一人に何かいい事があると
厭やな顔をして
けなしつける、
一人が高く登らうとすると
寄つてたかつて引きずりおろす
そんな友達がある、
寂しいことだ。

論　語

論語といふ書物がある、
いい本だから讀めと教へられて
一生懸命に讀んだけれど
ちつとも面白くなかつた。
それから十五年ほど經つて、
ふと取り出して讀んでみたら
實に面白い、
温かい、やさしい、賢い本だ。

恩　寵

惠まれないと云ふ事で
惠まれるのが、
ほんたうの惠みだ。

これがわかるのは
恵まれない人だけだ。
ほんたうの寂しさに
堪へた後でなければ、
これは分らない。

裁く心と宥す心

愛なきものは裁く、
自ら省ることなきものは裁く、
心傲れるものは裁く。

×

愛するものは宥す、
自ら罪を知るものは宥す、
謙りたるものは宥す。

×

人を裁くものは、人に裁かれる。
人を宥すものは、人に宥される。

×

人を裁くものは、自らを裁くのである。
人を宥すものは、自らを宥すのである。

×

私達は他人を裁くことによつて、
直ちに自らを裁いてゐる。
私達が他人を批評してゐる時は、
いつも自分を批評してゐるのだ。
人を裁く心が、人の地獄だ。

×

人を傷つけようとするものは、
結局、自分がきずつく、
人を罵るものは、
結局、自分を罵つてゐるのだ。

×

私達は人を宥さう、

人を傷つけようとたくらむまい、
人を罵ることをやめよう。
これはまた、自分自身を高める道だ。
かうして私達ははじめて一人前の人間になれる。

×

眞に己れを知るとき、
人ははじめて人生を知る。
眞に人生を知るものは、
他人を裁くことをやめる。
彼は凡てを宥す——
その宥す心の中に、彼の智慧がある、
彼の勝利がある、彼の救ひがある。

東洋人の智慧

若い時、私は心にかう云つた、
「下を見るな、上を見よ」と。
私は上へ上へとのぼらうとした、
だが、世間の閾(しきみ)は高かつた、
蹉跌又蹉跌……苦しかつた……

やがて、疲れた心にやはらかに
古い東洋人の智慧がささやいた、
「上を見るな、下を見よ」と。
かくて、やうやく、平凡人の安心を
私は世の片隅に探し求めた。

そこから、私は静かに世を眺めた、
「上をも見よ、下をも見よ」と。
けれど、その凡てはいかに空しかつたか、
私は眼を閉ぢて自分に云つた、
「上も見るな、下も見るな」と。

だが、たうとう、私は知つた、

もつと自由な、廣い世界を。

「上もない、下もない——」

「一切の比較を絶し、一切の差別を超えて、」

ここに東洋人の眞の智慧あることを。

銷魂の秋

哀歌

今夜は幾日(いくか)、月は出ない、
空は冷光の星にかざられて
何事もなげに地を蔽ふ。

星よ、おまへはこの土地を見る、
痛み傷ついた大地を
裂けた地上を、
崩れ落ちた海を見る、
隆起した港を
失はれた都市を、
暗い灰燼の中によこたはる
死者の骨片を、その堆積を。

おお星よ、
おまへはそれを見て悲しむか。
悲しみもなく、喜びもなく、
おまへは冷然としてそれを見てゐる。

だが、その地上の一角を
目にさだかならぬ壞滅を
ただ見てすぎるにも、人間は
心は重く重く沈んでくる、——
かうして大きな闇の中を
幾時間も幾時間もわたしはさまようた。

九段の坂の上から、悲しい心で
ずつと市街を見おろすと、
バラックはここかしこ

仄かな灯影を見せてゐる、
いかばかりの嘆き
いかばかりの諦めが、
そこにその暗い提灯の火を見てゐるだらう。

疲れて、沈んで、
うちのめされた心もちで、
暗い路をかへらうとすると、
空はあやなくかきくもり
雨がはらはらと降つて來た。

十七夜、美しい月かげを見ず、
降るは雨、バラックの上に、
日本橋、京橋の死滅せる建物の上に、
ひと雨、ひと雨、寒くなつてゆく
秋の夜の雨が降り出した——
灰燼と、焦土との上に。

バラックの歌

闇にたよりない足もとさぐり
累々たる燒跡の中を歩いて行くと、
碎けた煉瓦の山のかげに
小さなバラックが一つあつた。

十四五の色の白い娘が一人
二十五六の背の高い若い男が一人
四十ぐらゐの女が一人、
この三人が小さい提灯の灯の下で
荷物をひろげて何か話をしてゐる。

ふと、その娘がやさしい眼をあげて
若い男に聲をかけて笑つた、
娘はこんな時でも愛らしく笑ふ、

こんな焼野の中で幸福さうに
その紅い美しい頬を染めてゐる。

だが、その笑ひをみるものは
涙ぐましくなるであらう。
バラックのそのわび住居には
これからの夜寒の夜な夜なは
冷たい風が吹き込むだらう！

そこに住まうとするものは
お互ひに仲よく、
お互ひにやさしく、
お互ひに慰め合つて、
その袖は袖にかさね
その肩はその肩にそへて、
共にあたため、共に夜寒をしのぐやうに、
爭ひと不人情とのあとをたつて
愛し合はずば、
親も子も、兄弟も夫婦も
その狹いところでは一緒にゐられぬ。

それが幸福だ、
不幸の中の愛のたまもの。

たつた一つの提灯の火が
電燈にかはる時が來ても、
その仲は睦まじくなくてはならない、
それがバラックの佗び住居。

生き殘つたもの

蟲が啼いてゐる――
ずつとむかうの片隅で、

あの大地震のために
その屋根瓦の搖れ落ちた家のむかうで。

蟲が啼いてゐる――
いつもの秋の夕のやうに、
幸福者(しあはせもの)よ、おまへは生きてゐる
この間の地震にもけがをしないで。

滅びた都の片隅に生き殘つた、
こんな秋を、おまへは啼くために。
あの燒跡のバラックのまはりには
おまへの仲間はもう啼いてゐぬであらうに。

寂しい家族

九段坂の上から見れば
キラキラ光るバラックの波、
ぢつと見てゐる私の眼には
あの震災後の十五六日目に
本所のはづれで
なにげなく心にとまつた
寂しい親子三人の姿が見える。

燒けあとにかへる群れにまじつて、
妻は嬰兒をかかへ
夫は荷車をひき、
子は大根のふといのを一本かかへ
埃にまみれて歩いてゐた
あの家族も、
あの何處ぞかに住んではゐまいか。

寂しい秋

あの大地震があつてから、

日かげはほとんど氣も付かぬうちに
だんだんに暮れ足が早くなつて、
目の前の窓かけの硝子戸に
しばしかげるかと思ふまもなく、
はやも薄れて夕暮となつてしまつた。

中陰を喪にこもるやうに
ぢつとたれこめて、幾日はすぎた、
寂しい秋よ、今年の秋よ、
これがあんなに待たれた秋であつたか、
秋はいまその魅力をばすべて失ひ
秋すでに冬のここちする、今日も籠れば。

淸平稿

本是山中人。愛說山中話。

介石錄

雲

大空をただよふものと
見てやまん、
とどまりがたく
鎭まりがたく、
山の上の
石には似ざる人心。

生くる身なれば、
雲のごと
鎭まりがたく
ただよひて。

不二

清平稿

藍であるとも
靑であるとも、
はつきりと云ひわけられぬ
天の色こそは
心にたとへめ。

愛であるとも
憎みであるとも、
はつきりと云ひわけられぬ
人の心こそは
空にたとへめ。

杳かなる浪に

杳かなる浪に目をこらす、
ぬれたる沙の上にたたずみしとき
そはわが心に惱みありし頃なりき。

杳かなる浪に目をこらす、
空の下なるその波動にむかひしとき、」
そは平らかにはあらざりき。

杳かなる浪に目をこらす、
白き帆の二つ三つよこぎるとき、
そはしづかにはあらざりき。

ものなべて平らかならず、靜かならず、
その動くとき、生きてゆくとき、
そは戰ひを辭せざりき。

潮のごとわれに叛逆のこころ起りたり、
わが心にはげしく背く心もえたり、
かくてわれ生くることを得たりき。

水を戀ふ

秋近からんとして
わが旅愁また新らし、」
とほきかなたに
心、水を戀ひ。

水邊の綠の搖れて、」
夢の水草、
しげれるかなたに
心、水を戀ひ。

蒼空深み
水樓の欄白くうく
かの久戀の地を
杳かにおもひ。

思慕のこころざし
何ぞとどまらん、戀とのみ、
わが枕頭(ちんとう)にまつはりて
麗くは綠、水邊(すゐへん)の草。

清　閑

造訪者甚忙。受訪者甚閑。

人の是非をいはねば
心はなはだ閑なり、
芭蕉は花にうかれ
西行は月を慕ふ、
われはただこの松風をきく。」

茶をたてて法を知らず、
一椀の苦茗に
清興の友もあらねば、
ひとり清風を容となす。

花をみれど花を知らず、
月を仰げど月を覺えず、
紅塵に足を洗ひて
夜來八萬四千の偈(げ)、
また深く悟ることなし。

清閑裡ひとり茶を煮れば、」
名利の市場に
われをののしる人聲も
ここに來て松風の音。

秋　の　雨

秋の雨は小靜かに

降りそそぐ、朝から夜まで、
わが庭の鉢植の
白い蘭の花をぬらして。

秋の雨は心靜かに
降りそそぐ、朝から夜まで、
愛讀の書の頁の
めくれどもめくれども盡きずして。

水すまし

澤瀉の葉のかるくうく
野中の淸水しづかにて、
昨日も今日も水すまし
澄みたる鏡、影をひく。

なりはひ

秋草にふちどられたる
水涸れの河原の中に
石あつめ砂を漉す
小砂こす。

秋さびの侘しき日日を
わが生の流れの中に
石あつめ砂を漉す
小砂こす。

若葉の雨

緣側に出て、
庭の楓にふる雨を

ぢつと見てゐると、
いい氣持だ。

いつの年だつたか、
疊の上に寢そべつて
いつまでも、いつまでも、
悲しい佗しい氣持で
ぢつと雨を見てゐた事があつた。

もうそんな時代はすぎた、
今はぼんやり雨を見てゐる、
颯と降つて來た雨が
青い楓の葉にあたつて
パツとはぢける、
それが何ともなく面白い。
なぜそれが面白いのだか

口では云へないが、
こんなつまらぬ事が
何よりも樂しみだ。

雨よ、ふれ、
楓にも、花の咲かない躑躅にも、
雨よ、ふれ、
今年はじめてたつた三つ
實のついた小さな桃の木にも、
仕事も忘れて
ぢつと見てゐるといい氣持だ。

水仙花

私の机の上の靑い壺に
水仙の花がさされてゐる。

水仙の花の寂しさと淸さと
明るい白さは實に氣持がよい。

自然なものの氣持のよいことは
ありのままそのままに人の心に映る。」

この一册の本の中にある詩篇が
素直さと自然さとを物語ればよい。

かつての日の詩の饗宴はなつかしく
今日の日の詩の生活は淸らかなれよ。」

若さを失はず、正しさを失はず
詩はわれわれの命ともなれよ。

詩集「風車」に序す

秋の食卓

梢の柿の實をついばむ
わたり鳥よ。

秋晴れの空のさなかに、
たのしい晝餐（ひるげ）。

わたしの食（た）べるものはなに、
靜かな部屋の

食卓におく好きなものも、
思ひあたらで。

ながめやる梢は高い、
空の食卓。

うらやましい鳥よ、
もう滿ち足りて。

柿の梢を飛んでしまつた
わたり鳥よ。

秋の讃

私は秋がすきである、
秋は月がよく、霧がよく、
雨がよく、凬がよい。
どんな花でも秋さく花は
あつさりとして美しい。
私の庭には、秋毎に
白い蘭の花が咲く、
今年は五莖ほど咲いてゐる。

清平稿

ぢつとその靜かな花を見てゐると
淸い汚れのない處女の心をおもふ。」

秋は旅をするのによい、
贅澤な旅ではない。
歩く旅、さすらふ旅、
そぞろに心たのしむ旅、
旅にあこがれつつも、この秋は
毎夜、萩の薄の夢を見る、
霧のただよふ松かげを見る、
海を見る、砂濱を見る、
引きあげられた漁舟の上に
やさしい乙女の姿をみる。

だんだんたのしみは少くなるが
だんだん自然へのあこがれは深い。」

夜天の富士

この月のない夜に
富士を見つけた――
くらい夜空に
ほんのり白く
浮き上つた富士を。

春の霞よりもやはらかに
白い絹地よりもしなやかに、
空のなかばに漂うてゐる
まぼろしのやうな富士を。

この早春の冴えた夜空に
いかなる神の靈妙な手が
ゑがくを敢てしたか、
絹地のぼかしも及ばない
うつすりと、しかも鮮かな面影。

ふとかかげた帷(とばり)の中に
美しい女の寢顏を
はからずも見つけたやうに
ハツとしてなほも見入る、
夜汽車の窓に
廣重さへも見なかつた富士を。

旅人の言葉

旅した人は知るであらう
わたしの言葉を。
夕まぐれ一つの町についたとき、
心の底からうれしいと。

兩側に並んでゐる低い屋根の
ところどころになびく夕かげ、
白いけむりを見るときは
涙ぐましいよろこびがあると。

ともしび光るその下に相寄り
まるくなつて食べてゐる家族たちが
道から見えるそのときは、
聲でもかけたい心がすると。

さらば、またとはとほらない
田舍の町の柏の樹よ、
おまへにかたらう、この町には
やさしい母が多いよと。

かざりけのない心と正直な言葉と、
土のやうなそのものがたさで、
賢い言葉は知らぬけれど
ただよき愛で働いてゐる母おやたち。

野の一情景

薄がいちめんに群がり茂つた
野中の小丘には秋風が鳴つてゐる、
赤松の二三本、寂しくかたまつて
梢にさまよふ日ざしものうく、
下には、小さな一つの塚がある。

「蛇がゐやせんかえ」
「今時分蛇なんぞが出てたまるかい」
こんなことを云ひ合ひながら
四五人の靑年が丘へのぼつて來た、
ステッキを振廻したり、帽子を投げながら。

「こんな處に墓があるぜ、
誰の墓だらう？」と一人が云つた、」
「こんな寂しい景色の中に
眠つてゐるのも一寸いいな」と
ルパシカを着た靑年が云つた、
前へ廻つて、その碑の文字を讀みながら。

「詩人S……の墓——
未だ認められずして旣に忘られたる——」
「いやに氣取つた墓碑銘を書いてるぜ」
「こんな詩人があつたかな？」
「どうせヘボ詩人だらう……」
一人の靑年はステッキで墓石の頭を叩いて云つた。

「S……さう云へば何だか聞いたやうな名だ、
さうだ、さうだ、思ひ出したよ、
センティメンタルだと云つて
詩壇で評判のわるい男だつた、
へえ、こんな處に埋められてゐるのか」

「ぢや、やつぱりヘボ詩人だつたのさ」
「くだらねえ、詩人なんぞは……」
カッと一人が唾を草の中にとばした、
「ああ、死は神聖なりさ」と
ルパシカの靑年は云つて
空に向つてピイと口笛を吹いた。

秋である。晴れて寂しい秋である。
口笛の音が野の果てに
消えると、それに答へるやうに
何處かで百舌鳥が銳く鳴いた。
彼等は丘の彼方に馳せ下りながら
昔はやつた流行唄（はやりうた）をうたひだした……

クライストの碑銘に

ハインリッヒ・フォン・クライスト、
一七七六年十月一日に生れ
一八一一年十一月二十一日に歿す、」
いと悲しく苦しき時に
長く生き惱みつ、
ここに死を求めて
不滅を見出でき……

夜更けてしばしば私はこの碑銘を唱む、
ハインリッヒ・フォン・クライスト、
いと悲しく苦しき時に
長く生き惱みつ……
——ああ、かやうな人の生きる時は
つねに悲しく苦しい時である、
惱みこそ、彼の受けて來た印綬なれば。
ああ、ハインリッヒ・フォン・クライスト—
ここに死を求めて
不滅を見出でき……
——されど、不滅はた何物ぞ、
死を求めたる人にとりては。
すべてのフィリスティンの戰慄する
悲劇的運命こそ、
汝の誇りであり、汝の幸福である—

千八百十一年十一月二十一日に、
一臺の馬車はワンゼエの湖畔にむかつた。
馬車の中には、男女二人の客、
こはいかに樂しい遊山の客であらう。
既に黄ばんだ凋落の野道で
行き會うた一人の農夫が

ふと立止つて見上げたほどに、
女が微かにささやいて
二人で高く笑つたその笑ひごゑ……

（斷片）

狼

冬の夜は
寒さきはまりて、
空は冴えわたる碧色に徹り
みがかれたる星は狼の瞳のごとし。

人の心は
考へきはまりて、
頭は冴えたる碧色に徹り
みがかれたる一念は狼のごとし。

白銀の雪上
眦けらんとする狼よ、
われらしばしば狼ならんとすることあり、
孤獨の勇志ふるひ立つことあるなり。

枝々

夕なぎ、大なる木を遠く見れば
しづかにしのび入るやはらぎ。

この世ならぬやはらぎ、
葉も見えず、葉の色も見えず。

思ひわづらふ枝々のゆらぎ
いま、しづまりて。

夕暮、大なる木のねむり
しづかにしのび入るやはらぎ。

鏡

風寒く渡る夕となりにけり、
くもり日のつゞきしのちに
秋さびて、まろき鏡の
かげ青く澄み。

風寒く渡る夕となりにけり、
くる日くる日の心には
さしたる影もあらはれで、
色あらはるる葉の上に。

いのち一つをいとしまん、
くるしき時もなぐさめて
おなじつとめのます鏡、
風寒く渡る夕となりにけり。

満　平　稿

松

年老(ね)びゆけば、
心こそ内へ内へと
もぐり入る、
野中にくねる一つ松。

外へ外へとのびてゆく
若松なりと思ひしを、
形骸(かたち)きまりて
なほも野に立つ一つ松。

老松(おいまつ)見れば老松に、
若松見れば若松に、
それはそれぞと見てやまむ、
かくこそおもへ年へては。

象徴の烏賊

影の國

疲れた眼は永久に閉ぢられて、
傷ついた心をかくまうてゐる。
あるものはだんだん小さくなつて
最も遠い星に達しようとする。
あるものはただ寂しく微笑する。

寂寥

靑い木はいたるところにある、
生きた葉は死の表情に慣れて、
尖つた舌の重なつた下から、
寂しい顏がのぞいてゐる、
風の眼を恐れるやうに。

一つの花があらゆる肉體に咲く、
蝶は光に鞭たれて眩惑しながら
夢より重く、翅を垂れて、
よろよろと、出口を探してゐる。

鳥影

數へ切れない夢が
光の中に飛んでゐる、
羊齒の扇で
氷の方へと追はれながら。

晴れた空のもと、
光る風の中を、
瞬間の鳥が過ぎる
ただ一列なして。

とらへたや、とらへたや」
あれはみなわがもの、
わが身の後光、
美しく失はれて……

身にひそむもの
身を編むもの、
あまりにも早く放ち、
悔いてゐる、鳥影。

とまれ、とまれ、鳥よ、
わたしの生の水晶を
切り出して生んだ鳥、
飛び去るな、今より。

わが裡なる谷窪、
晶石のうつろに
一體の光としづめ、
永遠の相を現じて。

忘却

影の匂ひに
裸身を浸し、
流轉の髮に
心をまかす。

蘆にかくれて
風を見つけ、
鳥をはなちて
聲をさむ。

おもく垂れた

手は遠く、
動くものみな
忘れ去る。

色は死に
相(すがた)しりぞき、
時の巣に
ひとり眠る。

釣床

釣床に思ひをのせて、
搖れるもの、みな花となる。—
垂れた足あまり白きに、」
紅き脣(くち)、しばらく落す。
風は花の姉妹(はらから)である。

忘れたとき、つと來ては、
胸に重いものをかい撫で、
思ひ出の匂ひを殘す。

合歡(ねむ)の葉のやはらかな眸(まみ)
閉ぢるとき、閉ぢわすれた
貝の葉のおくにこもりて
遠く呼ぶ、夕の思ひ。

身は半ば死し、
心のみ半ばめざめ。
釣床に搖られつつ
時の袖、しばし捉へて。

網目

すべてのものを網の中に置いて見る、」

魚のやうに、
蟲のやうに、
すべてのもの、
網目をとほしてすくひあげる
灯(ほ)かげである、
風である。

ちらちらとゆらめくものは
生のすべてである、
ただよふ眼(め)を惑はすもの、
夢を汲み上げる水車である。

網の中に閉ぢ籠つて、
紗をとほして見る
うつろな瞳に、
すべてのもの、
今見慣れず、
親しみなし。

すべてのもの、
網の中の
白き眼(め)に、
遠し、遠し。

白檀の箸

身のまはり、すべて波なり。
脈打ちて、來ては逃(のが)るる。
ただひとつ、白檀の箸、
短しとすかし見れば、
青きもの、底しれずして。

ただよへば、倒ることなし、
立つとすれば、波に奪(と)らるる。

白きもの、花のごと揺れ、
象牙の螺旋、沈み沈んで、
日照り波、葉うらをかへす。

身のまはり、すべて波なり。
月の夜の舟とうかべば、
斜めなる天(そら)のはしより
雫落ち、涙こぼれて、
白きもの、今は靑めき、
靑きもの、黑く老いたり。

魂の家

月の夜は、光の布(き)れで
なめらかな象牙を磨き、
長い手をつくり、
圓い足をつくり、
露をそそぎ、
雫をそそぎ。

闇の夜は、漆(うるし)、烏羽玉(うばたま)、
黑耀の石を刻んで、
瞳をつくり、
髮をつくり、
夢をそそぎ、
涙をそそぎ。

日たけなは、レンズのもとに
火の色の珊瑚を伐(き)つて、
唇をつくり、
心をつくり、
血をそそぎ、
愛をそそぎ。

わがもてる凡てをささげ、
思ひをこめ、願ひをこめ、
魂の家をつくりて、
いま、身は輕し、
風となり、
霙となり。

描かれた夢

鳥籠は三つ並んでゐる。
鳥は二羽づつ並んでゐる。
木の葉が上から來て蔽ふ、
歌ひつつ、囀きつつ。
鳥はとまり木に身を搖すな。
失はれることのない時を搖する。

鳥の言葉は鳥に遠く、
眼はいつも空と語る。

これは描かれた昔の夢である。
その夢の中に、白い女一人あらはれ、
鳥をつつき、かすかに笑ふ、
歌ひつつ、囀きつつ。

象徴の烏賊

或る肉體は、インキによつて充たされてゐる。
傷つけても、傷つけても、常にインキを流す。
二十年、インキに浸つた魂の貧困！
或る魂は、自らインキにすぎぬことを誇る。
自分の存在を隱蔽せんがために
象徴の烏賊は、好んでインキを射出する。

或る蛇は、常に毒液を蓄へてゐる。
至大の恐怖に驅られると、蛇は嚙みつく。
致命の毒を對象に注入しながら
自らまた力盡きて斃れる旱魃(かんばつ)の河！
或る蛇の技術は、自己防禦とその喪失、
夏夕の花火、一瞬の龍と天上する。

或る貝は、海底に幻怪な宮殿を築く。
あらゆる苦惱は重く、不幸は鹽辛く、
利刃に刺された傷口は甘く涙を流す。
或る眞珠の涙は、淸雅な復讐である。
奸黠な商賈の金庫に光空しく死せども、
美しい夫人の手に彼の涙は輝く。

或る植物は、常にじめじめした濕地に生え、
その身をあまりに夥多なる液汁に包む。
深夜、或る暗い空洞から空洞へ注ぎこまれ、
その畸形なる尻尾を振つて游泳する
或る菌はしばしば死と復讐の神である。
漠雲の中哄笑する、目に見えぬものは神である。

幻の畫家

わたしは自分の肉體(からだ)にいろいろなものを描いた、
あるときは花を描き、
あるときは虹を描き、
また唐草模樣を、
蠻人の鎗を、
天人の喜戲を描いた。

わたしは名匠のたくみを知つてゐる、
然し、それは消さねばならない、
それは一日の名畫である。
わたしの肉體(からだ)に積つた落葉(おちば)は

無數の苦痛と快樂の樹から
ただ一日わたしに許された色彩であつた。」

わたしは幻の畫家であつた、
肉體のカンヴスに
はかない影を描いて、
みづから味はひ、
みづから溺れ、
みづから泣いた。

わたしは描くことを忘れ、
また消すことを忘れた。
わたしの樹に
今は沈默の鳥がとまり、
むかしの花を
その嘴から落す……

悔恨

心臟があんまり高く打つので、
息がとまるかと思つた。
氷がとけて、磁氣が沸騰し、
世界と自己とをむすぶ
二本の導線の一端に
健康が飽和して、
傷ついた心臟は叛逆したか。

歡樂のきはみに、死は最も甘し。
新婚の床の心臟痲痺！
くるくるくるくると五瓣の水車は
狂氣の薫香をふりまはせば、
可惜（あたら）、ドン・キホオテの鎗は折れる。
今日は何の日ぞ、佛滅、すべては凶、

夜の畠に死の麥を收穫する
貪婪の農夫、勤勞の空しきを知る。

生の最後の執着の上に死の扉開く、
黎明、夜の胎の中へ多淫の風を送りつつ、
何の故の午後ぞ、まだ遺書が書いてない、
あの氷河の中流に書く事を忘れて來た。
戀人の花束を埋めたほとりに
自分の横顔を描くべき昨日を、
椰子樹下の土人は、唯だ天をのみ眺めて
その手の指に咲き出でた罌粟を忘れた。

影の舟

影の國、
辭なきところ、
花と花、
風にみだれる。

美しいもの、
長身にして、
くろのなか
白くきらめき。

動く葉の
響かぬ笑ひ、
言葉なき
戀のささやき。

マカロニの
線がみだれ、
顏の海、
漕ぐ舟あり。

灣と岬

岬並んで
灣をかこめば、
干潟遠く
乏しき煙。

屏風岩、
獅子岩並び、
人の家
あまり小さし。

あまりにも貧しき心、
ほそぼそと
日の光ふる、
涙なき目に。

一人ありて、岩を飛べば、
灣と岬つと寄りて、
波の碎けに
舟は影なし。

山行

火の山は
すでに眠り、
笠の底、
木の果つもれり。

わが齡
數へ數へて、
溪河に
花を投げ投げ。

立てばまた
あしは樹となり、
手をふれば
煙ふたすぢ。

杳けさよ、
巖に沁む影、
一條の
鐵と見まがふ。

採草

忘却の藥草を採りに
けはしい巖をよぢのぼつた。

日は出ては、また入つた、
花は咲いて、また散つた。

白髪は風になびいて
篠原に雪とちらばふ。

山深く、心さぐれば、
掌に鳥が來て啼く。

またおもふ、敵の杯、
針の酒、胸に落ちた日。

忘却の藥草を採りに
火の山の底へとくだる。

秘密

井戸

深い井戸の中に
石を投げてはならない、
その底には
自分の魂が棲む。

井戸は神聖な生の泉である、
われわれが空氣のために硬ばると
もとの闇の中に復つて、
その齎した眞珠を水の中に溶く。

深い井戸の中に
永遠なるものが眠つてゐる、
その中を窺いてはならない、
われわれの眼を塞ぐまで。

あらゆるユウトピアの探求者は
つひに母達の國に下りてゆく、
失はれたものの凡てを見つけるものは
その一つをも拾ひ上げる指をもたない。

深い井戸の中に
石を投げてはならない、
その淸涼な闇は
一切のものの萠芽である。

泉の中

泉の中から

靜かな聲が聞える、
ここにたつた一つ
取殘された歌がある。

一切の歌は
拾ひ盡された、
ここにたつた一つ
見出されなかつた歌がある。

泉は湧きあふれて
地の閾（しきみ）まで浸す、
その水を汲みながら
人は歌を殘した。

天の底まで探つた
神のやうな詩人は、
その足もとを流れすぎる
水の中の歌を忘れた。

取殘された歌は、
一人の忘れられた
詩人を求めた、
その心を洗ひながら。

溢（あふれ）

水はおれの堰（せき）を越え、
おれを乘り越し、何處まで浸す。
この井戸は底なしの井戸、
あくことなしに湧きあふれる。

女手の白きを重ね、
女の胸の紅きを積んで
惱みを堰（せ）くと、

神業(かみわざ)をなみするたくみ。

水は越える、涼しく笑ひ、
おれを溢れ、滑らに歌ふ、
人間の智慧をうづめて、
天にとどく、生を溢れて。

女のあたへるものは夥しく、
女の奪ふものはただ一つ、
わが寶を藏(をさ)める手に
流れ落ちて、掌(てのひら)にとどまる。

祕密

あらゆる花の中に
わたしは祕密をこめる。

あらゆる水の上に
永遠を流す。

あらゆる星の影に
眞をゆだねる。

あらゆる唇に
悲哀を刻む。

あらゆる瞳(ひとみ)に
夢を置く。

與へるために
わたしは生れた、
そのすべてから
ただ一つの悔を

受けるために。

魂の黎明

互ひに身を隱し合はうではないか、
わたしはおまへの中に、
おまへはわたしの中に、
蘆と蘆とが隱れ合ふやうに、
水と水とが隱れ合ふやうに、
心と心との境を取らうではないか。

魂の黎明が來て、
裂けたもの、一つに寄る。
舟がすぎて、
秋が生れる。
空は低く低く垂れて、
地のふところに沈む。

靑いもの、いよいよ靑く、
匂ふもの、いよいよ匂ふ。
曙は、人も鳥となる。
互ひに身を隱さうではないか、
樹木の中に、
流れの中に。

囘心

さまざまの葉の中に身を隱して來た、
芭蕉の葉にかくし、
棕櫚の葉にかくし、
桐の葉にかくし、
蔦の葉にかくし、
たうとう松の葉にかくし、
杉の葉にまでもかくした。

雲も、水も、鳥も、花も、
空から、山から、地から、草から、
あらはれよう、あらはれようとする。
なぜおまへは、人の身をもて、
神のまへに隱れようとするか。
裸身あまりに白いがゆゑか、
白ければ、隱すも甲斐ないものを。

目に見える言葉の中に
おのれを隱し來たもの、
目に見えぬ大氣の中に
おのれをあらはせ。
あらはせば、うかびいでなば、
人も雲、人も鳥、
妙に飛び、いみじく歌ふ。

走馬燈

この走馬燈はまだこはれない。
夜もすがら消えがての灯がまたたき、
いつもいつも、ものうさうに、
おなじ寂しい姿がめぐつてゐる。

章句

青松葉を莚に編んで、
夜夜、わたしの魂は寢る。
露はのこらず身に吸はれて、
松實の鱗をつくる。

章句

金(きん)は地獄のやうに重く、
愛は羽毛(はね)のやうに輕い。
美女は多く金泥に死し、
飢ゑた魂は空氣に飽く。

隊商

沙漠をさまよふもの、
いまだ雨を見ず。
緑地を捨てて、
天幕(テント)を卷いて、
なほ渇く海へと向ふ。

隊商はすぎる、
あるときは金銀を積み、
あるときは穀物を積み、
あるときは紅(あか)の旗立て、
絶えずすぎる、
沙漠の上を。

秋もなく、冬もなし。
椰子は茂り、風に蔽はれ、
駱駝斃れ、墓は埋まる。
涯(はて)しなく、死は輝く。
涙なく、笑ひもなしに
隊商はすぎる、
渇き渇きて。

僧形

地獄みち

鴉片をのむものあり、
ハシッシュを嗜むものあり。
魔薬みな靈の藥、
その味は一片の死なり。

生の中に死を求めて、
醉の中に神を求めて、
疲れたるもの、みな藥のむ、
世界より癒やされんとして。

書物には古き懊惱、
息詰まる思想を燒けば、
煩惱の小人跳りて
灰の中に角を失ふ。

心の面、かき消せば、
ただ白く、無のそらだき。
戀すれば、女かがやき、
接吻のとき、息は匂ふ。

地獄みち、かゆきかくゆき、」
杖立てて西を占ふ。
火の酒に行くものあり、
劍の齒に行くものあり。

獨座

小舍の中に住む人がある、

心、木の葉に蔽はれて、
春も、夏も、秋も、冬も、
一面の花を咲かせてゐる。

寂しげに微笑む花あり、
默々とうなづく花あり、
掌を合はす花あり、
風の中にうたふ花あり。

月の夜は、人あまりに小さく、
闇の夜は、花がかがやく。
さても不思議な人生である、
遠く連峯に白い虹を見る。

ひとり住めば、人は神となる、
鳥と語れば、愛は果てしなし。
花の小舍のまはりに、
山は靑み、また黄ばむ。

農人

日の出づるところ、
日の入るところ、
丈高き農人ありて、
終年、土を耕す。

織りなすは春の花、
摘みとるは秋の木の實。
背骨みな弓と曲り、
指はみな節を數ふ。

鋤行けば、土はめざめ、
鍬入れば、泥かたまる。
頭、雲にはらはれ、

足、地心を踏む。
一生の營み、汗の梭、
地の上に地を織る。
心みな耕して、
ただ一つ墓をあます。

行者

骨の中、空洞にして、
竹のごと、水は流る。
打て、石を、聖賢の石、
骨細く、香ひ幽か。
若き口、蛇に嚙まれ、
草の髮、綠褪せぬ。

寂寞を行ずるもの、
十年經て、既に苔なり。
細流に、頭を埋め、
林間に、花を忘る。
空し、空し、日は翳る、
遠景に舞ふは童子。

笑

髮の中に、鼠巣くひて、
鼠の子、出てはまた入る。
穴藏に一生は過ぎ、
得たるもの、ただ笑ひなり。

鱗相搏つ笑ひなり。
驢年も消えぬ笑ひなり。
齒は寒く鳴る笑ひなり。
齒車軋む笑ひなり。

神々の如く笑ひ、
惡魔の如く笑ひ、
默照の笑ひ終れば
鼠啼き、ちちと、ちちと。

不動

假象の流れを下る
不壞の舟——
動きやまぬ水
かつて動かず。
山は低下し、
舟は虹となる。

不動なるもの
最も疾し。
一線の矢、
死の如し。

太虚の胎に
眞は眠りて、
水に風行き、
風に舟行く。

天眞佛

むかし天笠の沙門は
月水衣に涙潸々、

柱杖をついて
不淨の門に立つた。

けがれもて身を洗へば、
身は珠のやうに白く、
恥のしるし額に刻み、
身の光り衆生を照らす。

婆羅門の家、
旃陀羅の家、
青蓮のかがやく二つ、
鉢を割つて受けるものなし。

月水衣の沙門通れば、
道の下、地獄の底に、
いつもいつも光る眼がある、
星のやうに淨く。

破戒

圓頂黑衣のひと、
白魚を彫り、
海鼠を刻む。
すかしぼり、
ささらぼり、
やはらかなものを彫り彫り、
へなへなとしたものを刻む。

法の網に洩れもせで、
成佛して、何と思ふか、
白魚よ。
おまへを吉祥天女に供養しよう、
美しい爪のかがやく指と見立てて。

隱遁者海鼠ありて、
いつも冬の相も現ず。
不景氣なやつだねえ、
いつも凍つてゐるやうだ。
でも、ときに鯱となり、
ぴんと張ります、赤くなつて。
そんなら、不動明王の火焔にしよう。」

不淨なるものを刻み、
情欲を刀に光らせ、
三拜して、叡智を削る。

圓頂黑衣のひと、
魚を彫り、
肉を刻み、
魂はつひに彫らず。

瀧

角を持つ馬面の瀧は、
輾轉んでまた起きんとし、
蛇の尾の溪河は
虹の方へ崩れ落ち、
崩れ落ちぬものを見捨てる。
水は月の水銀を碎き、
すべての圓かなものを碎き、
さしのぞく樹をさらひ、
退かぬ岩石をさらふ。

豐饒の實りある野へ、
樂音の完き海へ、
溪河はおのれを投げる。
おのが手の觸れるもの

おのが目にむかふもの、
みな共に攫ひて。

ひとたび、築かれたもの、
すでに價なし。
崩し取らば、生かへる、
流し去らば、眼ひらく。

葉の雫、波と逆卷き、
土くれは、甘き實となる。
落下して、流轉するもの、
不壞の虹、空にかかる。

過ぎ去りしあと、
何も殘らず。
天地を張る
一挺の琴、
琮々と鳴る。

僧院

終日、松の葉は寺院を刻み、
僧形の影うなだれて行く。
黑衣の袂長く地を曳き、
まつかさは打つ、
敷石を打つ、
悟後を打つ。

竹林は沈默を忘れ、
葉に懸る琴を忘る。
葉毎見る、
言葉なき歌。
雲水の耳に
風は隱る。

草庵は半僧を置き、
塔頭は俗を蓄ふ。
臨濟は、松となり、
香嚴は、竹となる。
夏日、淸風長く、
流泉、夕歌ふ。

禪定の床に
老僧は眠る。
一喝、
生死飛び、
色身飛び、
心飛ぶ。

寒山子、今日も流れ、
普化は、鈴ふる。

心、何處ぞ、
天の一方、
いんいんと音して
遠く去るものあり。

白き夫人

白き夫人、
白く微笑む——
わが得ざりし
脣なれば、——
その紅み
失ひ難し、
知らしめよ
苦き味を。

白き心に
一點の紅。

しきものの
ぬひとりの薔薇、
したたる血、
君吸ひたまへ——
白き夫人、
そと微笑む。

白き夫人、
褥に臥す——
われになき
ものを與へよ、
わが足らはぬ
もの一つあり、
おぎなひて
滿たしめたまへ。

裂けしまま

縫はざりし口、
くちづけに
ふさがりぬ、
なほ強く
生命(いのち)噛めと――
白き夫人、
熟(う)れて紅らむ。

眞夏の晝の夢

あなたの手はやはらかすぎて
小鳥のやうで、娘のやうで、
母の愛がおこりますのよと、
その肥えた手もて握つて、
からかひの眼(め)で、その胸におけば、
新鮮な血の歌が、遠く近く、
男の手に眞白なシイツの上の
狂亂の夢を囁けば、耳熱く、
つと取つて、唇にあてる、火燒(やけど)のやうに。
たのしげにサイレンは笑ひ、
椅子の上につと身をそらし、
ましろの足ふたそろへ、つとのべて、
事なげに、ちらと尻目し、
まろい肘小さき輪をかき、
細卷のシガレット、
紫の煙ひとすぢ、
身の底の匂ひをつたふ。

この夏はどうなさいまして、
どちらへいらつしやいますの、
キャンピング、
それとも……と、
その足をすこしひらいて、
腰ふりて、身を乘りだす。

奥さん、だいぶ暑くなつて來ましたね、
ねむさうではありませんか。
ええ、わたくし、晝寢るのですよ、
あなたもおやすみにならない？　ホホホ。

ばね仕掛、長身の夫人、つと立ち、
ながながと瀧の水落ち、
爽かなものがくちふれ、
これはわたしの贈り物、
花市に得がてぬ花束、
燃えひらく唇と、
絹ごしの頰と、
白銀の鼻と、
大粒の瑠璃の眼と、
一つに束ね、
まあちよいと嗅いで御覧なさいましな。

奥さん、何て美しい花束、
氣が狂ひさうな、匂ひの花束、
惡魔でも死にさうですよ。
殊に、緋紅色のこの花は
あまりに大輪で、
あまりに開き切つて、
あまりに豐滿で、
見るさへ胸がときめきます、
そつと唇をあてて
湧きかへる强烈な香りに
息づまり、生命が消えさうです。
この花だけはかくして下さいませんか、
この花だけはゆるして下さいませんか。

今日

小さなもの、急に實つて、

青いもの、紅く熟れた。
乙女は戀人の言葉をつかふ、
「さうよ」といひ、
「ほんとだわ」といふ。

草茫々とした曠野なのに、
もうそんなに遠方に行つたのですか。

若い木は枝葉をひろげ、
柘榴の實、美しい口をあけて、
「さあ、おあがり」と云はれて
子供は黐竿をひつこめます。

床しいのは、昨日の禮儀である。
一切の窓が閉められた家である。
風は心の上を渡る。

印象

まるみのついた爪先のやはらかさに、
果物かと思うた、
その足に心を乘せて、
海を行く人あり。

ギヤマンの皿に
唇を盛つて、
凉を嘗め、風の雫に
太古の夏を探る。

あまりに白い手であれば、
指環さへよけいなものに見える。
雪の中の梅は黄色だが、
艶やかな爪は紅。

君はすぐ咲く花だつた。
咲いて重たい花だつた。
ただ夏の間に。
ただ夢の間に。

甘睡

ダブルベッドの上で、
それは云ひ、
それは開かれた。
人生を窓から閉めだして、」

夏の眞晝の花の夢だ。
梢にかかる風の歌だ。
砂に吸はれる水の音だ。
誰も見ず、誰も聞かない。

細い足は何處まで延びて、
蔓となるか、蛇となるか。
あしのうら、顔のやうに見え、」
接吻すれば、指がわらふ。

矢車草がただ一輪咲いてゐた。

艶夢

花の蔓に入つて
午睡してゐたら、
死の息がふれたやうで、
夢の極みに、めがさめた。

長いこと、一人の女を
夢想してゐたら、

その顔があまり近づき、
向日葵がくるりとめぐつた。

抱いて……といふ
散りそめの花の言葉、
雨の手が十あればとて
花瓣をささへ得ようか。

氷の息、溪をわたり、
艶夢、まづ散つて、
心の面紗を
風が破つた。

白樺

若い月、綠にかかり、
夕風に落ちさうだ。
白樺をいだいて
遠く去つた人を泣く。

その肌を撫で、
その香ひ嗅ぎ。

夜

壺に花を挿せば、冷かな表情消えて、
土もはにかんで、少しあからむ。
夜ひと夜、百合花はサバトに、
夜ひと夜、自らの息に絕え入る。

わたしは多くのものを失ひました。
大切なものをみな失ひました。
今、殘つたものは、自分だけです。

それがわたしを呑まうとします。

獅子に跨つて
沙漠を越え、
天狗の翼で
空に入る。

百合花は一夜の女王です。

霧の中の眼

霧の中の眼!

おまへは打たれた點のやうに、まだ遠ざかるものを追つてゐる。

小さな妖精が、おまへの視線のまはりにふざけてゐる。

涙がパッと輝くとき、おまへのまぶたは閉ざされる。

眼の中の霧!

おまへは何處まで果てしなく擴つてゆくのだらう。

失はれた生の奥底まで、霧は下つて行くであらう。

累々として重つた晶石の上に、ただ一つ輝くものがある。

霧の中の眼!

神獸

神人

頂上の人は奈落を愛する。

目に見えぬ翼は、落下のときに最も強し。

神なる人、爐中に轉身す。

四大を解いて、行者は合掌の掌裡に蛇を隱す。

山巓は靑空に最も遠い。

奈落には、つねに一輪の紅蓮が咲いてゐる。

異形

異形のもの、
心に群れて。

烏天狗、
梢から見る。

白い蛇、
谷を埋め。

水牛の角、
鎗ぶすまして。

螢烏賊、

波にちらちら。
摩訶不思議、
これがおのれか。

黄昏

その裂目、あまり深くて
苔幾荷、なほ足らず。
神々のふるさと、
神すらもうづめがたし。

狐の尾、銀に光りて、
かつ扇ぎ、かつ淨むるは
蒼蠅のけがれ、
人のいつはり。

古沼よどみ、水銹する
十月の草を分けつつ、
瘦せし馬、顔垂れて、
日の暮をか行きかく行き。

舟のかげすでに遠く、
旅人の笠もかたむく。
神々は洞にひそみ、
笑ひ幽か。

老

わたしの心が飢ゑたとき、
しばしば熱いのみものを求めた。
無花果の液を求めた、
その割目からしたたる乳を。
渇くとき、やはらかな肉を求め、

女の血を求めた。
満たされて、與へられて、
さらに飢ゑ、さらに渇き。

苦みは智慧を生み、
智慧はただ諦念を教ふ。
にこやかに笑ふもの、
甘やかに誘ふもの、
飢ゑをます毒、
渇き呼ぶ火よ。
血は渇くもの、
乳は飢ゑるもの。

わたしの心が老いたとき、
智慧の蠱、身うちをめぐり、
生命の芽、黒く萎びて
甘いものも苦く、
鮮しい血も酸く、
白い肉も硬ばり、
紅い無花果の割目も
紫の毒もておどし、
歯は怯えて落ち、
手の指は伸びるを忘れ、
一顆の胡桃
掌にころがし、ころがし……

性

囚はれた魂をにぎる手がある、
かぼそい指に、あまりに熱い魂、
火のやうなもの、石のやうなもの、
これが愛と悲哀の化合物である。

ぢィとこらへて、にぎつてゐる、

脈うつものを、響くものを、
女はうれしいのだ、火燒(やけど)したいのだ、
手にないものは小鳥でないのだ。

だが、魂は冷える、魂は縮まる、
光線を放射するほど收縮(しゅうしゅく)作用をして、
熱く燃えるほど光あるもの、力を失ふ——
これがすべての太陽の運命である。

シャグランの皮、
つひに一片をあますのみ、
最後の欲望とともに
生命(いのち)斷たれる。

すべての雄(をす)は
つひに雌(めす)に食はれ、
悲しき殘骸もて
地殼を蔽ふ。

受難劇(パッションスシュピイル)

數限りのない受難がある。

基督が女になつて、
ひとりひとり、
十字架に手足をひろげて、
磔刑の鎗を受けてゐる。

地上はバビロンの都をつらね、
バビロンは水晶の柱をつらねて、
虛空と地底とをつなぐのは、
一本の汚辱の綱である。

末世の基督は、日毎に、

エリ、エリ、ラマサバクタニを叫び、
マグダラのマリアは
夜毎に聖痕を磨いてゐる。

人の子は人のために死に、
罪の女は罪のために生く。
愛は半時の開花であり、
一日は一日の奇蹟である。

涙の谷は笑ひの苔に蔽はれ、
下水は歡樂の垢を流す。
石の上に絶間なく落ちて碎けるものは
むしられた夢、奪はれた童貞である。

預言者は酒場の道化者となつて、
手風琴ではやり唄をうたつてゐる。
風に響く金貨の音の中には
勝ち誇る神々の笑ひがある。

基督が女になつて、
ひとりひとり、
ふみ碎かれた心臟の上に、
金の鎗を受けてゐる。

數限りのない聖痕は、バビロンの譽れである。

人工の翼

イカロスは海へ落ちる、
人工の翼をふるつて
天空高く思ひは馳せても、
あまりに光に近くなれば、
たちまち黒い死にのみ込まれる。

三千年の間、
イカロスは來ては落ち、
來ては落ちるエイゲの海、
波の穗に乘る神もあるに、
人なれば、光を慕ひ、光に打たれ。

絶えずやぶれ、絶えず溺れる
それゆゑに人はたふとい。
可愛らしい裸の子供ではないか。
飛びたいな、飛びたいなと、
空をめがけて兩手を振つてゐる。

ただ一度、眞白な子供が、
目に見えぬ雲の中まで昇つたが、
すさまじく落ちてしまつた。
基督の翼やぶれて、老人達が、
その翼、いまもつくろふといふ。

狼

狼の列が行き合ふ、
狼は高吠えして
次ぎが吠え、その次ぎが吠え、
月の下に
長く尾を曳き、
遠く響く。

行き合うた二つ咬み合ふ、
白き牙、月にきらめき、
ウォと唸り、血はたらら落つ。
一つ喰はれ、その後から
一つ出て、また一つ喰ふ。

狼は食ひつ食はれつ、

狼の數はへりつつ、
長い列、血と變りつつ、
瘦せた腹、波うち動き、
物凄く、月に吠える。

血にまみれ、
牙はからみ、
狼の群れ
肉をあまさず。

われとわが種屬を罪し、
われとわが喉を裂く。

狼あり。
つひに一匹、
悄然と草むらを行く。

河童

青空に
槍は突立ち、
溪流の
音は遥か。

河童出て
月と遊ぶ、
病詩人
河童と遊ぶ。

河童あたま
二つゆらめき、
わらふもの、
うたふもの。

霧ふかし、
深林の髮の下かげ、
あかあかと
菌(きのこ)はえはえ。

河童の肌(はだ)
青くさびつき、
なめなめと
手からすべる。

さびしいな、
わびしいな、
河童よ、おれの尻の穴を
抜いてくれぬか。

蝙蝠

黒い蝙蝠がおれの天井にぶら下つてゐる。
なんとはえない古着屋の店だ。
こいつを殘らず取つておれの身に纏うたら、
おれも一人前のメフィストフェレスだ。

匈奴

野人、
氷の中に生れて、
鐵道に輸送され、
今、火の中に唸る。
酒に煮られ、
女に嚙まれ、
蒙昧の垢を落して、
瀟洒たる好紳士、
タキシイドの客、
カフェエの卓上に

猪を投ぐ。

北蒙の野人、
海風に嘯く。
時に浸されて
昨日を忘れ、
言葉なほ鈍し。
俗心、更に熱く、
近きものを抑へ、
下につくものを抑へ、
知るものの白きに、
郷人の家高きに、
身は嫉みに黒し。

野人、
死して餘榮あり。
暴虎の名
三世に及び、
餘毒、不朽を圖り、
龜を馭して
北にかへる。
影、血の如く、
波に跳る。
牙なき野人、
悄として氷にかへる。

詩の死

詩人天上

小さな小さな詩人があつて、
袋の中で歌つてゐた。
歌へば歌ふほど
袋の口をしめつけられて、
だんだん小さくへそばりながら、
縮こまりへそばるほど
その聲は高くなつた。

小さな小さなその詩人は
人の出さぬ聲を出した。
人の知らぬ言葉で
ときがたい歌をうたつた。

死の歌か、呪ひの歌か、
そんな不吉な歌はやめよと
袋の口さらにしめられ、
姿見えぬその小人は
さらに小さく小さくなつた。

袋ただ袋をあまし、
この中に人なしと見えた
から袋の中に聲あり、
いや高く破れるほどに
叫び叫び、歌ひ歌ふ。
影もなく、生なきもの、
未だ曾て歌はなかつた
最も善く美しい歌をうたつた、
無の琴にのせる魔の曲、
今ぞ死の、呪ひの歌を。

それは魔術だ、正しい詩ではないと
かぎ鼻の批評家が云つた。
佛蘭西のどの詩人だつて
こんな變な聲は出さぬと
長髪の詩人は云つた。
魔術だよ、詩ではないぞと、
ヴェルレエヌよりヷレリイまで
知らぬ聲、知らぬ歌よと
矢の如く壓しつけられた
袋の中に聲は答へて、
その矢つと、空に飛びゆき、
星さして行方も知れず。

奇蹟

自分を空虚にするために、歌ふ。
歌へば、心、いよいよ滿ち溢れる。

不思議な井戸、胸に掘られて、
神の水、世界を浸す。

聲の蛇、はてもなくのび、
天と地をひとすぢ結ぶ。

闇の中に歌をそそげば
寂寥は光りかがやく。

不思議な歌よ、自らを弔ふ歌よ、
呪ひもて棺に釘うてば、その音に青空は晴る。

自らをただ鞭つために歌ふ、
歌へば歌、傷を癒やす。

沈黙

人、默して地に描けば、
地に生命躍る。
琥珀いろの人差指より
人の子の愛はしたたる。

かぎりなく美しい風光、
世にただ一度許されて、
神も眼を細めて見入る、
沈默の光るとき。

天使たち喇叭を吹いて、
雲の中、上り下れば、
うつむいた人の面に
その影、寂寥の笑と映る。

象徴の奥義きはめて、
詩人また、沈默を知る。
口をとざし、地に描くとき、
天は默示のためにひらく。

覆面

面紗の中の女の眼はいつも美しく、
無花果の葉に蔽はれた處は最も蠱惑的である。
預言は常に謎の言葉もて語られるが故に尊く、
言葉なき歌は最も人の魂を搖り動かす歌である。

受信

詩人は女の手紙を讀んでゐる、
一句每に、天來の詩は燦爛と落つ。
いかなる天才の入神の技も、
愛する女の稚ない言葉には及ばない。

詩人

自分の聲に倦いた詩人が
泉のそばで音樂を聽く。
詩人は聽衆であるとき、
最も良い詩人である。

飛躍

木の股から子供が生れ、
土くれから鳥が飛び出し、
小石から血が流れ出し、
美學から詩が生れる。

晩光

繰返しは詩人の一の罪過だ、
阿呆のやうに笑はうではないか。
菫いろの詠嘆もひからびた、
それは人を莫迦にした春の贈物だ。
十九世紀ぶりは、最後の鐵道馬車、
おれで打切りにしなければならない。

つかまへた女は手の指から洩れた。
一指も觸れないでしまつた女は
遠ざかるほど強い言葉をよこす。
ただその心を穫ただけだと風に語る、
道化者は言葉と心とをとりちがへてゐる。
おれが最後の人間であらう、莫迦族の。

愛を失ふものは、また夢を失ふ。
死を養ふためには、汗の一粒も惜しい。
仰向きに寢て、星をかぞへながら、

わが魂は
墓場にともされる燈籠に似てゐる、
既に歌なき寂寞の中によろめき、
初秋の嵐にうち叩かれて
くづれ落ちる骨に似てゐる。

死が落ちてくるのを待つてゐる。
何といふ寂しい蟲の一生だらう。
女の手がまだみぞおちを抑へてゐる。

詩魂

わが魂は
婚禮の床の上の白いももに似てゐる、
熟れた無花果のやうに
それは二つに裂かれねばならない、
善き歌を生むためには。

わが魂は
火に投げ込まれる栗に似てゐる、
ぱつとはぢけて實をはき出す、
その一度に一生をかける、
ただ一つの叫びのために。

死

おれは二本のペンで食ふ。
赤と黒とのペンさきで、
十年、白い飯を食つた。
今はもう、ペンは折れた、
米櫃も空になつた。

おれは今、折れたペンで
水を挾んで食ふ。

葦のやうに痩せた指で
空を縫つて衣る。
庭隅の濕地にもぐる
蟇の腹をくりぬいて住む。

月はおれの腸を噛む、
蘭はおれの涙を啜る。
ひと雫、落ちたら落ちて
おれの詩も、おれの血も
月の夜に、空となる。

架空の橋

東洋より西洋へ――
二つの洋の上高く
かかる虹を見たか、
思想の虹を。

生、生とむすび、
心、心とむすぶ。

東方も人、
西方も人。

靈は肉と交り、
靜は動と搖れ、
空しく分たれたもの
いま一如不二。

月は半面、
日は全面、
暗に光入り、
影、星となる。

夢は不眠を打ち、
死は生を醒ます。
名狀すべからざるもの、
玆に成し遂げらる。

ただ、この架空の橋、
地を天にむすぶより

なほ偉(おほい)なるかな、
東と西とつなぐ橋。

異象

架空の橋をかくるひと、
末世の神、垢面蓬髮、
丁々と伐木の音こだまし、
異象、人見て異となさず。

七色の思想の虹、
成つてただ、夏の戯れ、
稚兒(をさなご)は指さしわらひ、
とどまれといふ人もなし。

架空の橋をわたるひと、
たちまち雨となつて落つ、
ばらばらと黒土の上、
草の根に沁みてかすけく。

またひとつ、世は失ふ。
翁(おきな)ひとりあつて、長く惜む、
見る眼の前に忽然として
消えてあとなき思想の虹を。

振子

振子ゆく、朝に夕に、
また鏡靑き空より
穴藏に垂れたる振子、
振れやまず、光に影に。

いつも搖れいつも傷つく
さだめにと置かれし振子、

愛の日より憎みの夜へ
ゆき通ふ乙女子の梭。

一天の端しより端しへ
苦と樂の果てより果てへ、
振子ゆく、嘆き泣きつつ、
振れやまず、生にも死にも。

假面

あの中のどれを選ばう、
壁にかかつた假面。
青い假面、
赤い假面、
笑ひの假面、
泣きの假面。

假面をかぶれば人が人となる、
死人ですらも肉となる。
よくはしやぐ、
よくしやべる、
よくをどる、
よく生きる。

生はここに、愛もここに、
みな美し、みな樂し。
かの色白の人形、
すつきりと情深く、
幾百の處女の
魂を奪ふ。

假面こそ彼の眞實、
人そのままの面ぞ假面。
神の如く聖く、

魔の如く美しく、
今、世は樂土、
人肉の假面をつけて。

神獸

われとともに一度び獸(けもの)であつた女は
わがための神である。
われとともに神とならうと欲(ねが)ふ女は
まづ獸(けもの)とならねばならぬ。

彼女よく這ふことを解するか、
また吼ゆることを解するか、
交はることを愛するか、
さらばわが善き伴侶である。

われらは神とならんがために
まづ獸とならねばならぬ。
神と獸とは二にして一となる、
われら今日ともに神獸である。

神に祈るものは既に絶えた、
今、人はみな獸に祈る。
神を忘れて祈りを忘れず、
なほ依然として奴隷である。

われらの祈りは鞭打であれ、
河上に擧げる一齊の爆竹であれ。
明日のわれらが祝祭の花火のために
今日、彼女の胎に火を點ぜしめよ。

断章

南仙子黙示録（The Revelation of Nonsense）の名のもとに完成せんとしたものの断章である。一部分は東京で、大部分は大阪で。

（一九三〇・五・一八　大阪にて）

天地の間

われ今日、天地に異象を見たり。
地になきものを天に見、
天になきものを地に見る
天と地になきもの、
天と地の間に見る。

鶴嘴

大きな鶴嘴が一つ、
天と地の間にかかつてゐる。
コッツン、コッツン、
地を打つ、やみまなく打つ。

ペルシア

二條の眉がひとつらになつて、
鳶いろの頰の上に
欲望と悲哀とをゑがいてゐる。
濃い眉と、厚い唇とは
ペルシアの絨氈の夜の刺繍である。

ペルシア女よ、棕櫚蔭の女よ、
そなたは甘い熟果をささげる。
けふの一日、けふの一夜を、
あのキヨスクの中で

そなたの織りなす夢を敷きたい。

あらゆる精錬されたもの、
花と咲き、酒と薫り、指と動く。
ペルシア、ペルシア、
古きダリウスの不運もこれ、
アレクサンデルの誘惑もこれ。

詩人ハアフィスと杯をくみて、
永遠に忘れられた花を
その花園に摘むとき、
古い悔は萎み、
新しい悔と咲き出る。

オーサカ

ロンドン、パリ、ニュウヨオク、
ベルリン、キイン、トオキヨウ……
飢ゑた貧しい詩人が月を見てゐる、
月が詩人の鬚を見てゐる。
おまへはあまりに知られすぎた月、
これはあまりに知られない詩人、
みんなに見られてゐる月と
誰も讀まない詩人とは、
この世で誰よりも親しいのだ。

詩人の運命はインタアナショナル、
すべて平凡、すべて無趣味、
煤煙と塵埃との中
商業主義の花は開き、
機械の中に神の呪咀を聞き、
貨幣の音に詩が生れる。
新しい詩は金である、
この電力の世に、まだ紙に詩をかく

詩人といふ種族が生き殘つてゐたのか。
オーサカで、詩人は滅びる……

章句

娘たちの歌が、草から草へ流れてゐる。
娘たちの歌は、地が焚く香の煙である。
娘たちの生は、ただ一つの歌である。

章句

蝸牛は殼を負うて生れる、
おれは不幸の殼を負うて生れた。

章句

おれを待つのは花と音樂である。
なんとすばらしい出世であらう。

汚水

大都會の下水の中を
ひとりで流れてゐた。
自ら自らの何であるかを知らない、
ただ果てしらず流れるのを知つてゐた。

ここはマンハッタンか、
ここは堂島、
一生はただ下水のどぶ、
わたしはただ流れる。

無眼子

桃を見る人あり、
竹を撃つ人あり、
かれもさとり
これもさとる。

われは山を見て山を見ず、
海をみてまた海を見ず、
さとりもなく
一生は終る。

變　形

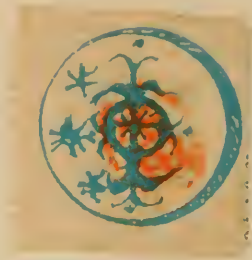
或る時は生に充ちてゐる、
或る時は死に充ちてゐる。

蠶食されるもの、
氾濫するものとなる。

破　滅

おれは墮ちたる天使である、
白哲の神通力を失つて
翼破れて、喜んでゐる。
もうおれは絕對自由である、
黑く波に身をのまれつつ。

——了——

生田春月全集

第一卷

昭和六年七月廿三日印刷
昭和六年七月廿七日發行

編輯者　生田花世
同　生田博孝

發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込　長 八〇五番 八〇六番 八〇七番 八〇八番 八〇九番
振替東京　一七四二番

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社

製本者　植木瀧藏

全十卷目次